
ヴァーミンズ・クロニクル

蠱毒成長中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァーミンス・クロニクル

【Nコード】

N8961V

【作者名】

蠱毒成長中

【あらすじ】

俺の名は辻原繁。
ツジハラシゲル

生まれてこの方真面目かつ真っ当に生きてきた学生だ。いや、それは誇大的か？

まあいい。兎に角毎日真面目に健全な学生生活を送っていた俺。今日は休日を使って事で都会の街へ遊びに出ている。

そして昼頃、それは唐突に起こった。突如謎めいた光の巻き添えを食らった俺は、奇妙な空間を流されながら気を失い、気付けば見知らぬ部屋に居た。

暫くして戻って来た部屋の主・コリンナ王女の話の聞くに、ここは地球でない異世界『カタル・ティゾル』で、俺はこいつに魔術で召喚されたんだと。

妙な話かもしれねえが、本当にそうなんだから仕方ねえわな。

んで、何時までも混乱してたって仕方無えなと思った俺は、王女に召喚した理由を聞いてみた。

すると返ってきた答えが「お前を下僕にするためだ」だど！？

おいおい、リアル生活も上手く行ってたってのにそんなのありかよ！？

これからどうすりゃ良いってんだ！？

『なろう』史上最も人気の振るわない男が送るわちやめちや異世界ファンタジー、ここに開幕！

2011・9・27 ペース

低下ながら更新再開いたしました

第一話 辻原繁の失踪

―現代・日本国内中国地方某所―

「いやあ、補講も代講も無いごく普通の休日つてのは良いねえ」

都心部を意気揚々と歩く長身瘦躯に眼鏡の青年。

彼の名は辻原繁。動物行動学を専攻する20歳の大学生である。

専門は昆虫学だが、動物全般に対する愛が強く「文明と自然は距離を置いて共存すべき」という考えの持ち主である。

こういった性格故に、時たま動物相手に人間のように接する事もある（あくまで半ば冗談のようなもののだが）。

更に元々思い遣り深い性格の彼は家族や友達など、身の回りの人々も心から愛し敬う事を美徳だと信じている。

また、真面目な性格で気遣いも上手い為学校での評判もそれなりに良く、奇行が玉に瑕の好青年として中々に名の知れた存在でもあった。

彼は現在、補講・代講の無い純粋な休日を堪能していた。

というのも、彼の大学ではここ最近教員の事情により平日の休講が相次ぎ、その補講や代講を毎週土曜に開いていた。

日曜は別件で午前中の大半を消費する辻原にとって、土曜日には若干特別な思い入れがあったのである。

「さて、それじゃ今日は何処に行くかな」

等と地図を片手に考え込む辻原。

財布の中身や脚の具合から大方の予定を立てる彼は、洒落た飲食店

での食事や路線バス・路面電車・タクシーによる移動を行わない。移動は基本的に自転車と電車を用い、運転免許は持っているが専用の車を持っている訳ではないので移動手段として乗用車を用いることはない。

自転車・電車の管轄でない場所は基本的に徒歩である。

これらは全て、彼が有り金をなるべく趣味に使いたいと思うが故であり、それ故に彼は飲酒・喫煙・賭博の類にも手を出したことはない。

酒は元々好きではなく（寧ろ生徒時代自宅で食べたラムレーズン入りアイスに不快感を抱くほど）、煙草に至っては「毎日の煙草より月一のコカイン」という科学理論に基づきそもそも根底から忌み嫌う傾向にある（だからと言ってスモーカーであるという理由だけで他人を罵るような事は無いが）。

賭博を否定する考え方は幼い頃両親に教え込まれた事もあって筋金入りの域に達しており、テレビCMで魅力的なプロモーション・ヴィデオが流れるとそれに興味を示すも、それがパチンコ・パチスロの宣伝用に作られたものだとは判るや否や途端に落胆する程である。

予定を考えながら歩みを進める辻原。

しかしその一方では、何も知らない辻原を巻き添えにある出来事が起こり始めていた。

―同時刻・異世界カタル・ティゾル―

何処にあるかも判らない次元の壁を越えた場所にある、我々が暮らす浮世とは違う異世界カタル・ティゾル。

世界の根底に超自然的エネルギー——所謂『魔力』のようなものの概念が根付き、それに伴って生物相も大きく異なるという、我々現代人の知識の斜め上を行く世界。

その一大陸、まるで中世西洋を思わせる分化の根付く大陸ノモシア。そしてノモシアを支配する王国エクスーシアの首都中枢部に鎮座するのは、代々国を治める国王家の住まうテリヤード城。

辻原を巻き添えにする出来事を引き起こし始めていたのは、この城に住まう国王の一人娘コリンナ・テリヤードであった。

——テリヤード城・コリンナの自室——

起伏の無い細い身体に豪華なドレスを着込み、白金色の長いツインテールを棚引かせた王女コリンナ・テリヤードは、異世界の様子を鮮明に映し出す巨大な鏡を覗き込みながら、何かを呟いていた。

「遂に見付けたわ……こいつよ……この男よ……」。

この男なら間違いないわ……そう……この男なら……」

コリンナは、しゃがみ込んで上質な木材で作られた床材を素早く指でなぞっていく。

彼女の指の跡は白く光る線となり、奇妙な円陣を描いていく。円陣を完成させたコリンナは、立ち上がって解読不能な言葉を詠唱し始めた。

そして彼女の詠唱に合わせて、円陣は脈打つように光を増していく。

「（もうすぐ……もうすぐよ……もうすぐ私だけの忠実な下僕が……）」

―同時刻・日本国内中国地方某所―

「……うん、これは中々に良いな。やっぱりこの会社は安定したものを作る」

発売されたばかりの飲料を飲みながらそんな事を言う辻原は、休憩所のベンチでくつろぎつつ、街の風景を眺めていた。

二分ほどして、ゴミを処理しようかと辻原が立ち上がった、その時。

―フヴォウン！

「！？」

突風が吹き荒れるかのような音がしたかと思うと、辻原の背後に何やら光り輝く球体のようなものが現れた。

光の球体を元手に薄い光の板のようなものが舞っており、その姿は神秘的かつ幻想的であった。

「な……何だ？…一体何事だ……？」

咄嗟の出来事に驚いた辻原は慌てて周囲を見渡すが、どういわけかその存在に気付いているのは辻原だけらしく、周囲の人間は寧ろ

慌てふためく辻原に驚く始末だった。

「（もしかしてこの光る球体……俺にしか見えてないのか？
全く……何処の世界のファンタジーだよ、こんなもん……）」

等と考え込みながらも、辻原はコンビニで買った食料を頼張る。

「（とりあえずこういうのは、無視するのが一番だと相場が決まってる）」

根拠は無いがそうする他無いだろうと考えた辻原。

しかし世の中、そう何もかも上手く行とは限らない。

光り輝く球体のようなものは次第に肥大化していき、遂に必死で無視を決め込んでいた辻原をも巻き添えにする。

「（……ん？何だこりゃ……？やばいか？流石にやばいか？いや、確認するまでもなくやばいよなコレ？

そして何でこういう時に限ってカップ麺作ってんだ俺？何でカップ麺チヨイスしてんだ俺！？しかもうどんだから五分くらいかかるわ！）」

そして、次の瞬間

「（畜生、二分余計なんだよ！そしてうどんを選ぶ俺も俺だろ！何やってんだよマジ！このままじゃ明らかにヤバ——）」

——ヴォフン！

光の球体が一気に収縮するかのようにして消滅するのと時を同じく

して、意識を失った辻原は手に持っていた荷物ごとその場から消え失せた。

その場に残されたのは、湯を注いだから1分も経過していないインスタントのうどんだけだった。

第二話 さしガメ！（前書き）

突如謎の光に包まれ気を失った繁が目を覚ますと・・・

第二話 さしガメ！

―前回より―

何処とも知れない空間を、辻原は漂っていた。

その空間は、終わりのない曲がりくねった管に似ていた。

辻原の目に入る内壁の風景は、サイケデリックでありながら幻想的で、不思議な美しさを醸し出していた。

描かれているのが風景である事は辛うじて感じる事が出来たが、それが何処なのかは一切理解できなかった。

「（ここは一体……俺はどうなったんだ……？）」

考え込む辻原だったが、この謎めいた空間では何をしようとはば無駄である事は既に実証済みだった。

奇妙な力によって浮かばされたまま、ゆっくりと落ちていく。

その空間では幾ら動き回ろうとも、進むことも上がることも止まることも出来ない。

ただ、等加速度で落ちていく。それだけだった。

「（それにしてもこの壁画……凄く俺好みなんだが、一体何を描いたんだろなあ……）」

と、その時である。

突如、辻原の頭を激しい頭痛が襲う。

「――ッ！？（な、何だこの頭痛は！？頭の中でッ…針の塊が暴れ回っているような……ッ！）」

頭痛はその後二分半にも及んだ。

「（……何だったんだ……あれは……）」

頭痛収束に安堵する辻原だったが、ここで更なる怪異が彼を襲う。

「（――！？）」

頭の中が激しく揺れ動くような感覚に襲われたかと思うと、突如辻原の脳内へ、断片的な言葉が響く。

―おはれか　ル・テルへ　うだ　―

―かた　後、　そこ　簡単　ると出　い―

―前　れ　った　へり　ら　カタ　イズの
とれ―

―　だ　と　く　な　―

―　可　だ　と　め　な　―

―お　に　は　が　―

―何　も　る　事　な　、　絶　力　―

―恐　な　。　さ　た　お　を　け　せ　―

「（何だこの声は……俺に何を語りかけようとしてるんだ？）」

必死に考え込む辻原。

しかし幾ら考えてもその答えは出てきそうにない。

そんな中、異変は起こった。

―壊したいものを探せ。消し去りたいものを探せ。滅ぼしたいものを探せ。殺したい奴を探せ。―

謎の声が、遂にはつきりと聞き取れる明確な言葉を発したのである。

「（……！？

……壊したいもの？

消し去りたいもの？

滅ぼしたいもの？

殺したい奴？

……何を言い出すんだ一体……？

…第一、俺に何をしろっていうんだ……？）」

謎の声は尚も語りかける。

―それが、見付かったら、口を開け―

「（口？）」

—そして、吐き出せ—

「（何を？）」

—壊したい、消し去りたい、殺したい、滅ぼしたい、

その思いを精一杯に込めて、吐き出せ—

「（だから何をだよ？）」

—全てを消し去り滅ぼす、緑の霧、或いは、碧の流れ—

「（霧？流れ？）」

—それを以て、隠されたお前を、さらけ出せ—

「（隠された……俺……か）」

その言葉に覚えのある辻原は、断片的な言葉の解読を試みる。
しかしその最中、またしても彼は意識を失った。

—目覚め—

「……ん……」

目覚めた辻原は、木製の床の上で寝転がっていた。

「……ここは一体……何処だ？」

起き上がった周囲を見渡すと、そこが中世ヨーロッパを思わせる豪華な作りの部屋である事が理解できた。

「（だが何故…？俺は確か、あの謎の光に巻き込まれて気を失って……そうだ！荷物！何処かで何か落としたりしてないか！？）」

辻原は慌てて手荷物を確認する。

幸いなことに、失っていたのは作りかけのカップ麺だけだった。

「（良かった……カップ麺は仕方ないが、これだけあれば十分やっていける……）」

安堵した辻原は、続いてこの部屋からの脱出手段について考える。屋敷の主に頼んで出口まで案内して貰うのが筋というものだろうが、主含め屋敷の住人が友好的な存在だとは言いい切れない。

実際辻原は大学に入り立ての頃、ゲームセンターで一人ゲームに興じる高校生のプレイ風景を後ろから観戦していた所、詳しい理由は不明だが何故か高校生に睨み付けられ、罵詈雑言のような言葉を叩き付けられたような気がしたという事があった（店内の音声が酷かったのと高校生の滑舌が悪かった事からよく聞き取れなかった）。昔からそうだった経験を繰り返すたび「現代日本であろうとも危険なときには危険である」という事を幼くして熟知していた辻原は、なるべく屋敷の住人に見付からないような逃走方法を計画する。

しかし幾ら考えても良い案は浮かばず、結果的に彼の考えは行き詰まってしまっていた。

「（兎も角この部屋に人が来る前に何処かへ隠れないと……時代錯誤気味だが見るからに女の部屋だし、見付かれば洒落にならんぞこ

れは……)」

辻原は凄まじい速度で隠れ場所について考えを巡らせる。

しかし、やはりというか何というか、決定的にまとまった案は出てきそうに無かった。

と、その時である。

辻原の身に、更なる危機が迫る。

ガチャリ

「!？」

豪奢なドアノブが回転し、部屋に何者かが入ってきたのである。

焦りと未知なるものへの恐怖で慌てふためく辻原だったが、やがてそれも馬鹿馬鹿しく思い、動くのをやめた。

そうして入ってきたのは、起伏の無い体つきをして、豪奢なドレスを身に纏う、白金色のツインテールを棚引かせた高貴そうなティーンエイジャーの少女―基、異世界力タル・ティゾルは大陸ノモシアを支配する王国エクスーシアを治める国王の一人娘こと、コリンナ・テリヤードであった。

その姿を見た辻原は、再び考えを巡らせる。

「(どういう事だ……? あんな服装をした人間が、まさかこの世にまだ居るってのか?)

そんな馬鹿な。時代錯誤も大概にしてくれ。金属製の鎧に剣と盾で戦う兵士や、忍者の方がまだ現実味がある……。

だがだとすれば、この女は一体何者なんだ……？」

一方のコリンナは、辻原の姿を見て内心歓喜していた。

「（やったわ……成功よ……そう、この男よ……。
私が探し求めていた、最高の下僕……！」

これでこのつまらない毎日がもつと愉快になるに違いないわ……）」

そんなコリンナの考えどころか、名前すら知らない辻原は、ふと左手の掌に違和感を感じる。

「（……ん？何だ？）」

辻原が左手を見ると、掌に何やら黒い紋章のようなものが刻まれている。

その形状はまさしく昆虫のようで、大学で昆虫学を学ぶ辻原にとってその種類を特定する事は容易かった。

「（これは……サシガメか？）」

サシガメ。

漢字では「刺亀虫（刺す亀の如し虫）」または「刺椿象（刺す椿の象）」と表記されるそれは、虫や鳥獣の体液を嚙るカメムシの一種である。

一瞬入れ墨の類かとも思ったが、生憎と辻原にそんな趣味はない。では冗談か何かで書き記した落書きか何かか、とも思い記憶を探ったが、それも当て嵌まらない。

何はともあれそれを不審に思った辻原は、人差し指と中指で、紋章

に軽く触れてみる。
事が起こったのは、その瞬間だった。

「——！？！？！？！？」

辻原の脳内にて、驚くべき勢いで様々な情報が再生される。
更に驚くべき事に、辻原は再生された全ての情報を余さず明確に記憶するに至ったのである。

これにより辻原は、一瞬にしてこの謎の状況についての全てを知るに至る。

あの光や謎の空間の正体、何故自分があんな目に遭ったのか、この少女は何者なのか、謎の声によって語られた言葉には如何なる意味が秘められていたのか、この紋章とは一体何なのか。

その全てを、辻原は理解できた。
そしてそれにより一気に平常心を取り戻した彼は、不気味な笑みを浮かべ、呟いた。

「——成る程な。大方覚った」

大学生・辻原繁。

下僕欲しさに彼をこのカタル・ティゾルへと召還した張本人である王女コリンナは、知らなかった。

温厚で博識、かつ真面目で心優しいと専ら評判になっている彼の持つ、おぞましい本性の存在を。

第二話 さしガメ！（後書き）

繁の持つ本性とは一体？

第三話 可愛げゼロの王女（前書き）

下手に出る繁を相手に強気に振る舞うコリンナだったが……？

第三話 可愛げゼロの王女

―前回より―

異世界カタル・ティゾルはエクスーシアのテリヤード城にて、コリンナと辻原はひたすら向かい合っていた。

お互い黙り込み、微塵も動かないまま数分間も睨み合っていた二人。その沈黙を打ち破ったのは、辻原の方だった。

「初めまして。名も何も知らぬ、麗しの異国の姫君よ」

柄にもなく、というより、上役や遠い親戚などを相手にするような声で馬鹿丁寧に話を切り出す。

「私は辻原繁。嘗て倭或いは大和と呼ばれし極東の矮小な島国に産まれた、取るに足らない庶民です。

本日はお許しもなく貴方様のお城へ侵入してしまったこと、深くお詫び申し上げます。

ひいてはこの城の出口を教えて頂きたいのですが、宜しいでしょうか？」

辻原の芝居がかった挨拶を受けたコリンナもまた名乗る。

「此方こそ初めまして、辻原。私はコリンナ。コリンナ・テリヤード。

このテリヤード城城主にしてこの国の国王、ジェローム・テリヤードの一人娘よ」

「コリンナ…… 良いお名前ですな」

「有り難う、辻原。」

それと城の出口についてだけど、心配要らないわ」

「何故です？」

辻原の問いに、コリンナは声高らかに言い放つ。

「何故って？決まってるじゃない。貴方はこれから私の下僕になるからよ。」

下僕である以上、私の言うことは何でも聞いて貰うわ。城から出るにしても私の許可が無ければ駄目よ。

でも有り難く思いなさい。このエクスーシア王国……いいえ、ノモシア大陸一の美少女であるこの私の下僕で居られるんだから」

黙り込む辻原に、コリンナは更に付け加える。

「ああ、それと……貴方が生まれ育ったって言うそのワとかヤマトとかいう国だけど、帰ろうなんて考えないことね。

だって死んでも無理なもの。

貴方に使った召還魔法、この世界で扱えるのは私達神性種の中でも特に優れたエリートだけなの。

そもそもこの城に、その魔法を扱えるのは私と私のお父様しか居ないわ。

だから貴方が元の世界に戻る事は、絶対に無理って訳。

あ、そういえば世界とか何とか言われても、何のことだかさっぱりでしょ？

良いわ、教えてあげる。特別サービスよ、感謝なさい」

大仰な動きで歩みながら、コリンナは言葉を紡ぎ出す。

「この世界の名は——「カタル・ティゾル」——!？」

突如話を遮られたばかりか、決して知り得る筈のない情報を軽々語り出す辻原に驚いたコリンナは、思わず言葉を失った。
しかし辻原は、尚も話し続ける。

「それぞれに文化・技術等が大きく異なる6の大陸から成る世界。その根底に存在するのは、自然界に起因する二つのエネルギー理論とそれを昇華させた技術。
魔力からなる魔術と科学からなる学術。

これら二つの影響により生態系は日々多様化の一途を辿り、優れた生物学者は中堅貴族と同等の身分を得る事もある。
ただ、身分の高い者には圧倒的に魔術関係者が多い」

コリンナは、本来知っているはずのない情報を淡々と語り続ける辻原に気圧されていた。

「（何故……？何故なの……？何故この男が、カタル・ティゾルの事をこんなに知っているの……？）」

「文明を形成する生物の種族・形態も多種多様であり、一口に人類と言いくるめる事は難しい。

神性種は、数ある”カタル・ティゾル人”の中でも特に希有な存在であり、総じて王族・貴族に属し社会的地位も高い。

魔力・魔術の才能にも長け、主要な魔術関係者はどこかで神性種と繋がっている。

名前の由来は主要な出身地であるノモシア大陸の大国・エクスーシア王国に伝わる神話に起因。

神性種はその神話に於ける造物主の眷属を自称し——「ちよつと待ちなさいよ！」

淡々とした説明を遮るようにして、コリンナが怒鳴る。

「神性種がトウマージョーの眷属である事は紛れもない事実よ！創世の神トウマージョーとその妻である記憶の女神インディクリストとの間に産まれた子供達……その末裔が私達神性種なのよ！？」

それを自称ですって？ふざけるのも大概にして！

もう良いわ、今日から貴方は下僕なんかじゃない。私の奴隷よ！

死ぬまでペット以下の扱いでコキ使ってやるわ！

有り難く思いなさい！これから貴方は——「黙れクソガキ」——んなつ！？」

騒ぎ立てるコリンナの言葉を遮り、辻原は本音を口にした。

「こつちが態々下手に出てやってるからってな、調子こいてベラベラ喋ってんじゃねえよゴミクスが。」

つか目障りだわ、お前。ハッキリ言わせて貰うが、一度死んだ方がいいんじゃないか？

つつかお前みてえのは一度ぐれえ本気で死ぬべきだろ。いや、冗談抜きで」

思いも寄らぬ毒舌に、コリンナは言葉が出なくなった。

明らかに先程までとは態度が違う。本当に同一人物なのかと疑いたくなるほどに。

愛と友情に生き、親しい者を思い敬う事を美德とする辻原。しかしその本性とは、そんな彼の設定を根底から覆すものである。

彼はある一面に於いて卑劣で狡猾なサディストであり、敵や、嫌っ

ている者相手ではどんなに卑怯な手段や姑息な真似も厭わない。その上ある意味で独善的な考えを持っており、動機が家族や友人など親しい人々への愛によるものであり、尚かつ違法でなく表沙汰にならなければどんな事でもやって良いという考えの持ち主である。更にそれらの動機が含まれていない悪行も「生物は生きるに当たって必然的に罪を犯してしまうものだ」という言葉で弁明しその殆どを完全に正当化してしまう。

斯様に何とも悪質な男というのが辻原繁の本性の一つであり、例えるならばホンソメワケベラとアンボイナガイの中間といった所であろうか。

ホンソメワケベラとは掃除屋として名の知れた魚であり、魚の歯に詰まった食べカスや体表の寄生虫を啄むことで広くその名が知られている。

一方のアンボイナガイは、猛毒を含んだ針で魚を毒殺し丸飲みにしてしまう恐るべき巻き貝であり、この毒は人も殺せる程に強力である。

同じ環境に棲みながら悉く正反対の性質を持ったこの二種類こそは、まさしく辻原の性根を表すに相応しかった。

暴言はまだまだ続く。

「つか、お前は正直なところアレだな。テンプレの塊だな。要するに面白みの欠片も無え。

今日日萌え豚全盛期……作家・アニメーターは勿論企業商店地方自治体観光地、果ては教育機関や寺院まで萌えに走る時代だ。そんな時代だからこそ、スタンダードな萌え属性は使い古されつつ

ある。信者や新参の根強い指示があつて廃れこそしてねえがな。

だがそれは逆に言えば、テメエみてえな奴なんぞ何処にだつて居るつて事になる。

貴族・金髪・ツインテール・貧乳の時点でもうカブリまくりだつつの。

要するに、テメエみてえな奴の代理なんぞ腐るほど居るんだよ。

そもそも異世界召還自体、『小説家になろう』じゃ腐った先に森が出来るぐれえの数になつてやがる。

しかもその殆どがティーン男のハーレム物語だ。

ふざけんじゃねえぜ、ド畜生めが。

何か自分で言つて腹立つてきたしよ……とりあえずお前、殺すわ」

辻原は恐怖の余り硬直して動けないコリンナの首筋を掴み彼女を睨むと、その口を大きく開けた。

開かれた口の中から現れたのは、無数の太い針の束。その先端部から、若草色の霧が勢い良く噴射された。

第三話 可愛げゼロの王女（後書き）

繁が吐き出した霧の正体とは！？

第四話 とある学生の異世界紀行（前書き）

遂に紋章の謎が明らかに！

第四話 とある学生の異世界紀行

―前回より―

シユオオオオオオオオオオオオ

「つくああああああああああっ！」

コリンナの顔面から白煙が上がるのと同時に、辻原はそれを投げ捨てた。

緑色の霧を顔面に浴びせられたコリンナは、その激痛に両手で顔面を押さえ藻掻き苦しむ。

その顔面からは絶えず白煙が生じており、暴れ回る彼女の顔から滴る液体が、彼女の両手から床材や家具までも、手当たり次第に焼き溶かしていく。

「そのまま一生藻掻き苦しんでろ、クソガキ」

辻原は藻掻き苦しむコリンナの尻を蹴飛ばし、指先から放つ緑色の霧で部屋の扉を溶かして廊下に躍り出た。

「しかし便利だな、この力は。」

無制限かつ精密仕様で破壊力抜群。その上マニュアルまで付属とは」

辻原が絶賛する”力”とはつまり、先程放った緑色の霧の事である。『ヴァーミン』と呼ばれる全十種類の異能力の一つであるこの緑色の霧の性質は、現実世界で言う硫酸に近く、辻原の意志により自由自在に操られるこれは坂原が命じればどんなものをも焼き溶かしてしまう。

更に驚くべき事に、この液体に対する命令の中には「溶かすな」というものも含まれており、これにより余計な被害を出す心配も滅多に無いという、馬鹿に親切な設計だった。

「『ヴァーミンス・ヴォーセミ アサシンバグ』だったか？中々に洒落た名前じゃねえか。

アサシンバグってのは俺の左手に出た紋章よろしくサシガメの事だが、何故サシガメで溶解液なのかねえ」

辻原は城内の廊下をのんびりと歩んでいく。

異世界の美術品はどれも魅力的で、彼はそれらをじつくりと堪能したかった。

しかしその願いが叶えられるほど、現実も優しくはないらしい。

侍女の報告によりコリンナの異変をいち早く察知した城に控える兵士達が動き出したのである。

魔術関連の技術が深く関わる所以か、奇妙な術式により辻原の動きは直ぐさま兵士達に知られてしまった。

どうにか逃亡を試みた辻原だったが、そこは一介の大学生。しかも根っからの座学派で運動部になど入ったこともない。

当然すぐに息切れを起こし、メイスと盾を構えた兵士達に取り囲まれてしまった。

「観念しろ侵入者！」

「そうだ！その罪牢獄で償え！」

「死刑台に送ってやる！」

辻原に対し口々に悪口雑言を浴びせる兵士達。

こういった手合いの始末の悪さを知っている辻原は、能力で撃退しようかと考える。

しかしその時、

「黙れ！黙らんか！騒ぐでない！案ぜずともこの男は逃げも隠れも出来ぬわ！」

隊長らしき男の一声で、兵士達は一斉に押し黙った。

「有り難うよ、一際貫禄のある旦那」

「礼には及ばぬ。儂はこの者共の長であるからな」

隊長の男は、辻原の軽口にも冗談交じりで返答する。
少なくともこの兵士よりは理解力のある人物らしい。

「して……貴様は何故この城に居る？」

隊長の問いかけに、辻原はさも真実であるかのように大嘘を語り聞かせる。

「ここだけの話、俺は大臣殿から極秘に呼ばれてやって来た辺境地の霊媒師だね。

昔からこの辺りに出るっていう質の悪い悪霊を退治しに来たのさ」
我ながら見え透いた嘘である事は自覚済みだった。しかし、ありのままの事を話せば間違いなく袋叩きにされる。

「（どうせ嘘だと見抜かれんのがオチだろうな……）」

等と踏んでいた辻原だったが、隊長の反応は意外なものだった。

「な、何と！貴様はもしや、あの悪霊アクセタルを倒す為にここへ来たというのか！？」

全く持って予想外の反応だった。

しかし辻原は、取り乱すこともなく話を進めていく。

「そうそう。んで、俺と大臣殿の会話を偶然立ち聞きたコリンナ

姫が俺の話を聞きたいってんで、装備展開しながら話を進めてたのさ。

で、腹が痛くなって厠に行こうと思ったんだが、慌ててたもんで姫に教わった道順を忘れちゃってさ。

探し回ってる間に変なところへ迷い込んでよ、今はその帰りって訳だ」

「そうだったのか……それは大変だったな。しかし此方も大変なのだ。

姫様がいきなり不埒な輩に襲われてな、顔と掌が無惨に焼け爛れてしまっておるのだ。

それでその犯人を捜しているのだが……」

「そうか……そいつぁ大変だな。良し、ここは俺が人肌脱ぐとするぜ」

「何？」

「姫の為に故郷に伝わる薬を作ってやろうかと思ってな。火傷の傷口に塗るとそれが最初から無かったように治る優れものなんだよ。

城に来る途中この辺りの草や石ころでどうにかなるのは確認済みだし、材料集めて来ようかと思ってな」

「そ、それは本当か!？」

「嘘なわけねえだろ？」

「おお！感謝するぞ霊媒師よ！さぁお前達、喜ぶのだ！」

兵士達が喜び沸き立つ中、辻原は隊長から出口への道順を聞き出し（「忘れた」と言ったら詳しく教えてくれた）、城からの脱出に成功する。

こうして辻原はまんまと城外への脱出に成功した。

― 城下の市街地 ―

「成る程。こりゃ確かに凄えわ。まさにファンタジーって奴だな」

辻原が繰り出した市街地は、まさしく彼が見た架空の異世界を思わせるものだった。

鎧やローブ等様々な服装の人々が道を行き交い、亜人や獣人が人間と思しき人々と対話する、そんな光景。

それが、彼の眼前に広がっていた。

「さて…それはそうと、どうにかして元の世界に戻る方法を考えなきゃなんねえよなあ。

とりあえずここに定住する事を考えるか……あの声は『カタル・テイズルの破壊神になれ』とか何とか言ってたが、そんなもんそうそうなれるもんでもねえしな。

そうと決まれば早速働き口だが——『号外！号外イ！号外だア！』

——？」

ふと上を見上げると、背中に翼を持った鳥のような姿の獣人——羽毛種と呼ばれる者達——の男性が、上空からビラを撒いていた。

そのビラを拾って見た辻原は、驚愕の余り言葉を失った。

「……………何故……………あの事がバレてるんだ……………？」

辻原はすぐさま路地裏に逃げ込み、再びビラをよく読み直してみた。

「…『異世界人シゲル・ツジハラ、コリンナ姫への傷害で殺人未遂……………クソ、バレやがったか……………』」

そう。辻原が城を抜け出してから、彼の容姿に関する情報がコリンナによって城内に知れ渡るに至り、それがそのまま指名手配にまで

発展したのである。

「何はともあれ逃げねえとな……王女の顔面に硫酸ぶっつけたなんてのが裁判になりや、懲役通り越して死刑確定だ」

辻原はそそくさとその場から逃げ出し、人気のない広葉樹林に逃げ込んだ。

「（何か化け物とか出そうだが仕方無え。いざとなりやヴァーミンでどうにかしてえところだが…一応喰われる覚悟もしておくか……）」

「

広葉樹林の道無き道を掻き分けて歩みを進める辻原。

てつきり猛獣や化け物の類が出てきて喰い殺されかけるのではないかと思っていた彼だったが、この後そんな予想は悉く裏切られることになる。

第四話 とある学生の異世界紀行（後書き）

逃亡者・辻原繁！広葉樹林を往く彼がであつた驚くべきものとは一体！？

第五話 逃げ込め！ツジ原さん（前書き）

森の中を歩いていた繁は、そこでカタル・ティゾルの数奇な生態系を目の当たりにし……

第五話 逃げ込め！ツジ原さん

― 前回より・広葉樹林 ―

辻原は一人広葉樹林の中を進んでいた。

「驚いたな」

辻原は呟く。

「こうして自然の中を歩いていると、改めて今異世界に居るんだと再認識させられる。

草木も虫も、見たことのない奴ばかりだ。熱帯雨林の奥地にも行かなきゃこんなのは居ないだろう」

広葉樹林には奇妙奇天烈な形態の生物がひしめき合っており、そのどれもが辻原にとっては興味深く思えた。

虹のようにきらびやかな翅の羽虫が飛んでいたかと思うと、それを目玉模様の芋虫が飛び跳ねて捕食する。

地を這う円錐形をしたムカデのような生物の身体は美しく輝く青色で、毒々しくも煌びやかな模様の翅を持つ蝶の複眼はカタツムリのように長く伸び縮みする。

根元が泥山のように脹れ上がった樹に登った蟻がその表面を触角で叩くと、樹皮が扉のようにスライドして開き、中は蟻達の都市国家が如く有様だった。

ふと小さな紙飛行機のようなものが飛んできたので捕まえて観察してみると、その正体は植物の種子らしかった。

このように、自分が生まれ育った世界とはかけ離れた生態系を持つ

カタル・ティゾルの自然をもう暫く堪能していたかった。
しかしそれを許さないのが現実というものである。

「探せエ！捕らえろオ！」

「悪漢ツジハラを捕らえて血祭りに上げるのだ！」

「引きずり下ろして細切れだ！」

林の向こうから聞こえてくるのは、間違いなく兵士達の雄叫びである。

「やべえな。極力見付からないように逃げたつもりだったが、どうやら甘かったらしい。」

何処かに適当な隠れ家は…っと

辻原はなるべく音を立てないように、姿勢を低く保って兵士から離れようと移動する。

しかしそうこうしている間にも兵士達はどんどん辻原に近付いてくる。

事を案じた辻原は、ふと沢の側に広葉樹林に似つかわしくない煉瓦造りの家を発見する。

「あの家にかくまって貰うか……」

辻原は見付かるのを覚悟の上で立ち上がると、家に向かって全速力で走り出した。

—家の前—

何とか家の前まで辿り着いた辻原は、扉を叩く。

ゴンゴン、ゴンゴン

「ご免下さい！ご免下さいませ！家の方は居られますか！？」

幸いにも家主は在宅だったらしく、温厚そうな若い女の声が返ってきた。

『どうなさいました？』

「訳あってテリヤードの兵に追われているのです！

贅沢は言いません！兵が退くまで匿って頂きたい！」

『テリヤード兵から！？何があつたかは存じませんが早くお入りなさい！鍵は開いていますから』

「感謝します」

家主の計らいにより辻原は民家の中に逃げ込んだ。

家の内装は和風とも洋風とも言える成り立ちで、中世ファンタジーと現代日本が混ざり合つたような雰囲気がある。

「土足で構いません。どうぞお上がり下さい」

奥の方から聞こえた家主の声を頼りに、辻原は恐る恐る家へと上がり込む。

何分土足で屋内に上がるといふのは初めてだったため、多少の躊躇いがあつたのだ。

そのまま暫く歩いていると、奥の方から家主らしき細身の女が現れた。

部屋の雰囲気と同じような服装のその女は、整った顔立ちに深紅のロングヘアが似合っていた。

何処かで見たような顔だが、気のせいだろう。

「大変でしたね。しかし助かって何よりです——

「いえいえ。此方こそ助けて頂き有り難う御座います——

そしてお互いの顔を見た二人は、

——！？」

一瞬硬直した。

そして数秒後。

「……繁……？」

「……香織……？」

再度顔を見合わせる繁と香織。

そして次の瞬間、二人の口から言葉が爆薬のように飛び出した。

「何で貴方が此処に居るのよ！？」

「そらアこつちの台詞だろうが！今まで何処で何してた？」

「何って、カタル・ティソル此処で生活してたけど？」

繁と会話を繰り広げるこの深紅の長髪が特徴的な女は、名を清水香織という。

繁の従姉に当たるこの女は、3年前の秋から行方知れずとなっており、その事は繁もまた深刻視している案件だった。

「まあそういう事なんだが、そういう事じゃねえわ。」

三年間も行方不明になっという理由がそれだけってのはおかしくねえかって事だよ！

叔母様や俊一達がどれだけ心配したか判ってんのか？」

離れ離れになっていた母や兄弟の名を出された香織は、一瞬口をつぐむ。

「や……それは確かに、悪かったと思うけどさ……でも仕方ないんだよ。」

変な光に巻き込まれて、妙な奴に捕まった所をどうにか逃げ出して、

「気が付いたら何か魔法っぽいのが使えるようになって……」

「何か漫画みてえな話だなぁ」

「事実なのは確かんだけどね。私も正直信じられなかった。でも、この家のお婆さんに拾われて、そこで色々な事を教わってね。そのお婆さんも半年前に病気で亡くなって、今は私が一人暮らししてる。」

仕事の合間にどうにか戻る方法を探したけど、結局は駄目だった」

「それで、ここに居続けてると？」

「そういう事。それで、繁の方は？何があったの？」

「俺か？俺はなぁ……」

辻原は香織に、今までの経緯を話した。

「つまり貴方は……ヴァーミンの有資格者になったって事？」

「そういう事になるな。『ヴァーミンス・ヴォーセミ アサシンバグ』」

つまり八番目で、象徴はサシガメって事だ」

「八番目って……溶解液の能力？」

「何だ、知ってるのか？」

「知ってるも何も、生前お婆さんが色々教えてくれたからね。」

「一応十種類全部、覚えてるつもり」

「そりゃ凄え」

「そうでもないよ。ただ、お婆さんは何時も言ってた。『ヴァーミンの有資格者を敵に回しちゃいけない』って」

「そんなにおっかねえもんなのか」

「らしいよ。」

それはそうと、とんだ無茶をやらかしたっぽいね？

よりもよって王女の顔を焼いたとか何とか」

「正確には『焼き溶かした』だが、確かにそうだ。俺はこのヴァーミンの初発をコリンナ・テリヤードの顔面に放ってやった」

「昔から変な所で本気出す正確だとは思ってたけど、どうも筋金入りみたいだね」

「お陰で城から出られたは良いが指名手配——つまり犯罪者だ。」

さて、どうする？お前は今現在、王女への傷害行為を働いた極悪人を匿っているわけだが」

「どうするって、決まってるじゃん。」

貴方をこのまま匿い続けて、その活動をサポートする。それだけよ」

「意外だな。小さい頃から正義感が強かったお前からすると有り得ないぞ」

「いや実は、私を呼び付けたのもあのコリンナって王女でさ。」

その件で結構個人的な怨みがあったりするのよ。あとあいつ、親手玉に取って贅沢し放題なもんだから偶に増税が酷いんだよね。態度も気に入らないし」

「そうか……あのガキ、見たとおりのクズだったようだな」

「そういう事。」

んで、繁はこれからどうするの？まさかとは思っけど、このままここに留まり続けるなんて訳無いでしょ？」

「勿論。折角異世界に来たんだ。何かやらすには終われねえ」

繁はその晩から、早速活動計画を練り始めた。

第五話 逃げ込め！ツジ原さん（後書き）

従姉妹・香織と再会した繁は一体何をしでかすつもりなのか？

第六話 サポート要員にお勧めな従姉妹（前書き）

繁が定めたカタル・ティゾルでの活動は、主人公にあるまじきものだった。

しかしその内には彼なりの真意があり……

第六話 サポート要員にお勧めな従姉妹

―前回より―

「で、どうだった？私の貸した資料、役に立った？」

「愚問だな。大助かりだ」

「そう、それは良かった」

昨晚、繁は香織に私物のある資料を貸りていた。

カタル・ティゾルについてのより詳しい情報と、今後の活動に於ける目標を探す為である。

資料というのは、学生用の教科書や図鑑から各大陸の観光ガイド、更にはローカル情報誌など多岐に渡る。

それら全ての資料は、何れも今は亡き薬屋の老婆と彼女の弟子である香織が収集したものであった。

「準備物の目星もつけてある」

繁は香織にリストを差し出す。

表記されている文字はカタル・ティゾルで最もスタンダードな言語のものであった。

「凄いね、もう読み書き覚えたんだ」

「紋章に触った時、全部流れ込んできた」

書こうと思うと勝手に頭の底の方から湧き出て来やがる」

「流石はヴァーミンの有資格者。私だって全部の言語覚えるのに半年かかったのに」

「俺もよくわからん」

何にせよ言葉が余裕で通じるのは助かる」

「召還魔法の影響だね。喋る分にはどこでも問題ないよ」

「素晴らしい。ややこしいモンは全部ご都合主義でどうにかなる。まさに異世界ファンタジーって奴だ。」

で、どうだ？この世界で三年も暮らしてきたお前から見て、そのリストに何か問題点はあるか？」

「別に無いと思うけど、繁はどこか不安なの？」

予想を外れた香織の答えに、繁は淡々と返す。

「予算面が予想以上に高くついちまったってのと、リストの最後に入れた『兆眼紫円陣』……」

「ああ、これね」

「今回、ソレがどうしても要るんだ……が、だ。」

そいつは去年の法案改正の所為で今じゃ生産停止の上、製造法も現存品諸共お上の押収喰らっていると来た。

だからどうしたもんかなあと、思ってた所だな」

兆眼紫円陣とは、指定した無生物を至る所へ、そこに在るべき姿で転送する布状の魔術道具である。

転送先に距離は関係なく、異なる世界にすら送り届けることが出来るという奇跡のような代物だった。

繁は資料でこれの情報を目にした時即リストに追加したものの、後になって入手はほぼ不可能と知って落胆していた。

しかし、そんな繁に対する香織の返答は、またも彼の予想を上回るものだった。

「それなら心配ないよ」

「どういつ事だ？」

「だってこれ、うちにあるもん」

「……何？」

「いやだからさあ、これうちにあるんだって。

押収されたのは二十年前の魔術道具売買に関する法案の改定案で導入された『購入証』付きの奴と、一部の公的機関・高所得者が持つてただけだから」

カタル・ティゾルにて一般向けに流通する機材・道具類には、性能に応じて格付けがなされる。

この格付けで上位に分類された魔術道具は、売買にあたりややこしい法的制限が課せられ、更に購入者はそれを証明するための『購入証』なる書類を所持しなければならず、ある一定の状況下（購入証を提示出来ない状態で魔術道具を使う、違法行為に使用する、所持権利を失ってなお手放そうとしない等）に於いては、政府によって該当の品を押収されてしまう。

法改定の結果、兆眼紫円陣はその数量こそ少ないものの性能が高すぎると判断され、殆どの所有者が政府によって該当の魔術道具を押収されてしまっていた。

但し購入証導入以前から所持していた物についてはこの限りではなく、香織の恩師であった老婆の所持していたものは押収対象の定義に当て嵌まらなかった。

「そつえばそうだったな……何分、法律関係はまだ覚えきれて無くてなあ……」

「仕方ないよ。基本法規に加えて各大陸が独自に法律定めちゃってるからね。

まあ、気楽に覚えていけばいいと思うよ？元々指名手配中の身の上だし、そんなに必死こいて覚え込まなくても」

「それはそうかも知れんがよ、だからって法律完全無視とはいかん
だろ。

業に入っては業に従ってな便利な言葉があるわけだしな」

「うん、字が違う。誤字にしては明らかにどうかしてる。でも私は

突っ込まない。

っていうか、兆眼紫円陣の他にもうちで確保できる物はいけど…
…一体これで何を企んでるの？」

「何ってお前、アレだよアレ」

繁はごく自然に、ぼつりと言った。

「金儲け」

「……金？」

「そう。」

お前は三年前にこっちへ来てたから知らないだろうから教えてやる。
実はこっちの世界の日本じゃ、馬鹿でかい地震の所為で一部都道府
県が壊滅的な被害を被っててよ。

マグニチュードは8.5かそこらだったかな。観測史上最大、規格
外の大地震だったそうだし」

その言葉を聞いて、香織は口を噤む。

まさか自分が姿を消してから、そんな事が起こっていろいろ等とは予
想もしていなかったのだ。

「幸いにも国全体の機能が麻痺する程じゃねえし、うちの県も無事
ではあったんだがな。」

二年前に政権交代があった所為で内閣の使えなさ感がヤバくてよ」

「じゃあ、被災した人達は…」

「各方面からの支援で暮らしはナンボか楽になってるが、問題は山
積みだな。」

特に、どっかの馬鹿が修理代ケチった所為で原子力発電所がぶっ壊
れやがったもんで事態は更におっかなくなってるやがる」

「つまり、カタル・ティゾルで稼いだお金を兆眼紫円陣で向こうの世界へ送り込むんだね？」

「その通りだ。このテの境遇に晒された奴は大体辿り着いた世界を救いたがるが、俺は違う。」

あくまで俺が産まれた世界への愛を示し、俺が育った世界への敬意を示す。

それが、俺を産み出し育ててくれた世界への、最大の恩返しであり善行だ。

その為には汚え事もしなきゃならんだろうし、最悪死も覚悟してるが……どうする？

そこまでするクズ従兄弟に、お前は肩入れする覚悟があるか？
運が悪けりゃ、お前も巻き添えだぞ？」

言い方こそきついが、その言葉には大切な従姉妹への思いやりが含まれていた。

そしてその事をちゃんと理解している香織は、自信を持って答える。

「当然。ここで捨てるくらいなら、兵士に追われてるって時点で家に入れてないよ。」

こんな所で三年も暮らしていると、妙なところで勘も鋭くなっちゃうからね」

「そういうもんか」

「そういうもんだよ。大体、繁の考えたことは面白さという一面ではほぼ外れが無いもん。」

元の世界にも帰れずにこんな異世界で骨埋めるくらいなら、精々足掻いてみたいと思ってたんだ。

情報収集とかなら任せてよ。

魔法は実戦で使い物になるようなレベルじゃないから戦ったりは出

来ないけど、小細工なら自信あるから」

「頼りにしてるぞ」

かくしてここに、カタル・ティゾルを混沌に陥れる異世界人のコン
ビが誕生した。

第六話 サポート要員にお勧めな従姉妹（後書き）

次回、情報収集開始に伴い新キャラ登場！

第七話 辻原さんと突然の爆発事故（前書き）

変装して大陸首都へ向かった繁は、そこで突然の爆発事故に遭遇し

……

第七話 辻原さんと突然の爆発事故

―前回より―

「さて、どうするかな」

前回、カタル・ティゾルでの活動方針を確立させた繁は現在、最初の現場として選定したノモシアの大国・ルタマルス首都圏ジュールノブルの街道にてベンチに座り込んでいた。

ルタマルスはエクスーシアに次ぐ第二位の地位に属するノモシアの主要国家が一つであり、実質的にはエクスーシアを遙かに凌ぐ程の国力を誇る。

ただ、比較的新しく歴史の浅い国家である為形式上の最上位はエクスーシアとして定められており、その立場は現代日本に於ける皇族に類似したものである（しかも当のエクスーシア上層部はこの扱いに全く気付いていない）。

そしてベンチに座り込む繁だったが、彼は何分指名手配中の身である。

そのままの姿で出歩けば、ノモシア大陸内ならば普通に動き回ることなど出来はしない。

斯様な関係上、彼は現在身元を隠すために変装を強いられているのだが、その姿というのがまた奇抜の一言だった。

否、奇抜と言うよりは、怪しい。

上半身は赤の毛筆書体ででかかと『致死量』と書かれた黒のＴシャツを着込み、その上から白衣を羽織っている。

下半身は灰色の作業服と爬虫類を思わせる質感のベルトを巻いて、

靴の足跡から特定されては困ると黒いゴム長靴を履いていた。

何より怪しげなのは頭部であり、巨大なバツタ丸々一匹を模したフェイスマスクには特殊な術が施され、頭部と一体化しているようだった。

「さて、そんなこんなでこんな変装——ってか仮装だなこりゃ、まあ良いや。

何にせよ金儲けの計画を進めねえと。

とりあえずアレだ。ルタマルスはノモシアでも特に異文化交流が盛んな癖に、未だ王政なんて時代遅れな手法に拘る懐古厨だ。だがそれは、こっちからすると好都合だとも考えられる。

ぶつちやけ貴族のが、弄くる上で楽しそうだからな」

そんな事をばやきながら、繁は街道を歩いていく。

作り込まれた装備品は、何れも驚くほどに通気性が良く、繁は強い日差しの下にあつて尚涼しげな態度を保てていた。

現代社会の街道でこんな格好をしていれば好奇の目で見られ、好ましくないトラブルに発展することもあるだろうがしかし、ここは異世界カタル・ティゾル。

奇抜な格好をした者が我が物顔で堂々と公道を闊歩するなど日常茶飯事である。

中には、我々人類と同じだけの知性レベル・言語能力を持つというだけで、人間とはかけ離れた容姿の者も居る。

そんな中にあつて、仮装した繁の姿というのはさほど目立つわけもなく、寧ろ逆に隠れ蓑として十分機能する程のものだったのだ。

「さて……地図によるとジュールノブル城はもうすぐなんだが……この道はどう行きゃ良いんだ？」

一角獣の石像はもう通り過ぎた筈なんだが……」

城を目指す道中、道に迷い地図と睨み合う繁。
そんな彼の熟考を遮るように、事態は急展開を見せる。

ツドオオオオン！

鋭い爆風と凄まじい爆音を伴った、恐らくは可燃性ガスがある種の燃料によるものであるう爆発事故。

「い、一体何事だ！？」

慌てながらも、繁は全速力で現場を目指す。

事故現場でなら自分のヴァーミンを活用できるのではないかと考えたからである。

無論、出過ぎた真似はしない。あくまで謙虚に、そして臆病に歩を進めるのが繁の基本的なやり口だからである。

―現場―

「失礼、何か凄まじい爆風が来ましたが、一体何が起こったんです？」

繁の問に、野次馬の一人である禽獣種（哺乳類風獣人）の若者は快く答えてくれた。

「爆発事故だよ。あそこの廃倉庫に溜まってた魔ガスが何かの拍子に爆発したんだ」

「よくある事なんですか？」

「いや、滅多にないよ。魔ガスは魔力の集まりで、加工法もかなり特別だからそう簡単に爆発したりはしない筈なんだけどなあ」

ばやきながら、若者は何処かへ立ち去ってしまった。

「（魔ガス…… 確か天然の魔力をエアゾル状に加工したものだったよな？」

確かに香織が持ってきてくれた資料にもそんな事があったな……ま

あ、世の中何が起こるか判ったもんじゃねえ。
気を付けねえとなーっと）」

繁は再び城へ向かって歩き出す。

しかしそんな時、倉庫内部が更に大きく爆発した。

しかも今度のそれは以前と比べてかなり大規模なもので、強烈な爆発は小振りな倉庫一つを丸々吹き飛ばすに十分すぎた。

野次馬達は予想外の出来事にパニックを起こし逃げ惑う。

しかし繁は彼自身でも信じられない程に冷静で、指先から溶解液の霧や弾を放つては周囲に飛んできた瓦礫を打ち消していく。

その動きはまるで一般人とは思えない機敏さであり、当の繁本人も別の誰かに動かされているように感じている始末だった。

瞬く間に瓦礫の殆どを打ち消した繁は、野次馬達が逃げ去ったのを確認するとそそくさとその場から立ち去ろうとする。

あれほどの爆発が起きたのに消防・救急に相当する機関が動かなかった事を疑問に思ったがしかし、それが逆に繁にとっては好都合でもあった。

しかしそんな中、彼を呼び止める者が居た。

「ねえ、お兄さん」

「？」

見れば繁を呼び止めたのは、白衣を着たクリーム色の長髪を棚引かせる若い女だった。

側頭部や腰から生えた狐のような耳や尾は、彼女が禽獣種―哺乳類を基礎とした亜人型種族―の血を引く存在である事を証明していた。

「さっきの、凄かったじゃない。何をどうやったの？」

「手元から溶解液の弾を飛ばしただけです。別に大したことじゃあない」

「いやいや、凄いことだよ。ここいらの連中は誰も彼も中途半端に身勝手な奴と流されやすい奴ばかりでさ。」

それに引き替えお兄さんは凄いのよ。最後まで始末付けちゃうんだもん」

「そんな最後まで始末付けた覚えは無いんですけどねえ。所々外してますし」

「外す外さないは関係無いでしょ。その場に留まり続けたって事がそもそも評価に値するんだし」

等と、通りすがりの名も知らぬ女と適当な雑談を繰り広げた繁は、女に別れを告げて城を目指す。

そしてその場に一人取り残された狐女は佇んだまま、遠くを見据えていた。

「それにしても…何がどうなってこんなに吹き飛んだのかしらね…」
等と呟きながら女が倉庫の跡地に足を踏み入れ、辛うじて爆発に耐え抜いた柱に触れようとした、その時。

柱の根元が鈍い音を立てて折れ曲がり、女は倒れてきた柱に上の下敷きになってしまった。

女はその一撃で絶命し、二度と起き上がることはなかった――

――と、思われた。

しかし、それから二分ほどして。

「――不覚、だったわ」

そんな声がして、下敷きになった女の手足が、激しく蠢いた。かと思えば女は両手で柱をずらし、未だ身体の正面に深手を負っているにもかかわらず、何事もなかったかのように歩き出した。

更に柱によつて重傷を負っていた女の身体は、一步、また一步と女が歩む度に治癒・再生していく。

倉庫が出る頃には、女の身体には傷一つ見られなくなっていた。

「幾ら不老不死だからって、やたらめったら危ない事しちゃ駄目よねえ。」

それにしても彼……何でジュルノブル城なんかに向かったのかしら？」

繁に興味を持ち始めた女は、密かに彼を追うことにした。

女の名はニコラ・フォックス。ルタマルスの首都圏に住まう、”元開業医である。”

第七話 辻原さんと突然の爆発事故（後書き）

次回、元開業医ニコラの真実が明らかに！

第八話 医学博士は呪われない（前書き）

不死身の医者ニコラ・フォックス。その不死性の真実と、波瀾万丈なる彼女の生涯。

第八話 医学博士は呪われない

昔々、カタル・ティゾルはルタマルスに、ニコラという女の子が住んでいました。

ニコラはとても明るく心の優しい子で、誰かを助けてあげることと、助けた相手から「ありがとう」と言われる事が大好きでした。

ニコラには、大きな夢がありました。それは、お医者さんになることです。

お医者さんになって、色々な人を病気や怪我から助けたい、守りたいと、願っていたのです。

でも、お医者さんになるのはそう簡単なことはありません。

お医者さんになるためには、色々なことを勉強し、勉強だけでは学べないような事もたくさん知っておかなければならないからです。

でも、誰かを助けたいと思うニコラは、夢を諦めずに頑張りました。そうして頑張ったニコラは、お医者さんになるための特別な学校に入ることが出来ました。

ニコラは学校での生活を楽しみました。難しいこともいっぱい勉強しました。

そうして、学校での生活にも慣れた頃。

街へ遊びに出ていたニコラは、その姿を偶然にも、ある人に見られてしまうのです。

それは、遠い所にある大きな国の王子様でした。

お忍びで街に遊びに来ていた所を、偶然にも側を通ったニコラと目があったのです。

そしてその時王子様は何と、

ニコラに恋をしてしまったのです。

それまで女の人に恋をした事なんて一度もなかった王子様は、それが恋なのだと気付くのにかなりの時間がかかりました。でも、気付いてからははつきりと判るようになったのです。

これは恋なんだ。僕はあの子に恋をしているんだ。

王子様は人が良く誰とでも仲良くできましたが、奥手で少し気の小さい所がありました。

だから、その気になればニコラを探し出して思いを伝える事だって出来たはずなのに、王子様はそれをしませんでした。出来なかったのです。

結局そうして月日が過ぎ、王子様の恋心がニコラに伝わらないまま、一年が経ちました。

勇気が出せない王子様は、幼馴染みで友達だった隣の国のお姫様に相談することにしました。

お姫様は王子様の事をよく知っていたので、王子様に「貴方のペーすでじっくりタイミングを見計らっていけばいい」と言いました。王子様はその言葉を信じ、勇気が出る時を待ち続け、その日のために告白の計画を練るのでした。

でもこの時、王子様は気付いていませんでした。

お姫様は、王子様の恋を応援する気なんて無かったのです。

それもその筈でした。

お姫様は王子様の事が死ぬほどに好きで、王子様の愛は自分だけに向いていればいいと、そう考えていました。

だから、王子様の心が他の女の人に向いている事が何より許せなかったのです。

そしてお姫様は、作戦を実行に移しました。

遠い国から魔法の本を取り寄せ、その本にあったある恐ろしい呪いを、ニコラにかけたのです。

呪いをかけられたニコラが不幸な目に遭うことはありませんでした。それどころか、どんなに大きな病気や怪我をしても、ニコラが死ぬことはありませんでした。

でも、お姫様にとつてはそれで十分でした。何を隠そう、お姫様の狙いはそれだったからです。

というのも、お姫様のかけた呪いの力で、ニコラは決して年を取らず絶対に死なない身体になった代わりに、もう二度と子供を産めない身体にされてしまったのです。

鈍感なニコラはそれに気付きませんでした。お姫様は満足でした。女の人だけに許された、最も大きな幸せの、最も意味のある生き甲斐の一つである、子育ての権利を、奪ってやる事が出来たのですから。

お姫様は早速、その事を王子様に話しました。

「貴方が好きなあのニコラという女の子は、絶対にやってはいけないと言われている魔法を使って、子供を産むことを諦めてまで老いることも死ぬこともない身体を手に入れた」と。

それは明らかに歪められた真実でしたが、優しく奥手な王子様は、その言葉を真に受けて深く悩み苦しんでしまいます。

お姫様はこうして出来た心の隙に付け入ろうと考えていたのですが、中々上手く行きません。

王子様に近づくタイミングを掴もうとしても、大抵は失敗してばかり。

タイミングを掴んでじっくり話そうとしても、ニコラの事を諦めきれない王子様は、ニコラにかけられた呪いを解いて彼女を改心させる方法を探すことに躍起になっていて、お姫様との話もその事ばかりです。

お姫様はその事に腹を立て、腹いせに徹底してニコラの命を狙いました。

でもどんな事をして、ニコラは死ぬことはありません。

当然でした。

ニコラは既に、お姫様がかけた呪いの所為で、決して死ぬことのない身体になってしまっていたのですから。

でもお姫様は、王子様への想いとニコラへの逆恨みの気持ちでそのことをすっかり忘れてしまっていました。

そして月日が経つ内に、お姫様と王子様はどんな年を取りましたが、呪いのかかっているニコラは年を取りません。

そうこうしている間に、王子様は病気で死に、お姫様も途中で女王様になりましたが、国を上手く治める事も出来ず、民衆に刃向かわれ、城を追い出されてしまいました。

そして数年が経ち、ニコラは無事にお医者さんになることが出来ました。

でも、ニコラはまだ、物足りない気分でした。というのも、ニコラの性格は、学校での色々な経験を経て、少し変になっていたのです。

ニコラは思いました。

「お医者さんをやる以外に、私にしか出来ないことが、まだ他にあるんじゃないかしら？」

そしてニコラはある日、自分の身体についての秘密を知ることになります。

子供を産むことが出来ない代わりに、絶対に年を取らず、なにをされても死なない身体。

その秘密を知った途端、ニコラはあんなでもない事を思い付きました。

自分で自分を、色々な方法を使って、殺してしまうのです。

普通の人なら死んでしまうような事でも、ニコラは死にません。

それを利用して、ニコラは色々な方法で自殺を繰り返し、その原理や様子を細かく記録することにしたのです。

例えば縄で首を縛るにしても、太さ、長さ、縛る力や縛り方、縄の材質など、その度に少しずつ変えて、どうなるかを試します。

その様子の違いや、痛みの感じ方、安全な対処方法などを、ニコラは研究し続けました。

そしてニコラはある時、それらの記録を一冊の本にして、出版しま

す。

『対死神営業妨害白書』というタイトルのそれは、人を死から救う方法を探求したために冥界から追放された死神が、密かに書き記したという設定でした。

『対死神営業妨害白書』はその衝撃的な内容と癖になる文章が相俟って大ヒットを記録し、続編が期待されていましたが、所々に王政を批判する記述が目立ったため、政府により発行を禁止されてしまいました。

それでもニコラは、お医者さんをしながら研究者としてめげずに政府と戦い続けました。

老いることも死ぬことも無いニコラの戦いは五十年以上も続き、ついには病院の営業を停止されてしまいました。

でも、ニコラは諦めずに打開策を探し続けます。

果たして彼女に、本当の安息は訪れるのでしょうか？

それは誰にも、判らないことなのでしょう。

第八話 医学博士は呪われない（後書き）

明らかになったニコラの過去。果たして彼女は繁の見方か？それとも……

第九話 再会したぜ！（前書き）

元開業医と指名手配犯は再び出会い、そして……

第九話 再会したぜ！

―前々回より―

繁がジュールノブル城に辿り着くのに、さほど時間はかからなかった。道中の道案内はとも丁寧であり、城下町の商店経営者や城周辺の警備兵に聞けば、大抵の事は教えてくれた。

それどころか「建築士を目指している友人に頼まれたので、城の内部や周辺について詳しく判るものが欲しい」と頼めば、城の詳細な間取りは勿論、通気口や排水溝のルートまで事細かに書かれた見取り図を渡された。

「（完全に信じ込むとヤベエが……参考までに持っておくか）」

繁は外部で準備を綿密に済ませ、ひとまず城内を見学させて貰うことにした。

霊長種（我々人類と大差ない種族）の若者がガイドとして案内役を担当し、一般人に公開出来る部屋全てを三時間もかけて巡り続けた。

繁は城の内装や従業員達の業務内容等に興味津々で、積極的な見学やインタビューを行っていた。

元々善意や敬意、愛情を軸とした行動を心がける繁のインタビューには従業員達も積極的に応じており、皆不平一つ言わず嬉々として自らの生い立ちや業務内容を話し、更には私生活を語る者まで居る始末であった。

繁はそれらを大学生活で鍛えた速記で記録していくが、当然彼の目的はそんな情報ではない。

否、城の内装や従業員達についての情報もまた、目当てではあった。しかしその優先順位はほぼ最下位であり、より重要な目的とは他

にあった。

それは手渡された城内見取り図の確認と、更にもう一つ含まれていた。

その目的が何かは、また後程。

― 帰路の道中 ―

「準備は完了した……あとは筋書きと下準備だが……」

ベンチに座り込んで城の見取り図を睨みながら、繁は考え込んでいた。

しかし幾ら考えても、望むような作戦概要は思い浮かばなかった。思案することを不毛に感じた繁は、食事にとしようとベンチから立ち上がる。

と、同時に。

ガンツ―バキイ！

という鈍い音がして、木製のベンチが盛大にへし折られる。

その根源に居たのは何と、城に向かう道中で出会ったあの女―ニコラ・フォックスであった。

首の骨が在らぬ方向に折れ曲がり、頭部からは血が出ている。

「うおっ！？あ、アンタは確か爆発事故の時出会した……ってんな悠長な事言ってる場合じゃねえや！

気をしっかり以て下さいね！？今救命隊を――呼ばなくて良いから――はえ？」

ニコラの予想外の答えに、思わず間の抜けた声が出てしまう。

「寧ろ騒ぎを大きくされたりすると困るのよ。若干政府から追われる身だしさあ、さっき落ちてきたのもその一件でね？」

等と語り続けるニコラの身体は、驚くべき速度で再生していく。

地に滴り落ちた血液の一滴までも傷口に吸収されていく辺り、彼女の不死性が常軌を逸している事が見て判る。

その光景に言葉を失う繁を尻目に、ニコラは存外マイペースであった。

「驚かしてごめんね？実は私ってアレがコレでこうなっててさあ」

「微塵も意味がわかりませんよその説明文」

「そりゃ説明する気が無いからねえ。」

ああ、自己紹介が遅れたね。私はニコラ・フォックス。この辺りで開業医をやってたよ」

「田上飛蝗タガミヒコウです。エクスーシアで従姉妹と薬屋を営んでいます」

繁は偽名を名乗った。

指名手配中である今、安易に外部で本名を話すわけにはいかない。

「ヒコウか…中々に良い名前だねえ」

「いえいえ、貴女こそ素敵ですよ。その耳や尻尾もお似合いですし」

等と適当な事を語らいながら、二人はひとまず香織の家へと向かう。公共交通機関を乗り継ぎながら交わされる二人の会話は、雰囲気だけをれば中々に平和的だった。

しかし内容はといえば、ニコラの素性や繁の体験談（大幅に脚色）等であり、その内容は若干恐ろしげでもあった。

「ほうほう、ではニコラさんは19歳のままで不老不死の身体に？」
「そうなんだよねえ。理由もわからず、突然にね」

本人達からしてみれば他愛もない会話と共に、二人の時間は過ぎていく。

繁はこの間に、隙を見て小型通信機で香織と連絡を取り、異世界人である自分達の素性は隠すべきとの結論に至る。

幸いにもニコラは気付いていないようで、繁は心の底から安堵した。香織は兎も角、自分の素性を知られてしまつては大変だし、何よりニコラを傷付けてしまふからだ。

そして列車に揺られ、獣道を歩むこと早一時間半。

二人は無事、何事もなく香織の家へと辿り着いた。
ちなみに香織の偽名は「ツユキアゲハ露木揚羽」とした。

— 玄関 —

「揚羽、今戻ったぞ」

「お帰りなさい。ノモシアはどうだった？」

「お邪魔しまーす」

「いらつしゃい。ゆっくりしていつて下さいね」

等と家に上がり込む二人を、露木揚羽こと清水香織は温かく出迎える。

香織はニコラを居間に案内し、紅茶とケーキを振る舞った。

正体を覚られないよう、繁は尚もマスクを取らない。

その後、三人は他愛もない世間話を楽しんだが、ふとニコラが、こんな事を言い出した。

「それにしてもまあ、二人は上手だよねえ」

含みのあるその言葉に、飛蝗こと繁が問いかける。

「何がです？」

繁の問いかけに、ニコラは軽く、しかし的確に言葉を紡ぐ。

「何がってそりゃあ、嘘がよ。というか、演技っていつのかな？」

随分とまあ、巧妙なもんだねえ。

不老の身として70年以上生きてるけど、これほど上手で、それでいて悪意や私欲の感じられない嘘は、初めてだよ」

その言葉に思わず動揺した香織が、口を挟む。

「う、嘘？何の話ですか、フォックス先生？私達、嘘なんて吐いてませんけ——「シラ切ろうったってそうは行かないよ？」

気付くのにかなり時間がかかったけどね、その分確固たる答えが見いだせたわ。

飛蝗さん、揚羽さん……貴方達のその名前、偽名だよね？

確証はないけど、何かそんな気がするんだ……。

それから、出身地とか生い立ちとかも嘘だよね？

真実があるとすれば……二人の趣味くらいでしょ？」

ニコラの推理は、曖昧でありながらしかし的確でもあった。凶星であったが故に、二人は言葉を失い返答が出来ない。

「あと出身についてだけど……二人は、さ。

異世界人、だよな？何となく、だけど」

その推理に、二人は最早言葉を失うしかなかった。

香織の経験が確かならば、地球人とカタル・ティゾルの霊長種の間には、決定的な差は見受けられない筈であった。

つまり、動向に気を遣って個人情報漏洩防止に心がけていれば、余程疑り深い人間とかなりの長期間でも居ないと、地球人であるという事はバレないというのが、香織の立てた定説であった。

しかしその定説は今、音もたてずに瓦解した。

ノモシア出身の、一人の開業医の「何となく」という理由で立てられた推論によって。

繁と香織はアイコンタクトで瞬時に意見を交換し、ニコラに真実を話す決意を決めた。

通報されてしまうかもしれないが、そうならないようにどうにかするしかない。

繁と香織は、覚悟を決めた。

第九話 再会したぜ！（後書き）

二人の旅もここで終焉か！？

第十話 彼女も同類（前書き）

またもや明らかになる事実。そのヒントは、タイトルにあり

第十話 彼女も同類

―前回より―

繁と香織は、ニコラに全てを打ち明けた。

自分達の本名から、詳細な生い立ちや、その活動目的まで。

ニコラもある程度の情報は得ていたようで、指名手配班辻原繁についての情報は既に持っていたという。

しかし彼女は繁を罪人だとは思っておらず、寧ろ王族主導で行われる政治体制に対して否定的だった彼女は、繁の行動を寧ろ賞賛する意向を示した。

それどころか、度重なる王族批判により政府からの圧力を受け開業医としての立場を追われ、更に命を狙われる等、自業自得とはいえ散々な目に遭っているニコラは、二人に協力したいとまで言い出した。

最初は驚いていた二人だったが、その真っ直ぐな志や資質は繁の立てた計画の人員としては十分採用に値するものであり、拒否する理由は見当たらなかった。

「それにしても驚いたよ。まさか異世界人がヴァーミンの有資格者になるなんてね」

「おや、ヴァーミンをご存じで？」

「ご存じだよ。っていうか敬語やめてよ。これから一緒に戦っている仲間なんだしさあ、私だって心は子供のまんまなわけだし」

ニコラの主張を受けた繁と香織は、彼女の意見を採用入れることに

した。

「そう……か。」

ではニコラ。お前はヴァーミンについて、どの程度知っている？」

その問いかけに、ニコラは誇らしげに答えた。

「基礎的な事は大体全部知ってるね。」

何せ私……」

そして彼女は白衣の右袖をまくり上げ、白い細腕をさらけ出す。

その二の腕を見た二人は、驚きの余り言葉を失った。

「ヴァーミンの有資格者だからさあ」

等と言うニコラの右二の腕には、黒い蛾のような紋章が描かれている。

「『ヴァーミンス・トリートセックモス』。

ドクガの象徴を持つ三番目のヴァーミンだよ」

「ドクガか……しかし驚いたな。まさかこんな近くに同類が居たなんて……」

「まさか、繁に近付いたのもそれを察知したから？」

「その通り。ヴァーミンの有資格者は、その気になれば互いの存在をうつすらと認識できるようになるの。」

そうしてなくても、無意識に過ごしてたら何か人が寄ってきて、気が付いたらこの人有資格者だって事もあるらしいし」

「そうか。それは良いことを聞いた。有り難うよ、ニコラ」

「ん？何が？」

「判らないのか？ヴァーミンは只でさえ凶悪な能力だ。そしてその

有資格者は、まだこの世界に八人も居る。

全ての有資格者と協力的な関係を維持できるとは限らないし、生い立ちや職業、それに種族だってピンキリの筈だ。

そんな状況下だからこそ、同類を意図的にサーチ出来るという性質は実に有り難い。

協力的な同類は早く出会って仲間にするに限るし、敵対的な同類は早々に狩る事が出来るからな」

「確かに一利あるね、流石繁」

「止せ、香織。こんな作戦だれだって思い付く。

それより問題は、初回の作戦での動き方だ」

「あ、初回の作戦の現場決まったんだね？」

「無論。下見もしっかりしてきた」

繁はテーブルの上に、ルタマルスで手に入れたジュルノブル城の見取り図を展開した。

見取り図は所々カラーペンで加筆が施されており、繁の私的な憶測や作戦内容の片鱗が見て取れる。

「今回の現場はルタマルスの首都ジュルノブルに居を構える王族・アイトラス家の住まうジュルノブル城。

メインターゲットは当然当主エスティとイルズの夫婦だが、それ以上に重要なのは娘のセシルだ」

「セシル・アイトラスねえ、白金色をしたロングヘアと整った顔立ちに青い瞳が特徴的な15歳だっけ？」

「あの乳見たら普通20歳くらいには思っちゃうけど、でも15歳なんだよねえ」

「そう、だ。ガイドブックにも顔写真とプロフィールが載るくらいの有名人、それが王女セシル・アイトラス……」。

そしてこのガキには、髪だの身体だの目玉だの、そんな事よりずっ

と重要な特記事項がある…何か判るか？」

確かに、何か重要な事があつたような気がした。しかし二人はそれを思い出せず、首を横に振る。

「まあ、お前等は俺と違って暇じゃないから仕方ないな。

セシル・アイトラス……奴にある重要な特記事項……それは、奴の種族だ」

「種族？それってどういう事？」

「アイトラス家は代々高純度の霊長種でしょ？」

「如何にも。アイトラス家は霊長種としての血統を維持するために、緊急時には近親婚が認められるほど人種に五月蠅い。

食や医療に関する分野も独特で、調べた限りだと、毎日決まった時刻に魔術で加工したケトウスパールを炙って吸ったり、硫化水銀や獣骨、魚の肝臓や竜種の胆汁なんかを調合した精力剤が代々伝わっていたり、料理に砕いた真珠や水晶を混ぜたもんを毎日食べてるんだと」

ケトウスパールとはカタル・ティゾルの海に棲息するフナダマクジラという巨大なハクジラの腸内に発生する蠟状の結石であり、一般的には天然香料として高額で取引されている。

言ってみれば現実世界の龍涎香リュウゼンコウに等しいものであり、貴族や政治家等の金持ちが私用で買い求める事で有名である。

その上、カタル・ティゾルでは研究のための調査目的や、害獣指定され駆除が認められている地区以外での捕鯨が禁止されているためケトウスパールの希少度は鯨肉と並んでかなり高く、オークションにて億単位で落札される事も珍しくなかった。

「で、だ。そんな事してるのはカタル・ティゾル広しと言えどアイ

トラス家ぐれえでよ、その上上層部の延命や治療の為に魔術を平然と使うような連中だ。

そんな事になってりや、幾ら純粋な霊長種だろうと、何かしらの変異が生じて亜種が産まれても文句は言えん。

事実カタル・ティゾルは同性愛や近親婚について比較的フリーな傾向にあるからな。

ある豹系禽獣種の兄妹が近親婚の末に産んだ子供は、親と似ても似つかない毛色かつ尾が三本もあつたという」

「その事なら時代柄大学じゃ習わなかったけど、最近の医学書でなら読んだことあるよ。

他にも、回復魔法を頻繁に受けていた霊長種の母親から角の生えた子供が産まれたケースもあるみたい」

「それ以外にも、先天的な遺伝子変異で親と違う姿になったりつていうケースは昔からあるらしいよ。

それが一つの血筋として繋がつてることもザラらしいし。

確か、『亜種血統』だっけ？禽獣種や羽毛種なんかだと顕著なんだよね」

「流石だな二人とも。

で、調べた所によると、だ。セシルも霊長種の『亜種』であるらしいという事が判った」

二人はその言葉を聞いて、どの道色白で耳が三角形かつ比較的細身で美形になる傾向にある尖耳種せんじや、頭に角を持ち身体能力の高い有角種であろうと考えていた。

しかし二人の予想は裏切られ、また二人は度肝を抜かれることになる。

「どうせ二人とも、尖耳か有角だと思つてんだろ？
だがな、奴はそんな甘っちょろい亜種じゃねえんだ。

あのガキ……セシル・アイトラスはな……飛姫種^{ヒキ}なんだよ」

二人は絶句するしかなかった。

第十話 彼女も同類（後書き）

飛姫種とは一体何なのか…？

第十一話 IS 命懸けの繁さんラジオ公開録音スタート (前書き)

明らかになる飛姫種の正体。そして繁が実行に移した計画は……ラ
ジオ番組？

第十一話 IS 命懸けの繁さんラジオ公開録音スタート

—前回より—

嘗てカタル・ティゾルに於ける科学の聖地ラビーレマに、一人の工学者が居た。

学者は靈長種の若い女であり、自らを天才と自称し興味を持たない者への態度は最悪。

それ故に忌み嫌われ、度々迫害の対象になっていた。

ある時、女は発明をした。それは機械的な鎧のようであり、人が着込む事が出来た。

理論によればそれは魔術と科学を併合させたものであり、独自の出力機関により空を飛び、また虚空より武器を産み出し、更に着込んだ者の命を絶対的に守り通すとの事だった。

各大陸・各国家はこの鎧を貪欲に欲し、研究に着手した。

しかし鎧は、人を選んだ。

鎧を着込み動かす事が出来たのは、主に靈長種の女性——中でも、特に選ばれた者だけだったのである。

更にその鎧の中枢部に使われている機関の構造は発明者の女が独自に作り出したものであり、他の何者にも再現する事は不可能だった。

よって各大陸・各国家の政府は、我先にと女を自らの陣営へと招きたがった。

しかし女は突如姿を消し、残されたのは全1344の鎧——『プリンキピサ・サブマ（和訳：王女の奇跡）』だけだった。

後にラビーレマが誇る生理学者や医学博士が、プリンキピサ・サブ

マを起動させる事の出来た者の体組織を詳しく調べた所、何れも身体の何処かに僅かな変異が見受けられた。

この変異した組織は後に『PS因子』と名付けられ、因子を持つ女性達は『飛姫種』と呼ばれるようになり、軍人や研究対象として優遇される事となる。

「と、まあこんな話は至極有名だからまだ良い。

問題は、セシル・アイトラスが飛姫種だって事と、それが公表されてねえって事だ。

城の内部じゃわりと有名らしく、情報源はそこらしい。

俺は今回、この情報をどうにか作戦で上手く利用出来ないかと考えてるんだが……その話は後だ。

実を言うと作戦プランは既に出来上がってる。
下準備だって完璧だ。

あとは二人に、こいつを見て欲しい」

そう言つて繁は、ホチキスで閉じられたコピー用紙の冊子を二人に手渡した。

「これは……台本？」

「そうだ。香織の魔術サポートでかなり凝った仕掛けを組めたからな。

ただ単に侵略していくんじゃ面白く無え。

ここは一つ、奇抜に攻め入る」

「奇抜につて……こんなんで大丈夫なの？」

「大丈夫かどうかは知らん。しかしながら、こうでもせんと面白みが無い。」

敵だつてろくすっぱとっ捕まえもせずどうせ殺すか無視するかだ」

その発言に疑問を抱いたのか、香織が一言。

「あれ？ 困って調教とか繁殖とかしないの？」

女ながらにとんでもない事を言う奴である。

「誰がそんな馬鹿馬鹿しい真似するか。」

俺が目指すのは破壊神だ。破壊行為の末に金が得られればそれでいい。

ハーレムを夢見る奴に人格者なんて居ない。いや、ごく希に居るが

……十中八九はクズだ。

その内の八割は性行為どころか女とまともに喋ったことも無いような若手童貞。

残る二割は性欲のまま、知的生物としてのモラルを捨てて生き続けるバカに過ぎん。

生涯抱ける女なんて精々一人が原則だ。二人目を探すのは、そいつと別れる羽目になった時で良い」

「珍しいねえ。英雄と侵略者は好色家の性豪つてのが常だと思ってたけど」

冗談半分のニコラに、繁は言う。

「俺は英雄でもなきや侵略者でもねえ。只の大学生だ」

自作の台本を握り締める繁の顔は、何処か笑っているようだった。

—翌日・ジュルノブル城—

「皆様、御機嫌よう」

『お早う御座います。セシル王女』

煌びやかな青いドレスに身を包んだセシル・アイトラスの一声に、従業員達が一斉に返事を返す。

「今日はとても素晴らしい一日になりそうな予感がしますね。
例えばそう……愛しい愛しいあの方が、今日こそ私の元へ舞い降り
て……」

等と、音信不通の思い人の顔を思い浮かべるセシル。
しかしその日は残念ながら、彼女にとって色々大変な日になって
しまう。

城の従業員達が持ち場に帰り、自室のセシルが思い人との妄想にふ
ける中、城に異変が起こり始める。
壁や柱が鳴動し、それらが機械的に開いたかと思うと、内部から黒
い巨大な箱が幾つも出現し始めたのである。

「な、なんですの一体っ!？」

突然の事態に取り乱すセシルだったが、城の鳴動と黒い箱の出現は
案外すぐに収まった。

そして黒い箱——セシルはそれが、ラビーレマの技術による蓄音機
の一部——即ち我々の間でスピーカーと呼ばれるものであると理解し
た——から、人間の声と思しき音声が鳴り響いた。

『セエーのッ……「ツジラジ」ッ!』

続いてアニメのオープニングかアダルトゲームのデモムービーを思わせる音楽が流れ出す。

『はアーい！始まっちゃいましたア！』

『始まったねー！目出度いねー！』

話しているのは若い男女二人らしく、妙に上機嫌でもある。

そんな事ぐらいしか察知できなかったセシルだったが、一つだけ確信している事があった。

「（…この音量……最悪ですわッ……）」

狭い室内で四方八方から大音量の音声を叩き込まれたセシルは、決死の思いで部屋から脱出。

廊下で衛兵達と合流し、非常口へ向かっていた。

しかしスピーカー越しの男女の会話は尚も続いている。

『さてそんな訳で初めまして。

私この「ツジラジ」でメインパーソナリティを勤めさせて頂きます。

「チューターの教える生物学概論に感動した18の夏、或いは矮小な虫の尾」ことツジラ・バグテイルです』

『何か長い上に意味不明！？と、リスナーの皆さん初めまして。

「ツジラジ」メインパーソナリティその2こと青色薬剤師です』

『突然何事だっと思うかもしれませんがそれは無理もないことなんです。』

何せこの「ツジラジ」、放送決定したのが何と三日前なんですよ。

以前この時間帯にやっていた「朝から爆裂気分」が、諸事情により急遽放送を急死せざる終えなくなったとの事で、放送局の局長さんが偶然別件でその場に居合わせた私達に目を付けまして』

『何か私達にラジオをやれっていきなり言っ
て来たんですよ。』

それで急遽企画を考えて、設備も整えて……』

『そもそも今こうやって放送してますけど、まだ尺埋めるのに十分な企画が思い付いてないんですよ。』

いや本当、冗談抜きで』

等と、スピーカーから聞こえる男女の会話を聞いたセシルは思った。

「（今日は何だが、人生最悪の日になりそうな予感がしますわ……）」

「

そしてそんな彼女の気心を知ってか知らずか、メインパーソナリテ
ィの二人ーもとい、繁と香織は、上機嫌なままに番組を進めていく。
電波ジャックによる、完全な違法放送の元に。

第十一話 IS 命懸けの繁さんラジオ公開録音スタート (後書き)

もう凄いとかが言う、レベルじゃない

第十二話 ジュルノブル城物語（前書き）

この反応は北米版BW二期日本語版最終回を思わせる勢いで……

第十二話 ジュルノブル城物語

―前回より―

『ツジラジ』の放送は六大陸全土に及び、それらは各所で話題を呼んでいた。

各大陸放送局は電波ジャックの元に探りを入れて放送をやめさせようと躍起になっていたが、複雑怪奇な術式の適用された電波は探りを入れようにも逆に機材を狂わせてしまう始末。

更に各大陸放送局には問い合わせが殺到し、各局は苦情の嵐に巻き込まれる事を覚悟した。

しかし電話の内容はその予想と真逆のものであり、『ツジラジ』は民衆に対して好評だった。

―放送開始から10分、ジュルノブル城―

いつの間にか城内に閉じこめられていたジュルノブル城の面々は、『ツジラジ』に聞き入っていた。

『はい。と言うわけでフリートークもそこそこに、今回は何と初回にして素敵なゲストに来て頂いています』

『ええ！？何それ聞いてない！っていうかラジオって初回は大体ゲスト無しだよね！？』

『そこはまあ、色々とアレって事で許せ。』

サプライズっぽい仕様にした方が面白いと思ったんだよ。

という訳で、素敵なゲストに来て頂きましょう。

ノモシアの医者語る上でこの人を知らないならモグリだぜっ！

不死身の天才医学博士、ニコラ・フォックスさんです！どうぞ！』

その名前を耳にした瞬間、セシルの顔色が変わった。

「ニコラ・フォックス……？」

お婆さまの愛しい人を奪い取り、今ものうのと生き続ける汚らしい泥棒狐が何故こんな所に……？」

王族家や王制国家政府と真っ向から敵対しているニコラは、当然アイトラス家からも快く思われていない。

というより、彼女が王政批判で槍玉に挙げるのは基本的にアイトラス家であり、特にセシルに関する記述は私情による脚色が酷く、ある種惨劇と言って良い有様である。

また彼女は両親から、今は亡き祖母——つまりニコラに呪いをかけた張本人——の話を脚色の限りを尽くされた形で聞かされており、ニコラを完全な悪役として考えていた。

それ故、スピーカーの向こうで楽しげにパーソナリティと語らい、賓客として持て成されるニコラの姿を思い浮かべるだけで腹が立つてきた。

そして彼女の耳に、思いがけない情報が入ってくる。

『それにしても今日の収録場所……一体何処なんですか？』

『あ、それ私も気になった。何かスタッフさんに目隠しされた状態で連れてこられたんだけど……』

『右に同じく。ツジラさん、ここ何処なんですか？』

『よくぞ聞いてくれました。実はここ、何とも凄まじい場所なんですよねえ』

『『凄まじい場所？』』

『ハイ！んな訳でせり上がって見たわけですが…こりやすげえ！
何て出来でしょう！見たことも無い花々が軒を連ね、高級感たっぷり
の高級大理石をふんだんに使った彫刻なんて見事なモンです！
彫刻以外にも、石畳や中央の池だって賞賛に値する出来ですなあ！』

中庭の芝生を突き破って現れた小屋の中から外の風景を見た繁は、
それらを絶賛していた。

そう言われて王家の面々や中庭を手入れしていた庭師達も、満更で
もない表情を浮かべる。

しかしその嬉しい気分も、続く繁の一言で台無しになる。

『イヤー本当に凄いですねえ！一体どんだけの国家予算と公的補助
を注ぎ込めばこんな事が出来るんでしょう！？

多分アレですね！死亡税なんてもんがまだあるんでしょうねこの国
には！

いやゝ時代遅れも大概にしてくださいよ全く！

これじゃまるで中世のクソ時代じゃありませんか！』

その言葉が流れた瞬間、カタル・ティゾルの反応は大きく二つに分
別された。

まず一つ目は、王政反対派による歓喜。

そして一つは、王政支持派による憤怒。

当然王政支持派であるルタマルス政府とアイトラス家の面々は怒り
狂い、政府は軍に命じて即時ツジラジの放送を辞めさせるための『
ツジラ討伐隊』を編成しジュールノブル城に派遣。

ニステイの指示を受けたジュールノブル城専属の兵士や騎士、魔術師
等が、四方八方から中庭のスタジオに突撃した。

しかし、攻撃は意味を成さなかった。

ツジラ討伐隊はジュールノブル城周辺に展開された特殊な障壁に弾かれて中に入ることさえまなならず、同じくジュールノブルの戦闘員による攻撃も、スタジオ周辺の障壁に弾かれてしまったのである。

―軍司令部―

「オップス大佐！城の周辺で何をくすぶっている！？」

討伐隊の指揮を執るスタウリコ中將は、通信機越しに討伐隊隊長のオップス大佐を怒鳴りつける。

『申し訳御座いません！ジュールノブル城周辺に破壊困難な障壁があり、現在解除作業に当たらせているのですが…』

「そう言ってもう10分だぞ！？迅速に事を進めるのだ！」

『か、畏まりましたアッ！』

通信を終えたスタウリコは、呆れたように椅子に腰掛けた。

「しかしどういう事なのだ……？」

我がノモシア軍魔術隊の精鋭が、只の障壁如きに十分など――「古式特級魔術では、ないかね」

ばやくスタウリコの背後に、何者かが歩み寄ってそう言った。

「そ、そのお声はッ！」

スタウリコはその声を聞いただけで狼狽え、思わず椅子から転げ落ちてしまった。

「ド、ドライシス上級大將ッ！？何故このような場所に！？」

スタウリコが慌てて振り向いた先に居たのは、爬虫類を思わせる頭

や角、腰から生えた細長い尾、堅い鱗に覆われた肌等が特徴的な『竜属種』の女にして、ルタマルス軍の頂点に君臨するランゴ・ドライシス上級大将であった。

「そんなに取り乱さないでくれ、スタウリコ中将。

本官はそういう風に、他人から怖がられるのが嫌なんだ」

「こ、これは失礼致しましたッ！」

「別に謝らなくて良いさ。

それで本題だけど、あのツジラという男とその仲間の内に、最低一人は古式特級魔術の使い手が居るよ」

「古式特級魔術……嘗て、文明と呼ばれる概念さえ曖昧だった時代に編み出されたとされる、145の強大な魔術の事ですか……？」

しかし、あの術に関連する資料は殆どが消え失せ、扱えるような術者も殆どが死に絶えていると聞きました……」

「しかしだよ君、並の障壁なんて訓練された王宮魔術師が十人がかりで本気を出せば簡単に破れるんだ。

まさか天下のジュルノブル城が、障壁破りも出来ないような三流魔術師を雇い入れている筈もない。

となると、それしか考えられない。」

ドライシスは踵を返すと、歩み出しながらスタウリコに言った。

「中将」

「は、はいッ！」

「この一件、どうも一筋縄では行かないようだ」

「と、仰有いますと……？」

「本官の左肩がね、朝からどうも変なんだ」

言葉の意味を覚ったスタウリコは無言のままドライシスを見送り、現場へと連絡を入れる。

「諸君、この件にはかゝる有資格者が絡んでいる。
くれぐれも用心せよ」

第十二話 ジュルノブル城物語（後書き）

まさかヴァーミンの有資格者が軍内部にまで！ツジラジはどうなっ
てしまうのか！？

第十三話 王家（やつら）は主人公（おれ）を嫌ってる（前書き）

通称「やつおれ」

第十三話 王家（やつら）は主人公（おれ）を嫌ってる

―前回より―

『ハイ！そういう訳で今回のメイン企画行ってみましょう！』

『『エーイ！』』

まさか軍で上級大將が動き出している事など露知らず、繁達はラジオを続けていた。

『先程も仰有ったとおり、この番組では視聴者の皆様から寄せられたカタル・ティゾルの謎や事件に、我々が体当たりで挑んでいきます！』

そしてその様子をドラマチックかつ器用な編集で上手いこと纏め上げ、皆様にお伝えすると、そういうコンセプトな訳です！』

『成る程！』

『本来は皆様から寄せられた情報を頼りにアクションを起こしているのですが、今回は第一回記念という事で！』

何と、此方でご用意した企画を生中継でお届けします！』

ツジラこと繁のそんな豪快過ぎる一言に、六大陸全土が沸き立った。

『そして今回此方でご用意した企画とは……』

『企画とは……？』

『一体何なの？』

『その名も「第一次ノモシア内戦 ジュルノブル奇闘編――王家は主人公を嫌ってる――」』

即ち、我々対ジユルノブル城の皆様 & a m p ・その他の方々での全面戦争って訳です！」

その言葉に、視聴者達は言葉を失った。

『ルールは至極簡単！

我々三名と、城の内と外に控えて居られる方々とで真っ向からのガチバトル！

武装・魔術等戦術に制限無しで、開始24時間以内に相手チームの2/3以上を戦闘不能とした方が勝ちとなります！

尚、参加資格を持つのは現在ジユルノブル城内部に居る方と、政府命令で派遣されてきた討伐隊の皆様、更にそこに加えて、王家・軍艦傾斜一名様に限らせて頂きます！

そんなわけでエ」

『『『開け、障壁』』』

三人の言葉と共に、スタジオと城の周囲を取り囲んでいた障壁が消え去った。

――門前――

「大尉！障壁が、消え失せました！」

「何い？良し！全軍突撃だ！陛下達をお救いするぞ！」

こうして、進軍が開始された。

――スタジオ内部――

「そいじゃあまあ……」

繁は香織とニコラに指示を下し、自らも戦闘準備につく。

「企画スタートだ！」

繁の言葉を合図に、スタジオは機械的に展開し、どういう原理か機材も地面の下へ潜っていく。

そしてその場に残されたのは、何と繁ただ一人。

能力のままにサシガメ型のフェイスマスクを被り、作業着の上に羽織った白衣の背にはデカデカと『生地万歳』と書かれている。

「どっからでも、かかって来やがれ！」

その言葉を聞いた兵士達は、冬眠開けの雑草か蛙が如く勢いで繁に向かっていく。

騎士達は槍を構えて突進し、剣士達も一斉に斬り掛かる。

更に建物上部で様子を伺っていた魔術師達も、炎球や氷弾、電撃等、要素こそ千差万別なれど皆想いを一つに攻撃魔術を放つ。

一部兵力は王家の護送に当たったが、どのみち侵入者を殺したいという思いに違いはない。

しかし、次の瞬間。

「『ワカバグモの切肉網』ッ！」

辻原は叫びに伴いその場で華麗なスピンを決めると共に、溶解液を糸状にして周囲に放つ。

空中でも尚彼の意志に従う溶解液の糸達は、蜘蛛の巣型の網となり、

繁の周囲へと素早く広がっていく。
そしてそれらは、最前列で突撃する剣士達に降りかかる。

結果、剣士達は断末魔さえ上げずに血肉を撒き散らし、大振りな肉片へと変わり果てた。

その様は、まるで人間版サイコロステーキとも言え良いだろうか。

ともあれ凄惨な光景である事に変わりはないかった。

突如無数の剣士が鎧諸共肉片と成り果てたことに動揺した騎士と魔術師の心に、一瞬の怯みが生じる。

更に飛んできた炎や氷の攻撃魔術も、繁が脚を踏み鳴らしたただけで地面から伸びてきた木材のような謎の触手によって打ち消されてしまった。

しかしそれでも尚、残った兵士や騎士は突撃し、魔術師達も各々の弾丸や波動を放つ。

対する繁は何処からか黄色い箱形の物体を取り出し、言った。

「ニコラ！上は任せた！」

その直後、魔術師達が待機している屋根の上が一部波打ったかと思うと、液体を突き破るようにして現れた者が居た。

ニコラである。

ニコラは早速両手の中指と人差し指を銃身に見立てて拳銃の形にし、それを水平状態で魔術師達に向ける。

それを見た魔術師達はどうと、

「何だ貴様…… 思わせぶりの登場をした癖に、まさか輪ゴムで我々に立ち向かう気か？」

「いや待てボイセイ。奴は怪しげな呪術に手を出し悪魔を孕んだと噂される国賊のニコラ・フォックスだぞ？」

もしかしたら指先から光線でも打つのかも知れない」

心底馬鹿にしたような態度で、ろくに攻撃魔術も撃つてこない。

完全に此方を軽視した態度に、怒ると言うより呆れを覚えたニコラは、早速指先から空気弾を数十発放ち、それら全てを魔術師達に命中させた。

それでも空気弾そのものの威力は控えめなので、やっぱり魔術師達の態度は変わらない。

しかしある魔術師がふと空気弾の当たった自分の左脚を見た時、その空気は一変する。

その魔術師は自らの左脚を見て、驚愕と恐怖の余り取り乱した。

「おい、どうしたんだ？」

「かつ、かつ、かかかかかつ…… 身体…… からだがあ！」

「身体…… —— ツ!？」

取り乱す魔術師の言葉を頼りに、改めて自らの身体に目を遣った魔術師達は、一斉に凍り付いた。

「これはまさか…… 『毒蛾の刻印』 ツ!？」

「ご名答…… よく判ったね」

「何故だ…… ニコラ・フォックス…… 何故貴様がヴァーミンの有資格者なのだ!？」

何故貴様のような国賊が、よりもよってヴァーミンの有資格者な

どに……」

「はあ……知らんよ。

というか、その印の意味がわかったって事は……宮廷魔術師だけはあるねえ」

「質問に答えろ、国賊！何故お前がヴァーミンの有資格者なのだ！？どんな呪術を使った！？何処の悪魔と契約したッ！？」

女王イルヅによって歪められた真実を聞かされて育った宮廷魔術師達は、『ニコラが禁忌の呪術により悪魔と契約し不老不死の肉体を得て、その上先代女王（即ちエステイの母）の思い人を奪おうとしていた』という話を信じ切っていた。

しかしそれは全くの嘘であり、そもそもニコラは産まれてこの方悪魔というものに逢ったことが無い（一応それらしい生物種は存在する）。

「はあ……何処の誰に吹き込まれたかは知らないけど、近頃の宮廷魔術師はアホばかりかい。

それと、一つ訂正。

私は医者だ。国賊になったつもりはない。

患者を生かす事。それが医者の仕事。

でも完璧に患者を生かす為には、殺す方法も知っておかなきゃいけない。

医者は患者を生かす方法と、殺す方法を知り尽くしてこそ、初めて医者として完成する。

だからさあ、何て言うのかな。

宮廷魔術師の十人や二十人殺すぐらい、私にとっては何ともないんだよ」

そう言ったニコラの背後で、山吹色に輝く蛾のようなオーラが揺らめいた。

第十三話 王家（やつら）は主人公（おれ）を嫌ってる（後書き）

次回、遂に明らかになるニコラの本領！

第十四話 医者と軍隊と攻城戦（前書き）

ニコラ「見せてやるわ……『毒蛾』の力を！戦慄を教えてあげる……。
快樂なんて無いわ。あるのは苦痛だけ。これぞ、第三のヴァーミン
ッ！」

第十四話 医者と軍隊と攻城戦

—前回より—

屋根の上にて巨大な蛾のオーラを出現させたニコラは、それを引っ込めると共に自らの能力—毒蛾の象徴を持つ三番目のヴァーミン—を発動した。

すると間もなくして、何処からか甲高い羽音のような音が無数に響き渡る。

宮廷魔術師達は皆その耳障りな音に思わず頭を抱え冷静さも失ってしまう。

そして突如空気が波打ったかと思うと、何かを突き破るようにして小さな物体が飛び出てきた。

よく見れば、それは小さな山吹色の蛾であった。

しかし蛾にしては妙に飛行が早い。早すぎる。

突然の出来事に啞然とする魔術師達だったが、そんな事など気にせず、蛾は銃弾のような動きで魔術師達へ一斉に襲い掛かる。

そして、次の瞬間。

ゾシュツ！バゴユ！ゴゲユ！

蛾の大群が魔術師達の身体に発生した刻印に突撃し、そのまま猛スピードで骨肉を貫いていく。

それも5匹や十匹ではない。軽く見積もっても一人当たり100匹を超える蛾が、魔術師達の身体を貫いていく。

蛾一匹の全長は僅か1cm程だったが、翅の面積と推進力も相俟つ

て破壊力は既に9ミリ口径の銃弾に匹敵。

そんなものを志保魚発砲から受けて、無事で居られるはずがない。

一部魔術師は術で身体能力を上げ、弾雨をかくぐろうとした。

しかしそれもまた蛾の執拗にして正確無比な追尾の前には意味を成さず、刻印を何百匹の蛾に貫かれ、跡形もなく死に絶えた。

「よしよし立派な射殺体。魔術師のミンチ一丁上がり」

死体の山を見てそんな事を言ったニコラは、出てきたときと同じく水に飛び込むかのようにして屋根へと潜っていった。

――同時刻・中庭――

「ツジラジイゝツヘアツ！」

ヴァーミンへの順応から獲得した身体能力で軽快に飛び回り、宮廷戦闘部隊の猛攻をかくぐっていた繁。

彼は現在、積極的な攻撃よりトリッキーな回避を優先する事で洋画の猿気分を味わっていたのだが、中庭に携帯式榴弾砲が持ち込まれた辺りで流石に考えを改めたのか、そろそろ本気を出すことにした。

「早々にコイツを使ってみるか！」

繁は背負っていた黄色い箱を開く。

内部にはキーボード等の機械的なパーツが組み込まれており、繁はそれらに巧みな手つきで何かを打ち込んでいく。

そして打ち込みが終わった、直後。

「どうおわあああああああああ！」

「っぎゃあああああああああああ！」

携帯式榴弾砲を構えていた兵士達の経っていた地面がピンポイントで鳴動し、四角柱型に勢い良く伸び上がったかと思えば、兵士達は空高く跳ね上げられてしまった。

続けざまに四角柱がゴムのようになり、落ちてきた兵士達を叩き潰してしまった。

「おお、こりゃ良いねえ。流石は上物だ」

等と宣いながら四角柱を引っ込める繁だったが、突如その背後から長剣使いの兵士が三人同時に斬り掛かってきた。

「ツジラ、覚悟おおおおお！」

しかし兵士達の振り下ろした剣は何故か繁の右腕一振りではじき飛ばされ、続けざまに放たれた溶解液で骨を残して消滅してしまった。

しかしその直後に隙を見出した騎士が、ランスと盾を構えて突進を繰り出してきた。

だが繁はそれを巧みに避け、盾を溶解液で消し去ると、騎士の腹を下から殴り上げる。

ドゥゴ！

「ッガ!? (な、何故だ!? 何故板金鎧越しに……ここまでのダメー
ジがっ…!)」

それは辻原が溶解液で鎧を部分的に溶かしているからなのだが、騎士はそんな事など知る由もない。

「（そもそもかりに鎧が無かったとしても、この重み……こんな体格で出せる筈が無いッ！）」

等と疑問に思いながらも再び槍を握り締め、騎士は逆転を狙う。

「（こいつの頸椎を槍で叩き折ってくれるッ！）」

だが次の瞬間、その作戦は見事に失敗する事となる。

先程まで拳が叩き込まれていた場所から続けざまに刃物のようなも

のが飛び出し、騎士の下腹部を刺し貫いた。

「ッゴエッ！」

苦痛の余り最早言葉さえ出せない騎士の手が緩み、槍が地面に落ちた。

繁はそのまま騎士の亡骸を突き上げるようにして投げ捨てた。地面へ仰向けに落ちた騎士の亡骸は、鎧の下腹部が拳一つ分程度に剔られ、シャツには鮮血が滲んでいた。

繁の左腕もまた、肘より前が血で赤茶色に染まっていた。

訳の判らない事態に一瞬突撃を躊躇った宮廷戦闘員達だったが、ここで引き下がってはジュールノブル城警備隊の名が廃るとばかりに奮起し、一斉に突撃していく。

しかし繁は、それらの猛攻を優雅にかいくぐり、その恐ろしい溶解液の餌食にしていく。

更に彼の両腕から、恐るべきものが飛び出した。

それは平たい、金属製と思しき刃であった。

指の骨に沿って片手に四本ずつ、計八本が出そろっている。

それはさながら、数多くのメディアミックスがされた欧米の人気コミックに登場する、捕食動物の名を冠する不死の戦士を思わせる。

しかし繁はその戦士と違い、繁は煙草を好まず、異性への執着も薄い。

能力も相俟って獣というよりは虫のようであり、野性的な雄々しさや勇猛さも、繁には無い。

しかし共通している事もある。

それは、家族や友などへの愛が人一倍強いという事。

繁は両腕の鉤爪に溶解液を纏わせ、宮廷の騎士や兵士や魔術師達を
どンドン切り裂いていく。

そしてそれと時を同じくして、障壁により動きを阻害されていたツ
ジラ討伐隊やランゴ・ドライシスも、戦場である中庭へと向かい
つあった。

この壮絶な戦いは、誰にも止めようが無い。

第十四話 医者と軍隊と攻城戦（後書き）

繁の武器についてはセキヒロト氏からアイデアを頂いた。
素晴らしいアイデアを提供してくださった氏に心からの感謝を。

第十五話 大佐が主人公っぽいなんてぜんぜん思っていないんだからねっ！（前書

注意：主人公はあくまで繁です。

第十五話 大佐が主人公っぱいなんてぜんぜん思っていないんだからねっ！

―前回より―

『オツプス大佐、状況説明を』

「はッ！先程突如障壁が解除された事により、城内への突入に成功しました」

『よくやった！』

「しかし、問題があります。

幻術が罫なのか、城の内部が迷路のように入り組んでおり、中庭に辿り着けないのです」

『何だと？』

「更に言えば、城内部は我々の目に見える形で、建築学を乖離した凄まじい変形を繰り返しています。

これでは中庭になど辿り着きようがありません」

『馬鹿な……我が軍の魔術部隊はあらゆる感覚干涉系魔術への耐性を身に付け、一級の幻術破りを習得させた者ばかりだというのに……』

「正直なところ鬼頭種^{キトウ}である故に私も軍に入って長いですが、幻術や感覚干涉系魔術以外でこんな事をやってのける魔術師には会ったことがありません。

確かに専用術式を用いれば建築物を変形させる事も可能ですが、それには建造段階での術式適用が必須ですし、そうだとしても決まったパターンの変形を定期的にこなす事しか出来ないというのに……」

『いや待て大佐……その例外というのは確かに存在するぞ』

「まさか！現代の魔術理論では神性種でも不可能だという事は既に実証済みですよ！？」

『そうだ……スプリングフィールド教授の打ち立てた現代式魔術理論では、神性種でも到底不可能な事だ。』

だがもし、発動されている魔術が現代魔術の定義に当て嵌まらないものだとしたら、どうかね？」

中將の言葉に、大佐は耳を疑った。

「まさか……古式特級魔術!？」

その一言は、それまで黙っていた兵士達の耳にも入る結果となり、討伐隊に動揺が広まった。

『ドライシス上級大將の受け売りだがな、しかしそうだとすれば納得が行くだろう?』

「確かにそうですが……しかし、古式特級魔術はもうかれこれ150年も前に習得方法を印した資料が根刮ぎ破棄され、関連教育機関でもその存在や術名・効果等の情報こそ歴史学びますが、習得方法の教育は完全に違法とされていましたよね？」

更にその殆どは現役の使用者が既に他界しており、生存していたとしても殆どは各大陸で厳重な監視の元保護されていますし、更に総じて高齢である事も相俟ってツジラ・バグテイルが招き入れる事は不可能だと思つのですが……」

『確かに。だが魔術を学ぶ方法は、何も教育機関だけではあるまい?』

民間の魔術師に弟子入りする事で直にそれらを学ぶことも可能だ。当然それが、古式特級魔術であろうともな』

「確かにそうですが、しかしですよ中將。

あらゆる点で現代魔術理論を乖離している古式特級魔術を習得可能な逸材が、果たしてそう簡単に産まれるのでしょうか?」

『判らん。しかしながら、風の噂で聞いたことがある。

異世界で産まれた者の中には、比較的高確率で優れた魔術的才能を発揮する者が居るのだとな。

しかもその才能の方向性は神性種などとは違う事が多く、現代魔術理論を逸した場合が多いとも聞く』

「異世界出身者……ですか。それは盲点でした」

『……そもそもだな、大佐。現状に於いてそんな事はさして重要ではないのではないかと、私は思うぞ』

「それは、どういう事でしょうか？」

『判らんか？つまり、習得者の発生率がどうであれ、現に我々の眼前では既に古式特級魔術が行使されているのだ。』

私もつつい熱く語ってしまったが、今重要なことは「如何にしてツジラ一味を捕らえるべきか」だ。

それを忘れてはならんぞ、大佐』

「はい……了解であります、中将！」

予想外の出来事の連続で不安に囚われていたオップスは、再び奮起し決意を固め、部下達に言う。

「諸君、我々が今こうして立ち往生している間にも、かのツジラという男は国王陛下や女王陛下、そしてセシル王女のお命を狙っている！」

王族が命の危機にあり、また王家を護る為に警備隊の勇士達はツジラ一味の手に掛かり、尊い命を奪われているのだ！

そんな状況下で、我等ルタマルス公国軍の誇り高き軍人ともあろうものが、この『ツジラ討伐隊』の選ばれし精鋭ともあろうものが、たかが魔術程度に恐れを成して進軍を躊躇うとは何事かっ！

我等討伐隊の軍人達よ！今こそ立ち上がって眼前の障害を果敢に突き破り、かの憎きツジラ・バグテイルのその首を、悉く刈り取ってやるうではないか！」

オップス大佐の言葉に感化された軍人達は、皆次々に雄々しく立ち上がり、種族それぞれに咆哮や奇声にも等しいほど凄まじい音量で、一斉に鬨^{トキ}の声を上げ、お互いの志気を高め合った。

男も女も、若手も古参も、霊長種も禽獣種も鬼頭種も羽毛種も流体種も有鱗種も、その他様々な種族や亜種の者達が、一斉に叫ぶ。

ふとそんな時、軍人達の志気が上がったのを見計らったかのように、城の変形が止まった。

これを好機と見たオップス大佐は、部下達に向かって叫ぶ。

「今だ！我々の力を一つにして、壁を突破するぞ！」

『うおおおおあああああああああ！』

魔術部隊がオップス大佐を含む武装部隊に持てる限りのエネルギーを注ぎ込み、それらをまず銃砲や弓など、遠隔攻撃担当の部隊が中庭方向の壁に向けて放つ。

そして続けざまに、武装部隊が一斉に全力での突進を繰り出し、障害物を悉く突き破っていく。

最後の太い石柱一本を突き破った末、討伐隊は中庭へと辿り着いた。所々に前線虚しく力尽きた警備隊員達の亡骸が散乱する中庭は、本来の美しさや気品を失っていた。

そしてその中央に、オップス大佐は自らの宿敵であろう男の姿を見付ける。

姿を見たことは無かったが、一度声を聞いている以上、鬼頭種の持つ気配察知の力を用いれば特定は容易い。

そして中央に佇み暢気に黄色い炭酸らしき飲料を啜る、頭に巨大な虫が丸々一匹貼り付いたような容貌の男・ツジラ―基、辻原繁―は、討伐隊に言い放つ。

「お前さん方、いい目をしてるな。」

殺すのが、惜しいよ」

その言葉に対し、オップス大佐は果敢に言い返した。

「そうか。お褒めに預かり光栄だ。

お前は私達をころすのが惜しいと言ったが、しかしだ。

私は少なくとも、微塵も躊躇わずにお前を殺せそうな気がするよ」

繁が立ち上がるのと同時に、オップス大佐は自らの武器であるウォーハンマーを構え、部下達もそれに応じて各々戦闘態勢に入る。

『ツジラジ』の第一回で遂行された企画は、遂に最終局面へと向かい始めた。

第十五話 大佐が主人公っぽいなんてぜんぜん思っていないんだからねっ！（後書

注意：主人公はあくまで繁なんです。

第十六話 俺と奴が殺人鬼と軍人で城内交戦中（前書き）

ヴァーミンの有資格者としてその力を振るう繁と、彼に翻弄される大佐。

第十六話 俺と奴が殺人鬼と軍人で城内交戦中

―前回より―

「うおおおおおおお！」

「ぐあああああああ！」

「さア喰らエ喰らえエッ！」

ジユオア！ゾブシュッ！

溶解液が兵士の体組織を綺麗に消し去り、鉤爪が頸動脈を分断する。中堅戦力の中でも選りすぐりの精鋭達で構成された討伐隊であったが、変形する城と繁の奇策、そして彼の能力が故に、その数は加速度的に減りつつあった。

しかも繁の嫌な所は、如何なる物体をも的確に消し去ることの出来る溶解液を持ちながら、その力を殆ど使わないという事。

即ち繁は本気で戦って居らず、それは軍人達にとって自らの実力を軽視されている事にも等しい行為であり、純粋な愛国心と努力で生き残ってきた討伐隊メンバーにとって、死をも超える冒瀆ですらあった。

メンバーの殆どを殺され、数少ない生き残りも無惨な姿にされ生きるのがやっとという中、ただ一人だけ繁の奇策をかくぐり戦闘をやめない男が居た。

討伐隊隊長・オップス大佐である。

「素晴らしいな、隊長殿。貴方の格闘センスは、私が見た中であるとほぼ究極の域にある。」

どうだ？軍を去り、我々と六大陸でラジオ番組を創らないか？」

「誰が乗るかっ、そんな誘いにつ！」

私が一生涯を賭して守ってきたこの国の、魂とも呼ぶべき王家を冒瀆し、多くの命を奪ったお前の誘いになんて、乗って堪るか！」

「そうか……それは残念。今時王家が政治のトップに君臨するなんて正気の沙汰とは思えないんだがなあ」

「お前のした事に比べれば十分正気だろう！」

「それはそうだが、身勝手な制作や失策も一つや二つじゃないぞ？ノモシアで政権を握る王族は総じて国家予算を独占気味だっていう話だってザラだ」

「だから何だ！殺人犯が誇り高い王家を」

――「これは俺が独自のラインで調べてきたネタだ。捏造とかじゃねえし、まあフライドポテトでも食いながら聞いてくれ」

そう言つて繁はオックス大佐にフライドポテトの包みを投げ渡す。しかしオックスはそれを辛うじて動く右手ではたき落とし、踏み潰してしまった。

「……おいおい、食い物を粗末にするとは頂けんな。

その行為によつてお前は、飯屋や調理師や農業者の思いと同時に、素材となつた植物の存在意義までも踏みにじつて居るんだぞ？

国民の模範であらねばならない軍将校ともあるう男が、そんな真似をして良いはずがないだろうに」

「殺人犯如きにそんな説教をされるのは心外だが、確かにお前の言うことは、その点に限っては正論だろうな。

だがしかし、軍人たるもの注意と警戒に心血注ぐ事を疎かにしてはならないのだ。

そのフライドポテトに毒や爆発物や電極が仕込まれていないと誰が断言できる？」

「……呆れた。何かと思えばそんな事か？大丈夫だ。貴方に何か出

来るなら、もうとつくにそれをしている。

まあ良い。とりあえず話だけでも―― ヒュオン ガッ！

繁の発言を遮るようにしてオックス大佐が投げたナイフは、繁の持つ黄色い箱によって直撃を免れた。

「……おい、こちらに戦う気が無いのに投げナイフとはどういうつもりだ？」

「黙れ。私は将校であり兵士だ。兵士とは戦士や騎士のように余計なプライドなど持たない生物だ。

常に任務を最優先し、その為ならば如何なる手段をも厭わない。

それはある意味、貴様らも同じ事だろう？」

「それもそうだな。それに引き替え騎士や戦士なんて連中は、確かにある一転に於いては強いのだろうが、動物行動学的には弱者と呼ばざるを得ない哀れな種だったな。

よし、話はやめだ。貴方とこうして言い合っているのも楽しいが、そればかりとも―― スバオン！ バキャン！

オックス大佐の放った散弾は、再び黄色い箱によって防がれる。

しかし流石にこの衝撃には耐えかねたのか、黄色い箱は音をたてて崩壊してしまう。

内部から基盤やキーボード、液晶が崩れ落ちる。

「そんなものをまだ持っていたのか」

「この一発が最後だがな、しかしこれで、貴様の古式特級魔術は封じられた筈だ。

発動体を失った魔術はその効力を失うか、暴走故術者に被害をもたらす……それは古式特級魔術とて例外ではない筈……」

「そうだ。それは実に正しい。

だが……」

その後繁は少々間を置いて、オップスに問いかける

「それはあくまで『私が術者だと仮定した場合の話』に過ぎない。だがしかし、この場に於いて建造物を変形させる古式特級魔術『ソール・マルファス』を行使していた術者が、もし私でなかったとしたら？」

「まさか……青色薬剤師かつ！？」

「彼女は魔術が得意でね。攻撃系はからつきしなんだそうだが、こういう分野だと滅法強くなるらしい。

師と仰ぐ老婆は最早他界なされたが……その英知はしっかりと、彼女に受け継がれている」

「そんな馬鹿な…まさか本当に、回収計画をかくぐって逃げ延びた古式特級魔術の使い手が居ようとは……」

予想こそしていたものの、十分信じがたい事態に狼狽えるオップス大佐。

しかし彼と繁の脚は、既に変形した城によって吸い込まれつつあった。

それに気付き更に騒ぎ立てるオップス大佐を宥めるように、繁は言う。

「狼狽えるのは止せ、将校。大丈夫だ。これも企画の演出さ」

その言葉と共に、二人は地面に吸い込まれていった。

時を同じくして、王家の面々と戦闘人員でない従業員達とが避難に

使っていた部屋から、従業員達だけが綺麗さっぱり消え失せていた。

第十六話 俺と奴が殺人鬼と軍人で城内交戦中（後書き）

親父が言っていた。

『皿の上で塩焼きになった魚はお前のために死んでくれたんだ。だから出来る限り喰わせて貰うのがせめてもの勤めだ』 ってな

第十七話 飛翔王女と害虫男（前書き）

繁とオックス大佐が飛ばされたのは……

第十七話 飛翔王女と害虫男

―前回より―

地面に吸い込まれたオックス大佐と繁が吐き出されたのは、王族家三名が避難に用いている、強固な外壁と高度な防護魔術によって守られた礼拝室の中であつた。

突如現れた異質な二人に、驚き取り乱す王家の面々。

「な、何だ貴様は！？一体何が目的だ！？」

オックス大佐の着ていた軍服に見覚えのあつた国王エステイ・アイトラスは、彼が軍関係者―それも位の高い将校だと覺り安堵し、慣れぬ服装の繁へ強気に問いかけた。

「おお、これはこれはエステイ・アイトラス国王陛下。

お初にお目に掛かります。私、ラジオDJをやる事になりましたツジラ・バグテイルと申します。

本日は我が『ツジラジ』の企画にて、このジュールノブル城を訪れた次第」

「企画……貴様等と我が城の兵達が戦うという、つまらん手合わせの事か？」

「その通りで御座います。ただ違ふのは、城の兵達という点ですがね……」

「どういう事だ？」

「即ち……こういう事ですよ」

繁はマスクに仕組まれたノズルを前方に向けると、大きく反り返る。

プシヨン

拍子抜けするような音と共に放たれた緑色の巨大な塊は、放物線を描いて飛んでいく。

四人が呆気にとられている中、その塊は女王・イルズの元へ飛んでいき、

ベシユ——ジュオアアアツ！

彼女の頭部を、消滅させた。

「ッ…お母様ああ！」

「イルズウウウ！！貴様……よくも妻を！！」

「落ち着いてください国王陛下！失礼ながらあの男、ただ者ではありません！」

騒ぎ立てる三人を尻目に、繁は淡々と言つてのける。

「イルズ・アイトラス……旧姓をミドツエーモ。

聞き込みをしたが正直悪い話ばかりだったな。

元は辺境の弱小貴族の家に生まれるも実家が没落。その後偶然出会ったエステイに見初められ、結婚。

その後夫により政治の才能を見出され、政治主導権を獲得」

繁が城や町中で集めた話は、アイトラス家の歴史を如実に物語っていた。

しかし問題は、その次からであった。

「主導権を握った後のルタマルスは、強権的な政治に悩まされることとなる。

エクスーシア程じゃ無いが、国家予算を半ば私物化したアイトラス家の政治は酷いもんだった。

家族揃っての世界一周旅行に大陸内貴族限定の社交パーティーの定期開催等々、国家予算の1/3を使い込み、不足分補充の為に月単位の増税。

かと思えば余った予算を使い切る為無差別な道路工事やバラマキ政策を決行……。

それでアンチが沸かないなんて有り得ないというのに、王家批判派に間接的圧力をかけることでその勢力を削ろうとする姿勢は実に気に食わん。

そもそもこの女は自分の娘が飛姫種であることを鼻にかけて方々で好き勝手やる事も—— ザゴユン！

繁の頭の真横を、青い光線が通り過ぎた。

見れば光線を放ったのはセシルであるらしく、彼女が身に纏っていたドレスはいつの間にか消え失せ、ドレスのような意匠の目立つ青い鎧のようなものを身に纏い、右手にはライフルを構えていた。

「プリンキピサ・サブマか……」

厄介なことになったな、と繁は思った。

PSことプリンキピサ・サブマは、扱うに値する飛姫種共々各大陸がこぞって欲しがるだけに、インチキとしか思えないような機能が目白押しである。

先ず、普段は小物などに擬態しており、傍目から見ただけでその存在を察知するのは困難であるという点。

次に、何も存在しないはずの虚空から、使い手専用の武器を取り出し自由自在に扱うという機能。

更に、取り出された武器が刃物であるなら折れもせず刃こぼれもせ

ず、銃砲ならば段数に制限が無いという事。

そして最も重要なのが、飛行能力。

何とも複雑な形状をしている癖に、それでいて平然と空を飛んだりする。

こんな性能故、繁にとってPSを起動した飛姫種は非常に相性の悪い相手であった。

しかし繁はそれでも尚諦めず、能力と奇策を以て性能の差を埋めようと思いを巡らせる。

「……お父様、この害虫めを駆除してもよろしいかしら？」

「ああ、存分にやるがよいぞ。我が愛娘セシルよ」

「はい。では……遠慮無く殺らせて頂きますわ。覚悟なさい、この汚らしい害虫！」

気取った口調でそう吐き捨てたセシルは早速ライフルを構え直し、繁を狙い撃つ。

しかしヴァーミンの力に馴染みつつある繁にとって、直線的な射撃を避ける事など容易い。

青い光線のような弾丸は繁に当たることなく、全てが礼拝堂の床や壁や柱に大穴を開け、テーブルや花瓶や宗教画を粉碎していく。

そして弾を外す度に父親のエステイは激しく怒り狂い、親が言うには些か相応しくないような言葉で娘を口汚く罵り続ける。

例えば実の父親によるものであろうと、『ノロマ』だの『役立たず』だのと罵られていれば、怒らない方が変である。

事実、産まれながらにして頂点として育てられ、唯我独尊たる思想の元に全てを踏み台に生きてきたセシルにとって、父による罵倒の数々は本来我を忘れる程激昂するに値する程のものであった。

しかしセシルは考える。

自尊心と慢心故に世の何よりも優れていると影ながら自負している己の頭脳で。

普段の自身は、周囲に対して「高貴で優雅、かつ淑やかな才女」というイメージがまかり通っている。

それだというのに、彼女自身からすれば尻拭き紙ほどの価値しかないような軍人や、それ以下のゴミである害虫男の手前、そういったイメージを崩すのはかなり都合が悪い。

この二人を殺してしまえばその点は解決だが、問題点はまだある。

それは、恐らくこの部屋での音声は今もこうしてカタル・ティゾル全土に流れているであろうという事であり、ともすれば自分の発言が全ての力タル・ティゾル民に筒抜けという結果になるのは確実。

只でさえ王政反対派・王家批判派の勢いが強まりつつある昨今にあつて、更なるイメージダウンの発生は、自分の生涯に於いて致命傷となるだろう。

そう考えれば、ここはひとまず冷静に取り繕っておくのが妥当だろうと、セシルは考えた。

自身のPS『アスル・ミラグロ（青の奇跡）』にはライフル以外にも機関銃や誘導弾等多数の武器が搭載されているが、礼拝堂内の品々を破壊しては余計親子関係に拘れが生じてしまう。

となると最早、結論はただ一つに限られていた。

「（ここはひとまず……必要最低限の動作であの男を始末……そうすれば私は、城の兵達を救ったヒーローとして一躍有名人ですわ……）」

しかし彼女がそう思った瞬間、繁はその視野から消え失せていた。そしてそれと同時に、背後へこれ以上にならない程の不快感を感じ、慌てて振り返る。

すると彼女の背後には、やはり辻原が、浮いていた。

第十七話 飛翔王女と害虫男（後書き）

繁VSセシル、最終局面へ！

第十八話 おねがい プリンセス（死んでください的な意味で）（前書き）

各大陸が欲しがるPSの力を使いこなす飛姫種も、繁の奇策に翻弄され……

第十八話 おねがい プリンセス（死んでください的な意味で）

作者は今作に於いてしばしば『プリンキピサ・サブマ』の形状を、鎧と形容している。

しかし実際の所、この兵器の形状には実際の鎧と異なる点もかなり多い。

最も大きな違いは、装着者の頭部及び胴部を守る装甲が殆ど存在しないという点であろうか。

更に装着者は兵器行使にあたり身に纏っている全ての衣類を一度取り払い、専用の防護服を身に纏わねばならない（但しかなり面倒なので、軍役中の飛姫種は最初から防護服を身に纏う者が殆ど）。

この防護服というのは薄手かつ伸縮性があり、軽量化により機動性を向上させる目的の他、兵器そのものに搭乗者の意志を、神経などを通じて伝達する作用を促進させる目的も兼ねているのだという。

しかし、今回の場合――

――前回より――

「ってイヤアアアアア！」

ドゴギッ！

――それは見事に裏目に出てしまった。

妙な叫びと共に放たれた繁の飛び蹴りが、振り向きざまにセシルの腹へと突き刺さる。

ヴァーミンに順応したが故に獲得した身体能力で放たれた蹴りは、

浮遊中の飛姫種を吹き飛ばすのに十分な力を秘めていた。

「っ！？」

衝撃の余り声も上げられずに吹き飛ばされたセシルだったが何とか空中で体勢を立て直し、天井に張り付いた繁を睨み付け、使うまいと思っていた誘導弾の狙いを繁に定める。

「（正直これは使いたくありませんでしたけど……いい加減お父様のお説教にもうんざりしていた所ですし……致し方ありませんわ）」

セシルの腰に備わった砲塔から誘導弾が発射される。

繁は壁伝いに這い回り、どうにか誘導弾の追跡を逃れようと躍起になるも、努力虚しく見事爆発の巻き添えになってしまった。

結果繁は木っ端微塵に砕け散り、壁にも大穴が空いてしまった。

礼拝堂が壊れた事でまたも怒鳴り散らすエステイだったが、この状況下のセシルにとって最早父親などさして重要ではない。

「さてと……事も済んだことですし、帰りましょうか」

PSを解除しドレス姿へと戻ったセシルは、今だ怒鳴り続ける父エステイを無視して自室に戻ろうとする。

しかし次の瞬間、壁をすり抜けるようにして眼前に現れた者の姿を目にしたセシルの目の色が変わった。

「貴女は……ニコラ・フォックス！？」

「あ、誰かと思えば消費税横領と年齢不相応な薄い本向きの体型に定評のあるセシル王女じゃありませんか。」

直接お会いしたのは半年前のPS学院入学式以来でしたっけ？」

「何故貴方がここに居るんですの！？幾ら強大な悪魔と取引をした

ところで貴女は一介の藪医者ですわ！

それが百戦錬磨のエリート魔術師団に敵うはずがありませんわ！」

「あ、まだそのネタ気に入ってたんですね？ いやあ、女王陛下らしく寒くて売れなさそうなギャグだから、流行に囚われてばかりのスィーツ（笑）な王女もすぐ飽きるかと思ったんですけど」

「ギャグですって！？ 貴女は自分が過去に犯した禁忌をギャグと偽り言って開き直るんですの！？」

「開き直るも何も、嘘なんだから仕方ないじゃないですか。

まさかあのお話が事実だなんて思ってたませんよね？

幾らオワコン系王女、脳死系王女の異名で有名なセシル王女でもそれはありませんよね？

冗談抜きでお願いしますよ！？ いや切実に！」

「思ってるに決まってますわ！

貴女はお婆様の思い人を奪おうと計画し、その過程で外道に走り悪魔と取引して不死の肉体を手に入れた！

これは紛れもない真実ですよ！？」

「はあ……アホの宮廷魔術師達もそんな事言っていましたけど、セシル王女までとは……まあ良いです。

そういえばセシル王女って、アホな王族ランキング王女編晩年一位でしたもんね……。

それは仕方ないですよね」

「そうそう仕方ない事なのですわ。何せ私は——って、今貴女なんて仰有いましたの！？」

今私がアホとか何とか聞こえましたわよ！？」

「へ？ 今頃気付いたんですか？ 気付くの遅すぎでしょう？ どれだけアホなんですか？

だからアンタはアホなんですよ。判ってます？」

「貴女……どれだけ私をアホ呼ばわりすれば気が済むんですの！？」

「さあ」

「さあって貴女……そもそも私を誰だと思って——「あ！」——ち

よつと、聞いてますの!?

関係ない話題を切り出して話を反らせようだったってそうは——ッ
!?!」

突如背から腹に走る不快な激痛に、セシルは思わず言葉を失った。

痛みの中どうにか振り向くと、背後には驚くべき人物が立っていた。

「……ツジラ…バグ…テイル…!?!」

「お久しぶりです、セシル王女。

そして、さようなら」

端から馬鹿にしたような繁に何か言い返そうとするセシルだったが、ふと力を込めた瞬間。

彼女の体組織が一瞬で木炭のように変化。更にそこへ亀裂が走り、粉々に砕け散ってしまった。

「PS因子が身体から抜けた飛姫種は全身の細胞が炭化し死に至る……話には聞いていたが、まさかこれほどとはな」

繁は仕上げとばかりに右手から溶解液の塊を放ち、エステイをも悉く消し去った。

更にそれと時を同じくして床から這い出るように現れたのは、今回の作戦で影ながら重要な役割を果たしていた人物にして彼の従姉妹・青色薬剤師こと清水香織。

「そうだね。でもさ、こんなにあっさり死ぬようなら態々七話半もかけて攻撃する事無かったんじゃないの?」

「まあ確かにそうなんだが、それじゃ破壊神っぽさが出ねえだろ? さて、あとは城内の金庫を攻めて中身を手当たり次第頂くだけなわ

けだが」

「その件なら安心して。私がちゃんと例の場所に送っておいたから。あとは回収するだけで大丈夫な筈」

「そりゃ何よりだ。さて、金も手に入った事だしこんな所さっさとズラかんぞ」

「了解」

「はいよ」

目的を完遂した三人は、早々に城から立ち去ろうと帰路を急ぐ。

スピーカーからは予め録音しておいた番組を締め括る挨拶が流れており、諸々の事柄が終わり次第城に仕組まれた古式特級魔術も解除され、放送は終了する。

あとは適当にその場から逃げ去り、途中で香織が例の場所に送った戦利品を回収。香織の自宅にある兆眼紫円陣でそれらを然るべき場所へ換金し流し込む。

三人はそれぞれこの計画について始終不安で仕方なかったが、それぞれが協力し合った事と偶然が折り重なった事が功を奏し、無事完遂するに至った。

しかしながら、事件はこれで終わっていなかった。

第十八話 おねがい プリンセス（死んでください的な意味で）（後書き）

ツジラジ第一回、無事放送終了。しかし事態はこれで終わりではなかった！？

第十九話 君が死を断念するまで説得をやめない（前書き）

繁が去った後、礼拝堂に取り残されたあの男は……

第十九話 君が死を断念するまで説得をやめない

―前回より―

最早死体と炭の散乱する廃屋同然となつた礼拝堂の中にあつて、ただ一人生き延びた者が居た。

今となつては壊滅したツジラ討伐隊の隊長・オップス大佐である。繁との戦いで深手を負い、更にエステイに突き飛ばされ重体に陥つた彼は、生きることを諦め、このまま静かに死を待つ事を心に決めていた。

「（どうせ生きて帰つたところで、私は軍法会議にかけられた挙げ句投獄されて飼ひ殺しか、最悪死刑だ。

鬼頭種の誇りに賭けて、生きる喜びを享受できない生涯を送るなんてご免だ……それこそ、死んだ方がましというものさ）」

大佐の決意は固かつた。それならば今すぐにも舌を噛み切れればいいと、思ふ読者も居るだろう。

しかしながら彼は、『どうせ死ぬのなら、せめて生きた目でもう少し、この景色を眺めていたい』という思いから、自殺を拒んでいた。その奇妙な心境は、徐々に命が果て往くその時間さえも、生きる喜びとして享受しようという、彼なりの哲学の結果であつた。

そうして死を待つ彼だったがしかし、ふとその耳へ幽かに羽音のよななものを感じ取る。

「（これは……まさか……いや、そんな筈は……）」

オップス大佐が思考を巡らせる中、羽音はどんどん大きくなってい

く。

そしてそれが突然止んだかと思うと、ガラスの碎けるような音が、礼拝堂の中に響き渡る。

その後何者かが大佐の近くに降り立ち、そのまま歩み寄ってくる。

妙にゆっくりとした歩みに

一体何者なのか、傷の所為で瞼を開くことの出来ない大佐は傷付いた身体で身構える。

しかし、

「おいおい大佐、身構えるのはよしてくれないか」

その声を聞いて、オップス大佐は驚愕した。

「ど、ドライシス上級大将！？何故貴方がここに！？」

「おや、連絡していなかったかな？忘れていたのだとしたらすまないね。」

何、少し同類の気配を感じ取ったので来てみたんだが……どうやらもう、姿をくらましてしまったようだね」

「はい。尽力こそしたのですが、やはりヴァーミンの有資格者相手では力及ばず……結果部隊は私を残し全滅。

唯一の生き残りである私も最早この有様故、国王陛下を御守りすることも出来ず終い……」

「そうだったのか……」

「恐らくこのまま生きて帰っても軍法会議にかけられ、良くて投獄、最悪の場合死刑を言い渡されるでしょう。」

そんな末路は鬼頭種の誇りに反しますので、いつそこで静かに死んでしまおうかと、そう思っていたところで御座います」

大佐の話聞いたドライシス上級大将の心の奥底から、得も言われぬ悲しみがこみ上げてきた。

彼女にとっては、例えば歩兵の一人でも大切な軍の仲間であり、家族同然に愛すべき者なのだ。

それだというのに、あんな身勝手極まりない王族如きを守るために、それ程にまで尊い命が散らされたという事がそもそも、彼女にとって怒りに値する事柄だった。

泣きそうになりながら、ドライシス上級大将は言う。

「そんな悲しい事を言うものではないよ、大佐。鬼頭種が生きる喜びを何より尊ぶ種族だというのは知っているし、君は本官の大切な部下だ。」

だから君を投獄だなんて、本官は是が非でもしたくない。

でも軍上層部には王家支持派が大勢居るだろうから、彼らの意見を考慮すると確かに、君に罰を与えねばならないのは明白だ」

「そうで御座いましょうな……ですから上級大将、どうか私の事など捨て置いては頂けませんか？」

私はここで死ぬさだめなのです……ですから、私は――

――だがしかし、だからと言って君を見殺しにする事は出来ない。

そもそもだよ大佐、こうは思えないかね？

ツジラ・バグテイル一味が今回のような事件を起こしたのは、十中八九アイトラス家の悪政が原因だ。

如何に無能であろうとも、国家首脳が襲撃・暗殺されるような事などあつてはならないし、それが推奨されるべき行為だとも本官は思わない。

しかしだからと言って、国家首脳陣はその立場に甘んじることなく、

『もしかしたら不安を募らせた国民が反逆を起こすかも知れない』

『明日にでも自分は暗殺されるかも知れない』という意識を念頭に置き、それが現実にならないよう、国民を正しく導き守り通す事こそ、国家首脳のすべき事ではないのか、とね」

「確かに……そうですが……しかしならば何故……彼らはエクスーシアでなく、この国を……？」

「理由は簡単だよ、大佐。国家首脳は常に国民を正しく導き守り通

すべきなんだ。

だがアイトラス家は違った。彼らは王族である自分達に陶醉し悪政を行ってきた。

無論エクスーシア程ではないがしかし、国民が不安を募らせ怒り狂う原因となるには十分なものだ。

ラジオにゲスト出演していたニコラ女医の本を読んだことがあるのだけど、彼女は医学だけでなく政治にも詳しいようだね。

指摘は的確だったよ。

ただ、彼女がジュールノブル城を襲撃する暗殺グループに肩入れするとは全くの予想外だったがね。

大佐、本官は思うのだよ。ツジラー味の言うとおり、最早王政とは古いのかも知れない——否、古いだろう。

これからはラビーレマやイスキュロンを倣い、国民が直接選んだ面々が新たな政府として一丸となって国を治めねばならないのだ」

「政府が……一丸と……？」

「そうだ。今までの王政では、政府はあくまで王家の命令に従い、王家を補佐するだけの存在だった。

当然政治的な発言力など持ち合わせていないわけだが、それは実に効率が悪い。

ルタマルスは——否、ノモシアは変わらなければならないんだ、きつと。

これまでのように、王家だから、貴族だからと、ある程度先天的な血統で評価される文化圏ではなく、真つ当に努力して確固たる実力を得た者だけが評価される文化圏へとね。

それこそが、この国に足りないものだ、と、本官はそう思っている。そういった意味では、ツジラー味のしかしたこの一件、必ずしも完全な害であるとは言い切れないと思うのだが、どうだね？」

「確かに……そうですが……しかしでは、これからどうするの？」

オツプス大佐の問いに、ドライシス上級大將は答えた。

「そうだね……本官は——いや、『僕』は——

——軍を、去ろうと思う」

第十九話 君が死を断念するまで説得をやめない（後書き）

ドライシス上級大将の口から出た衝撃の一言！その真意とは！？果たしてこの二人の運命や如何に！？

第二十話 旅に出よう、ここではない何処か―謎と神秘の漂うあの大地まで（前

ドライシスの発言にオックス大佐は……

第二十話 旅に出よう、ここではない何処か―謎と神秘の漂うあの大地まで

―前回より―

「失礼ながらお伺いします……正気ですか？上級大将」
オップス大佐の問に、ドライシスは答える。

「正気か狂気か、それを完全に保証出来る者はこの世に居ないが……僕は本気だよ、オップス君」

「しかし、宜しいのですか？」

「何がだい？」

「着任中の身でありながら生きたまま軍を去ったとなれば、只では済みませんぞ？」

我等は国家反逆罪に問われ、それこそ投獄や極刑は目に見えております……」

「何だ、そんな事かい？心配は要らないさ。手は打ってある」

「と、仰有いますと？」

ドライシスはオップス大佐の問に、淡々と答える。

「この礼拝堂をね、爆破してやるのさ」

「ば、爆破……ですか？」

「そうさ。放送を聞く限り、ツジラは奇抜な作戦が得意な男だ。違うかい？」

「いえ、奴は奇策に秀でた男で御座いますが……」

「それなら都合が良い。奇策を特技とする男が、罠の一つや二つ仕掛けないなんて逆に可笑しいだろう？」

見たところかなりのエンターティナーだったようだから、派手な事をしたがるとも考えられる。

そこで僕は、そこを逆手に取る」

「……成る程。つまりこの礼拝堂を爆破し、ツジラの罠により我々が死亡したと見せかけるのですな？」

「その通りさ、オップス君。」

幸いなことに僕は炎の魔術が得意でね。爆薬に見せかけてこの教会一つ吹き飛ばすくらい訳はない。

そもそも彼らの仲間には、古式特級魔術の使い手が居ただろう？その片鱗と思わせれば、例え魔術であると判明しても誤魔化しが効く。残留魔力分析から個人を特定される恐れもあるにはあるが、竜属種にその方法は通用しない。

あとは……そうだ。念のためにより死を信じやすくさせる為の偽装工作をしておこうか」

「偽装工作？」

「そう、偽装工作だ。というのは要するに、君の軍服だとか、僕の指の骨なんかをこの場に捨てておくのさ。そうすれば偽装された死はより真実味のあるものに成り果て、走査線をかく乱することが出来るようになる。」

心配することはない。竜属種は元よりしぶといんだ。指や腕の一本や二本、二日もすればまた生えてくる。

どうだい？それでもまだ、潔く死ぬ事に拘るかい？」

ドライシスの問に、オップス大佐は笑みを浮かべて冗談交じりに答える。

「仕方ないですね。ドライシスさんがそんなに私と一緒に居たいというのなら、生き残ってみましょうか」

「フフ…その意気だよオップス君」

「但し、私はかなり重いですよ？ドライシスさんの体格で、大丈夫

ですか？」

「おやおや、竜属種もかなり軽く見られたものだね。大丈夫さ、竜属種は力自慢だし、何より今回は転移の術を使って、一気にエレモスまで飛んでやろうと思っていたからね」

「エレモスですか…… 謎めいた第六の大陸、良いですねえ。私達二人のセカンドライフを送るにはもってこいの場所だ」

「そうだろう？ では、軍服を脱いでくれ。転移終了と共に術が発動して、礼拝堂が吹き飛ぶようにしてあるからね」

「判りました」

「そうだ、いつそ僕の軍服も脱いでもおうか。心機一転の意味合いも込めて、エレモスではもっと女らしい服を着てみたい」

「良いじゃありませんか、きつと似合いますよ」

こうしてオップスとドライシスは自らの上着を脱ぎ捨て、転移の術を用いてノモシアから遠く離れた神秘の大陸・エレモスへと向かった。

そしてそれと時を同じくして、ジュールノブル城最上階の一角に立てられた豪華な礼拝堂が、凄まじい爆発音を伴って盛大に吹き飛んだ。

――翌日以降――

卑劣かつ背徳的な虐殺行為であったにもかかわらず、『ツジラジ』は多くの民衆の支持を獲得していた。

というのも、事実ルタマルスを初めとするノモシア王政国家の政治体制は議会政治を取り入れている国家のそれより異常な点が多く、ごく一撮み程度の政治家や貴族、懐古思想の強い高齢者等を除き王政を支持する者は微塵も居ないというのが現状であった。

この事から、王家を一方的に批判・侵略する繁達の行動は、ある意味で王家への不安を抱えていた民衆達の怒りを代弁するようであり、

それが高い支持率に繋がったのである。

こうした現状と、本件での実質的な王家壊滅及び国王エスティ・アイトラスの醜悪な本性露呈を皮切りに、ルタマルス政府は王政を廃止。以降は政府主導での議会政治を取り入れるようになった。

更にその動きを察知したノモシアの各王制国家も、王族や貴族をあぐまで国家の象徴として置くことで政治への直接干渉を禁止し、王族・貴族の権威を殺ぐ動きを見せ始めている。

ただ問題は、影で実質的な独裁国家と呼ばれているエクスーシアがこの流れに乗っていないという事であるが、大陸同盟はこの件の解決策も随時考案中とのことである。

第二十話 旅に出よう、ここではない何処か―謎と神秘の漂うあの大地まで（後

ランゴ・ドライシスとエリヤ・オツプス。

死を装ってまで軍を抜け出した二人の旅は、まだ始まったばかり。

でもシーズン2以降の主役は、やっぱり繁達。

第二十一話 生徒が次々と怪死していく理由を説明出来ない（前書き）

あの悲惨なテロ事件から一週間後、事件はラビレマで起こった。

第二十一話 生徒が次々と怪死していく理由を説明出来ない

―ジュルノブル城襲撃から一週間後・東ゾイロス高等学校―

学術ラビーレマの大国に存る名門私立高等学校・東ゾイロス高等学校の夕暮れ時。

多くの生徒達が自宅や寮へ戻り、一部は部活動の練習などで校内へ残っている時間。

広い体育館の片隅で練習に励むのは、実力者揃いの東ゾイロス高校バスケットボール部の面々。

練習風景の見回りをしていた亀系有鱗種（禽獣種・羽毛種の爬虫類版）の顧問が、ふとある事に気付く。

「（諏訪が居ない…？）」

部員が一人、足りないのである。

その部員・諏訪というのは大変に真面目な尖耳系霊長種の男子寮生であり、無断で欠席・早退するなど有り得ない程の人格者であった。華憐で手足が細く、虚弱で儂げな美男子ながらに、持ち前の機敏さを生かして毎度試合ではチームの勝利に貢献する優秀な部員である。諏訪を顧問は気に入っていた。

気に入りであるうがなかるうが、自らが顧問を務める部活の部員が失踪したとなれば心配するのが教員というもの。

顧問は早速部員達への聞き込みを始め、ある部員から『休憩時間中トイレに行ったのを見たがそれ以降見ていない』という証言を得るに至る。

余計心配になった顧問は、早速部員達が利用する男子トイレへと向かった。

しかしトイレに諏訪の姿はなく、顧問は結果的として他に諏訪が行きそうな場所を一時間以上かけて探し回ったが、結局諏訪は見当たらなかった。

と、その道中。

部員達の悲鳴が響いた。

「一体何事だ!？」

顧問は思った。

そう思っただけで、顧問が抱えていた不安が急激に肥大化していく。

そう決意した顧問は、亀ながらにかなりの早さで休息所へ駆けつけていく。

―そして、休息所―

「お前達！無事かつ！？」

「先生っ！」

休息所に入るとすぐさま部員達が駆け寄ってきた。

「良かった……全員無事らしいな。」

それより、一体何があった？」

「それなんですが、その……」

誰もが酷く怯えているのか、部員達は中々言葉を切り出せない。

顧問は一度部員達を外で待たせた上で、休息所の中に入っていく。

暫く進んでいると、休息所の奥にあるベッド二つの間から、茶色い枯れ木のような物体がその先端部を除かせていた。

そして顧問は、ベッドの間に打ち捨てられていたその物体の全貌を目の当たりにして、思わず言葉を失った。

「（これは……どういう事だ……？

だがこれで、あいつ等が悲鳴を上げたのも納得が行く……）」

顧問が目にしたその物体―てつきり枯れ木か何かだろうと高を括っていたそれ―は、極限まで水分を失い干涸らびて絶命した人の死体であった。

体格から推測するに年齢は15　17歳、種族は霊長種と言ったところだろうか。

体組織は殆ど骨と皮だけとなり、何故か頭髪の色素も限界まで抜け落ち、更に両目の水分が完全に失われた結果、まるでぐり取られたように眼窩の大穴が存在していた。

「（一体何がどうなっているんだ……？）」

等と考え込む顧問の頭にふと最悪の事態が過ぎるも、しかしやはり教員と言っただけあり冷静を保つ顧問はこの事を学校に報告し、部員達を即時帰らせた。

発見された死体はすぐさま教員達の手で解剖にかけられ（ラビールマでは情報漏洩や無駄な混乱を防ぐため余程の大事件でもないかぎり、事の解決に公的機関を頼らない流れが一般的である）身元調査が行われた。

結果として襲われたのは、バスケットボール部一年の諏訪という生徒であると判明。

即ち、顧問の予測した不吉な予感が的中したと言っことになる。

翌日以降学校側は事を荒立てない為、死体の第一発見者であるバスケットボール部員を公欠扱いとして欠席にする等して情報漏洩を防ぐと共に、有効な打開策を練り始めた。

そうして三度目の職員会議序盤、羽毛種の数学教員がこんな事を言い出した。

『そういえば先週ノモシアの城を襲撃したラジオ番組の三人組は、自分達に解決して欲しい謎や事件のネタを募集しているのではなかったか』

更に数学教師は続ける。

『彼らの番組の題材として、この事件を解決させるというのはどうだろうか？

彼らはコンセプトにより収録した情報を編集すると言っていたし、仮に生中継だったとしても校名を出さないようにして貰えば良い』

数学教師の提案に、職員達は真つ二つに割れて対立した。

一方は物理教師の考えを支持する賛成派で、繁達の高い実力を評価しての事だった。

もう一方は反対派であり、此方は繁達がテロリストであるから迂闊に信賴してはならないという考えを持っていた。

ちなみに根っからの王政嫌いだった顧問は賛成派であり、この事は賛成派にとって強みとなっていた。

二時間にも及ぶ議論の末賛成派の意見が通る事となり、代表として理事長が繁達へ宛てた依頼状を出す事となった（この事は理事長たつての希望によるものである）。

教員達が安堵したのも束の間、校内に潜む謎の存在は次々と生徒達をその手にかけていき、次々とミイラ化させて殺害していく。

事態を重く見た理事長は事情を生徒や生徒の保護者にも報告し、徹底した情報奇声を敷くよう要請。

更に表向きには感染症流行の為と題して長期間の学校閉鎖を遂行（事実この時、ラビレマでは運良く季節性の感染症が出回っており、欠席者もかなりの数が居た）する事で、これ以上の犠牲者を増やさないようにした。

第二十一話 生徒が次々と怪死していく理由を説明出来ない（後書き）

次回、遂に繁達動き出す！

第二十二話 日常？（前書き）

暗躍する何かに苦戦を強いられる東ゾイロス高等学校職員陣。一方
その頃『ツジラジ』のスタッフ三人は……

第二十二話 日常？

― 前回より更に数日後・エクスーシア国境付近に佇む薬屋 ―

三人の男女が、テーブルを囲んでいた。

一人は長身痩軀に眼鏡の男。

一人は深紅の長髪を柵引かせた女。

一人は狐の耳と尾を持つ、白衣を着た女。

「さて、今回のツジラジだが…… 実は適当にかけておいた募集の方へ贈ってくる奴がかなり居てな」

男女の内の一人、長身痩軀に眼鏡の男が話を切り出した。

彼の名は辻原繁。元居た世界へ戻る為、カタル・テイゾルの破壊神を目指すべく猟奇系DJツジラ・バグテイルとして神出鬼没系謎解きラジオ『ツジラジ』を主催する異世界人である。

「お、私がやったあの適当な宛先に送ろうっていう奇特な人がよく居たもんだね」

それに返すのは、この家を仕切る深紅の長髪を柵引かせた女・清水香織。

繁同様異世界人である彼女は繁の従姉妹兼補佐役でもあり、ツジラジの放送に置いてはDJ青色薬剤師を名乗り諸々の連絡等を行う。

「そんなに適当には聞こえなかったけど…… っていうか、前回ゲストだった私の扱いは？」

自らの行く末を案じる（？）ような事を言う白衣の女の名は、ニコラ・フォックス。

嘗てルタマルスで開業医として活動していた医学博士であり、若干

19歳にして呪術により不老不死の身となってしまったという壮絶な過去を持つ。

王家に対する批判から政府に追われているところを繁に誘われ、ツジラジの初回でゲストとして出演していた。

「手紙もメールもかなりの数だよ。合計で二十万件くれえ来てんだわ、コレが」

「に、二十万件っ！？」

「一体何処からそんな数値が出るの！？」

「正直バカみてえな数値だが、その九割が電子メールだよ。郵便の方は多分検閲が何かに引っかかって処分されたんだろうな。」

まあ六大陸の主要な国家全体に向けて放送してたんだ。そんだけ来たって何ら変じゃねえさ。

流石に全部採用する訳にも行かねえんで、ノモシア舞台にしたのを省いて三割減らし、更にそっからあんま金が入りそうに無い奴を省いたら更に五割減った」

「それでもまだ四万件残ったの！？」

「残ったな。んでまあ、そんなんじゃ話進まねえわな。」

という訳で、収入が不確定な奴を省いた。宝探しとかその辺だな」

「幾ら減ったの？」

「大体八分くれえにはなったんじゃねえか。それでもまだ一万件以上あるけどな。」

更に追加で内容重複と面白く無さそうな奴を適当に省いて五分の一直で減らした」

「一気に減ったねえ」

「半ば適当に省いたからな。大丈夫だ。省いた分は後々の放送にも転用する。」

んで、更にこれを厳正かつ適当に審査した結果」

「どつちよ？」

「どうにか一つに絞り込めた。現場は学術大陸ラビーレマの中枢部の『列甲大学』——「れ、列甲！？」——の、関連校として名高い東ゾイロス高等学校だ」

「あ、そつちか……良かった」

香織は一瞬ぎよつとした。

『ツジラジ』が列甲大学などに挑むなど、考えただけで身の毛も立つような話だからだ。

列甲大学は、科学の力を用いた技術『学術』を主導とする大陸ラビーレマに於ける教育・研究機関の最大手であり、学術者の聖地とも呼ばれる巨大機関である。

その名前は創立者である天才羽毛種・列甲に由来し、面積は一つの大都市に匹敵。通称として『大学園都市』とも呼称される。

一部では学術のみならず魔術の研究にも着手しており、その影響から大陸外にも数多くの関連校を持つ。

その為他の大陸・文化圏からの入学者も多く、今となつてはラビーレマそのものが多民族文化圏となりつつある程。

東ゾイロス高等学校は大学園都市付近に存在する都市ゾイロスに存在する高等学校であり、大学園都市には遠く及ばないものの凄まじい規模を誇る教育機関であつた。

「そつといえは知り合いが東ゾイロス出身だつたつけ。でもあそこ、そんなに問題らしい問題なんてあつたつけ？」

ノモシア、ヤムタ辺りはまだ王政が続いてるし、イスキュロンは退役軍人の横暴が酷いとか、アクサノは海神教過激派の猛攻が酷いつて聞くけどさ、それに引き替えラビーレマって治安も経済状況もさして問題ないよね？」

一時期権威主義が横行したこともあったけど、それも今ではあつてないようなもんだし」

「どうでも良い事だけどニコラさんって大陸情勢に詳しいよね」

「伊達に70年生きてないからね。それで、案件は？」

「理事長をやつてる『生まれたての73歳児』さんからのお使いでな、近頃校内に妙なのが沸いて出るとかでよ。」

幸い校外には出ねえそうだから生徒を自宅待機させ、職員が交代で見張つてるらしい。

だがまあ、公的機関にバラすと情報が漏洩して寧ろ厄介になりやがるから、ジュールノブルの宮廷警備部隊を皆殺しにした俺らの力を借りてえんだと」

「ハンネのセンスもさることながら、とんでも無いこと頼んでくる理事長だね…… っていうか、ツジラジつて結局大陸全体にオンエアされるから厄介事になるのは変わりないんじゃない？」

「だからジュールノブル戦よろしく生放送でケリ付けてくれって言つて来やがったよ。」

成功時の報酬は前回回収した分の1.5倍、失敗したら保険で2.2倍出すとよ」

「なにそのヌルゲー」

「八百長かませて言つてるようなもんじゃん」

「そんな事言つてやるなよ。幾ら俺でも保険の話は後々断つたさ」

「あ、断つたんだ。珍しいね。何やるにしても大体何時も逃げ道確保する癖に」

「世の中には確保して良い逃げ道と確保しなきゃならん逃げ道があるんだよ。」

んで敵の特徴についてだが、今回も人間サイズを相手に戦う事になるんじゃないかと踏んでいる。

但しそうだとしても、やり口を見る限り霊長種じゃない可能性も高い」

「屋内戦となると私のマルファスが本領発揮だね」

「タセツクモスも狭い室内でなら起動読まれにくい分活躍の幅広がるし」

「よし。んじゃ早速台本を練るか」

こうして始まった作戦会議の末、ニコラはゲストとして二回目も出演する事になった。

第二十二話 日常？（後書き）

次回、殺人事件の犯人グループが遂に登場！

第二十三話 Mr. ウェインのお気に入り（前書き）

物語は謎めいた薄暗い一室から始まる・・・

第二十三話 Mr・クエインのお気に入り

―前回と同時刻・ある一室―

薄暗いその部屋からは、実に悲痛で痛々しい喘ぎ声が響いていた。喘ぎ声は若い―恐らく十代の―女のものであり、その声には恐怖と苦痛と不快感、そして快楽が混じり合っていた。

それと同じくして鳴り響くのは、生理的な嫌悪感や不快感を催すような、湿った音。

擬音語で表すなら、ぐちょ　だとか　ねちょ　だとか　ぬちゃ　だとか。

そんな不愉快な音が激しくなる度、喘ぎ声の悲痛さは増していく。

そんな事が続いて、早十数分。

静かになった部屋の中で、男の声がした。

「やはり生娘の精気は良い……二十歳に見たぬ処女のそれは至高……」。

しかし――「しかしだからと言ってもだ、幼すぎても良くはない。十五に見たない稚児などは、味も悪いし見た目も悪い」

男の変態じみた独り言を遮るように補ったのは、これまた若い―しかし今度は20代程の―女の声。

「おや、誰かと思えば小樽さんではありませんか。」

「一体どうしたのです？」

「お楽しみ中の所失礼致します、Mr・クエイン」

「いえいえ、構いませんよ。丁度今終わったところですから」

「有り難う御座います。」

では、ご報告致します。今後の戯事についてですが……状況が変わりました」

「状況が変わった……とは？」

よもや、以前のように現地の空気を感じながらの戯事が出来るようになった、という事ですか？」

「いえ、残念ながらそのような良い変化ではないのです」

「ふむ……そうでしたか。つまり『状況は悪化の一途を辿りつつある』と？」

「左様で御座います。」

単刀直入に申し上げます。祭品ジレンの供給源を、断たれました」

クエインが動揺する様は、暗闇の中でもハッキリと感じ取れた。

「何と……！ よりによってもうそろそろ補充せねばならぬいう時になってですか……」

「我々の動向を覚った職員共は、感染症の流行を理由に穢れ無き子らの登校を封じました。」

申し訳御座いません、Mr……これも全て私の力不足が招いた事に御座います……」

暗闇の中、小樽はクエインに頭を下げる。

「頭をお上げなさい小樽さん。貴方が謝る理由などどこにもありません」

「しかしこのままでは……」

「心配ご無用。また何か打開策を立てれば良いだけです。」

我等クブス一派の栄光は、まだ十分取り戻せます」

高らかに宣言するクエインに、小樽は再び申し訳なさそうに話を切り出す。

「それとMr……もう一つ申し上げねばならぬ事が御座います」

「何でしょう？」

「度々不吉な事柄で申し訳ないのですが、職員共が我々を始末しようと刺客を送り込んでくる事が判明したのです」

「刺客ですって？」

「はい。それも音声データによりますと、何でも刺客というのは……二週間前ノモシアで勃発したジュールノブル城襲撃事件の、その主犯であるツジラ・バグテイル一味であるとの事でして……」

「何と！あのツジラ一味が？確かにあのラジオ番組では身の回りに潜む謎や事件を募集していましたが……まさか我々がその手にかかろうとは……」

「まだ確定的ではありませんが、来るという覚悟だけはしておくべきかと」

「そうでしょうね……（しかし何と言うことだ……まさかツジラ一味とは……）」

クエインは頭を抱えた。

「（私はまだ良い……しかし、しかし問題は彼女だ……」。

ラクラ……ラクラ・アスリン……彼女だけは絶対に守り抜かねば……）」

決意を固めるクエイン。

そんな彼の決意も知らず、別の一室に備わったベッドで眠り続ける

のは、旧式体操着に紺色のブルマーという出で立ちの兎系禽獣種の少女、ラクラ・アスリン。

肉付きが良く豊満な体つきをしながら、まるで幼子のように無邪気に眠る彼女の部屋の床には、先日東ゾイロス高校で見付かったような、全裸に剥かれ干涸らびた男の死体が転がっていた。

第二十三話 Mr. ウェインのお気に入り（後書き）

次回、ツジラジスタッフが遂にラビレマへ！

第二十四話 ネカフェから失礼致します（前書き）

かくしてラビレマへ辿り着いた三人だったが・・・

第二十四話 ネカフェから失礼致します

―翌日・ラビーレマ首都圏―

『さて、そういうわけだ。俺らは今変装かましてラビーレマ首都圏某所―つか東ゾイロス高校のすぐ近所にあるネカフェに居る訳だが』

『うん』

『だねえ』

『何か絶賛行き詰まり中だよなこの状況』

『そうね』

『冗談抜きでやばいね』

お互い離れ離れの個室を取り、魔術道具による簡単な念話によって会話する三人。

しかし現在三人は皆、総じてパソコンの前で頂垂れていた。

詳細な理由は不明なのであるが、三人とも移動途中から徐々に疲れが出始め、ラビーレマ首都圏に着く頃には不老不死である筈のニコラさえもかなり疲弊した状態になってしまっていた。

『何が原因なんだろ……』

『……ニコラ、お前何か知ってるんじゃないか？』

ラビーレマ独自の感染症とか、疾患とか』

『あるにはあるけどさ、どれもこんな症状じゃないわ……』

『じゃあ何が原因なんだ……？税関回避ルートでの長距離移動に備えて事前に疲労止めの薬飲んだよな？』

確か香織の師匠の……』

『トリ口婆様直伝のアレね。効き目は確かだよ？』

『そりゃそうよ。大昔の薬学の教科書にも大きく書いてあるもの。』

「サキモリガの幼虫はタテムシと呼ばれ、その内蔵は疲労回復に効果覲面である」って。

薬学の先生、生徒思いでサービス問題とかけっこう出してくれてたんだけど、テストには毎回その問題が出ててね。嫌でも覚えたわ」

「そうかよ……じゃあ香織、トリ口婆様はこの薬の副作用とか言及してたりしたか？」

「いやそれが……何にも無し。ノモシア圏内で使う分にはほぼ万能って言うてたけど……ちょい待ち、ノモシア圏内？」

香織は思い立ったように重い身体を持ち上げ、スリープモードにあったパソコンを叩き起こす。

SFめいた大陸だというのにこういった細かい部分は現代の地球そのままである事に安堵しつつ、検索エンジンを立ち上げキーワードを入力。

検索結果で出てきたページを幾つか見て回った後、香織は机へ盛大に倒れ込み、その後か細い声で言った。

「ごめん。薬なんだけどさ……あつたわ、副作用」

「……マジで？」

「……どんな副作用だ？」

「これさ……ノモシア区域以外の水・植物と併せて摂取すると真逆に作用するらしいの……」

一向はこの薬を服用するに当たりその辺の量販店で、アクサノを原産地とする果実「キツルギ」（学名：ムサ・マユシエンシス。地球のバナナに相当）を原料とする乳酸飲料を購入。

それを水代わりに薬を服用していた。

「つまり俺らは、疲労防止のつもりで疲労を増幅させる薬を飲んだと……」

『大学の教科書には載ってなかったんだけどねえ……』

『論文として公的に発表されて学会で認可されたのが実に20年前の事だから、この話』

『ああ…それじゃ知らないわ。』

それで、対処法は？』

『ビタミンC入りの炭酸飲料……その辺の自販機にある奴で事足りるみたい』

『マジでか……ちょい買ってきて来るわ』

繁の買ってきた炭酸飲料の効果は凄まじく、疲労感はすぐさま回復した。

それこそ、吹き飛ぶという表現が適切なほどに。

――街中――

「効いたな、炭酸飲料」

「まさかあそこまでの即効性とは思わなかったよ」

「凄い。流石ビタミンC凄い」

「ていうか炭酸が地味に効いた。あとビタミンC以外に入ってた諸々の栄養素も。」

副作用を打ち消したのか、薬の効能自体が無かったことになったのか、どっちでもいいやってぐらいいに」

「全くだな。さて、早速スタジオと情報の確保を――ツドオオオオオオン！――ぬお！？な、何事だ！？」

突然の地鳴りと逃げ惑う人々の悲鳴。その源に居たのは外皮が黄土色のワイバーンであった。

ワイバーン。分類学上二足飛行竜というカテゴリに属する動物類であり、前脚が現実世界に於ける翼竜類（プテラノドン等）や翼手目^{コウモリ}のように発達した大型爬虫類である。

全長はしめて6 m。中型肉食恐竜ほどの大きさだが、それでも町中に出れば十分脅威と呼べる存在であろう。

「ワイバーン類……頭骨と鱗からしてシツキタシアス科、角から考えると性別は雌だな……」

「時期と動きを見ると、繁殖期なのにプロポーズしてくれる雄が居なくて気が立ってみたいだね」

「いや何で冷静に解説してるの！？イトコ同士語らってる所悪いけど、流石に不老不死の私でもこれは逃げるよ！？」

「いやいや、そこは逃げるなよ。ワイバーンなんて元々寿命長い癖に繁殖頻度低くて個体数少ないのに増えすぎて困るってぐらいの戦闘能力がある動物だ。」

写真や文献での資料は腐るほど在るが、その反面映像資料は極端に少ない。

飼育してる施設もカタル・ティゾルでも片手で数えられるぐらいしかない、そんな何か微妙な奴らなんだ。

ヴァーミンの有資格者を代表して触れ合ったって罰は当たらんذار」

「どういう理屈！？」

「私はヴァーミンの有資格者の身内兼相方を代表して触れ合うことにするよ」

「いやだからどういう理屈！？」

等というニコラの突っ込みも意に介さず、二人はワイバーンに向かっていく。

繁は正面からトリッキーな動きでワイバーンを挑発するように走り寄り、それに続く形で香織はその背中に飛び乗る。

かくして人々の逃げ惑う中、香織と繁のコンビによる奇策と魔術を駆使したワイバーン狩りが始まるかと思われた。

しかしその予想は、大きく外れることとなる。

荒ぶるワイバーンの足下から、突如緑色をした炎が上がったのである。

第二十四話 ネカフェから失礼致します（後書き）

突如上がった炎の正体とは！？

第二十五話 マチでヒリュウが燃え尽きる頃（前書き）

雄運無さ故に繁殖出来ないワイバーンの足下が、大炎上！

第二十五話 マチでヒリユウが燃え尽きる頃

―前回より―

雄運無さ故の苛立ちが原因で街を襲ってしまったワイバーンの足下で上がった炎は、瞬く間に彼女を取り囲んだ。

『ヴァオオオオオン！ゴアオオオオオン！』

緑色の炎に脚を焼かれ、腹を炙られたワイバーンは飛び立とうと躍起になるが、一度着地の為地面に下ろした両足と両翼は接着剤のようなもので地面に固定され、動かすことが出来ない。

シツキタシアス科のワイバーンは更に体温・水分をなるべく逃がさないよう強固な鱗を持っている。

しかし今回はその『熱を溜め込みやすい』という鱗の性質が災いし、その巨体は極端に熱せられていく。

香織は隙を見て背中から逃れ、繁と共に傍観へ徹する事とした。最早これは自分達が手出しすべきではないと判断したのである。

『グアオアアアアッ！』

ワイバーンは尚も、地面に貼り付いて動けないまま炙られていく。そしてその熱は脳を余裕で煮えたぎらせ、熱中症に近い症状に陥ったワイバーンはうめき声も上げずに絶命した。

逃げ惑っていた人々は最初、自分達の眼前で何が起こったのか理解できず戸惑っていたものの、次第に状況を理解。訳も判らず盛大に歓喜した。

緑色をした炎は自然に消え去り、石畳の幅広い道に残されたのは、無傷なまま熱を持って死に絶えたワイバーンの亡骸のみ。

そんな状況下で、繁達は。

「凄いね、まさか古式特級魔術？」

「いや……それというか、科学的な手法によるもんだろつな。只でさえ少ない古式特級魔術の使い手が、よりにもよってラビーレマなんぞに居る訳もあるめえ。

恐らくは遠隔から弾頭やら小型ロボやらを使って炎や接着剤を仕込んだんだろつよ」

「あの緑色の炎は？」

「炎色反応だ」

「炎色反応？結晶乗つけた針金の先端をバーナーで焼いたらそこだけ色が変わるっていうアレ？」

「花火の色づけとかにも使うよね」

「そう。基本原理はそれだが、燃料に色々な化学物質を混ぜて焼く方法だと炎全体に色が付く。

極一部でも色々な色があつてな……」

以下に、主要な炎色反応の組み合わせを記す。

リチウム：深紅

ナトリウム：黄

カリウム：淡紫

ルビジウム：暗赤

セシウム：青紫

カルシウム：橙赤

ストロンチウム：深赤

バリウム：黄緑

ラジウム：洋紅

銅：青緑色（燃烧エネルギーを奪い温度を下げて色の振り幅を変更すれば青も可能）

ホウ素：黄緑

ガリウム：青

インジウム：藍色

タリウム：淡緑

リン：淡青

ヒ素：淡青

アンチモン：淡青

「炎の色が緑だった所を見ると、燃料に混ざってたのはバリウムかホウ素、それが銅だろうな」

「断定出来るものの？」

「そりやお前、色彩パターンなんぞ成分構成や温度の違いで千差万別だ。

これならこの色、なんて断定出来る物質なんぞありやしねえ。

あとよ、ニコラ」

「何？」

「お前言ってたよな？『ヴァーミンの有資格者同士は互いを認知しあい、偶発的に出会いもする』ってよ」

「言ったねえ」

「何かよ、今になってそれが初めて判った気がしたぜ。

実は今朝紋章が右肩の方に現れてたんだが……今その右肩、無茶苦茶脈打ってたんだよ」

「って事は……つまり……あれをやったのは、ヴァーミンの有資格者かも知れないって事……？」

「そういう仮説も、強ち間違いじゃねえかもな。

番号は判らんが、十中八九向こうもこつちを認識していると考えて間違いあるめえ」

「となると、今回の案件にも絡んでるのかな？」

「それは些か飛躍した推測だが、頭に入れておいて損は無えだろうよ」

等と語らいながら、繁達は東ゾイロス高等学校で起こる謎の事件について何かラジオに使えるような情報を探すため、その場から立ち去った。

ワイバーン死亡に沸き立っていた群衆達も次第に死体の周囲から離れ始め、各々の目的地へ向かいだす。

何処からともなく現れた、地を這う無数の赤い粒子がワイバーンの死骸へ一斉に集る。

そして粒子が動く度、ワイバーンの死肉が驚くべき速度で消えていく。

この粒子こそはラビーレマ全土に備わった有機ゴミ処理システム『トラッシュバイター』である。

この胡麻粒ほどの小さな飛べない甲虫達は極小の電子機器によりその行動を制御されており、命令されるが俚に動き、貪り、増え、そして死んでいく。

他の大陸政府からは未だに暴走の危険性を示唆され続けているこのシステムだが、不思議なことに今の今まで災害を引き起こしたことは一度もない。

死骸を食い尽くしたトラッシュバイターが立ち去ると、今度は何処から都もなくゴミ収集用のキャタピラ車が現れてワイバーンの白骨を回収していった。

全てが丸く収まったのを見計らったかのように、建物の影から素早く女が現れた。

アジア人的な顔つきに緑色のポニーテールを棚引かせたその女の年齢は、見たところ20代ほどであろうか。

ほっそりした肢体が爽やかな外観の黒いスーツを着こなす様は、彼女があらゆる能力に秀でた秀才である事を彷彿とさせる。

女はゴミ収集車に取りこぼした骨片に歩み寄り、それを拾い上げて呟く。

「馬鹿ですねえ、貴女も。幾ら結婚できないからって、幾ら雄運おとしが無いからって、街に攻め入るなんて……本当に、救いようのない馬鹿ですよねえ」

骨片を近くのゴミ箱に投げ捨てた女は、そのままラビーレマの町並を歩き出す。

「まあ、そんな馬鹿の事なんて気にしてたらキリがありませんよね。馬鹿ほどこの世界に腐るほど居るようなものなんて、そうありませんから。」

それより今注目すべきは、あの三人組ですよ。

彼ら……特にあの昆虫のようなマスクを被った男性は、実に興味深い。

あのマスクの形状からするとモチーフは蛾でしょうか？

しかしながら見たことの無い姿……もしや、アクサノ学会も認知していない新種……？

何やら面白そうな雰囲気ですねえ……彼らの後、付けてみても良いかも知れません。

つと、それより前に……何か食べましょう。流石にお腹が空きました」

女はごく普通に、飲食店のある方角へと歩み出した。

しかし彼女が三歩進んだ直後、その姿は一瞬にして消え失せてしまった。

第二十五話 マチでヒリュウが燃え尽きる頃（後書き）

突如現れた謎の女、その脚力の秘密とは！？

第二十六話 謙虚理事長と喋る葉虫（前書き）

理事長・緒方三ツ葉の独白。

第二十六話 謙虚理事長と喋る葉虫

読者の皆さん、初めまして。東ゾイロス高等学校理事長で多眼系霊長種の緒方三ツ葉です。

さて、学校を閉鎖してもう一週間近く経ちました。ラジオDJのツジラさんからのお返事によると、第二回目の舞台は是非とも我が校にしたいという事でした。

また私は、協力者への敬意を示すためツジラさん達に多額の報酬をご用意し、事件解決に失敗したとしても保険として多額のお金を差し上げようと考えていました。

バグテイルさんからのお返事にはその件についても触れられていましたがしかし、何と彼は「事件失敗に際してお金はお受け取りできません」と言ってきたのでした。

私は驚くと共に、この人は何と人格の優れた人なのかと誤ってしまいました。

サービス業に於いて重要な事の一つには、業者と顧客との信頼関係が含まれます。

業者は顧客からの報酬を代価に、報酬に見合う、若しくは報酬以上のサービスを全力で提供する。

それが普通である事は、読者の皆様もよくご存じの所だと思います。

しかし世界に絶対的な法則など存在し得ず、あらゆる存在・原理・現象には何らかの形で例外が存在します。

例えばヤムタの慣用句には、『打ち水、杓に戻らず』というものがあります。

打ち水とはヤムタに古くから伝わる風習で、敷地や路面に水を撒き路面の塵が舞い上がるのを防いだり、気温の高い季節は気化熱を利

用して涼気を取る目的でも行われます。

またこの時に撒かれる水の事も指し示しており、この慣用句の場合は此方の意味合いでしょう。

杓とは液体を掬う道具の事で、こちらも古来ヤムタに伝わる伝統的な工芸品の一つです。打ち水に用いられることもあったでしょう。

この慣用句を私なりに解釈すると、「打ち水の為、杓で撒かれた水を再び掬い取って杓に戻すことは出来ない」という意味であり、即ち「一度起きてしまった物事は元に戻せない」という事柄を意味しているのです。

この慣用句、確かに意味そのものは的確でしょう。先人の残したものは、何者にも代え難い価値を持つのが世の常です。

しかしながら私は二年前、我が校を卒業後列甲へ進んだとある男子学生の書いた本にあった一説を見て、驚き呆れると共に感心してしまったのです。

彼は本にこう書いていました。

『極端な思考に押し負けて諦めるな。

打ち水が杓に帰らないと割り切るな。打ち水だって無重力空間でなら杓に戻るし、そんな事をしなくても撒いた部分から上がる水蒸気を集めれば理論上は杓に戻せる。

鳥からは鳥しか生まれないと割り切るな。遺伝子操作の技術を駆使すれば、鳥に鼠や蛇を産ませることだって出来る。

無い刃は届かないと割り切るな。無い刃は量子力学の分野で見れば「届かない」という確率が高いだけだ。

諦めようとするな。慣用句に対してもそこまで捻くれたものの見方をして、揚げ足を取るのが科学という学問なんだ』

本分は長いので要約しましたが、大体こんな事を書いていたように思います。

中々凄いことを書くでしょう？でも確かに、彼の書いたことも間違いないんです。

つまり世の中には必ず、何らかの形で例外が存在する。

でも世の中に存在する例外は、必ずしも良いものばかりだとも限らないんです。

サービス業者の中には、言葉巧みに顧客から多額の報酬を持ち逃げするような、道を踏み外した者も存在します。

私は最初、心の何処かで、ツジラさんもそんな「道を踏み外した者」だと思っってしまった。

だから、彼に強力を仰ぐ事に反対した中には「騙されるかもしれない」と主張した方も居ました。

でも実際の所、彼からの返事を見た私は、彼がそれほど卑劣な人物ではないと、そんな風に思ったのでした。

―前回より―

そして私は今日、彼―ツジラさん―に呼び出され、東ゾイロスが誇る人気ファミリーレストラン『NYAN BEY』で待ち合わせ中なのです。

注文は今のところドリンクバーのみ。長い人生で久々にコーラの味を再認識しましたが、まさかこれほどに美味しいものとは……。

そろそろ何か食べる物を頼もうかと思っていた時、ふと私の目の前に大きな赤い虫が現れました。

外殻種（禽獣種や羽毛種、有鱗種の節足動物版と思って下さい）の方でしょうか？

禽獣種等の方々と違い、外殻種の中にはヒューマノイド型を乖離し

た形態の方が居られます。面白いですよ。

外殻種の方（と、思っておきます）は私の向かい側の椅子に降り立つと、私に向き直って言いました。

「失礼、私立東ゾイロス高等学校理事長の……」

「緒方三ツ葉ですが」

「良かった……。お初にお目に掛かります。私、かの方からの使いとして参りました。

三型茂虫系外殻種のクリムゾンと申します」

「かの方……？」

「貴女がお便りを出した、あの方で御座います。一応、我等の会話は部外者に対してごく普通の世間話となるよう魔術を施しましたが、それでも用心に超したことは無いでしょう」

「確かにそうですね。それで、彼は何故私を呼び出したのです？」

「はい。実はですね、かの方は生放送のため、現場に収録スタジオを設けなければならないのですが……」

「それは承知ですが、何か問題でも？」

「ええ。今回は事前に現場の建造物に関する情報を得ることが出来たのですが、それは相手が王家の侍従であつたからこそです。

ジウルノブル城は半ば観光地であり、ノモシアの庶民は元々表裏が無く寛容でありますから……しかしながら、ラビーレマともなればそうも行きますまい？

失礼ながら『追い詰められたラビーレマの民は己の為ならば権利も誇りもあつさりとかなく捨てる』と聞いております」

クリムゾン氏の言及したラビーレマの民族性は的確の一言でした。

「いえいえ、全く持つてその通りですからご心配なさらず」

「左様で……そして更にまたこうも聞きました。

『ラビーレマの民は趣味趣向に於いて共通する者や、自らに友好的

である者は決して裏切らず生涯全力を以て愛し続ける。

その反面、自らを阻害する者や、敵対的であったり、悪意を以て接しようとする者は徹底的に忌み嫌う。

しかし原則として無用な争いを望まず、それ故に進んで争いを仕掛けたり、破滅させようとする事は極力しない』と」

「確かにその通りですね。現にラビレマで起こったいじめ行為の加害者は総じて、性格面に於いては他大陸出身者に近いことが明らかにされていますし」

「そうでしょうか？ですからして、かの方は収録場所の下見に自ら現地に赴くことを躊躇っておられます。

お便りによれば、かの方への協力要請を出すという案が出た時、賛成派と反対派による対立が起こったというではありませんか」

「全く持つて仰有るとおりです」

「『ともなれば、現地へ赴いての情報収集や下見は徒労』」

かの方の出した結論に御座います。

何より今回の敵は校内に潜伏している。つまりあなた方を監視しているとも、考えられるわけです」

「……！」

思わず言葉を失いましたが、気を取り直して精一杯言葉を紡ぎます。

「お恥ずかしながら、盲点でした」

「いえいえ、恥ずべき事ではありません」

「それで、私に何をせよと？」

「単刀直入に言いますと、今からお渡しするデータに従い、我々に校内の見取り図と各所の特徴に関するデータを提供して頂きたいのです。

無論、提供して頂いたデータは公表せず、回収次第此方で破棄します」

こうなったら決意を固めるしか在りません。

私は彼の言葉に従い、ツジラさんにデータを提供する事を決意しました。

第二十六話 謙虚理事長と喋る葉虫（後書き）

繁の部下であるという外殻種・クリムゾン。
次回、彼の驚くべき（？）正体が明らかに！

第二十七話 虫も魔術も使いよう（前書き）

前回、繁からの使者として緒方理事長との交渉を行った口達者な外殻種・クリムゾン。

しかし、その正体は・・・？

第二十七話 虫も魔術も使いよう

―前回より―

「よくやったぞクリムゾン……お前は優秀だ」

ラビールレマ近所にあるビジネスホテルの一室にて、繁は一抱えほどもある巨大な赤い甲虫―クリムゾンと名付けた雄にそう語りかける。机の上には香織の私物である小型ノートパソコンが展開されており、画面には東ゾイロス高等学校の詳細な見取り図が映し出されている。ちなみにこのクリムゾンと名付けられた何とも巨大な甲虫は正式名称を「チロハムシ」といい、体内に脊椎を発達させるという独自の進化によって昆虫種の域を超えた巨大化を実現させた「脊椎節足動物亜門」に属する生物の一つである。

「しかしクリムゾン以上に優秀なのは、やっぱりお前だよなあ……香織」

「そうかな？ 繁が捕まえてきたその虫居てこそだと思っただけど」
「謙遜するな。お前の覚えた古式特級魔術二つ……動物を操る『ジュルネ・バルバトス』と生物の記憶を複製・搾取して記録する『ソワール・シャックス』が無ければ、今回の作戦は成り立たなかった。あと一般系の会話偽装魔術もな」

「確かにそうだけども、クリムゾンの操作は繁がやったんでしょ？」
「まーな。だが今になって考えるとアレも中々グダグダだったような気がするきた……」

「何にせよ、これで動き方には困らないね。タセツクモスの刻印は弾頭の出入り口としても使えるし、この分だと二階の廊下とか良いかも」

「うし、んじゃ早速台本を作るぞ。リクエスト以外にも色々な投稿

が寄せられてるからな。

音楽のリクエストも来てるから音源を確保せにやならん」

こうしてツジラジ第二回に向けた会議が開始された。

―同時刻・外部―

「予想的中…… ツジラー一味が我々を狩りに来る事は確定的だったようですね……」

ホテルの屋根の上から特殊な器具を突き立て、内部の音声を聞き取っていたのは、あの黒スーツの女であった。

「しかしノイズが酷い…… やはりあの青色薬剤師、低級でこそありますが盗聴防止用魔術を施していますね……」。

ホームセンターで買ってきた材料で作った総額二千円の盗聴器ではやはり限界がありましたか……。

ともあれ、彼らが校舎内にスタジオを設置する事は判りました。

これでMr・クエイン、Ms・アスリンを守る手立てはある程度確保出来るでしょう……。

これでこの小樽兄妹を臣下と認めてくれた彼らに、漸く本格的な恩返しが出来るといふものです……。

ねえ、兄様。そうでしょう?」

等と女―小樽が左肩へ語りかけると、スーツの布地をすり抜けるようにして若い男の頭が現れた。

顔つきや瞳の色は小樽と似ており、頭髮も小樽と同じ緑色をしていた。

「ええ、そうですよ桃李…… 我々は遂に、本当の意味で恩を返すこ

とが出来るのです……」

男の頭はそう言い残すと、ゆっくりと小樽の体内へ引っ込んだ。

―その日の晩・ある一室―

「即ち……遅くとも本日より一週間以内に、我々の元へツジラ一味が攻めてくるでしょう」

外部で捕獲してきた祭品―クエインやアスリンが『戯事』と呼ぶ一方的な性行為に際しこの相手となる15歳以上の男女―の山の傍らに跪いた小樽桃李は、主であるクエインに事を報告した。

「そうですね……聞けばツジラ一味の一人・青色薬剤師は古式特級魔術を用いる手練れと聞きます。」

並大抵の者は許可しない限り発見すら不可能なこの空間魔術……しかし古式特級魔術の使い手ともなれば容易に破るでしょう。

そうなれば戯事や祭品についての情報は漏洩し、我々は公に知られ、クブス派の栄光どころか存在そのものが危うくなりかねない……」

「無論、そんな事はさせません。Mr・クエインやMs・アスリンは私共が御守り致します」

「何を言うのです、小樽さん。貴女一人だけを戦わせるなんて出来ませんよ。」

この戦い、私には参加する義務がある。何か異論はありますか？」

「いえ、全くありません。Mrのご協力あらば、ツジラ一味相手撃退程度どうという事は無いでしょう」

「そうです。我々が力を合わせれば、幾らツジラ一味とて一溜まりもありません。」

さて、それでどのように――「待つて、クエイン」

クエインの言葉は唐突に、背後へ現れた禽獣種の女によって遮られ

た。

「おや、ラクラ？どうしたのです？

今日はやけに起きるのが早いですねえ」

「変な気がしたから、早く起きたの」

「そうですか…変な気が……。

（流石はラクラ。禽獣種の勘は侮れませんねエ。）

しかし、大丈夫ですよ。心配なんて無用です。

今小樽さんと話していた案件なんて、大したことでは無いのですから」

こうして適当にはぐらかしておけば、何時も通りなら彼女は折れてくれる。

そう考えていたクエインだったが、

「嘘」

「はっ？」

現実はその都合良く進まなかった。

「大したこと無いなんて、嘘。ラクラ判る。

クエインもトリーも、もしかしたら死んじやうかも知れない。そうでしょ？」

「……まあ、そうですね。万に一つの確率で、我々は死ぬかも知れません」

「ただ、確率は確率ですから、無論生き残る可能性だってあります。仮に私が死ぬことになったとしても、貴女達は何が何でも守り抜きます」

「最悪の場合にはラクラ、貴女だけでも逃げ延びなさい。

貴女さえ生き残る事が出来たなら、クブス派にはまだ栄光を掴む権利が——「やだ」

クエインの言葉は、ラクラによって悉く遮られる。

「な、何を言い出すのですかラクラ！

クブス派の女性がどれだけ崇高な存在か、貴女にはその自覚がはつきりと在るはずですよ！？」

「それでもやだ。ラクラ、ひとりぼっちきらい。

クエインもトーリも居ないのに、クブスを取り戻したって、なんにもたのしくなんかない」

「しかしですね……」

「おわりはみんないっしょ。みんないなきゃ、だめだから。

だから、ラクラも戦う。みんなでツジラー味を倒して、クブスを取り戻したい」

「そうですか……Msがそう仰有るのですしたら私は別に構いませんが、Mrはどう思われますか？」

話を振られたクエインは、少々考え込み答えを出す。

「……仕方ありませんね。こうなれば三人でツジラー味を迎え撃つとしましょうか」

第二十七話 虫も魔術も使いよう(後書き)

次回、本格的に戦闘開始か!?

第二十八話 彼女と毒物と権威主義社会の愚者達（前書き）

戦闘開始の前にちょっと一休み。小樽兄妹の過去話をどうぞ

第二十八話 彼女と毒物と権威主義社会の愚者達

今でこそ六大大陸で最も住み心地がよいとされるラビーレマですが、一昔前は他の大陸と相違ない程に荒れた大陸でもありました。

というのは、原初より学術が主流であるラビーレマも昔は権威主義の名の下に、多数派や親の代から力を持った人々が優遇される傾向にあったからです。

その上今と違って排他的な思想で唯我独尊を地で行くような政治体制だったため他の大陸とも仲が悪く、特に魔術至上主義で代々指導者の気が荒い傾向にあったノモシアとの関係は最悪の一言でした。

そしてそんな時代柄の中、その二人は生まれてしまったのです。

――

権威主義が主流であった当時のラビーレマに住まう科学者にしては珍しく温厚な性格だった小樽夫妻はある時、双子を身ごもりました。しかもその双子というのは珍しいことに、一卵性にして男女の兄弟だったのです。

通常、何から何まで同じである一卵性双生児は同じ性別で産まれてくるのが常であり、理論上その性別が異なると言うことは有り得ない筈なのですが、希にある例外に引っかけたようでした。

ただ、双子には少々問題がありました。

というのも、双子というのは母体内で背中合わせに育っており、二人の左腕と右脚とは歪に結合していたのです。

これは現実には結合双生児とかシヤム双生児とか呼ばれている双生児の事で、決してフィクションに限った出来事などではなく、発生率は5万分の一から20万分の一程と言われます。

生後の生存率は低く日常生活も困難ですが、夫妻は男児に羽辰、女に桃李と名付け、出産を待ちました。

特に妻の決意は凄まじく、夫は病弱な妻を労り中絶も考えましたが、妻の覚悟を知ってからにはそんな事など考えなくなっていました。

そして時は巡り、待ち望まれた出産の時。

帝王切開で産まれた双子の羽辰と桃李。駄目もとの上最悪死を覚悟した末の出産でしたが、子供は産まれ妻も無事生存。

誰もが喜びに沸き立ち、小樽家を祝福する―――筈でした。

しかし現実とは、全く予期していないときに酷いことをしたりします。

そのまま元気に産声を上げるかと思われた桃李と羽辰でしたが、桃李が産声を上げた途端、突然羽辰の身体が灰になり、桃李の左腕と右脚は最初から存在しなかったが如くに消滅してしまいました。

その場の誰もが悲鳴を上げ取り乱す中、立て続けに二人を産んだ妻までもが徐々に弱り始め、入院中に息を引き取ってしまいました。

この件については今も学会で論争が続いているようですが、誰もが納得できる説は未だ出ていません。

生き残った夫は妻と息子の死を乗り越え、一人になったとしても必ず娘を育ててみせると決意しました。

しかしそんな夫もまた、不慮の交通事故により死んでしまいました。独りぼっちになった桃李は父親の姉である富豪の未亡人に引き取られました。

桃李には最新鋭の義手と義足、そして出身地でも選りすぐりの教育機関でトップクラスの教育を受けられる権利が与えられました。

桃李はそこで多くのことを学ぶ内、科学へ興味を持つようになっていました。

桃李が特に生物学や化学に興味を持っていた周囲の人々は、彼女をその当時ラビーレマで最も研究が盛んだった遺伝学や薬学の道へ進む事に期待していました。

しかしその頃の桃李は既に、遺伝学や薬学などよりもっと好きな分野を定めていました。

それは「毒」の研究でした。

特に生き物が持つ毒に興味を持った桃李は、色々な動物や植物、更には細菌の持つ毒など、色々な毒の研究に興味を持ちました。

勿論桃李は生き物に由来しない毒にも興味を示し、色々な毒の研究についての学術書や論文を読んだりしました。

家族同然の伯母や従兄弟達、親しくしていた学校の先生はこれを評価してくれましたが、身の回りの人すべてがそうとは限りません。現に同級生の殆どは、桃李を嫌っていました。

何故なら、血統書つきのトイ・プードルよりヤドクガエルを可愛いと言うからです。

何故なら、大陸を超えた人気のアイドルグループよりクサリヘビを美しいと言うからです。

何故なら、人気の男優よりも大きなサソリの方が格好いいと言うからです。

そして桃李を嫌う同級生達は、同時に彼女を恐れても居ました。

その理由は主に彼女の左腕と右脚にありました。

合金と樹脂で作られた最新鋭の義肢である彼女のそれは、謎めいた技術により桃李の成長に伴ってサイズを変え、先端に鉤や吸盤のつ

いたワイヤーを射出したり、一瞬で文房具や調理器具に姿を変えたりするからです。

またそういった同級生の実家は、遺伝学や医学などその頃のラビ―レマで普通とされていた分野を専攻する人ばかりでした。

産まれながらにエリートとして育てられていた同級生達は、自分よりも優れた才能を持つ桃李に嫉妬し、同時に自分達と相容れない存在である桃李を忌み嫌ってもいたのです。

しかしそういった同級生達は、年月を経る毎に様々な理由で桃李の周囲から消えていきました。

そして大学生になった桃李は、差別を受けるでもなく平和な日々を送っていました。

優しくかった伯母は亡くなり、従姉妹達とも音信不通でしたが、桃李は平穏な日常に満足していました。

しかし桃李は大学生活を送る中で、再び知ってしまいます。

世の中というのは、『普通』が正義であり『異質』は悪なのだ と。

毒について研究したいと思う自分の考えは、所詮差別され爪弾きにされてしまうようなものなのだと、覚ってしまったのです。

そしてまた桃李には、別の危機も迫っていました。

亡くなった伯母の遺産を狙う親戚から、相次いで執拗な攻撃を受けるようになっていたのです。

連日自宅の郵便受けには剃刀の刃を入れた封筒が届き、町中で在らぬ言い掛かりで大勢から追い回され、時には実験中に燃え盛る油が迫ってきたり、フィールドワークの最中野生の四足竜が襲い掛かっ

てきたこともありました。

そして親戚からの攻撃が過激になった頃、桃李の夢に奇妙な男が現れました。

その人は細くて背が高く、瞳や髪の色は桃李そっくりでした。

男は言いました。

「やっと会えましたね、桃李」

しかし桃李は男の事なんて一切知らなかったので、一体何者が聞きました。

すると男は驚くべき事に、桃李が産まれた時に死んでしまった兄羽辰を名乗ったのです。

何でも羽辰が死んだのは、肉体を消滅させて幽霊のような存在として桃李の体内に潜み、内側から彼女を支え続ける為だったということです。

最初は混乱していた桃李も、考えの末に兄を受け入れる覚悟を決めました。

それからというもの、羽辰は妹の危機に乗じて体内から部分的に姿を現し、霊体と生命の中間的存在として桃李を助け続けました。

そして三年生になった今年の春―ツジラジ第一回より少し前―、権威主義に嫌気の差した桃李は死を装って大学から姿を消し、偶然出会ったホリエサ・クエインに見初められ、彼の臣下として東ゾイロス高等学校での活動を開始します。

人から精気を吸ってその力を高める力を代々受け継ぐ他種族派閥・クブス派最後の生き残りである二人に桃李が協力する理由は不明です。

しかしながら彼女の動向の根底には、政権交代によって成し得た民

主主義的自由社会の中にあつて未だ一部で猛威をを振るう権威主義
に対する敵愾心があることだけは、確かなのです。

第二十八話 彼女と毒物と権威主義社会の愚者達（後書き）

ハブられるって辛いけど、でもアイデンティティを捨てるのはもっと辛いよね。

第二十九話 私立校列王記 - Aberration In The School

ツジラジ、放送開始！

―前々回より・午前10時程―

『セエーのツツ―』

『ツジラジっ!』

繁と香織の元気な声が、六大陸の主要な国家全域に流れ込む。

それと同時に、第一回とは違った音楽が流れ出す。

―錆色の空 苦境に悶え

―やがて人は 欲に目覚め

―私利私欲 夢 快楽の為

―満足だけ目指し 動き出す

『はい、そんなこんなで始まってしまいましたツジラジ第二回っ! 相変わらずの電波ジャックですが張り切っていきましょう。司会の青色薬剤師です』

『予想外のお便りの数に圧倒されつつピザトースト片手に徹夜で作業してたら口内炎になりました。司会のツジラ・バグテイルです。』

ん……で、この番組の概要は……もう説明しなくても良いか。

企画が生中継になったくらいだし』

『いや説明しようよ。パーソナリティだよ?』

『つつかそもそもこの番組、明確な概要なんてモンがそもそも無えじゃん』

『それはそうだけど……そういえば今流れてるこの曲は何?』

『よくぞ聞いてくれた。コイツは現在全大陸でTVアニメ版が好評

放送中の「増殖探偵丸斗恵」のOVA版最新作「悪鬼編」オープニング主題歌「Arrival To Ruin」だ」

『「悪鬼編」と言えば、原作の中でも五本の指に入るくらいの人気ストーリーだね？』

「中世編」に隠された謎が次々と明らかになったり、「戦国編」の人気キャラクターが再登場したり……」

『そうだ。続く「混沌編」への伏線も多く、アニメ未登場の人気キャラクター・ダイノヒウスも登場する。原作・アニメファン共々注目しておいて損はないぞ！』

ちなみに原作小説は全40巻で一冊510円、アニメ版DVDも続々リリース中。

DVD最新七巻の予約限定版には原作者と制作スタッフ・キャスト達との対談を収録したブックレットが付属するぜ！』

『凄く豪華！』

『だろ？まさしく全ての増殖探偵ファンに贈る仕様と言って差し支えねえぜ！』

さて、フリートークも程々に続いて番組に届いたお便りの方、紹介していきたいと思います！』

『はい、どんどん参りましょう』

等と楽しげに進んでいくラジオだったが、一方各大陸では別方向での騒ぎが巻き起こっていた。

というのも、「指名手配犯なんだから今更どうと言うことはない」という無茶苦茶な理由の為に、繁はアニメの歌や情報を当然無許可で流していた。

この事が災いし、出版社やアニメ制作会社、音楽会社など『増殖探偵』に関する各企業は総じてマスゴミ共からツジラ・バグテイルとの関係に関して暴動同然の質問攻めに逢っていた。

作者であるアクサノ出身の地竜種（禽獣種・羽毛種・有鱗種等の恐

竜版と言える種族）・NISECO氏も同じような状況であり、自宅に押し付けてきた近隣住民を家族ぐるみで巻いた上で、続いてネット上での騒動鎮圧に向かっていた。

しかし一方で、ツジラジで名が知れた事もあって、各通販サイトでは主題歌CDや映像作品のソフト、原作本を中心に『増殖探偵』の関連商品が急に売れ出した。

社会現象と呼ぶほどでは無かったにせよ、翌日から六大陸各地の書店では『増殖探偵』を初めとするNISECO作品の特設コーナーが作られるに至った。

『では先ず最初に、ラビレマにお住まいのラジオネーム・兎田ピヨンさん。11歳の方から』

『11歳？若いねえ！』

『広い年齢層に受け入れられる番組という事だろうよ。』

さて、「ツジラさん、青色薬剤師さん初めまして。」

『はい、初めまして』

『「先日献立表に『発作』と書いてあったので一体何事かと思っていたら、ヤムタ産の果物・ハツサクでした。こういう場合、どう突っ込めば良いでしょうか？」という事なんですが』

『それはアレだね。あの人だよホラ、声優の近野香奈恵さん。』

あの人ラジオ番組で「猛る者」と書いて「モサ」って読むのを「モウジャ」って読んだりするような、アレに近いよね』

『何か近しいものを感じるな。』

と言う訳で兎田ピヨンさん、そういった場合には無理に突っ込まず、運命に身を任せると良いと思います。

さてさて、続いてのお使い』

番組はスラスラと進行していき、五通の頼りを詠み上げた所で、遂

に企画のコーナーに入る。

『ハイ！そういう訳で御座いまして。 お便り紹介も程々に、遅ればせながら本日のゲストの方ご紹介して行きましょう！』

『第一回に続き、この方が来て下さいました！元医学博士のニコラ・フォックスさんです！』

『はいどうも皆さん今日は。ぶっちゃけ無職のニコラ・フォックスです』

『いやあ、よく来てくれたなニコラよ』

『いやいや、呼んでくれて有り難うと言わせてよ。あと折角呼んでくれたのに遅れてご免』

『気にしないで。そりゃ昨日あんなに遅くまで騒いだんだもん。遅れたって仕方ないよ』

その後ツジラは、昨日青色薬剤師とニコラの三人で集まり宴会を開いた事を明かした。

無論これは捏造であり、繁自身の無意味な遊び心によるものであった。

『さて、メンバーも揃った所で今回のメイン企画行ってみましょう。青色、今回の収録場所を説明してくれるか？』

『はいはい。今回の収録場所は、ラビーレマ首都圏東部にある、とある私立高等学校です。』

今回私達は、ラジオネーム「生まれたての」さんからのお便り「校内に潜む謎の殺人犯を捕まえて欲しい」との依頼を受けました』

『被害者は主に生徒の皆さんで、総じて全裸に剥かれ干涸らびていたとの事。』

この事から番組では犯人を霊長種・神性種以外として推定。対応する作戦の立案に努めました』

『無論、ゲストのニコラさん込みで』

『そして私達三人が考えた企画タイトルはーッ！』

ッバァン！

『『『『ラビーレマ死闘編』学校でラジオ番組と殺人鬼が死闘過ぎる』ッ！』』』

そのタイトルと共に動き始めた三人。

そしてそれと時を同じくして、学校に身を潜めていた三人も動き出す。

第二十九話 私立校列王記 - A b e r r a t i o n I n T h e S c h o o l

『増殖探偵』シリーズが気になる方はpixivにて、我が親愛なる同志・腹筋崩壊参謀氏の名をユーザー検索にかけてみましょう。

第三十話 兄と私は共生中（前書き）

戦闘開始！ 繁VS桃李！

第三十話 兄と私は共生中

―前々回より・校内―

ふとした事から遭遇した繁と桃李の交戦は、お互い一步も譲らぬ俤に長引いていた。

「熱流！」

桃李の手元から放たれる炎は流水のように床面を這い回り、繁を追尾する。

「ヘアッ！」

それを繁は奇怪なステップで回避し、そのまま飛び掛かって鉤爪で斬り掛かる。

しかしその攻撃は桃李の右腕によって防がれてしまった。

「ッ！？」

まるで堅い口ウソクを斬っているような感覚に陥る繁。

まさかこいつの腕が口ウな訳は無かろうと思いつながら鉤爪を引き抜こうとするが、中途半端に柔らかい為刃が食い込んでしまい、脱する事が出来ない。

繁が一瞬手間取ったその隙を突き、桃李の腹から羽辰の左脚が飛び出して、繁の腹に突くような蹴りを入れる。

繁はどうにか桃李の右腕から刃を抜き取り、彼女の身体を踏み台にして後方へ跳ぶ事で衝撃を緩和しようとする。

しかしその作戦は思うように行かず、結果的に繁はかなり遠くへ吹き飛ばされてしまった。

「グがッ！？」

バトルものの漫画にあるような『壁に激突して亀裂が入る』程の威力では無かったにせよ、繁にとってその蹴りは若干の深手となった。

「（何だっただんだ昨期の蹴りは……？

あの位置から出るなんて有り得ねえし、かと言って見間違いとも思えねえ……。

だがそうだとして、さっきのは何だ？物理法則を無視してた時点で学術ではねえだろうが……まさかESPの類じゃねえだろうな？

臭いから判る……コイツはジュールブルのバカ共やあの軍人達とは桁違いだ。別格だ。

つか、どうにも気分が妙だなーッ！」

ガギン！

考え込む繁の正面へ、炎を纏った桃李の拳が飛び込んできた。

「うおっ！？」

繁は咄嗟にそれを両の鉤爪でどうにか弾くが、火の粉に一瞬視界を奪われる。

その隙を突くように桃李の身体から再び羽辰の左脚が飛び出し、今度は繁へ踵落としを放つ。

しかし繁はその攻撃を直前で回避し、その勢いに任せて爪で羽辰の右脚を切り落とした。

「っっ！」

切り落とされた足首から先はゲーム画面に映った死骸のように消滅し、残りの部分も桃李の体内へ戻っていく。

桃李の左脚には鋭利な刃物で切断されたような激痛が走り、激痛の余りバランスを崩した彼女は着地に失敗。

対する繁は瞬時に体勢を立て直し、桃李の肩へ爪先を引っかけて掬い上げて宙へ浮かせ、そこへ両腕を上下から振りかぶって叩き込もうとする。

しかしその攻撃は、桃李の身体から飛び出た羽辰の両腕によって止

められてしまう。

それを好機と見た桃李は繁の股座を蹴り上げようとするが、咄嗟に繁が羽辰の両腕へ溶解液を放った事で状況は一転。

羽辰は両腕を引っ込め、激痛に耐えかねた桃李は思わず絶叫し廊下を転げ回る。

暫く転げ回った後、落ち着きを取り戻した桃李は繁に言う。

「貴方のその力……魔術や学術によるものではありませんね？」

「まあそうだな……だが、そりゃこっちの台詞だ。」

アンタの身体からチヨイチヨイ生えるその手足、それこそ並のブツじゃねえんだろ？」

「ええ、その通りですよ。しかし素晴らしい。」

貴方が初めてですよ。私と兄の連携に対してここまで対応してきたのは」

「……兄だと？」

「ええ……兄ですよ」

桃李の言葉と共に、桃李の背中から緑髪で長身痩躯の男がぬつと現れた。

「初めまして、私小樽桃李の兄で羽辰と申します」

「驚いたねえ……妹の肉体に寄生とは、どんな兄貴だ？」

「産まれて間もなく死ぬ事を覚った私は、自ら霊体と生物の中間的存在へと形を変え、妹を影から支えようと彼女の体内へと潜んだのです」

「それで定期的に姿を現しては妹を助けていると。確かに兄妹なら、感覚器官共有でも納得が行く。」

「ましてやその面構え、信じられねえがアンタ等……双子だろ？」

「その通りで御座います」

「性別の異なる双子か。架空の事象だと思ってたが、よもや拝見で

きる日が来ようとはな」

「お褒めに預かり光栄です」

「さして褒めたつもりも無えがな……」

そう言つて繁は両腕の鉤爪を再度展開し、小樽兄妹へと突進しようとした。

しかし

「ーッ！？何だ！？脚が、上がらねえッ！」

見れば、繁の長靴は靴底の辺りから正体不明の白い個体で塗り固められていた。

しかも足裏が妙に冷えている。

「何だコレあ？接着剤の類じゃ無さそうだが……」

「お手数ながら、暫くそこでじつとして下さいませんか。

他のお二人がどのような方かは存じ上げませんが、貴方は余りにも厄介すぎる。

やはり同胞ともなると、先天的な格の違いという奴を思い知らされますよ」

「同胞……やっぱリアンタ、ヴァーミンの——」

繁が話し掛けようとした時、桃李は既に姿を消していた。

「なんちゅー逃げ足だ……どっちが格上だ、ド畜生めが。

それにしても……この白い奴はロウか油だろうな。

それなら足裏が冷えんのも納得が行く……。

それに、確かにこの強度なら、ロウが溶けきるまで並大抵の奴は動けんだろう。

だが」

繁の手先から緑色の水滴が滴り落ちていく。

水滴は長靴の表面を伝って下へ下へと流れていき、冷え固まった口ウ状の物体だけを的確に溶かしていく。

「小樽桃李はしくじった。何故なら奴は、俺を並大抵の奴だと思い込んだからだ」

自身の能力により生成される溶解液を用いて白い口ウ状の物体だけを溶かした繁は、桃李を追って再び歩き出す。

「待つてろ主犯共。ヘッピリムシなりの戦い方って奴を見せてやら
ア」

第三十話 兄と私は共生中（後書き）

桃李はヴァーミンの有資格者だった！果たして彼女のヴァーミンとは！？

第三十一話 爆乳白兔娘（前書き）

お気に入り登録数30件突破を祝って（？）景気付けに（？）ニコ
ラVSラクラ！

第三十一話 爆乳白兔娘

―前回より・校内―

桃李と繁が激戦を繰り広げる一方で、ニコラもまたクエインの部下である兎系禽獣種のラクラ・アスリンと戦闘を繰り広げて――居なかった。

「待て！待て！待てえっ！きつね、逃げるなあっ！」

「今日日『待て逃げるな』は『逃げる待つな』のフリなんだよねえッ！」

そんな事も判らないとか、アンタ駄目ねえウサギちゃん！

巨乳・体操着・ブルマの三拍子揃ってまあ、只でさえ薄い本向けのナリだつてのに、教養も無いと来ちゃあ取るに足りないキモオタに掘られんのが関の山よ？」

長い長い廊下を逃げる狐ニッコラとそれを追う兎ラクラ。

動物種だけ見れば異様な光景であろうそれも、この二人ならばその違和感も消え失せる。

本来形態からも動物寄りのラクラは持久力・脚力共にニコラより優れている筈だったが、そんなラクラからニコラは華麗に逃げ続ける。

「うるさい！黙れ！黙れ黙れ黙れ！エロは正義！エロには何も敵わない！エロは絶対！」

「だああからさあつ、それが駄目だつてのよ。何で判らないかなあ？エロはあくまで調味料。主軸になる食材じゃないんだって……いや、主軸になるとこだつてあるにはあるけどさあ」

ニコラは立ち止まり、言う。

「アンタが今居る世界は、只の工口軸如きじゃ廻らないんだよねえ」
その言葉に腹を立てたラクラが一步前に踏み出した瞬間。彼女の足下に、奇妙な紋章が浮かび上がった。

「!？」

それは山吹色に光り輝く円陣で、中には毛羽立った書体で何やら不可解な記号が書かれていた。
そして次の瞬間、それと同様の紋章が廊下の壁面中に浮かび上がる。ラクラは目映い山吹の光に包まれ思わず目を覆った。

その三秒後、全ての紋章からラクラに向かって、件の蛾型弾幕が悉く降り注いだ。

「っがあああああああああっ！」

有り余る激痛に絶叫するラクラに、ニコラは軽々しく言い放つ。

「安心して良いよ。それは痛覚神経だけを的確に刺激するものであって、何発当たっても死にはしないから」

ニコラは苦痛の余り地面に倒れ伏すラクラの頭を、嘲るように軽く踏み付ける。

「いやあ、我ながら凄いわ。身体にや傷一つついてない……これもヴァーミンの有資格者の成せる技——「ふ、ざ、け、る、なあっ！」——「ぶべっ！」

ラクラは頭上に乗ったニコラの足に掴みかかり、痛みに耐えながら身体を捻って彼女を転倒させた。

続けざまに立ち上がったラクラは、ニコラの腰へ跨るとその後頭部を掴んで持ち上げ、凄まじい勢いで床面へ叩き付けた。

ゴツ！

しかもその回数は一回や二回などというものではなく、何十回にも渡った。

仮にニコラが並の禽獣種であつたならば、素早さとパワーを兼ね備えたラクラの打撃技を一発でも受けていれば既に死んでいても可笑しくはない。

しかし彼女は呪詛により不死の肉体を得たが故に、自らを何度も殺すという人体実験を繰り返した事で知られる元開業医のニコラ・フオックス。

この程度の攻撃で倒れる事など、有り得る筈が無いのだ。

しかしそんな事など知る由もないラクラは、床打撃に飽きたのか再生中のニコラを無理矢理立たせ、その顔面へ兎の脚力を生かした回転蹴りを叩き込む。

叩き飛ばされたニコラは木工教室の扉を突き破り、作業台に腹を叩き付けられる。

これを好機と見たラクラは更に執拗な攻撃を続行。

手始めに転がっていた角材を拾い上げると、それが折れるような勢いで背中を殴りつけ、更に長さ1mはあるつかという工業用大型ハンマーで作業台ごとニコラを叩き飛ばす。

更に落ちてきたニコラの右脚を掴み、教室中央の柱へ叩き付けた拳げ句、その腹を大型のドライバーで刺し貫いて壁に打ち付ける。

そしてとどめとばかりに作業台に固定されていた大型の万力を次々に引きちぎり、それを柱へ打ち付けられたニコラへと乱雑に投げつける。

「……これで……終わっ……た」

憎き相手を闇に葬り去った（と思い込んだ）ラクラは、思わず安堵し壁にもたれ掛かって座り込む。

激しい動きで疲弊しきっていたラクラの身体と意志とは、迷わず睡眠を選び取った。

しかし当然、彼女がこのままで済まされる筈はないのである。

頭蓋骨を潰され、背骨を叩き折られ、拳げ句ドライバーで串刺しにされて万力を投げつけられたニコラ。

その身体は既に原型を留めぬ程ボロボロであったが、全身の傷は時が経つにつれて徐々に塞がり、砕かれた骨や臓器は再構築され、更に呪詛の弊害によって衣類や所持品までもが修復されていく。

そして最後に腹からドライバーを排出し、四つ足で床面に降り立った所でニコラの再生は完了した。

「嘗て今まで、私が出会って来た中で」
木工室の壁にもたれ掛かって眠るラクラの前に歩み出たニコラは、言う。

「ここまで方向性でソリの合わない奴が居ただろうかと、つくづく思うわ。」

何をどうすればこうポンポンとまあ、淫乱になれるのかねえ。

常に男とやる事念頭に置いて、その為にエネルギーの殆どを注いで……いやあ、わけがわからんわ。

そもそも戦闘中に男子逆レイプとかその時点で意味不明だし、初対面の相手への第一声が『o・n k?』だもんで一瞬状況判断すつ飛

ばして飛び蹴りかましそうになったよ。

こうしてるとやっぱり思うのよねえ、金とセックスはある意味似てるんだって。

確かにどっちも必要だけど、最終目的に設定して良いほど大層なものじゃないし、そもそも本質はどっちもあくまで手段だし。

あと、知的生物が金とかセックスに溺れちゃいけないよねえやっぱり。

若い内からそんなものに溺れちゃったらもう、ほぼアウトの一手手前だよ」

そう言つてニコラは、並大抵の事では全く起きる気配のないラクラを殺すでもなく、縄と木材とその他諸々の道具を用いて作り上げた無駄に巧妙な仕掛けに組み込んで、そそくさとその場から立ち去った。

それから訳四分後、開脚状態で宙吊りにされたラクラの肛門へ角の削られた角材が突き挿さり、濁音の混ざった彼女の絶叫が校内に響き渡ったのは言うまでもない。

第三十一話 爆乳白兔娘（後書き）

みんな読んでくれて有り難う！

次回は香織とクエインのバトルだよ！ついでにクエインの正体も明らかになるよ！

第三十二話 S l i m e & a m p ; p h a r m a c i s t (前書き)

更新復帰！(でも以前のように毎日は無理かと思われ)

ひとまず香織VSクエインの魔術対決！

第三十二話 S l i m e & a m p ; P h a r m a c i s t

―前回より―

「いやぁ……お強いすなあ、清水さんは……」

「いえいえ……クエインさん程じゃありませんよ……」

講堂で妙に穏やかな雰囲気のまま語らい合う、二人の影。

一方は、深紅の長髪を棚引かせる霊長種の女・清水香織。

方やもう一方は、本件の首謀者であるホリエサ・クエイン。

「しかし驚きましたよ。まさか事件を引き起こしていたのが、クブス一派出身の流体種の方だったなんて。

失礼でしょうけど、流体種はともかくとして、クブス派なんてとつくに滅んでいたかと思っていましたから」

ホリエサ・クエインは、カタル・ティゾルに存在する知的生物の中でも特に風変わりな種族に属している。

流体種と呼ばれるそれは、その名の通り半個体状の肉体を持つ種族であり、一説には刺胞動物に近いとされる体組織の九割は水分で構築されている。

生活形態も多種多様であり、生涯水中で生活続ける者も居れば、クエインのように陸上で難なく活動できる者や、中には極地や乾燥帯に住まう変わり種も居るというのだから驚きである。

ただ全てに共通しているのは、身体が非常に柔軟であつたり、身体の至る所からエネルギーを摂取できるという事。

そして柔軟である反面、一部水棲種を除いては水分蒸発を防止するために薄くもそれなりに強靱な外皮が全身を覆い、体内には肉眼での目視が不可能な程に細密な神経系と軟骨の絡まり合った繊維が通

っているため、大がかりな変形は不可能であると言うことだろう。更に外皮・神経系・軟骨等は柔軟に伸び縮みし、損傷しても即座に再構築される。

この為、流体種を物理的な攻撃で殺害する事は殆ど不可能であるとされる。

そんな流体種の本質を担うのは脳を内包する小さな球状の頭蓋骨であり、各種神経と軟骨の行き着く場所である。

普段、感覚器官や発声器官が体外に露出している流体種であるが、有事ともなれば頭蓋骨に備わった臨時の感覚器官や発声器官を用いることもある。

その上時には肉体を捨て、頭蓋骨のみで活動する事もあるという（但し死の危険性が極めて高い）。

この為、理論上流体種を効率的に殺害するためには頭蓋骨を破壊してしまえばよい。

但しこの頭蓋骨というのはかなり強固であり、刃物や銃弾、高温や高圧力にも耐え、一時的にだがあらゆる上級魔術の影響を受けないという記録も存在する。

その上頭蓋骨は柔軟に伸び縮みする繊維組織と流体状の体組織によって体内を反射的に素早く動き回り、本人の意志とは無関係に危機を回避しようとする為、捕らえたり射抜く事さえも難しい。

現に香織も、先程からクエインを一撃で仕留めようと機会を伺ってこそ居たわけではあるが、狙いが全く定まらないというのが現状であった。

「世間には必ず例外というものがついて回るものです。そして例外は時に万人の思惑から外れ、あらゆる常識を破壊する。」

例外ありきの世の中だからこそ、私達は生き残ることが出来たのです」

「そうです、か。」

確かに私も、自分自身はそういった例外の一人であろうと自覚していますから、貴方の言葉には納得せざるを得ないように思います。

それで、事件についてですが……やはり祭品確保が目的ですか？」

「ええまあ、そんな所ですがしかし、それなりに惜しいですな」

「と、申されますと？」

「私達の最終目的は、祭品の確保ではない……という事です」

その言葉を耳にした香織は、一瞬身構える。

「まさか……」

「そう、恐らくはそのまさかです。」

私達の目的は、クブス一派の再興。

その為には上質な少年の精子と精気とを、母としての高い資質を持ったクブスの淑女に蓄えなければならないのです」

「やはり……という事は、居るんですね。貴方以外の、クブスが」

「ご名答。精子と精気の貯蓄量は既に満たされようとしています。」

故に、ここであなた方三人を始末した上で更なる回収作戦を続けられ、自ずと準備は整う筈だ。

あとは彼女が新たなる眷属を産み出し、あらゆる生物をクブスのもたらす甘美な快樂によって隷属し続けられ、一年足らずでカタル・ティゾルは我等クブス一派のものになるでしょう……。

そうなれば、あの忌々しい軟体動物の手に掛かり散っていった我等が同士達にも顔向けできるというもので――

ズドバァン！

クエインの言葉を遮るようにして、講堂の天井が一部巨大な四角錐に変形して彼の居た場所を指し貫いた。

「大した自信ですね、クエインさん……否『腐臭の肉塔王』ホリエサ・クエイン……」

「その名で呼ばないで頂けますか？私としましてはその異名……些か不愉快でしてね」

四角錐から退避していたクエインが、何処からともなく這い出つつ言った。

「最初からそう呼ばず、あくまで初対面の他人として敬語で接して差し上げただけでも有り難いと思って頂かなければ此方としても何とも言えませんねえ」

「まあ、割り切るしか無いでしょう」

清水香織とホリエサ・クエイン。

共に高い魔術的才能を持つて生まれ、あらゆる高等魔術を操るに至った二人の戦いが、再び始まるうとしていた。

とは言ってもこの二人の戦いは、繁と桃李のような「特殊技能に武装や奇策を織り交ぜフル活用する接近戦」ではないし、ニコラとラクラのような「ルール無用のぶつかり合い」でもない。

お互い魔術師である二人は己の知恵と術に全てを託し、可能な限り手早く相手を倒そうとする。

即ちそれはある種の「勝負」でもあったがしかし、彼らは騎士道や武士道のような気高き精神を持ち合わせているわけではない。

よってこの壮絶な勝負は、一方が投了を宣言したとしても終わる事は無いのである。

終了の基準は原則としてただ一つ、一方或いは両者の死亡のみである。

第三十二話 S l i m e & a m p . p h a r m a c i s t (後書き)

次回、クブス一派の実態が明らかに。

第三十三話 私が侍女を始末しますから貴方は感染症対策をお願いします（前書

待たせたか！？一週間ぶりの更新！

予告どおり、クブス一派の過去話だぜ！

第三十三話 私が侍女を始末しますから貴方は感染症対策をお願いします

嘗てケニーギ・スプリングフィールドが現代魔術の基礎を築くより遙か昔、カタル・ティゾルに一人の魔女が居た。

小夜子というその霊長種は実に美しい才女であり、あらゆる分野に通じていた。

しかし彼女は、その性分が災いして周囲からは快く思われていなかった。

というのも、小夜子は産まれながらにして酷く淫乱であったのだ。

温帯域の海にぽつりと突き出た岩の小島に建つ、古びた館に従者と二人で住まう彼女は、しばしば島に流れ着く漂流者を助けていた。しかし助けられた者は皆彼女の魔術に心身を侵され、性による快楽に執着する哀れで不毛な存在へと成り下がってしまうのが常であった。

はつきりした自我が保たれ正常なように見える者であっても、その内面は必ず性欲で染まっていたし、異常な性癖を植え付けられ人格を歪められてしまった者も居た。

このような哀れな者の末路というものは火を見るよりも明らかで、抑止の利かない欲故に見境無き強姦魔に成り下がる者など、総じて悲惨な末路を辿るばかりであった。

「快楽の権化」を自称する小夜子の魔手は人伝に大陸を超えて伝染し、それは同時に各大陸へ凶悪な感染症を媒介する事にも繋がった。

この事が災いし、報道機関や政府に該当するものが明確に備わっていなかった時代にありながら彼女の名は広く知れ渡る事となる。

そして感染症による怒りや憎悪に駆られた一握りの者は度々小夜子

の暗殺を試みたが、謎めいた尖耳種の従者・太刀川の持つ凄まじい力はそれを良しとしなかった。

しかしながらある時、この太刀川を巧みに打ち倒す強者^{ツラモノ}が現れた。男の名は黒沢健一。ノモシア辺境地の地方自治体に所属する中堅管理職である。

管理職とは言えどその戦闘能力は凄まじく、翼を持たない瘦躯の嘴^{ハシ}太鴉系羽毛種^{フトガラス}としての身体能力を生かした槍術と宮廷魔術師に匹敵する強力な魔術を織り交ぜた連携は、民間人らしからぬものであった。

学生時代は頭脳明晰な秀才として名を馳せた黒沢であったが、太刀川との戦いでは策も何も無い単純明快な戦術で勝利を勝ち取った。というのも彼は、総重量約1kgにも及ぶ諸装備を身に付けたまま沿岸部から島までの約3kmをクロールで泳いで渡ったのである。更に島へ上陸するや否や、館の周囲で無数の爆竹を鳴らし、様子を伺いに外へ飛び出てきた太刀川に恋文らしきもの（とは言っても内容は『五年前に貸した花澤・奈の写真集さつさと売ってこい。今ブレミアがついてて大変な事になってるから』という支離滅裂かつ意味不明なもの）を渡した上で決闘を申し込んだのであった。

結果として勝利を収めた黒沢の武勇伝はこの後、彼の部下であり格闘術の達人でもある手長猿系禽獣種・大喜多大志によって仲間内に広められ、以降一部で伝説として語り継がれたという。

（彼の仲間達はこの話を聞いて、最初大喜多の法螺とも思ったらしい。しかしながら同時に仲間達は、黒沢の臣下を自称し、彼の為ならば死も辞さない性格の大喜多に限ってそんな事を言うはずも無いと考え、話を信じることにした模様）

（また、大喜多の話を聞いた仲間達は、黒沢の彼らしからぬ戦いぶりを知って、仲間内のリーダー格である自称・禽獣種の男を思い浮かべたという）

（ちなみにその男、恋人らしい立場の蜘蛛系外殻種共々今も尚好評行方不明中である）

一方、臣下太刀川を殺された小夜子はというと、タッチの差で転移術を用いて黒沢の攻撃を館ごと回避

し、予め予定していた通り亜寒帯の辺境地に逃げ延びていた。

逃げ延びた先で小夜子は、魔術によって彼女の下僕となった者達に新たな術を施した。

下僕達は術の効果により、高い身体能力と魔術的才能、そして快樂を捨てなければ決して老いることのない肉体を得るに至った。

また彼らは欲を相手に気取られぬよう覆い隠す術を学び、鍛錬の末性行為によって相手の精気を吸い取り自らの魔力に変換する『夢魔式四十八手』という魔術と体術を併合した技法を習得した。

更に下僕達は同類と愛し合い繁殖を繰り返すようになっていた。下僕達の能力は世代交代の度に高まっていき、その類い希なる力を見た小夜子はこれを『クブス一派』と命名し、活動を開始する。

世界を犯し、自らの『血』を繋ぐ『種』を地に満ち溢れさせるという目的のために。

更に、クブス一派の力を以て『耐える事なき快樂に包まれた世界の中枢に立つ事』を夢見た小夜子は、呪術により自らの子宮を捨て不老不死の肉体を手に入れる。

その後、クブス一派は各大陸で影ながらに猛威を振るい続け、力を増す毎にその名もまた広まっていった。

そんなクブス一派の前にある時、総勢18名の風変わりな集団が現れた。

その集団というのは禽獣種や羽毛種等複数の種族によって構成され

る集団であり、『ラビーレマの飯屋がきっかけで集った烏合の衆』と名乗った。

最初小夜子はこの『烏合の衆』を、さして気にも留めていなかった。自ら烏合の衆と名乗る程卑屈なのだから、きつと己に自身のない弱者なのだろうと高を括っていたのである。

しかし、小夜子はその翌日『烏合の衆』の信じがたい力を目の当たりにする。

ノモシア東部に潜伏中だったクブス一派の者が皆、僅か半日の間に全滅したのである。

更に混乱する間もなく、小夜子の元へ次なる報せが舞い込んできた。その知らせによれば、ノモシア西部と北部に潜伏中だったクブス一派の一部が突如謎の光線によって変死したかと思うと、突如ゾンビのような姿となって残りの者を襲い始め、現地の部隊は瞬く間に全滅してしまったという。

この他、「突然壁に引きずり込まれた」「突如何かに怯えだし、わけもわからぬままに死んでしまった」「転がる度に肥大化する球体に押し潰されてしまった」等の報告が相次ぎ、六大陸に潜伏中だったクブス一派の関係者は悉く殺されていった。

小夜子は高を括った己自身を悔いたが、既に手遅れであった。

烏合の衆を名乗る集団の筆頭である烏賊軟体種の男はいつの間にか小夜子の私室に現れ、恐れおののく彼女の頭蓋骨を細い触手で叩き割って殺した。

因みに軟体種とは、禽獣種の水棲無脊椎動物版とでも言うべき種族である。但し形質の中に節足動物は含まれていない。

始祖である小夜子が殺害され、構成員もほぼ絶滅した事で、クブス一派は実質的に壊滅。

こうして人々の暮らしはまた、平和に戻っていった。因みにこの『クブス一派壊滅』が起こったのは、繁がカタル・テイゾルにやって来るより30年ほど前の事。

薬師の老婆トリロは最初の恋人であつた漁師の青年を小夜子によって奪われ、更に姉もまたクブス一派によって殺された為、クブス一派に対し激しい怨みを抱いていた。

そしてその怨恨は師から弟子へと受け継がれ、香織もまたクブス一派を凄まじく嫌っていた。

第三十三話 私が侍女を始末しますから貴方は感染症対策をお願いします（後書

次回以降、戦闘激化！

第三十四話 繁が何か主人公っぽい事に挑むそうですよ（前書き）

但し何をするのかは不明！

第三十四話 繁が何か主人公っぽい事に挑むそうですよ

―前々回より―

壮絶な魔術合戦は尚も続いていた。

香織とクエイン、赤と青とで対を成す二人はどちらも古式特級魔術を習得する程の達人でこそあったものの、この手の戦闘に用いられるような『攻撃魔術』についてはからっきしであった。

しかしだからといって相手に攻撃を行えないという訳ではなく、方や常軌を逸した変形を続ける建物で、方や宙に浮かぶ雑貨や瓦礫で、相手に執拗な攻撃を続けていく。

「封獄式、六角触腕柱！」

香織の放つ魔術により変形した床材と天井から細い六角形の棒が無数に伸び、クエインの中枢を貫かんとする。

「効かぬわ！チョーク・バレットオ！」

それを巧みに避けたクエインは、箱入りチョークを空中で碎いて再結合させ、それを散弾のようにして放つ。

散弾として放たれたチョークもまた香織操る不定型なテーブルによって防がれ、その脚が無数の鋭い針となってクエインに襲い掛かる。しかしその針もクエインは巧みに避け続け、体内に残った針は吐き出す序でに香織に放つ。

とまあ、ざっとこんな流れがもうかれこれ出会って以降一時間半以上も続いていた。

途中、多少ばかり長めの会話休憩（三十二話参照）を入れてこそ居

たものの、それでも戦闘時間が長い事に変わりは無かった。

そしてこんなに長い時間をかけていながら、未だに両者一步も譲らぬ拙戦が続いていた。

故に『どちらが有利か』と問われたと仮定しても、『一概に断定的な回答は出せそうに無い』という回答が精一杯とも言えば良いか。

兎も角二人の戦いには、よくある魔術師の持つ魔術そのものの『美しさ』だとか『健全な迫力』等というものはない。

よくある変身や召喚を行うにしても『幻想的』である以前に『暴力的』であり、また『ユーモラス』である以前に『ショッキング』である為、児童向けアニメや少年誌にはまず向かないような戦いが繰り広げられていた。

――一方その頃――

遙か上の階で戦っていたのは、繁と桃李であつた。

「アンタのヴァーミンの正体はともかくとしてその姿は何だあ!？」
突如姿が大幅に変貌――というより、全く別物とも言つべき姿になつた桃李に、繁は問う。

しかし、それに対する桃李の答えは実に暢気なもので

「ああ、これですか? まあ何というか、有資格者が己のアイデンティティを自覚し始めた際の姿とでも言つておきましようか」

「アイデンティティの自覚!? 曖昧過ぎんだろ!」

つつかお前、霊長種と見せかけて実は擬態してた外殻種でしたってオチか!? ああ!？」

珍しく取り乱す繁だったが、彼が取り乱すのには当然、明確な理由があつた。

というのも、現時点での桃李は『エメラルドグリーンのゴキブリ型ヒューマノイド』とでも言うべき姿を取っており、以前の面影が殆ど無いに等しかったからである（あって精々声と頭部の体毛程度）。

「まあ良い、アンタのヴァーミンの正体についての目星はついてんだ」

「ほお……では貴方は、私のヴァーミンの象徴と能力詳細についてどのようにお考えで？」

「その姿から見るに、象徴はゴキブリで間違いあるめえ。で、肝心の能力詳細だが……『温度』だろ？」

際限なく油っぽいのをどっから出すつても確かに能力だろうが、あくまでオマケ程度のモンでしかねえ。

その本質は物体の温度を自在に操作して、燃烧や凍結を引き起こすことにある。違うか？」

「……流石ですねえ、象徴は兎も角そこまで見抜くだなんて、やはり貴方は別格ですよ。」

私の『ヴァーミズ・シエースチ コックローチ』は、ゴキブリの象徴を持つ第六のヴァーミン。

厳密に言えばこの『ローチスリック』の量にはそれなりの制限がありますし、分泌も身体の一部に存在する油膜腺からしか生成出来ませんが、ほぼ正解と言って過言ではありません」

「ワイバーンや俺の足を止めたのも、その油か？」

「ええ。ローチスリックは高い可燃性を持つ一方、冷却して凝固させるとポリエチレンテレフタレートにも匹敵する強度を得るという、奇妙な性質を持っています」
「PETか、どうりで硬いわけだ。ワイバーンが抜け出せないのも頷ける」

「それを抜け出す貴方はどうなんでしょうねえ」

「気にしちゃ負けだ」

そう呟いた繁は、両腕を斜め下30度程に伸ばし、掌を背面に向け、

右膝を僅かに曲げた。

「……一体何を始めるんです？」

そんな桃李の問に、繁は軽々しく答える。

「さアて、何かねエ。ただ一つ判る事があるとすりゃあ、この構えはさっきアンタが取った奴を、俺流にアレンジした奴だつて事だ」

その時繁は、全身の血管が脈打つような感覚に襲われていた。

——一方その頃——

「ぎいやっはあああああ！何でこんな事になつてんのおおお！？」

学校などでしばしば見かける『廊下走るな』の掲示も無視して廊下を全力疾走するニコラ。

そんな彼女の後を追いつ回は、極太の木材で尻の穴を掘られ怒り狂うラクラーではなく、ニコラの身長の数倍以上程もある直径の、岩石球であつた。

「一体何なのよこれはっ！？」

何！？古典的な防犯装置！？古典的過ぎるわあっ！

一体何処の古代遺跡よ！？」

如何なる原因によつても死ぬ事の無い不老不死であるニコラであつたが、彼女の神経細胞はいつ何時とて正常に作用していた。

つまり彼女の体質は「死にさえしないが、痛みはしっかり感じる」という厄介なものである。

とは言え、『嘗て自身の身体で人体実験を行ったニコラが何故死を恐れるのか』等と疑問に思う方も居る事だろう。

確かにニコラは嘗て自身を用いた人体実験を、苦痛も含み存分に楽

しんでいた。

しかしながら彼女は、どういったわけか実験によるものでない苦痛を楽しめないのである。

これは彼女自身にとっても不明瞭な事柄であり、明確な答えは出せない。

しかし弁解の術は考えてあり、熟考しても答えが出ない場合『乙女心という奴だ』と答える事になっている。

『乙女心』とは、『女子力』『小悪魔系』等と並んでニコラにとって好ましくない単語である。

しかしながら、安易で軽々しい言葉なので弁解に使おうとも罪悪感などあつて無いが如しというものである。

かくしてニコラは時折『乙女心』『女子力』『小悪魔系』等の単語を使うのである。

さて、そうこうしている間にもニコラと岩石球との不毛な追走劇は続いていた。

「しかし本気で何なのよこの岩っ!？」

曲がり角減速無しに余裕で曲がるわ、上り坂だろうと平然と猛スピードで転がるわ、廊下に面した部屋に隠れても追つて来るわ、突っ込んで突っ込み切れないのよ!」

等と叫びながらもどうにか逃げ続けていたニコラであったが、ふと何かを踏ん付けて足が滑る。

「あっ」

ニコラがそれに気付くことも、最早状況は手遅れであった。

廊下に落ちていたパンの袋で大きく滑った彼女の身体は、忽ち岩石球によって潰され、そのまま張り付いてしまう。

結果としてニコラは、岩石球に張り付いた状態で再生しては潰され、また再生しては潰され、という悪夢の如し無限ループに陥ってしまった。

そしてそのまま、岩石球は転がり続ける。

行く先に何があるかと、決して止まりはしない。

第三十四話 繁が何か主人公っぽい事に挑むそうですよ（後書き）

次回、繁に新たな力が！

第三十五話 女神様の言うとおりっ！（前書き）

一方そのころ、ニコラの非道な畏にかかったニコラは…

第三十五話 女神様の言うとおりっ！

―前回より―

今の今まで自慰と騎乗位性交を主軸に、満たされることなき性的欲求の処理を行ってきたラクラには、肛門性交の経験などと言うものが一切無かった。

この事はクブス一派の教義に反するものでなく、感染症のリスク等もある程度軽減できる為、彼女にとっては都合がよかった。

しかし今回ばかりは、それが裏目に出てしまったようである。

自分の大便より太いものを通した事の無かった彼女の肛門にとって、角を削った角材はあまりにも太すぎた。

故に女性器では余裕に快楽と感じる刺激も肛門では激痛へと成り代わり、その痛みは彼女を気絶にまで追い込んでいたのである。

意識の飛ぶ中、彼女は謎の声により起こされる。

ラクラ、ラクラ。起きなさい。

「（ん……ここは……一体？）」

目覚めたラクラは、光り輝く幻想的な花畑に居た。

「ここは……まさか、天国？」

もしかしてラクラ、死んじゃった？」

立ち尽くすばかりのラクラ。

しかしそこへ、穏やかな女の声がラクラに優しく語りかける。

『ラクラ、ラクラ、漸く起きたのですね。辛かったでしょう？でももう大丈夫です』

「誰！？」

ラクラが振り向いた先に居たのは、肌の白い全裸の女だった。女は見たところ20〜30代程。

膝の間接まで伸びたピンク色のロングヘアはウェーブが掛かっており、その体つきは諸々に於いてラクラ以上に肉付きが良かった。というか、乳房が異様に肥大化している。

『私は性愛と快楽の女神パイオ・マンマン。

クブス一派が開祖・小夜子の甘美で気高き意思の象徴』

「女神……さま……？」

『ラクラ・アスリン、我が愛娘よ。

貴女はこの世にある他の何より尊く崇高なクブス一派の栄光が為に戦わねばなりません。

その戦いは辛く厳しいものとなるでしょう。

ですから私は、貴女に至高の力を授けます』

女神の言葉を受けたラクラが静かに頷く一方、他の面々は未だ戦場にあつた。

――蟲と虫――

スバアン！

唐突に繁の全身から解き放たれた衝撃波は、元々軽い小樽兄妹を軽々と吹き飛ばした。

「す……凄まじい力……無自覚初級者かつ見よう見まねとはいえ、これだけの威力とは……」

地面に倒れ付す桃李は、ふと衝撃波の根源に目をやる。

塵と土煙の舞う中にたたずむのは、当然我等が主人公・辻原繁……である筈なのだが、土煙が晴れるに従って現れたシルエットは、人を乖離した異様なものであるようだった。

完全に土煙が晴れ、露になったその姿を見て桃李は絶句する。しかし誰より驚いていたのは、他でもない繁自身であった。

「（何だこいつは……？
これが俺の、パワーアップって奴なのか？）」

見様見真似の上、何が起こるかも全く解らない状態で全身に力を入れてしまった繁は、桃李以上に人を離れた姿になっていた。

全体的なフォームこそ長身瘦躯な人間のそれであったものの、全身黒い外骨格に覆われ、手足も節足の様な形状であった。頭は滴型とも多角錐とも言える形状で、首と呼べるものはない。背には折り畳まれた翅が備わり、腹部側面からは細い節足が生えている。

そんな姿になった繁が驚きとある種の感動により立ち尽くしていると、桃李が言った。

「破殻化成功おめでとうございます。」

これで貴方も晴れて並の有資格者の仲間入りです」

「破殻化？この変身の事か？」

「はい。能力への順応が進行したヴァーミンの有資格者には、象徴

である生物種の力を最大限に活用する変身能力の使用が許可されるのです」

「それが、破殻化か」

「はい。『外殻を突破し新たな己へと変化する』という意味合いでしようね」

「そうか」

「しかし驚きましたよ。」

まさかこれ程早期に破殻化を達成する有資格者が居るとは」

「……何故俺の破殻化が早いと判った？」

「それは判りますよ。」

先程の貴方の動向や、私の破殻化を見た時の反応がまず素の驚愕でしたし、外皮の質感も違いましたし」

「質感まで見通すか。」

流石だ。兄妹揃って敵なのが惜しまれる。

お前が居れば良いラジオ番組が作れるだろうに」

「私達もそう思います。」

貴方と一緒になら、きっともっと大きくて面白い事が出来たでしょうに」

「まあ、出来ない事をあれこれと言っても空しいだけだ。

敵対しちゃった事を悔いつつ、最後までい派手に行こうじゃねえか」

「そうですね。今は出て来れませんが、兄もそう言ってます」

「んじゃ一丁、やっちゃまうかア」

桃李は背の翹で空へ舞い上がり、追う繁目掛けて炎の塊を放つ。

中枢に油を仕組んだメラミンスポンジの球体を据えたそれは、突風はおろか流水でも簡単には消せない火力を誇る。

しかし、それらが飛来するべき時、繁は既に姿を消していた。

「（何処へ消えた……？」

まさか、光学迷彩ッ！？それともまさか……）」

考えを巡らせる桃李に、内部から語りかける者が居た。
兄・羽辰である。

「（桃李、彼は上です！

天井にしがみついて、今にも飛び掛からんとしています！）」

「（上…？

…！）」

桃李が気付いた時、彼女の首は繁の腕四本に捕まっていた。

繁は空中で身体を巧みに高速回転させ、桃李を床に投げつける。

投げつけられた桃李は、立て続けに降り注ぐ溶解液を、凝固させた油の盾で受け流す。

当然盾は溶解液の前に成す術も無いが、桃李はそれを、流体力学の知識を生かした造形と裏側からの素早い補強で補い繁に対抗せんとする。

お互い譲って精々数歩という戦いが続くも、その終わりは当人達の意味とは無関係に訪れた。

桃李の身体を支えていた床が、盾を縁取るようにして丸ごとえぐられてしまったのである。

「！？」

（しまった！まさかこんな事になるなんて！）」

桃李はまたも出遅れた。

落ち行く床の上で天井を見上げれば、既に繁がドロップキックを放っている。

軽く硬い外骨格同士がぶつかり合い、桃李の下腹部に衝撃が走る。

そのまま二人は下の階まで落下していくが、事態はここで思わぬ方向へ進んで行く。

下の階の床に差し掛かる直前、突如横から凄まじい運動エネルギーを内包した物体が現れたかと思うと、二人を勢い良く跳ね飛ばしたのである。

二人を跳ね飛ばし、上の階の床材兼下の階の天井であつた建材の塊を打ち碎いた末に黒板へ激突し動きを止めた。

「いつてエ…一体何が起こつたつてんだ……？」

繁が辺りを見渡すと、そこは散々に散らかつた大教室であつた。しかもどういう訳か―否、訳そのものは分かっているのだ。兎に角魔術に伴つて発生する残り香がそこらじゅうから漂ってくる。

「いや冗談抜きで、何が何だつてんだ？」

繁はひとまず、隠れて様子を見ることにした。

第三十五話 女神様の言うとおりっ！（後書き）

遂に目覚めた繁の新たな力！

次回、戦いは思わぬ方向へこじれ始める！

第三十六話 有資格者達は象徴の生物に何処か似ている（だから何だ）（前書き）

分岐していた道筋が、今再び交わり合う！

第三十六話 有資格者達は象徴の生物に何処か似ている（だから何だ）

―前回より―

「「!？」」

それぞれ魔術によって召喚したサイスと双剣を掲げる香織とクエインによる鏢迫り合いは、突如割って入った巨大な何かによって中断されてしまった。

二人は一度大きく引き下がり、壁や天井に張り付いて相手の出方を見る。

二人は熟考する。

「（そういえばそうだった……東ゾイロス高等学校と言えば、創設者の趣味で校内に色々と罫が仕掛けてあるんだった……）」

「（見取り図によれば岩石球の罫は東側にしかなかったはず……今更増設したのかそれとも、見取り図に無い隠し罫なのか、あるいは私の入手した見取り図に見落としがあったのか……）」

「（何はともあれ岩石球は止まったみたい……）」

「（あの音、さては直進して黒板を砕いたな?）」

「（引つかかったのは繁かな?それともニコラさん?そうでなかったら残る敵二人のどっちかだけど……）」

「（正直な所、あの場の状況を確認したいのは山々だ）」

「（あの岩石球の確保は大きなアドバンテージになる）」

「（古式特級魔術『ジュルネ・デカラビア』……）」

「（もしくは『ソワール』の方が良いかも知れない）」

「（どちらにせよ、岩石球ついでに砕け散った黒板も確保出来れば良いが……）」

「（どうだろうと、頃合い見計らって動くしか無いっ！）」

「（それより何より重要なのは他の二人だ）」

「（始まって以降連絡取って無いし、そもそも状況からして連絡取れないし）」

「（数も力の内だ。とすれば二人との合流も考慮すべきだろう）」

「（でも今は）」

「（ひとまず）」

「（あの岩石球を確保して術を当てるのが最優先ッ！）」

二人はほぼ同時に飛び出し、空中を飛行するように岩石球へと向かう。

岩石球へと放たれた魔術は、全く同時に対象へ向かう。

根本の性質が同じ『ソワール』と『ジュルネ』の二つが対を成す様に存在する古式特級魔術。

その中の一つである『デカラビア』は、砂泥や岩石を操る効果を持つ。

しかしながら、対象外の物質には、単なる衝撃波にしかないのだが。

「むぎやひつ！」

「（（！？））」

ふと響く悲鳴の根源を見た二人は、硬直の余り落下した。

それもその筈、岩石球の正面で強風程度の衝撃波を受けていたのは、岩石球に轢かれたまま転がり続けていたニコラだったのである。

香織は思わずサイスを落とし、本能で危機を感じ取ったクエインはその場から逃げ延びる。

「ニ、ニコラさん！？」

「あれ？香織ちゃんじゃん。

何でここに？」

「それはこっちの台詞だよ。

まさかニコラさんが岩石トラップに便乗して助太刀に来てくれるなんて」

「いやあ、そんな格好の良い話じゃ無いんだけどね？」

「そうなの？」

「じゃあ一体何が？」

二人は繁捜しのついでに互いの近況を方向しあった。

「あの馬鹿兎がクブスだったとはね。」

どうりで三月ピンクにド淫乱全開なわけだわ」

「私や繁も薄々感づいてはいたんだけど、さっきの流体種が色々吐いてくれたおかげで確定的な情報を得られたよ」

「クブスねえ…悪い思い出しかないわ」

「大丈夫。私も悪い話しか聞いてない」

そんなこんなで二人の繁搜索は続く。

道中、香織とクエインによる魔術合戦（と、表現出来るかどうか曖昧な乱戦）の弊害で起こる天井や壁の崩壊に悩まされた。

時間経過と共に複雑さを増して行く大教室（何故これ程に巨大なのかと言う程に体積が広い）の中をさ迷うこと数分。

二人は積み重なった瓦礫の横を通りかかる。

一方の繁はというと、変身を解除して瓦礫の上で黄昏れていた。

「（さて、変身解除したら全裸とかそういう弊害が無いのは救いだ
が、これからどうする？

二人を探るか、それとも残りを潰しにかかるか……って、二人居た
じゃねえか）」

繁は瓦礫の山を下りながら、二人に呼び掛ける。

かくして『ツジラジ』スタッフ三名が揃い踏み形となり、彼らは再び諸々の事を報告しあった。

「成る程。やっぱりヴァーミンの有資格者が絡んでたんだね」

「そうだ。相手は四番ゴキブリ、油脂生成と温度操作と高速移動が
厄介なやつだ。」

それはそうと、そっちは魔術師の流体種にビッチの禽獣種……しかも悪名高きクブスの奴等とは、油断ならんな」

「流体種はともかく、禽獣種はしばらくどうにかできそうだけどね。あいつ馬鹿だし」

適当に報告や雑談をしながら歩みを進める三人だったが、ふと不穏な気配を察知した繁が、動いた。

「避ける！」

瞬時に二人を左右に突き飛ばし、自らもバックステップで3m程飛び下がる。

その直後、爆発音を伴って巨大な炎の塊が地面に激突し、碎けるのに伴って炎が広範囲に広がった。

「おや残念、直撃するかと思ったんですが」

天井ヘヤモリのように張り付きながらそういうのは、破殻化を解除した桃李であった。

「あの衝撃を受けて生き延びたか」

「それはお互いの事でしよう？我々は害虫というだけあり、そう簡単には死にませんし」

「ほうほう、まさかこんなに若い子が同胞とは驚いたねえ」

「……その髪型……ニコラ・フォックス先生ですね？」

「はあ、私を知ってるとは随分とマニアだねえ」

「貴方の本は高校時代読破しましたから。あの文体と、冗談にならないようなくだりであえてふざけるユーモアが大好きでしたよ」

「そりゃどうも。貴方も腐臭の肉塔王なんかに肩入れなんてしないで——」

ニコラの背後で浮き上がった巨大な白い四角柱が、彼女の頭部を刈り取るように叩き潰す。

「その名で私を呼ばないで頂けますか。不快指数がかなり上がるので」

壁の隙間から這い出てきたクェインが言った。

「何を言ってるのさ。全世界の人々の不快指数上げまくったのはアントア等じゃん」

「不快指数を上げた？はて、何のことでしょうかねえ。」

私はただ、小夜子様の御意思に従い、クブスの教義に基づき世界を快楽で満たそうと暗躍していただけなのですが」

「レイプで他人狂わせまくってただけの変態クズ集団がよく言うよ」「不人気を王政批判で補おうとしたマゾヒストの貴方に言われるのは心外というものですねえ」

罵り合いが白熱するかと思われた、その時。

ドゴオオオオン！

轟音と共に教室の壁が凄まじい勢いで吹き飛び、更にその余波で瓦礫が悉く崩壊する。

濃い土埃は五人から視界を奪うが、その中でも彼らはどうにか降り注ぐ瓦礫を回避し続ける。

土埃が晴れた先、丁度差し込む太陽光をバックに佇むのは、霊長種と思しき少女であった。

顔つきから察するに年齢は15　18程度だが、胸や尻は年齢不相

応に肉付きが良い。

頭髮は薄いピンクのショートカットで、白の長袖ジャージにブルマという井出達だった。

更に飾り物であろうか、頭頂部から白い兔の耳が生えている。

類人形質の強い禽獣種ならば耳は即頭部から生えるので、一同は各自飾り物か何かだと判断した。

盛り上がった瓦礫の上に立つ少女は、静かに言い放つ。

「無能は、いない。」

新世界の神は、ひとりでいい」

第三十六話 有資格者達は象徴の生物に何処か似ている（だから何だ）（後書き

突如現れた少女の正体とは！？

次回、思わぬ展開に！

第三十七話 社会的に死んでまでこんな奴に仕えてたなんて（前書き）

突如現れた少女の正体とは……？

第三十七話 社会的に死んでまでこんな奴に仕えてたなんて

―前回より―

突如現れるた霊長種の少女について、繁は思考を巡らせる。

「（一体何なんだこいつは？

ピンク髪巨乳っただけで既に萌え豚ホイホイだっつーのに、紺ブルマとかどんだけ萌え豚相手の身売り志望なんだよこいつは。上は長袖白ジャージでギャップ萌えってか？

あからさまにファスナー下ろしたりすんだろ？

んで、兎耳で人外& a m p・家畜キヤラってか？

まあいい。問題は俺の個人的苛立ちじゃねえ。

奴が何者かって事だ。

新世界の神とか何とか言ってるが、カタル・ティゾルともなると一概に厨二病だのイカレだのとは言い切れねえんだよね……）」

一同と少女との拮抗状態は尚も続く。

「……………ラクラ……………なのですか？」

その場の沈黙を破ったのは、クエインであった。

対する少女は、無表情のまま頷き返す。

桃李は驚愕し、言葉を失った。

仲間の身に未知の変異が起これば、大体は驚くものである。

続いて口を開いたのは、ラクラと死闘を演じたニコラであった。

「へへえ、あの馬鹿鬼が随分と様変わりしたもんだねえ！」

オカマ掘られたショックかい？それで女子力（笑）とやらを上げて、それで私を殺そうって！？

甘いんだよ糞餓鬼め！

あんたが何処で何をどうしたかなんて知らないし知りたくもないんだけどねえ、このニコラ・フォックスを、一ヴァーミンの有資格者を、その程度の浅知恵で始末しようなんて、考えた時点で負け確定なんだよっ！

第一、私の息の根を止めたとしてそこからどうするつもりだい！？あんたら如き、本気のこの二人にや手も足も出ないだろうさ！」

妙に感情的なニコラだったが、彼女は次の瞬間、突如ラクラの背後に現れた巨大な右手に叩き潰される。

続けてラクラが言う。

「……野狐にもなれない三流害獣如きが偉そうに……。愛と快楽に満ち溢れし我が新世界完成の暁には、こういった屑は即刻排除せねばなるまい……」

その物言いは、以前のラクラとは全く違うものであった。

「ラクラ、一体どうしてしまったのです？

フォックスに何をされたんですか？」

「そうですよMs。

一体何の真似で――

「黙れ能無し共！

我は女神パイオ・マンマンの加護を受け、隠された真の己に気づき、目覚める事が出来たのだ！

神は言われた！

『その力を以て世を犯し愛と快樂に満たされし神の御国とせよ』と！
そしてまた、神はこうも言われた！

『能無しの同胞など最早不要であり、切り捨てる他無し。神の御国は汝のみの支配によってこそ完成する』と！』

「パイオ・マンマン？」

「クブス始祖であらせられる小夜子様を導きし女神さえも知らぬとは、能無しの面汚しめ！」

「お待ちなさいラクラ！」

小夜子様を導いた女神の名はファウヌーラです。

パイオ・マンマン等というふざけた名では――

「くだい！」ラクラの背後から現れた巨大な右手は、ニコラに続いてクエインまでも叩き潰してしまった。

「Mrッ！」

シヨックの余り桃李が叫ぶ。

ラクラの平手は、クエインの頭蓋骨まで悉く破壊しており、遠目からそれを悟った羽辰も叫ぶ。

『MS・アスリン！』

貴女は自分が何をしたかお分かりなのですかっ！？」

「愚問だな。能無しのゴミ一つ、処分してやったただけだ」

「それはつまり、我々兄妹をも敵と見なし、絶縁するということ意味合いですね？」

「その通りだ。我が新世界に無能は不要。

支配者は、このラクラ・アスリン只一人！

私こそが法であるべきなのだ！」

声高らかに叫ぶラクラを尻目に、繁は桃李に小声で提案する。

「なあ、小樽のご兄妹よう」

「何です？」

「ここは一つ、一時休戦としようや。」

仲間になれたの仕えるだの、そんなややこしい事は言わねえからよ」

『休戦、ですか？』

「そうさ。クエインとか言う流体種が死に、あの馬鹿兎も俺らとア
ンタらを殺す気満々と来りゃ、ここは一先ず一時的にでも結託して、
だ」

「奴を始末すべきであると、そういう訳ですか」

「そうだ。実を言うと、俺らは東ゾイロスの理事長から莫大な額の
報酬で雇われてんだ。

だからある程度なら分け前をくれてやる。

どうだ？」

『そんな、お金なんて結構ですよ』

「そうですね。こう見えても私達、食い淵や遊ぶ金には困ってませ
んし」

「まじか」

「そうと決まれば早速作戦会議だね。」

三人とも、ついて来て。

あとニコラさん、あの馬鹿一丁前に何か始めてるから死んだフリと
か意味ないと思うよ」

「あら、そう？」

こうして五人は、香織の用意した異空間で作戦会議を開始した。

――臨時作戦会議室――

「さて、それで今の状況だが」

「良くも無く、悪くも無いって感じだね」

「奴は何をするか全く予測不能。但しこちらに手を出して来る事は有り得ない。」

「何せ認知出来ないからねえ」

一同は頭を捻る。

「しかもあの『謎の巨大平手』が問題なんですよね」

『詳細情報も一切不明ですからね』

「なににせよ、世の中打開策の無え状況なぞそう無え。

ましてやあの馬鹿兎なら——……？」

ふと、固まる繁。

「あれ？どうしたの？」

香織の問いに答えるように、繁は外部を一方的に見渡せる窓を指差した。

「窓の外……？」

言われるがままに外を見た一同は、驚愕の余り言葉を失った。

窓の外、荒れ果てた校舎の中に見えたのは、身につけている物共々加速度的に巨大化を続けるラクラの姿だった。

その光景を目にした香織、思わず呟く。

「これはひどい……かなり馬鹿げてる」

第三十七話 社会的に死んでまでこんな奴に仕えてたなんて（後書き）

謎の少女の正体は、裏切りを決行したラクラだった！？
次回、巨大化したラクラに繁達^が挑む！

第三十八話 痴女巨人と策を練る六人（前書き）

六人の逆襲が今始まる！

第三十八話 痴女巨人と策を練る六人

―前回より―

「さて」

ラクラの巨大化が止まった所を節目と見て外部へ繰り出した五人。その中で最初に話を切り出したのは繁で、流れから自動的にリーダー扱いされている身としても何か言っておきたいのだろう。

「動物が巨大化する事で得られるメリットについてわかる者は、拳手を」

真っ先に手を挙げたのは香織だった。

「はい」

「よし、清水」

「補食動物等の外敵から襲われる危険が下がり、仮に襲われたとしても撃退が容易になります」

「そうだな。では他に何か、解る者は？」

続いて手を挙げたのは、ニコラ。

「はい」

「よしフォックス。言ってみろ」

「気候変動等、環境の変化への耐性や病原体・寄生虫等への抵抗力や免疫力が上がります」

「そうだな。よし次」

次に手を挙げたのは桃李である。

「はい」

「よっしゃ。小樽妹」

「前二人の述べた理由もあり、寿命が延びます」

「そうだな。よし、次」

『では』

妹に続いて羽辰も手を挙げる。

「よし、小樽兄」

『身体の体積に対して表面積が小さくなるため、体温が下がりにくくなり極地での活動も容易になるでしょう』

「全く持つてその通り。」

さて。そこで、だ」

繁は依然微動だにしないラクラを見つつ言う。

「ここまでで皆が言及してくれた事柄の逆を突けば奴を効率的に始末出来ると、俺はそう思う訳だよ」

「確かに、寧ろそうすべきですらあるよね」

「そうだろう？」

だから俺は考えた。大きさというアドバンテージをディスアドバンテージに変えちまえば良い。

要約すれば、奴の体温を徹底的に上げて熱中症にし、動きを鈍らせちまえばいい」

「成る程。確かに巨大で馬鹿な恒温動物相手でしたら、これ以上無く素晴らしい名案ですね」

「差し当たり、少々準備が要る。」

なるべく迅速に進めたい所だが――

ズドゴァン！

凄まじい音と共に、巨大な質量を持った物体が校舎を貫いた。

物体の正体とはつまるところ、巨大化したラクラの右足であった。

有り得る可能性は二つに一つ。

移動を始めたか、一行を踏み潰さんとしたか。
どちらにせよ、繁達にとって都合の悪い事態である事に変わりはない。

「よし、作戦開始。」

桃李、コックローチの温度操作に制約や法則性はあるか？」

「射程距離は30mが限度ですが、ローチスリックを媒介にする場合距離は問題ありません」

「よし。んじゃ羽辰よ、お前さん妹から完全に分離出来るか？」

「破殻化前なら可能ですが」

「制限時間は？」

「状況にもよりますが、浮遊状態で少なくとも50分は確実にしようね」

「浮遊状態での飛行速度と範囲は？」

「破殻化した桃李に匹敵します」

「よし。んじゃ次、ニコラ。」

お前には少し特殊な役割を任せる」

「特殊？」

「そうだ。医学博士として、開業医としての腕と知識が必要だ。

奴の主要な動脈の位置を特定し、可能なら図示してくれ」

「あいさ。しかし図示か……そうなると紙と筆記用具と台座が要るのよねん」

「なら心配するな。筆記用具は俺のペンを使え。」

紙ならさっき理解準備室からくすねて来た霊長種の人体図鑑がある。

台座は……こいつで足りるか？」

繁は破壊された引き戸の残骸を指差し言った。

頷くニコラ。

「よっしゃ。んでラストは香織」

「待ってました」

「この状況下だが例のコンボは行けるか？」

「例の……ああ、前に話してた奴？」

愚問だねえ、この状況下であれ程度出来ずに今の繁の従姉妹なんて名乗れないよ」「心強いな。

良し、行動開始だ。各自配置に着こうぜ。

ニコラ、動脈の配置図示を可能な限り手早く――

「もう終わってるけど？」

――流石開業医、仕事先が早いな。
と、言う訳で桃李。

その図を元に奴の主要な動脈のある部位に油を挿してやれ。挿し終えたら地上に戻り、安全地帯でその温度を風呂の湯かカイロ程度を目安に上げて維持してくれ。

羽辰は桃李が温度操作をしている最中、奴の気を逸らしつつ可能な攻撃を頼む。あとニコラもな。

何、相手をイラつかせりゃ良いんだ」

「解りました」

『了解です』

「お任せあれ」

「んで香織、例の奴行けるんなら話は早い。

桃李や羽辰やニコラに当たんねえ様に例の奴を維持し続けてくれ」

「あいよ」

各自与えられた役目に移る中、指揮を取った繁自身もまた羽辰に加勢する形で作戦に参加する。

「待つてる厨二病ビッチ馬鹿兔。

兎が如何に崇高な生き物か、俺が教育してやる」

飛び立つ繁の脳裏に浮かんで居たのは、未だ生後間もなくつたない

言葉しか話せない、幼い雄のスマトラウサギ。

何でそんなもんが思い浮かんだのか、厳密に説明できるものはおそらくこの場に居ない。

もしかしたら繁本人にも説明がつかないのかもしれない。

そしてまた、戦闘の勃発が昼飯前の時刻ということもあり、東ゾイロス高等学校に向けられる衆人の視線もすさまじいものであった。繁側の会話文は音声回路に施された香織の魔術でどうにか誤魔化せていたが、流石に敵が巨大化するとは誰も想定していない。

桃李と羽辰に至っては、まさか見方だと思っていたラクラが裏切ったばかりか、その背景には自分はおるかクエインさえも知らない、馬鹿っぽい名前の女神が居るというのだから、益々予想外だった筈である。

更にその姿までも大幅に変わっているとあつては、もうやっついてられない。

しかしそれでも「どんなに努力しても受け入れるしかない運命だったまにはある」という、何所の誰が残したとも知らない言葉を胸に、五人は戦う。

眼前の、身長30mにまで巨大化した低脳ビッチを打ち倒すため、全力を賭すのである。

第三十八話 痴女巨人と策を練る六人（後書き）

次回、破殻化繁が空に舞う！

第三十九話 R - 15 G (前書き)

作戦開始！シーズン2も遂にクライマックス！

第三十九話 R - 15 G

―前回より―

主要な動脈の通る部位を的確に熱する桃李の手によって、ラクラの体温は急激に上がっていた。

そもそも気候の安定した温帯域にあるラビーレマとは言え、カタル・ティゾルももう五月下旬。

快晴な昼間、それも遮蔽物の無い場所に厚着して立っていれば、嫌でも暑くなるだろう。

それが筋肉質な身長30mの巨人であれば尚更である。

更にそこへ追い打ちをかけるのは、繁・ニコラ・羽辰による挑発と、地の利を活用した香織の魔術コンボ。

香織の魔術コンボは、

- ・ 空中に物体を浮遊させるもの
- ・ 鏡の様な物体を召喚するもの
- ・ 光の角度や流れを読むもの
- ・ 物体にある程度の破壊耐性を付加するもの

等という複数の魔術を併合したものであり、日光を反射しラクラの体温を上げる目的があった。

更に多方面から反射される日光はラクラの視覚にも凄まじいダメージを与えるに至っていた。

―上空―

「おいどうした馬鹿鬼っ!？」

動作が手に取るように丸解りだぞ!」

「はぁ……っぁ……う、五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅いつ、五

月蠅 ああああいつ！

潰ししてやる……お前なんか、私が粉々に叩き潰してや——んうつ！」

強気に言い放つつもりが、実に無駄に艶っぽい声を上げて怯むラク
ラ。

見れば彼女の両胸はいびつに波打っている。

まるで透明な巨人がラクラの胸を揉みしだいているようだったが、
良く見ればそれはニコラの放つ蛾型弾幕だった。

気になった繁が向かってみれば、ラクラの背後には巨大な蛾が浮い
ていた。

蛾の体毛は主にクリーム色と白であり、細長い人間の腕を思わせる
節足を持っていた。

更にその頭は狐のそれに似ており、腹部は狐の尾に似る始末。
ここまで来れば、この蛾が何者であるかお分かり頂けると思う。

第三のヴァーミンを持つ元女医、ニコラ・フォックスである。

破殻化は、有資格者の姿を大きく変える。

しかしその姿が、必ずしもヒューマノイド型であるとは限らない。
その姿は総じて、象徴である生物種を元にした巨大で得体の知れな
い化け物である。

しかしその形態には、何処か有資格者の元々の種族としての形質を
持ち合わせている。

桃李や繁の破殻化した姿がヒューマノイド型であるのは、二人の種
族が霊長種だからであるという理由が大きかった。

そしてそれ故、幾ら霊長種寄りとは言え曲がりなりにも狐系禽獣種
のニコラは、「狐の様な姿をした巨大な金色の蛾」という姿を取る
のである。

繁は早速ニコラに話し掛ける。

「よう、ニコラ」

「あ、繁。どうしたの？」

「どうしたの？じゃねえわ。何やってんだお前。

馬鹿兎の挑発と攪乱はどうしたよ？」

「やーねえ、ちゃんとやってるわよ。

あの馬鹿兎攪乱するついでに不快指数と体温も上げて、尚且つ近頃の『女の子がいっぱい出て来るライトノベル』のお約束もしっかり守ってるんじゃないの」

「お約束って何だ。

アレか。猿みてえな間抜け面の変態怪盗が物欲で生きてる雌豚（肉付き的な意味で）に襲いかかったら十割型首折られて死ぬとかそんなんか」

「まあ大体あつてるけど繁ってあのシリーズ嫌いななの？」

「いや、ある程度見るぐらいには好きだが」

「じゃあ何なのよさっきの言い方……」

「伏せ表現が他に思い付かなかった。

それで、お約束ってのは？」

「アレよほら。『巨乳は同性に乳揉まれて喘ぐ』って奴。

天然の動物耳&尻尾に、実年齢より外見が圧倒的に若い不老設定、かつ医療関係者っていう時点で私ってエロアニメの人氣攻めキャラとしての素質をおつりが来るくらいには合わせてると思うんだけど」

「お前もうビジュアルが雌の蛾だけだな」

「良いのよ別に。それ言ったら実際に揉んでるのは蛾型弾幕だし」

「銃弾ばりの破壊力は何処行つたよ」

「あれだけが蛾型弾幕の全てじゃないのよ。ほら、モ・ハンでも銃弾って単なる攻撃用だけじゃないでしょ？」

「つつことはアレか。神経毒とか麻酔とか散弾とかあんのか」

「一応回復もある」

「マジか」

「私自身不老不死だし、繁も香織も只じゃ死ななさそうだから使う機会多分無いけど」

「いや使え。使ってくれ。これから戦闘が激化したらわりと高頻度で死に掛けると思うから俺ら。」

つか、羽辰は？」

「羽辰？羽辰なら下の方で馬鹿兎の尻突き回してるけど」

「妹の手前何やってんだあの似非輝美結城は……」

呆れた繁が目を見やると、羽辰は何故かラクラの腰へ執拗に攻撃を加えていた。

しかも、ナイフらしきものを握っているのに血液らしきものは一滴も出ていない。

何かがおかしい、と思って接近してみれば、羽辰がナイフで切ろうとしているのはラクラの履いているブルマのゴムであるようだ。しかもどうやら、ご丁寧にブルマのゴムだけを切ろうとしている。

「（まあ、あれはあれで羽辰なりには頑張ってるんだろうし、応援しとくか）」

そう思った繁が飛び去ろうとした、その時。

ブチッ！

鈍い音を立てて、何かが千切れた。

「ゴゲフッ！」

続いて響くのは、これまた鈍い羽辰の声。顔面か腹を強打したのだろつ。

バサあ

更に、布のようなものが落下しそうになり、

「ーっやんっ!？」

無駄に可愛らしいような、ラクラの悲鳴が響く。

ふと繁が下を見れば、片側だけゴムの切れたブルマの前を押さえつけるラクラと、何らかの衝撃で吹き飛ばされたのか、上半身が近くにあったビルの壁にめり込む羽辰。

「（あの馬鹿ビッチ、羞恥心なんてあったのかッ!？）」

繁は心底驚愕した。これでもかという程に驚愕した。

ニコラの話聞くに、ラクラ・アスリンとは生まれながらにクブスの女であり、それ故に羞恥心などなくなり捨てているのではなかったか。

しかも、である。

暑さ故に意識が朦朧としているのか尻を押さえるのを忘れており、そのせいで尻が丸出しである。

「（三十九話にしてパンチラたあ、らしくねえなあ作者よ）」

我ながららしくない事をしたとは思ってるよ。

「（反省は?）」

しない。一応これC指定してるし。
実際はDだろうけど。

「（色についての描写・言及は？）」
勿論しない。そもそも需要無いだろ。
というか、さつさとやつちまいなよ。主人公らしく、名前つきの必
殺技でもぶちかましてやりな。

「（おう。言われるまでも無く殺ってやらア）」

繁は空中で姿勢を整え、試しに漫画でよくあるような『虚空から武器を掴み所る』ように動いてみる。

すると次の瞬間、繁は両手の甲から何かが生えるを感じる。

見れば彼の両手の甲からは、鋭い刃のような鉤爪が生えていた。

それはまるで、繁の愛用武器である籠手が破殻化した彼の体組織と化したようでもあった。

「（成る程、中々面白いギミックじゃねえの。
イメージとは違うが、これもまた良い。

さて、こいつで一丁派手に殺るか）」

繁は滞空したまま、必殺技を考え始めた。

第三十九話 R - 15 G (後書き)

次回、巨大化ラクラに繁の必殺技が炸裂！
そしてあの謎も明らかに……？

第四十話 きじょ?きじょ! (前書き)

繁さーん、必殺技考え終わりましたー?

第四十話 きじょ？きじょ！

―前回より―

繁は瞬時に必殺技を思い付いた。

「（最早こいつで行くしか手はねえ！）」

繁は独自の構えを取り、猛スピードでラクラへ向かう。

それを悟ったラクラは慌てて右手でたたき落とそうとするが、飛ぶ繁は溶解液で巨大な手の平をも、まるでそれが存在しないが如くに通過する。

激痛に顔をしかめるラクラは、思わず股間から手を離していた事に気付き、ブルマをも失い更に惨めな姿になった事からの恥辱で更に赤面、思わず泣き出しそうになる。

というか、公衆の面前に醜態と下着を晒す羽目になったラクラは、既に涙目になりつつある。

しばしば、涙は女の武器であると言う。

諸説あるうが、大方都合が悪くなったらとにかく泣いておけば周囲が味方になってくれて、結局事は自分に都合良く進むという意味合いだろうと作者は推測する。

（そして恐らく、そんな真似を好んでするはさぞ人間性が無く低俗な女であろうとも作者は推測する）

女に限らず、目の前で他人に泣かれると躊躇いが生じるのは、人として当然であろう。

しかしながら、カタル・ティゾルに来る前から繁の人としての基軸に大きなブレが生じている事は読者諸君もよくご存知かと思う。そしてそんな繁を前にして「女の武器」なる概念は、当然全く意味

を為さない。

かくして繁の猛攻が、ラクラの涙程度で止まる筈も無い。

繁はそのままラクラの首筋を幾重にも切り結び、噴水のように勢い良く吹き出る鮮血と、その持ち主が苦しみ悶える姿を尻目に巨大痴女の頭上へ舞い上がる。

繁はそのまま遙か上空で位置を見計らい、手頃な所で口吻から勢い良く溶解液を吐くと同時に空中で一回転。瞬時に溶解液噴霧を止めて体勢を立て直す。

細い糸となった溶解液はラクラの巨体を中心線で真つ二つに切り裂く。

この一撃で既に出血多量に陥り、加えて脳組織を破壊されたラクラは絶命に至った。

しかし、ここで終わらせる繁ではない。

立て続けに繰り出された溶解液は空中で箱型に変形。

垂直に落下する溶解液の膜はラクラの骨だけを残し、その他を悉く溶かし尽くす。

更に箱型溶解液の二発目が崩壊寸前の白骨を消し去る。

「碧細縄、へきさいじょうつ 緑鉛二段枢りょくえんにだんきゆう」

等と技の名を言ってみた繁であったが、その名は場の勢いで付けたものだった（つまり、後々変更される可能性が高いという事）。

何はともあれ、こうして東ゾイロス高校で多発していた謎の殺人事件は幕を閉じた。

繁達は一先ず予め録音しておいた音声を流し、小樽兄妹と別れて一度ラビーレマを去った。

後日、報告と謝罪を兼ねて東ゾイロスの理事長・緒方の元へクリームゾンを送り込んだ繁だったが、緒方の言葉は三人にとって予想外のものであった。

―後日・ラビーレマ某所―

『と、言うわけでございます……事件そのものは解決したのですが、校舎はあのとおり散々な有様でして……』

「そうでしたか……でも安心しましたよ」

『安心、ですと?』

「はい。だって、スタッフの皆様は全員ご無事なのでしょう?」

『ええ。それはもう、ただでは死にませんから』

「なら良いんです。」

お話を聞く限りでは、主犯格の二人も退治出来たそうですし」

『しかし、よろしいので?』

彼は事件解決に際して、校舎を破壊してしまった事を酷く気に病んでいるのですが』

「構いませんよ。元よりあの校舎は大部分を取り壊して立て直す予定だったんです。」

それに、そんな些細な事を気にしていたのでは、あんな規模の学校で理事長なんてやって居られません」

理事長から許され、更に約束通りの報酬を受け取った三人は心の底から安堵した。

全員が全員、多少の差こそ有れど理事長に文句を言われると思っていたからである。

そして今回得た報酬に適当な手紙を沿え、兆眼紫円陣で地球の信賴できる機関へ送り込む。

こうして、三人の企画は今回も無事成功を収めたのだった。

―事件解決より数日後・あるチャットルームにて―

軍神内藤「そんな事があつたもんだから、俺としても気の抜けない事態になつてよ」

空舞椿「成る程。それは確かに恐ろしい……某は一応、小型の飛竜程度なら全裸に丸腰でも追いつ返す自身はあるが、お主のような状況なら二秒で逃げ出すぞ」

淫乱毒飯「あなたねえ、それ自慢になつてないわよ？」

夢私刑「嬢ちゃんのスッパなら興味あるが、流石にそれは逃げた方がいいぜ」

軍神内藤「おい、幾ら仲間内限定だからってチャットでセクハラは止せよ」

淫乱毒飯「まあ、文字だけだとしても冷たく見えちゃうのよねえ」

夢私刑「そうか……すまねえな、嬢ちゃん」

飛舞椿「いや何、気にするな」

―入室：侵略頭足類―

侵略頭足類「やあみんな」

侵略頭足類「相変わらず楽しそうで何よりだよ」

飛舞椿「これはこれは、管理人殿」

夢私刑「おお、××の旦那じゃねえすか」

淫乱毒飯「今日はどうしたんですの？」

軍神内藤「また何か、新発明の話か？」

侵略頭足類「いやあ」

侵略頭足類「実を言うとホラ、この間ラビーレマでツジラジの生放送があつたろう？」

軍神内藤「ああ、あれか」

飛舞椿「あの番組、賛否両論あるでしょうが某は好きですね」

夢私刑「それで、ツジラジの生放送がどうかしたんで？」

侵略頭足類「その放送の途中、クブスの女が裏切つたろう？」

淫乱毒飯「ラクラ・アスリンって奴ね？」

夢私刑「正直クブスにゃロクな記憶がねーんだよな」

飛舞椿「確か、神の暗示で巨大化したんでしたっけ？」

全く馬鹿馬鹿しい話です」

軍神内藤「……いや待て、何かオチが見えたぞ…」

飛舞椿「？」

軍神内藤「おい××、あのラクラって馬鹿唆して自滅させたの、お前だろ？」

飛舞椿「えっ」

淫乱毒飯「なにそれ」

夢私刑「こわい」

侵略頭足類「流石だね。君。

確かに僕はあの馬鹿の夢に侵入し、奴に嘘の情報を掴ませ仲間殺しを行わせた」

軍神内藤「やっぱりか」

侵略頭足類「いやあ、あの馬鹿が想像を遙かに絶する他に類を見ない無知無学の腐れ産廃タッチワイフで助かったよ」

侵略頭足類「それにどんな馬鹿だって、他人に言われただけで仲間を殺すのに躊躇いを見せないなんて、頭おかしいんじゃないのかあ

のダッチワイフのゴミクスは。軍人や暗殺者でもあるまいし生意気なんだよ」

侵略頭足類「まあ、そもそもクブスそのものがニートや汚職官僚も下回る社会ゴミの集まりなんだよね。連中なんてその程度のもんなんだよ」

侵略頭足類「調べた所ホリエサ・クエインはクブスの中では一般人相当の人格者だったんだけど、ラクラ・アスリンは下っ端も下っ端、最下位のクズでね。早急に駆除する必要性があったんだ」

侵略頭足類「その為に僕は奴の夢に入り、適当な薬を乱雑にぶち込んでやったのさ。結果的に種族・服装が変化し妙な能力も得たらしい。だが死んだ。当然だ。元よりクブスには救いなんて決して訪れないんだからね」

侵略頭足類「何より、あんな生物とも定義出来ないゴミは早急に駆除すべきでもある」

軍神内藤「何故だ？」

侵略頭足類「何故って、」

侵略頭足類「それはもう」

侵略頭足類「決まりきった事じゃないか」

夢私刑「どんなんで？」

侵略頭足類「恐ろしいからだよ」

飛舞椿「恐怖、ですか？」

侵略頭足類「そう。恐怖だよ。」

こう言うのは女性に対して失礼かも知れないが」

淫乱毒飯「別に良いわよ」

侵略頭足類「なんというか、こういう極端な事はあまり言いたくないんだけど、女性というのは、種に関わらず総じて恐るべき存在だろう？」

あのクズだって曲がりなりにも雌だったんだ。用心に越したことは無いさ。

ああ、女性とはかくも

蟪蛄のようであり、
蜘蛛のようであり、
蜂のようであり……

「いやあ、身の毛もよだつ恐ろしさだよ」

第四十話 きじょ?きじょ! (後書き)

次回、シーズン3がスタート!

第四十一話 さんどおーしゃん しつぷす（前書き）

第三シーズン遂にスタート！

次の舞台となるのは、義理人情の根付く砂漠の軍事主義文化圏・イスキュロン！

第四十一話　さんどおーしゃん　しつぷす

―前回より―

次なる便りからイスキュロンへ向かった三人は、港街で別行動を取っていた。

というのも、このイスキュロンという大陸、ノモシアやラビーレマとは勝手が違う。

乾燥帯の軍事主義社会という表現こそ簡単だが、大国デザルテリアを始めとする主要諸国を除いた大陸の殆どは粒子の極めて細かい砂からなる砂漠で成り立っている。

この砂はまるで液体のようであり温度も高い為、並大抵の生物に歩行を許さなかった。

そこで砂漠のオアシスを拠点とする原始イスキュロン民は、海上の小島が如し隔離のされたオアシス間を移動するため、砂上船という船による独自の移動手段を確立させた。

動力も人力や風力の他、砂中に棲息する動物を飼い馴らしたものから、学術や魔術に起因するものへと変化していった。

時代が進みノモシアやラビーレマを始めとする他の文化圏との交易が始まるにつれてそうした傾向はより強まり、同時に大陸そのものも高度な文明を持ち、独自の崇高な哲学と国民の性質を重んじる思想を根底に据えた軍事主義社会へと成長を遂げていた。

現時点で三人がそれぞれ担当する事柄をまとめると、以下のとおりとなる。

ニコラ：移動先での宿泊施設等の確保。今回はかなりの長期戦が予想される為、安価かつ上質な宿の確保が望まれる。

香織：目的地へ向かうための砂上客船と航路情報の確保。生憎メンバー内に砂上船の運転免許を持っている者は居らず、安易に他の方法で移動するのも躊躇われる為、宿同様安価で性能やサービスの安定したもの。

繁：届いた便りの中から、今回放送分で読み上げるものの選定。及び目的地や中継地点に関する情報の確保の他、全体的な活動計画の調整等、全面的な雑用を担当。

この内、仕事が思いのほか速く終わったニコラは早急に繁と合流。仕事を手伝いながら適当な雑談に興じていた。

「それで、今回は何所に行くんだっけ？」

「香織が戻ってきたら色々と買い揃えて、14時には砂上客船でデザルテリアを目指す。」

遅くて明日の夕方には首都ゴーヴィーで買い物と情報補完だな」

「そういえば今回、長旅にしてはやけに荷物減らしたよね。まあその分手持ち軽くて助かるんだけど、何で？」

「何でってお前、今回は現場の気候が圧倒的に違うんだぞ？」

俺らで用意出来る備品はどれも亜寒帯・温帯での使用を考慮された。大学のフィールドワークで砂丘になら行ったが、正直砂漠地帯なんて人生で初めてだ。

ネットやハウツー本で情報集めるにしても少しのしくじりが大惨事に繋がらないとは言いい切れんだろうが」

「香織ちゃんの魔術でガードしてもらえば？」

「それも出来ない事は無いが、出来れば奴には魔力や体力の消費を抑えていて欲しい。」

俺達はまだヴァーミンの有資格者だが、香織はただの人間だ。もしかしたら環境に耐え切れず体調を崩したり、毒蛇毒虫の類にやられるとも限らんだろうが。

そう考えると、現地で乾燥帯での使用を想定して設計された装備や

食料を購入したほうが、安全性は高い」

「なるほど。70年以上生きてる私でもそこまでは知恵が回らなかったよ」

「しゃあねえしゃあねえ。俺みたいなガキは無駄なところで頭が回ったりするんだよ。」

……つと、香織の奴も戻って来てんな」

「暑いのに普段着でよく走れるよねあの子。しかもあんな笑顔維持したまま」

「昔からそうだったんだよ、あいつは。何か無駄なところで生命力高くてな」

駆け寄って来た香織は、何故か汗をかいた様子が全く見えなかった。

「お待ちせう。船の方確保してきたよ」

「おう、お疲れさん」

「おっつ」

「いやあ、大変だったよ。」

値段関係なく何処も予約一杯でさ。

でも一つ、凄く頑丈な最新型なのにガラガラ船があつてね。

受付で聞いたら管轄じゃないって言われて、試しに乗組員の人に聞いてみたら無料で乗せてってくれるって」

「おい、それ違法な船じゃねえのか？」

賊とか密猟者とか」

「マフィアとか環境右翼とか、カルト系じゃないの？」

「私も気になって近くの警備隊詰め所で聞いてみたんだけど、街興しの為に組織された民間団体なんだってよ」

「民間団体？」

「そ。砂の海に眠る希少な鉱物資源を採取するのが目的みたい」

「鉱物ねえ……そんなもん、ヤムタやラビーレマの奴らが採り尽くしてそうなもんだが」

「それで、その団体の名前は？」

「確か、『デザート・オルカ』だった筈。

丁度2時半頃から船を出して採掘に向かうから、それを手伝ってくれるなら無料で乗せてってくれるって」

「成る程。つまりツルハシ振り回したり、猫車押したりすればいいのね」

「現場の警備とか、負傷者の救護とかな。

この辺りは砂の海に適応した動物が多くて、肉食性の奴は人喰いもザラだっつうし」

「いよっし、それじゃ決まりだね。

出港はさっき言った通り14時半頃だから、それまではゆっくり出来るよ」

「んじゃ早速、色々買い揃えに行くか。

幾ら鉱物採取だろうとこんな装備じゃ、色々と不便だろうしな。

軽いだけでも持って行く価値はあるだろうよ」

かくして準備を済ませた繁達は、民間団体デザート・オルカの砂上船に乗り込んだ。「んじゃ早速、色々買い揃えに行くか。

幾ら鉱物採取だろうとこんな装備じゃ、色々と不便だろうしな。

軽いだけでも持って行く価値はあるだろうよ」

かくして準備を済ませた繁達は、民間団体デザート・オルカの砂上船に乗り込んだ。

第四十一話 さんどおーしゃん しつぷす（後書き）

次回、デゼルト・オルカの船で繁達を待つ者とは！？

第四十二話 巨人を倒した以前、巨獣に挑む今回（前書き）

船に乗り込んだ三人を待ち受けるのは……

第四十二話 巨人を倒した以前、巨獣に挑む今回

―前回より―

民間団体デゼルト・オルカの砂上船ミガサ・コルト号は、イスキュロンの広大な砂漠地帯を進んでいた。

ちなみに『ミガサ・コルト』とは、シーズン1冒頭で言及された神話に於ける雷電と戦いの女神である。

地域によつては、悪霊から神性にまで昇格したアクセレタルと並んで学術の祖とされたり、無数の眷属が居たともされる。

世界各地に残る数々の武勇伝故にトゥマージョーに匹敵する人気を誇り、彼女を主役とした外伝が見つかる等、古代から優遇されていたともされる。

また、宗派によつてはインディクリストに代わりトゥマージョーの妻になったともされ、現にミガサ・コルトがトゥマージョーに好意を抱いているという記述はこの神話の伝わる全ての地に存在する（但しミガサ・コルトは勇敢で義を重んじる恐れ知らずである半面極度の照れ屋であつたともされ、この他様々な理由からトゥマージョーにその好意が伝わつたという記述は極めて少ない）。

この他にもトゥマージョーの女性関係については諸説あるため、この件についてはしばしば論争が起こる。

しかしそもそもトゥマージョーは神話の中で種族や派閥を問わず様々な女性から好意を寄せられており、その全てを妻とし六大陸全ての人民の父となつたという記述も一部地域に残っているため、正直なところ真相は定かでない。

「いやしかし、すみませんねえ。

お忙しい中わざわざ運んで頂いて」

「謙遜しなくなつて良いのよ。丁度私らも収穫を一度向こうに持つて行かにやならんでね」

甲板で繁と語らうのは、ミガサ・コルト号船長兼デゼルト・オルカ団長の八坂逢天。やさかほうてん

彼は屈強な体つきの面々を率いるにしては些か細身な多眼系霊長種であつた。

「短い間とは思いますがお世話になります。

それで、件の鉱物採掘とやらはいつ頃始まるんでしょう?」

「いつ頃つて言われると困んのよね」。

何せ向こうも変則的だからさあ」

「変則的……やはり砂漠の鉱山ともなると、ある種の岩場のように不規則に浮沈を繰り返すのでしょうか?」

「まあ確かに、浮沈を繰り返すつて言えばそうなんだけどもね?

ただ何て言うか、鉱山とは——「船長オ!レーダーに反応ありやしたア!」

逢天の言葉を遮るようにして、船室内の乗組員が叫ぶ。

「来たか……距離と座標を割り出して船内放送かけな!

他の奴は配置につくんだ!」

「何事です?敵襲ですか?」

「敵襲てもあながち間違いないけど違うねえ。

寧ろこれは”標的”さ」

「標的?それは一体どういった意味合いで——!?」

ふと、突然暗くなった空を見上げた繁は、絶句した。

弧を描いて頭上に舞い上がる、巨大な質量。

太い筒型をしたその姿を言い表すならば、さしずめ「平たく短い手足を持ったナマズ」とでも言えば良いのか。

ともかくその生物らしき存在を目の当たりにした繁は、言葉を失った。

そこへ更に、酷く取り乱した様子の香織とニコラが駆け寄ってくる。二人もまた、反応こそ異なれど、繁と同じ事を思っているのだろう。

最早騒ぐ気力さえ失った繁は、か細い声で逢天に問う。

「船長、あれは一体何者です？」

「何者ってあんた、あれが目当てで私達は船出してるんじゃないか」

「しかし船長、この船は鉱物資源の採掘を目的としたものですよね！？」

「そうさ」

「船に備わった数多の武装は、あくまで船を護る為のものでしょう？」

「まあ、それもある意味正解かな」

「ある意味？ある意味ってどういう意味ですか！？」

「ある意味はある意味。そういう意味合いも含むって事だよ」

「……それは、つまり……」

「そう、私達は狩るのさ。あのでかぶつーヤマホフリをね」

「……ヤマホフリ？」

「そう。まあその名前は俗称で、正式にはティオウスナハンザキって言うんだけど」

「スナハンザキ！？あんな巨大なスナハンザキが居るんですかっ！？」

スナハンザキとは、イスキュロンの砂漠地帯に適応した有尾類（イ

モリを始めとする尾を持つ両生類）の一種である。

オアシスや地下水脈でオタマジャクシとして育ち、以降大部分の種が繁殖を除き生涯を砂中で過ごす。

生態系では海洋で言う肉食性の小型回遊魚や海鳥に該当し、砂中または砂上の小動物を捕食。

砂中生活を送る為殆どの種は目が退化したが、半面聴覚と嗅覚が発達している。

美味である肉は食材として、骨や皮は工芸品の素材として重宝され、ある先住部族にはスナハンザキの捕獲・加工とその指導を専門とする役職があつた程らしい。

スナハンザキについては繁もよく知っていた。

しかし、このサイズは反則なのではないか。

繁は心底そう思っていた。

身長30mに巨大化したラクラを相手にしたお前が言うなと思われる読者も居るだろうが、考えてもみて欲しい。

身長30mのセックスにしか頭の回らない巨人と、全長がヒゲクジラ程もある遙か昔から砂漠に順応してきた規格外に巨大な両生類。この二つを、果たして同格と見なせるだろうか。

読者諸君が仮に何と言おうと、作者は断言する。

そんな事が、出来る筈はないと。

「居るよ。何故か年に一頭しか居ないんで、その他の活動時期はもっと小振りな奴をとつ捕まえたりしてるけどね。」

奴は砂を丸呑みにして食い物だけを漉し取って食べるクジラみたいな奴さ。

だから奴の皮や腹の中には砂に混ざってる色々なもんが固まってでかい玉や岩になる。

玉は元より、岩だって職人が削ったり炉にかければ宝石や金属に早変わりだ。それ自体も希少だったりするから、学者なんかにも高く売れる」

「成る程。そういう事ですか」

繁はひとまず騒ぎ立てる香織とニコラを蹴り一発で黙らせ、逢天に問う。

「それで船長、我々は何をすればよろしいので？」

「そうさねえ…そこな紅色髪の姉さん、あんた確か魔術師だったね？」

「ええ、はい。」

あ、でも純正攻撃系はからつきしですよ？」

繁の蹴りで正気を取り戻した香織が言う。

「変則攻撃系で構わないから、機銃班のサポートをしてくれるかい？あと出来れば永続効果付与や回復も」

「お任せ下さい」

「あと白衣着た狐の姉さん」

「はいはい」

「あんた医者なんだろう？」

だったら負傷した奴らの救護を頼むよ」

「解りました」

「船長、私は何をしましょう？」

一応白兵戦の心得はありますし、残骸目当てに寄ってくる甲虫やスナハゼの駆逐ぐらいなら出来ますが」

「いやあ、あんたにはもつとでかい仕事が似合うだろう」

そう言っただけ逢天は、船の床下に備わった倉庫から何かを取ってきて繁に手渡す。

「これは一体？」

手渡された物体は、全長1・5m程の少し太い槍に見えた。

「槍さ」

「それは解ります。しかし何故これを私に？」

「あなたに似合うと思ったんだよ。というのは、実を言うとそれはいわくつきの品でね。」

誰が持ち込んだとも知れないのに、何時からか倉庫にあつて、誰にも振るう事を許さないのさ」

「……そんなものが……」

「振るおうとすればまるで自我があるみたいに突然暴れ出す。でも磨いたり持ち運ぶ分には問題ない。」

気になってノモシアの鑑定士数人に見せたら、これは並大抵の者に扱える品ではないそうでね」

「ほう」

「鑑定士によれば、直感ではつきりそうだと感じる男に譲り、巨獣の背に登らせるとか何とか」

「成る程……つまり、アレですか？」

「何だい？」

「私にこの槍を持つてあのテイオウスナハンザキに挑めと、そういう事ですか！？」

「有り体に言えばそうなるかな。」

大丈夫さ。私が管制室から指示出すから」

「いやそういう問題ではありませんよ！

急過ぎるでしょうに！」

「ああ、鑑定士の予言通りだわ。」

確か次にあなたは、

『……仕方ない。やってみましようかね』と言う」

「……仕方ない。やってみましようかね——ッ！？」

逢天の先読み通りの言葉を口にしてしまった繁はまたも絶句する。

「お次はこうさ。」

『でも過度の期待は禁物ですよ？私臆病ですし』」

「でも過度の期待は禁物ですよ？私臆病ですし——……またか」

「さて、お遊びはここまでよ。もうそろそろ奴が船に近付いてくる筈さ。

そうなればいよいよあんたの出番さね。

何、手筈通りにこなせば良いんだ。怖がらなくなっただけいい」

そうこうしている内に、テイオウスナハンザキは船へ近付きつつあった。

第四十二話 巨人を倒した以前、巨獣に挑む今回（後書き）

次回、テイオウスナハンザキ相手に善戦する繁にまさかの危機！？

第四十三話 だから私は彼を信じたい（前書き）

大砂漠の激戦！

第四十三話　だから私は彼を信じたい

―前回より―

砂の海を舞台にした人と獣との戦いは第二段階へと突入していた。それまで船上から遠距離攻撃を行っていた機銃班・砲撃班・魔術班を下がらせ、船に接近してきたティオウスナハンザキの背目掛けて近接班と採掘班が飛び乗っていく。

近接班がおのの武器でティオウスナハンザキを攻撃し、その隙に採掘班は外皮に発生した岩石や透き通った塊を採取していく。それら「砂漠の鉱物資源」の産出場所は、例えば体の表面であつたり、外皮と化した砂岩の中であつたりする。

砂岩からなる硬い外皮を鈍器で打ち割り引きはがすと、スナハンザキ本来の強靱かつ柔軟な皮膚が露出する。

変態に伴って発生する砂岩の外皮は繊維質の粘液により固定され、以降成長するにつれて発生する隙間を新たな砂と粘液が補うように形成される。

しかしその内部には両生類特有の柔肌が未だに残されており、ゴムの様な弾力と強度を誇ってこそいたが、乾燥と刃物には滅法弱いのであつた。

「セエア！ツラあ！ウェイオアッ！」

近接班として背中に乗る繁もまた、先程の攻撃で砂岩が碎けて露出したティオウスナハンザキの柔肌十数箇所を不規則かつ的確に切り付けていた。

両手の鉤爪の素早さと槍の長いリーチを巧みに織り交ぜた連携に一

々無駄に軽快なステップが加わり、本来なら切り傷程度ものの数秒で完治してしまう筈の再生力が追いついていなかった。というのも、繁の溶解液がその再生を妨害していたからなのではあるが（しかも溶かし方がまた繁らしくて不快極まりない）。

暫く経ち、ティオウスナハンザキがその丸太型の身体を大きく縦にうねらせる。

幾人かは背中に貼り付いたり各々翼や飛行装置などで空中に逃げる事でどうにか逃げおおせるが、船員の殆どは砂の海に放り出されてしまう。

「アンカー射出！」

「間に合って！」

逢天の指示を受けた船員達が砂漠に落ちた近接班・採取班に向けて特殊な救助用アンカーを放ち、それらを手早く釣り上げる。

あぶれた何人かは香織の魔術で救い出され、結果的に死傷者は皆無であった。

逢天はすぐさまティオウスナハンザキの動きが妙である事に感付き、船外の船員達に船へと戻るよう指示する。

繁もそれに続いて飛行装置で戻ろうとする（ヴァーミンの有資格者である事を明かすと不要なトラブルを招きそうで嫌だった為破殻化はしたくなかった）が、ほんの一瞬出遅れてしまう。

そして次の瞬間、ティオウスナハンザキの筋肉が素早く脈打ち、繁は空中高くへ跳ね上げられてしまう。

逢天が自ら救助用アンカーを放ち、香織が救助用の魔術を放った瞬間。

ヒゲクジラのように大きく砂中から跳び上がったティオウスナハンザキの口が大きく開き、

繁を丸飲みにした。

「！！」

逢天他、船員達やニコラまでもが絶句する中、半ば無関心とも取れる表情を浮かべるのは他の誰でもない、繁の従姉妹にして相方の清水香織ただ一人。

あまつさえ、

「何やってんのよあのバカ……頭良い癖にバカなんだからもう。二十歳になってもあのバカは……」

等と言い出す始末。

そんな事をはつきりと言ってしまったものであるから、当然反感を買わないはずがない。

「ちよつと待って香織ちゃん！

それは流石に洒落とか冗談ってレベルじゃ済まされないよね！？

イトコ同士とはいえ人としてどうなの！？」

ニコラを皮切りに、群集心理に乗せられた船員達は口々に香織を罵り始めた。

その罵り言葉というのは殆どが「人間のクズ」だの「死ね」だの「自分が今生きていることに恥や罪を感じたことはないのか」だのと、感情任せかつ支離滅裂なものであり、その事に馬鹿馬鹿しくなったニコラは思わず怒るのをやめてしまった。

しかしそれでも船員達の勢いは静まるところを知らず、遂に船員の一人がこんな事を言い出した。

「そうだ！こんな人でなしは船から放り出してやろうぜ！
大いなるミガサ・コルト様も、こんな薄情者の魔術師には裁きを下されるはずだ！」

この発言で完全に一致団結した船員達は、早速香織を縛り上げようとする。

流石のニコラもこれは当然止めに入ったが、同罪にされて逆に捕らえられ、香織共々船から放り出されそうになる。

完全に縛り上げたところで、言い出しつぺの男が言う。

「よおおおおおおおつし！縛り上げたか！？
それじゃ早速この薄情無しの卑怯者共を――」

――「いい加減にしなよあんた等あつ！」

船員達の暴挙を見かねた逢天の怒号が、その場の空気を一変させた。

「その内自分達の愚かさに気付いて自然消滅するだろうと信じていたのに、黙って見てりやあ一体何だね！？

感情任せに喚き散らしたかと思ったら、今度は法廷の裁判官気取りとは！

あんた等それでも義と愛と哲学に生きる誇り高きイスキュロン民かい！？

このデゼルト・オルカの一員としての自覚が、ミガサ・コルト号のクルーとしての覚悟があんのかね！？

何が大いなるミガサ・コルト様が！

非力な女を寄つて集つて縄で縛り上げ、この灼熱の砂漠に放り出そうなんてそんな卑劣な行いが、ミガサ・コルト様の御心に叶うとも思つてんのかい！？

馬鹿を言うんじゃないよ！確かにその女の言つたことは酷いだろう！死人を罵るなんて人として最低だ！

だけでもね、その女が何を言おうが何をしようが、今ここであんた等がその女をあんた等の独断で裁いて良いなんて事は決してないんだ！

例えその女がこの場で私を殺そうとも、それをあんた等が独断と感情に任せて裁いて良いわけではないんだよ！

あんた等は法官でもなければ政治家でもないし、ましてや天上の神でもない、只の私の部下だろうに！

身の程を弁えな！身の程を！何時も言っているだろう！『何にしても下手に出なさい。自分が一番下だと思つて努力しなさい』と！

何で船の操縦や機関銃の扱いが判つてそれが理解できないかね！？

そもそもその女だけならまだしもあんた等、最初は見方だつた筈の女医先生まで最終的に悪者にして殺そうとしたらう！

何て馬鹿なんだい！感情に流されすぎなんだよ！第一女医先生がその女に言つたのは、冷静な視点からの説教だつたけれど、あんた等のは揃いも揃つて馬鹿丸出しの暴言だつたじゃないか！

あんた等みたいのが居るから、ヤムタの貴族共やなんかからイスキユロンは脳味噌が豚肉で出来たような馬鹿共の集まりだなんて言われるんだよ！

「しかし、船長――

――お黙り！兎も角あんた等は他人の話を聞かなさすぎる！あと状況の判断も遅い！

何時も何時も感情任せに突つ走つて歯止めが利かなくなつて、そうして事を荒立てたりするんだ！

これは別にあんた等が嫌いで言ってるんじゃないよ。嫌いな
ら説教なんてせずに撃ち殺してるさ。

それもこれも全て、あんた等が大切だから言ってる事なんだ。その
辺り、判っておくれよ」

説教を終えた逢天は、船員の一人に香織とニコラの縄を解くように
命じ、香織に聞いた。

「ところで香織さん、見て話した所じゃあんたは年の割にかなり賢
そうだ。

さっきの言葉だって、深い意味も無く思ったとおりに言っただなんて
事は無いんだろう？」

「はい。私は彼の従姉妹ですから、付き合いももうかれこれ10年
以上になります。

だから私は、あの辻原繁という男がどんな人物なのか、この場では
他の誰よりも理解しているつもりです」

「そうだろうと思ったよ。それじゃあ、聞かせてくれないかね？」

さっきの言葉の、真相って奴をさ」

第四十三話 だから私は彼を信じたい（後書き）

次回、垣間見える二人の絆！

第四十四話 プレプレな彼は死亡フラグくらい叩き折れますから（笑）（前書き

香織の言葉の真意とは！？

第四十四話　ブレブレな彼は死亡フラグくらい叩き折れますから（笑）

―前回より―

「単刀直入に言えば、ですよ」

香織はボトルの茶を一口飲んで言った。

「彼は生きています。」

恐らくテイオウスナハンザキの食道から大腸までの何処かしかで」

「何故言い切れるんだい？」

「何故って、彼がそういう男だからですよ。」

昔からそうでした。私がまだ加減法も満足に出来ない頃からとても頭が良い癖に、余計な所で変こととして死にそうになって、それでも最後には事を荒立てるでもなく嬉々とした表情で無事帰ってくる。

私はそんな彼の姿をもう十年以上見てますから、心配すべきかそうでないかは、その都度の仕草とか態度とかを見れば判るんですよ」

「大した自身だねえ」

「私達二人はイトコ同士というより同い年の兄妹みたいなものでしたから、互いの事は大体理解し合ってるつもりなんです。」

お互いその事を言い合ったりはしませんけど、少なくとも私はそう思ってます。

今までだって、彼が本当に危ない時は何処にいてもそれを薄々感じ取れましたし、彼も私の危機はくまなく感付いていたと聞いてます。ましてや今の彼は身も心も霊長種としての基軸を大きく外れつつありますから、死にくさには余計磨きが掛かってるでしょうし」

「……皆聞いたね？十年以上も青年君と姉弟同然の付き合いをしてる彼女がこう言うんだ。」

信じてやらないでどうするってんだい？

まさかあんだ等……天下のツジラ・バグテイルともあるう男が、よもやテイオウスナハンザキに丸飲みにされた程度で簡単に死ぬとも思うのかね!？」

『断じて思いません!』

逢天のその言葉を聞いて、香織とニコラは驚愕した。

何故逢天がその名前を知っているのだろうか。事前に繁の指名手配がエクスーシア圏内と周辺諸国に限られていると踏んで本名を名乗り、目的もイスキュロン大陸軍本部の名物軍人へのインタビューだと伝えたはずなのに。

ツジラ、青色薬剤師という源氏名はおるか、ツジラジに関する情報は一切漏らさないよう徹底していたというのに。

「八坂船長……何故、その事を……？」

まさか最初から、覚っていたというのですか？」

「いやいや、私はそこまで鋭く無いよ。あんだ達のラジオはみんな大好きだけどね」

「じゃあ何で——「私達ですよ」——あ、あんだはっ!」

「そんなまさか!？」

船室から現れた女に、二人は見覚えがあった。

何せそいつとはほんの数日前まで敵同士であって、ほんの僅かな時間だが共闘した事さえあったのだから。

「お久しぶりです、青色薬剤師様、Dr・フォックス」

綺麗に畳まれた寝間着らしき衣類の山を抱えながら現れたのは、嘗てラビールマにてクブス残党のホリエサ・クエインの部下として暗躍、繁達と一戦交えた双子の片割れにしてヴァーミンの有資格者・小樽桃李であった。

「桃李！？何でアンタがここに居るの！？」

「いやあ、あの後適当なマフィアか悪徳政治家に媚びてまた小遣い稼ぎ&組織破壊でもしようかと思ったんですが適切なターゲットが見当たらず」

「明確な犯罪行為を海外旅行かゲームみたいに言うもんじゃないわ」「近頃妙に色々と物騒な事件も多くなった関係上、各国の警察機関も何かピリついてまして。」

ええ、恐らく原因の三割くらいはあなた方のラジオ番組なんでしょうけど」

「いや前シーズンのあんた等も十分原因になってるよ」

「兎に角諸事情相俟って以前より迂闊に手出しが出来なくなりました、当てもなく彷徨い続けその他諸々の紆余曲折を経た結果、デザルト・オルカ様の船内にて寝間着修繕のお仕事を頂いたわけです」

「いやちよつと、色々省略しすぎでしょそれは。あとパジャマ修繕って何？」

私らが身体張ってあいつと戦ってて、繁に至っては大概即死の丸飲み攻撃喰らってる最中なのに」

「さつき死んでないって言ったのあなたじゃないですか。

それに仕方ないでしょう、普段の私って攻撃力ほぼゼロですし。

その代わり兄はあのケダモノの腹へ潜って中を調べ回ってますけどね」

「じゃああれの背中がトランポリンみたいに脈打ったのって……」

「恐らく兄の仕業かと。多分中でパスタを茹でて居るんだと思います。」

海鮮クリームパスタは兄の大好物ですから」

「そうなんだ」

「そもそも海鮮好きなんですよ兄は。特にエビには独特の拘りがありまして、茹でエビはマリー・アルヌ産の安価な養殖物に限るとか何か」

「いやそこまで聞いてないし羽辰味覚安っ！」

マリー・アル又って好適環境水使った農業的漁業で天下取ったラビ
ーレマの内陸都市でしょ！？」

「好適環境水……？」

「あら、香織ちゃん知らないの？ヤムタ西部の山間部にある坂道ば
つかりの理系大学が作り上げた画期的な発明品なのよ。

それとその大学で人類学教えてるスキンヘッドに眼鏡の男がまた面
白い授業やんのよ。

そいつんとこのゼミ生も白骨見ただけで男前とか何とか言い出す奴
らでね？」

「いや知ってますよ。地球にもバリバリありますし」

「あ、そうなの？何か妙なところでシンクロするわねえ」
「全くで」

―ズドオオオオオオオン！

香織の言葉を遮るように、突如船の真横から柱状の何かが飛び出し
た。

微細な砂を霧状に撒き散らすそれは、目を凝らしてよく見れば先程
のティオウスナハンザキであった。

しかもその鳴き声は、名状し難い苦痛だとか、或いは冒瀆的な不快
感が混じっているようだった。

「全員構えエツ！砲撃用意！」

「ちよつと船長ー！？」

あん中にまだ二人居るんですけど！？」

「大丈夫ですよニコラさん。二人とも妙にタフですし」

「いやそいう問題じゃー」

ニコラが突っ込もうとした瞬間、垂直に苦しみ悶えるティオウスナハンザキの口の中から、マイクで増幅された歌声が響き渡った。

―『グダグダかつ　ッヘーイ！

テレレッテッテレッテレーイ ♪

テレーレーレレレッレレー ♪

テレレッテッテレッテレーイ ♪

テレーッテレーッターライ ♪』

その歌声の主は前奏らしき音楽の部分まで口で歌っていた。

『初手から腐つても ♪

チューナー来なくても ♪

使い続けてりゃ、何時か応えてくれる ♪』

その場の誰もが、その声に聞き覚えがあった。

そもそもこんな状況下でこんな人格破綻の大盤振る舞いとも言うべき歌詞の酷さを誇る歌を歌い出す奴の同定に、時間など掛からない。

ティオウスナハンザキの口の中から、何処から取り出したのであるう台座のようなものに乗って現れたのは、

我等が主人公にしてツジラジの司会を務めるDJツジラ・バグティルこと、辻原繁だった。

第四十四話 プレプレな彼は死亡フラグくらい叩き折れますから（笑）（後書き

読者「どういう事だあああああ！？」（ディスプレイに頭突き）
傍目から見てた人「あんたがどういうことだよ！」

第四十五話　これは軍人ですか？　１　はい、ただのクズです（前書き）

テイオウスナハンザキ戦、決着！

第四十五話　これは軍人ですか？　1　はい、ただのクズです

―前回より―

一通り歌い終わった繁は再びティオウスナハンザキの体内へ飛び込んだ。

その体内で何が行われているのか傍目からは窺い知れないが、被害者である巨獣の上げる鳴咽にも等しい悲鳴のような鳴き声からして、相当酷い目に遭わされているのだろう。

まるで漫画のような光景が繰り広げられた後、遂に力を失い絶命したティオウスナハンザキが砂の中へ倒れ込む。

粉塵を巻き上げながら砂の中へと横たわるティオウスナハンザキの口から、何かが素早く飛び出した。繁である。

その手には逢天から授かった槍が握られており、両手の手甲鉤も刃が剥かれていた。

獣の腹の上に座り込み、船上の仲間達に手を振る繁。

それに応えるかのように船員達は歓喜の声を上げ、香織やニコラも笑顔で手を振った。

―船上―

「凄いねえ、まさか本当に生き延びるとは」
「当然ですよ。」

彼は飛姫種や巨人さえも一人で討ち取る程の実力者なんですから」

「誰かと思えば羽辰さんじゃないかい。」

「一体何時からそこに居たんだい？」

「おかしい事を聞くものですね、船長。」

私は細胞と靈魂との中間的存在故、インスタントタイミングで大概何処へでも行けるのですよ」

「そういえばそうだったねえ。」

「こらいかわ、私ともあろうもんがねえ。はっはっはっは」

『……ところで船長、話は変わりますが……』

「ああ、分かつてるさ。あの大きさを絶命まで追い込んだんだ。暫くは砂上船の事故も減るだろう。」

ティオウスナハンザキはどんな船乗りも軍人も恐れる巨獣だ。

砂漠の生態系では万年トップな上に、体当たりや噛み付きで客船も戦艦も瞬く間に沈めてしまう、名前の通り帝王みたいな奴さ。

となれば、砂漠を主な活動拠点にしてる船持ちの企業には、大体の所に恩を売れるだろうね。

皮や腹から取れた玉や岩は言うまでもなく、骨肉もラビーレマの学者共がこぞって欲しがらるだろうよ」

かくしてティオウスナハンザキ狩りを終えたミガサ・コルト号は、収穫と共にデザルテリアへと進み出し、翌日の夕方にデザルテリアへ到着した。

都市の船着き場にてデゼルト・オルカの面々に別れを告げた繁達は、急速のためひとまず予約していた宿へと向かう。

因みに船で出会った小樽兄妹もこれを期に正式なツジラジスタッフとして認可され、繁達のグループに加わることとなった。

―翌日―

「早速だが、今日は人に会う」

「あれ？船乗るんじゃないの？」

「情報によると、今回の企画に最適な有名人が居るらしい。そいつに誘いをかける」

「有名人、ですか？」

『イスキュロンの有名人と言えば、大抵は政治家か軍人ですが……』
「まさか今回のゲストに退役軍人や政治家を呼ぶの？ やめといった方がいいと思うなあ」

『確かに、昔^{むかし}氣質の退役軍人は柄の悪い奴が多いですからねえ。

そればかりとは言いませんが、報道機関で取り沙汰される退役軍人は大抵酷い奴ばかりだ」

「居るよねえそんなの。現役時代に死んでくれたけど、昔海軍にハーマンヌ・リアメイっていう猿系霊長種が居てね？」

義父のロナルドは退役軍人にしては珍しく結構気の良い人格者のじじいなんだけど、義息がそりゃあもう性悪でさ。

親継いで海兵隊訓練所の教官やってたんだけど、訓練生の扱いがそりゃもう酷かったのよ。

人権無視の罵詈雑言は当たり前、訓練生へのフォローも無し。殴る蹴る、下手すりゃ死ぬような体罰だってあったらしい」

「まじか。ひでえな」

「一昔前ならまだしも、流石に近頃ともなると問題になりますからね。」

案の定各大陸の雑誌やテレビ番組で度々取り沙汰されて、ある番組でインタビュー受けた時に何て言ったと思います？

『俺は偉大な親父の掲げていた崇高で気高い志を継承しているだけだ。』

誇り高いイスキュロンの海兵たるもの、上官の命令や体罰に耐えられもしないようではいけない。

俺の指導は浮世の荒波の中からすれば生やさしいものに過ぎない。その程度で泣き言を言う腑抜けのゴミは自ら喉を射抜いて氏ね』ですよ？」

『田舎の貧民街で盗みを働いていた孤児如きが、偶然にも名家の当主に拾われた程度で何を勘違いしているのやら。』

「優秀だったので父は俺を叱りも怒鳴りもせず、欲しい物はなんでも買い与えてくれた」ってそりゃあんだ、優秀だったんじゃないくて

甘やかされてたんでしょに。

何が浮世の荒波か！世の荒波を知らないのはお前だろうに！

何が腑抜けのゴミか！親の七光りで甘やかされて育った不良のお前が何を偉そうに！

何が指導か！お前のそれは只のくだらない腹いせだ！目的も哲学も本能もない汚らしい暴力だ！」

「落ち着け羽辰、往来で大声出すもんじゃねえ。」

んで、その人格者のロナルドってのは息子の暴走に気付かなかったのか？」

「それが、ロナルド氏は幼い頃から女運に恵まれず、子供を授かるどころか結婚も出来なかったんだそうです。」

それで『この子は神のくださった最後のチャンスに違いない。大切に育てなければ』という思いが暴走シテしまったらしく」

「しかもその時、運悪く不意打ち仕掛けてきた盗賊にハンマーで頭殴られてさあ。」

そっから頭おかしくなっちゃったみたい」

「精神異常ねえ……」

「しかもそれが結構特殊で、他のことに関しては何時も通り全部完璧なんだけど、こと育児となると別人みたいに駄目人間全開になっちゃうらしくってさ」

『お陰で我等がラビーレマの医者もお手上げでしてね』

「その横暴が暫く続いた頃だっけっか、訓練生の一人にちよつと出来の悪い奴が来てさ。」

他の訓練生から散々イジメ受けて、あの馬鹿からも散々な目に遭わされていったの」

「自殺したのか？」

「強ち間違いでもないけど、その訓練生は過酷な環境下で射撃の才能を開花させてね。」

でもそれと同時に精神病を患い始めて、周囲が精神病院に入れよう

って言ってるのにあの馬鹿聞かなくてさ。

『精神病院は他人の力を借りなければまともに立ち歩く事さえ出来ない弱者の巣窟だ。』

絶対無敵のイスキュロン海兵にとっては地獄の方がまだ生温い』って、親の権威振り翳してその訓練生をそのまま学校に入れたままだったんだけど……」

「卒業式前夜、武器庫から銃器持ち逃げしたんだよそいつ。何に使うのかは知らなかったけどね。」

それでそれを見た馬鹿がキレて殴りかかったら、自分が虐めてた訓練生に撃ち殺されて目出度く死んでくれたのよ」

「それで済めばまだ良かったんだけど、撃ち殺してくれた訓練生も気が動転してすぐに自殺しちゃってねえ。」

あとはもう、酷いの一言よ。ロナルド氏が今までの自分を悔いて重度の鬱病になったり、ヤムタの報道機関が在ること無いこと書き綴って方々で言いふらしたり」

「大変だなあ、軍隊ってのも。」

いやあ、俺自衛隊とか行かなくて良かったわ。柄じゃねえし。

やっぱ人間の基本は座学だな」

等と雑談しながら歩く五人は、遂に目的地であるイスキュロン陸軍管轄の大病院へとたどり着いた。

第四十五話　これは軍人ですか？　１　はい、ただのクズです（後書き）

次回、病院での新たな出会い！？

第四十六話　これは軍人ですか？　2　そう、彼女は災いを背負う（前書き）

新キャラ登場！

第四十六話　これは軍人ですか？　2・そう、彼女は災いを背負う

―前回より―

デザルテリア首都圏に存在する、イスキュロン陸軍管轄の大病院。その深奥には、訳ありの事情を抱えた軍人達の治療に用いられる隔離病棟が存在した。

一部屋ごとに分厚い鋼鉄の壁で仕切られ、扉のロックは定められた方法以外では開けることが出来ない。

無理にでも開けようとすれば、患者の首に付けられた首輪から痛覚神経に刺激が下り、居ても立っても居られない程に苦しい（が、しかし決して死ぬことはない）激痛に苛まれ、氣力を殺がれてしまう。病棟と銘打つだけに患者を生かし続ける事が目的であるため、俗に幻術と呼ばれる、精神・感覚・思考に干渉する魔術の類で彩られた室内は患者に自身が最も理想とする世界を見せ続ける。

しかしその実態は全身が白く塗られた無機質で簡素な独房であり、必要最低限の設備が備えられている以外に飾り気は一切無い。

食事は基本的に全自動で供給されるが、幻術はそれさえも患者の望み通りに変えてしまう。

そんな隔離病棟の一室に、一人の女が収容されていた。

ベッドに座り込んだまま動かない女は身長約1・7m、少々広めの肩幅を持ち、長い銀髪を棚引かせている。

しかし異質なのは彼女の右半身であり、金属製の鎧か拘束具のようなもので覆われていた。

その表情は暗く落ち込んでこそいないが、明るく活気に満ち溢れているとも言い切れず、銀髪と白い病衣も相俟って『虚無』を感じさ

せる。

即ち今の彼女には『何もない』。

目的も、欲望も、使命も、本能も、何もかもが感じられない。

必要最低限の行動を取る以外は、何時もこうしてただ何もせず過ごしているだけ。

そんな彼女の名は、リユーラ・フォスコドル。元々の階級は少佐である。

若干21才の若さにして数々の武勲を打ち立てた事でその名を馳せた彼女は、数々の活躍から『砂塵の豹』の異名を持つ伝説的な存在であった。

そんな彼女が何故こんな場所で、生死すらも曖昧に思えるほど無気力かつ不毛な状態でたたずんでいるのか。

その理由と彼女の過去、そして彼女の身に付けている拘束具の意味については、後々述べることにする。

『フォスコドル様、面会をご希望の方がいらしておりますが、如何なさいますか？』

ふと、部屋に備わったスピーカーフォンからそんなスタッフの声がある。

空ろな表情ながらもその声を確定的に聞き取っているリユーラは、微動だにせずそれに答える。

「どんな奴だ？」

『はい。本の題材にするのでフォスコドル様にインタビューをしたい』

「通せ。そしてなるべく丁寧に持て成しな。

私の噂を知りながら、こんなに薄暗くて気味悪いだけの場所にまで足を運んで私に面会を申し込む奴の顔が見てみたいんでな」

その言葉には感情に伴う抑揚というものがまるで感じられず、至極不気味に思えてしまう。

聞くほうからしてみれば、これならまだ稚児の棒読み音読のほうがいいというものである。

『畏まりました。では二分後、そちらにご案内致します。』

面会時間は如何致しますか？』

「相手の気が済むまで、好きなだけ話し相手になってやる」

『畏まりました。相手の方にもそうお伝えします』

—二分後—

コン、コン

「どうぞ」

ガチャリ

「失礼致します」

中に入ってきたのは、我等が主人公・辻原繁ただ一人。

シーズン1でも見せたバツタ型マスクに白衣という出で立ちである。他の四人は宿で待機させており、マスク他数力所に仕掛けた小型カメラからの映像を遠隔送信している。

「初めまして。辻原繁と申します」

「……よろしく、ツジハラ。」

リユーラだ。リユーラ・フォスコドル。

気軽にリユーラと呼んでくれ」

「では、リユーラさん。あなたに幾つか質問があります。よろしい

ですか？」

「良いぜ。答えられる範囲でなら、答えてやる」

「まず、インターネット上で貴女がここへ来る前に、テレビ番組にゲスト出演した際の映像を見させて頂きました。

その時の貴女は、とても元気で明るく社交的な方だったように思えます。この事に間違いはありませんか？」

「無い。自分で言うのも何だが、ここに来る前の私は良く言えば明るく、悪く言えば気が荒かった。

ガキの頃は男の群れに混じってオアシスの森で虫や魚を追い回したり、格ゲーとかガンシューでハイスコア出しまくったもんだ。

喧嘩も散々した。酒や煙草には手を付けなかったし、不良と連む事も無かったが……暴力事件だけはよく起こしてたな」

「有り難う御座います。」

では……これは担当の方から聞いた話なのですが、この隔離病棟内には常時患者の方を対象とする精神干渉系の強力な魔術が施されているのだとかで……」

「そうだな」

「そしてその魔術の影響により、患者の方々は隔離病棟内を自身の願望を精密に反映した理想空間として感じ取ることが出来る、とも聞いております」

「一介の物書きにしては、随分と博識だな。感心したぞ」

「お褒めに預かり光栄です。」

そしてここからが本題なのですが……リユーラさんの目に映る理想世界とはどのようなものなのでしょう？」

「理想世界……か」

「はい」

リユーラは暫く考え込んでから、繁に言った。

「忘れちゃった」

繁は特に驚くでもなく、淡々と聞き返す。

「忘れてしまった？」

「ああ。忘れちゃった。いや、それしか逃げ道が無かった。ここに来るそもそもの理由になった病の影響でな。」

ノモシアの魔術師もラビーレマの医者も、アクサノのシャーマンとかドイルドとかいう奴らも、皆お手上げだと泣く泣く匙投げちゃまってよ」

「左様で……それはそれは、失礼致しました」

「良いんだよ、別に。大概どんな事でも聞くがいいさ。可能な限り答えてやる」

「有り難う御座います。それではあなたの右半身を被うその鎧のよくなものは、一体何なのですか？」

「ああ、これか？実を言うとな病に感染したのは、私の右半身全部でな。」

こうしてないと、色々とヤバいんだ」

「ほう……色々、とは？」

「……悪いが、それについては話す気になれねえ」

「そうですか」

「物書きにしては潔いじゃねえか。どういう風の吹き回しだ？」

「他意はありません。ただ、その御言葉が聞ければ十分です。」

無理に聞いてしまつては、リユーラさんのお体にもよろしくありませんし」

「優しいんだな、お前」

「……ご冗談を、私は欺き逃げ回る事しか出来ない意気地なしの臆病者ですよ」

「そうか？……私にはそうは見えないがなあ」

「そうですね。」

では、リユーラさん。少々失礼な事をお伺いしても宜しいでしょう

か？」

「ああ、どんと来い」

「私の個人的な意見ですが、今ここにいる貴女は大変に無気力で、明るいか暗いか、そういった表現以前に『生き活きとしていない』と言いますか……はつきり申し上げれば『傍目から見るに生き物であるように思えない』のですが……それも病の影響ですか？」

リユーラは暫く口を閉ざしていたが、暫し考え込んで言葉を紡ぎ出す。

「病の影響じゃあ、無え。私個人がそうしたことだからな。

あと訂正だが、そうするとさっき言った『理想世界を忘れた』ってのも、若干語弊のある言い方だったな」

「と、仰有いますと？」

「さっきも話したとおり、私の病てのはかなり妙だよ。治療不可能なんだよな。

で、長いこと苦しめられてる最中に見出した唯一の対処法が……」

「『何も考えないこと』ですか？」

「そうだ。『虚無に近づく』事が私に遺された唯一の逃げ道だったんだよ。

だから今もこうして、自分の感情や欲求なんてもんを限界レベルまで封殺してんだ。

ほんの少しなら大丈夫だが、人並みに出すとやべえ事になりやがるからな」

「成る程……では、リユーラさん」

「何だ？」

「もし宜しければ、聞かせて頂けませんか？ 貴女の過去を」

繁の問いかけに、リユーラは幽かな笑みを浮かべて答えた。

「あ、喜んで」

第四十六話 これは軍人ですか？ 2 .そう、彼女は災いを背負う（後書き）

次回、明かされるリユーラの過去！

第四十七話　これは軍人ですか？　3　いえ、彼女は深手を負いました（前書き）

昔話調で語られる、リユーラの過去とは！？

第四十七話　これは軍人ですか？　3・いえ、彼女は深手を負いました

―以下、リユーラ自らが語った内容―

よっしゃ。んじゃあちよつと昔話っぽくしてみるか。

昔々―等と言ってもほんの二十年程前の事です―砂漠の大陸イスキュロンの田舎の国に、リユーラという女の子が住んでいました。リユーラは昔から元気で明るく正義感が強いとよく言われ、少し怒りっぽくて融通の利かない所もありましたが、それでもみんなの人氣者だと評判でした。

遊び相手は男の子が多く、女の子らしい事なんてしたことがありません。

そもそも彼女は元より風変わりな生まれで、女性の身体に男性としての特徴を併せ持つ『両性具有』という体質でした。

これは身体だけでなく心にも言える事でした。即ち、男女の本能が入り交じっている彼女はバイセクシャルistだったのです。

心身がそれほどに奇怪ならいじめや差別の標的になっても良さそうなものですが、昔から人望のあったリユーラにそんな事をしようという奴は、どうやら居なかったようです。

むしろそれが珍しかったこともあり、リユーラの周りには人がどんどん集まっていきました。

しかし、リユーラの人望と正義感が常に良い方向に動くとは限りません。

運動も勉強もそれなりに出来たリユーラは、少しばかり不器用でもありました。

直情的で熱くなりやすい彼女は、友達や全く無関係の人をも助けようと度々暴力事件を起こしては相手に重傷を負わせて補導される事が何度もありました。

周りはそんな彼女を咎めますが、リユーラはいつも『困っている奴を助けて何が悪い』と開き直ってばかり。

両親はそんな娘を咎めつつも許し、どんなときでも支えてくれました。

ある日、リユーラの両親は言いました。

『リユーラ、よく聞きなさい。

正当な理由無く相手に暴力を振るうのは良くないことだけど、お前の持つ正義の心は本物だ。

進むべき道を間違えないよう、優しさと思いやりの心を忘れずに生きなさい』

リユーラはこの言葉を心に留め、感情的になる事を控え、物事を一歩下がって考えるようになりました。

その頃地元の公立中学に通っていたリユーラは、精神的に成長を遂げた結果あらゆる方面で華々しい成績を修めるようになりました。

そしてその成績と人格を担任の先生に見込まれ、何とデザルテリアにある国軍の士官学校へと入試出来るチャンスを与えられたのです。更に面接での彼女を見て、将来有望な軍人になるであろうと踏んだ士官学校の校長先生は、あるとんでもない決断を下します。

リユーラの秘められた能力を見込んだ校長先生は、特別な手順を踏んで彼女を特待生にしたのです。

特待生とは選ばれたごく僅かな人間だけができることが出来る選ばれし学生の事で、学費免除を初めとして破格の優遇措置を得ることが

出来るのです。

更にそれが名門中の名門とされるデザルテリア国立軍事士官学校ともなれば、大陸全土と言えども選りすぐりの精鋭という事に他なりません。

それでもリユーラはその肩書きに酔うことなく、今まで通り庶民的な正義感と善意に従って生きる事にしました。

そして特待生の名に恥じないよう、無理をしない程度に全力で努力を続けました。

そうしてリユーラが三年生になった頃、彼女の元にまたも素晴らしき話が舞い込んできたのです。

士官学校へ視察に来ていたイスキュロン陸軍の将校が訓練中のリユーラの活躍を見てたいそう気に入ったので、卒業後自分の部隊に配属したいと申し出たのです。

その頃将来何をすべきかで悩んでいたリユーラはこれを喜んで受け入れ、両親を初めとする身の回りの大勢の人達が彼女を祝福してくれました。

卒業後陸軍に配属されたリユーラの活躍は素晴らしく、若くして多くの武勲を打ち立てた彼女は21歳にして少佐の地位にまで上り詰め、その華麗な活躍から何時しか『砂塵の豹』と呼ばれるようになっていました。

国民的英雄になったリユーラは、テレビ番組に出演したり、アニメ映画の吹き替えをしたり、自伝を出版したりしました。

でも彼女はその事を一切誇らず、自分はあくまで軍人であり国を守る事が仕事なのだと言張し続けました。

軍人以外の仕事で稼いだ金は全て寄付したり、両親の仕送りに注ぎ込みました。

軍人でない自分自身の稼いだ金を自分のために使うのは、彼女自身の哲学が良しとしなかったからです。

そうこうしている内に時は巡り、リユーラが23歳の頃。

故郷でノモシア民魔術師による戦乱が起こり、急遽リユーラ率いる大隊が駆り出されることになりました。

部下達と共に故郷へ向かったリユーラが見たのは、無茶苦茶に破壊されて変わり果てた故郷の姿でした。

リユーラは部下達を率い、時に現地の人々を助け、時に敵の魔術師達と壮絶な戦いを繰り広げました。

リユーラは大勢の魔術師を殺しましたが、敵の魔術師も負けじとリユーラの部下達や生き残った人々を殺していきました。

それでもリユーラはぐつと涙を堪え、生き残った人々と共に必死で戦い抜きました。

そして二十日間に及ぶ激闘の末、敵をあと一人という所まで追い詰めたのです。

敵の魔術師は魔力も体力も使い果たしており、抵抗はほぼ不可能でした。

リユーラはその魔術師に、「投降して罪を償うのなら助けよう」と交渉を申し出ます。無抵抗の相手を殺すのは、彼女の哲学が許さなかったからです。

しかし相手の魔術師はそれを頑なに拒み続け、遂に抱えていた硝子瓶を叩き割ると、自ら舌を噛み切って死んでしまいました。

こうして全てが終わったかに思えたのですが、事態はまだ終わってなど居ませんでした。

硝子瓶の中に入っていたタールのようなものが唐突に動き出したかと思うと、それがリユーラの右半身にへばりついたのです。

タールは服の下へと潜り込み、肌へと直に染み込んでいきます。

リユーラはそれを必死に食い止めようとしますが、強く抵抗すれば

するほど全身に激痛が走り、立つ事さえまなくなってしまう。

タールの染み込んだ場所はそれと同じような色に染まり、彼女の右半身を恐ろしい怪物に変えて行きます。

「やったぜ！遂にやったんだあッ！」

右肩から硬い軍服を突き破って飛び出た蛇とも魚ともつかない不気味な怪物の頭が、低く嘸しわがれたような恐ろしい声で叫びます。

「俺は助かったんだ！こいつだ！この女だ！ああ、最高だ！この女とならやっていける！」

この女の為なら何だって出来る！俺は生きてえんだ！あんな生活はもうご免なんだ！」

更に怪物は長い首を曲げてリユーラの方へ向き直り、言いました。

「すまねえな、姉ちゃん。痛かったかい？だが怨まねえでおくれよ、仕方が無かったんだ」

「仕方……無い、だ……と？どの、口が……ッ……」

「おいおい、落ち着けよ。身体の力を抜いてリラックスするんだ。そうすりゃあ痛みも消える」

「……」

「だからよオ、そう睨むなつての。俺アアンタの敵じゃねえよ。獲って喰うだの取り憑いて操るだの、んな真似はしねえから安心しな」

等と言う怪物でしたが、小さい頃から男性向けの漫画やアニメが大好きだったリユーラは、その影響からか怪物の言うことを信用できません。

「黙れ……お前の言うことなんて誰が信じるか……ッ……」

「……はあ……判ってねえなあ……俺アアンタが好きなんだ。

餌としてとか力モとしてとかじゃなく、純粹に友達として好意を向けてんだよ。

いきなり飛びついちゃったのは悪いと思ってる。

けど仕方無かったんだ。あのままだと死んで——「悪いお化けめ！少佐のお姉ちゃんから出てけっ！」

近くに居た子供が投げつけた水銀体温計が、怪物の口の中へ入りました。

それに驚いた怪物は思わず体温計を噛み砕いてしまいます。

「ツぐえあおうあがぎげっ！」

かッ！馬鹿なツ！てめえ、不完全体の俺の唯一の弱点が水銀だと何故解ったア！？」

水銀にを飲まされた怪物は、萎みながらも吐き捨てます。

「頼む……俺を拒絶しねえでくれっ……！」

俺にはもう、お前しか居ねえんだよ……頼む……」

そう言つて怪物は姿を消しました。

しかし、リユーラの右半身は依然として元に戻る気配を見せませんでした。

デザルテリアの本部に戻ったリユーラはそこで様々な治療を受けましたが、どれも効果はありません。

あまつさえ感情が高ぶると、その隙に付け入って怪物の声が頭の中へ響き渡り全身に激痛が走ります。

リユーラはこの事から、最早まともな生活は送れないと思い、自ら志願し隔離病棟に収容される道を選んだのでした。

彼女は表向きには戦死扱いとなり、多くの人々がそれを悲しみました。

しかし、一部でまことしやかに信じられている都市伝説にはこんなものがあるのです。

——リユーラ・フォスコドルは生きている。

彼女は戦場で秘めた力に目覚め、その力を制御出来ないが為に国立

病院の隔離病棟で生かされているのだ――

そして今日も、リユーラの一日は無色に過ぎ去って行くのです。

第四十七話 これは軍人ですか？ 3 いえ、彼女は深手を負いました（後書き

怪物の真意とは一体何なのか？リユーラの結末は？繁はどう動く？
全ては次回、きつと明らかに！（多分！）

第四十八話　これは軍人ですか？ 4　うん、結構曲者っぽいね（前書き）

過去を語り終えたりユーラに告げられる、母校の現状。
そして彼女の感情が高ぶったとき、遂に奴が現れ……

第四十八話　これは軍人ですか？4　うん、結構曲者っぽいね

―前回より―

「……とまあ、こんな事があつてな。それ以来私はここで過ごしてる。満足してるかと聞かれても上手く答えられねえが、そもそも今の私にや満足なんて贅沢だと思えば納得が行く」

「……左様で。」

それと、ですな。リユーラさん」

「何だ？」

「貴女の出身校は、デザルテリア国立陸軍士官学校で間違い在りませんね？」

「ああ、そうだな。本来は中高一貫だったが、私は特別に高校から入れて貰った。」

学校としては異例の事態だったそうだ」

「そう、ですか」

「私の出身校がどうかしたのか？」

「いえ……実は風の噂で耳にしたのですが、何でも士官学校の教頭先生が代わられたとか何とかで」

「代わった？『教頭として学校の敷地内に骨を埋める』が口癖の、デイロフ教頭がやめたのか？」

「ええ。突然食道癌を発症し、療養のためやむなく休養をとられるそうで」

「そういえば教頭、学校でも一二を争う飲兵衛だったなあ……」。

それで、新任の教頭はどんな奴だ？」

「鼠鯨系鰓鱗種の秋本・九淫隷導・康志という男です。表向きには真面目で博識な人格者として通っています」

「……表向きには？まるで裏の顔があるとも言いたげだな？」

「ええ、あるのです。裏の顔が」

「マジか……どんな顔だ？」

「どんな顔だと、思われますか？」

「ヤクザと繋がってるとか」

「違いますな」

「じゃあ違法な品々を影で売り捌くブローカーだとか」

「それも違います」

「ならヤク中」

「外れです」

「ガキとやりたくてしょうがないキチガイ変態野郎」

「僅かながら近い」

「じゃあガキの所を女に変換」

「性格に於ける本質についてならそれで正解です」

「性格……？どういう事だ？」

「つまり問題は、奴の嗜好などではなく、行動にあるという事です」

「……行動？」

「はい。見境無き好色の秋本には自分より遙かに若い四十八人の愛人が居り、全員が士官学校に潜んでいるのです」

「四十八人……とんでもねえ人数だな」

「ええ。ある者は生徒として、またある者は教員、用務員、売店店員等職員として、ひとかたまりにならないようまばらに潜んでいるらしいのです。」

そして秋本は自ら考え出した校則と愛人共を基軸に、士官学校を独裁的に支配しているそうなのです」

「な、何だとっ！？」

リユーラは驚愕の余り思わず立ち上がった。

「そんな事が、そんな馬鹿な事があってたまるか！あそこは私の第二の家だ！」

おい、ツジハラ！その秋本って奴は何処にいる！？野郎、絶対に許さねえ！」

怒り狂ったリユーラは、繁の襟首を掴みながら大声で言う。

「落ち着いて下さいリユーラさん。秋本の所在なら判っていますが、今の貴女では手の出しようも無いでしょう？」

それに、そんなに感情的になって大丈夫なんですか？」

「何のことだ！？」

「いやだから、必要最低限以上に感情が高ぶったりすると――

――「うおおおおおおおおあああつ！何だとおおおおお！――
――こ、こいつは一体っ！？」

突如拘束具に被われていた筈のリユーラの肩から、肉食恐竜とも犬とも鮫ともつかない形をした首の長い怪物の頭が現れ、低く囁れた青年が中年のような声で叫んだ。

それと時を同じくして、リユーラが苦しみながら床に倒れ込む。しかし隔離病棟収容者とはいえ元軍人、受け身だけは取っているらしい。

「何てこったア、ちくしょおおおおお！うあああああゝッ！俺のッ、俺の命より大切なリユーラにとってのッ、大切な母校があッ！

そんな訳の判らねえ骨無しのクソ野郎に支配されてやがるだとおおおおーッ！？

なんてことだ…なんてことだっ……ひでえ……酷すぎるぜ…畜生…なんてこったあああゝッ！

うえっへあああああゝッ、どうしてなんだあああああッ！
どうしてこうなったあああああああッ！」

怪物は先程まで怒り狂っていたかと思えば、今度は滝のような涙を流して鳴き始めた。

流石の繁もこれには驚いた。驚かざる終えなかった。リユーラに謎の怪物が寄生しているとは聞いたが、まさかこんな性格だとは思っても見なかったのである。

「ああ、あの、とりあえず涙と鼻水を拭いてはどうでしょう？」

「おぶ、ずばべえっ（訳：おう、すまねえっ）」

繁は恐る恐るポケットティッシュを袋から抜くと、一袋分束で差し出した。

怪物は首の真ん中あたりから猿とも虫とも付かない形の腕を出してそれを受け取ると、全体の四分の三近くで涙を拭き、更に残る四分の一で鼻水をかんだ。

「どうです？落ち着きましたか？」

「おう…何とかな。有り難うよ、バツタ面の兄ちゃん」

「いえいえ、幾ら相手が得体の知れぬ生物であろうとも、困ったときはお互い様ですから」

「優しいなあ、兄ちゃんは。リユーラみてえによう、良い奴だなあ、あんた。」

こんな『顔に刺青入れた金髪の悪徳科学者みてえな声』した化け物だからって、物投げねえでちり紙くれるなんてよう」

「何を仰有いますか、貴方の声はどちらかと言えば、『いざというときには愛と大儀の為危機に立ち向かう勇敢な父親のような声』ですよ」

「そうだとしてもだぜ？声云々以前にこんなんが出てきたらヒいちまわねえか？」

「まあ…最初見たときにはかなり驚きましたが、悪い方には見えませんでしたから。」

自分以外の誰かの為に、あんなに大声で涙を流して泣ける方が悪だなんて、そうそう有り得ませんよ」

「そう思うか？」

「ええ。万が一悪意を完全に覆い隠してそこまでの演技が出来る方が居たとして、貴方はそうでないと見える。

そこまでする程の悪党ならそんなエネルギーを無駄遣いするような真似はせず、早急に私を手にかけている筈です。

仮にその先の先の先の、更にその果てまで読み通すような頭脳の持ち主が居たとしても、私が思うにそういった手合いは悪党五千兆人に一人居るか居ないかでしょうし」

「そうなんだよ、俺って不器用な上に積分も出来ねえ大バカでよう、出てくると何時もこうやってこいつを痛めつけちまうんだよなあ。

俺はただ、こいつの事が好きで好きでたまんねえだけなんだけどなあ……」

怪物の声は渋く、少し嘔れてこそ居るが気迫と威厳を感じさせるものだった。

しかしながらその喋りから読みとれる胸中たるや、まるで思い人に上手く胸の内を伝えられず、返って誤解を招き距離を置かれてしまう現状に思い悩む思春期の少年のようであった。

リユーラは思った。

「（私はもしかして、こいつの事を誤解してたのかもしれない……）」

そう思った瞬間彼女は、自らの全身を襲う激痛が幽かに和らいだように感じた。

第四十八話　これは軍人ですか？ 4　うん、結構曲者っぽいね（後書き）

疾患はまさかの思い込み！？

次回、遂に二人の心が通じ合う！

第四十九話 これは軍人ですか？ 5 ・ああ、奴らは実に面白い（前書き）

リユーラと怪物、遂に和解か！？

第四十九話 これは軍人ですか？ 5・ああ、奴らは実に面白い

―前回より―

「それで、そのクソ野郎を兄ちゃんはどうするつもりなんだ!？」

「実を言つと、既に対応のために動き出している組織がありましてね。」

何でも士官学校に潜入し、内部から教頭と愛人共を叩きのめすのだとか」

「ほう、そいつぁマジか!？ すごいぜ! やったなあ!」

繁と怪物の会話に花が咲く中、リユーラは密かに考え込んでいた。

「（私はガキの頃から漫画やアニメが大好きだった。魔術や学術で派手に戦う奴が特に。」

んで、そういうのには幾つかお約束つてのがあって、そういうのは基本的に現実でも同じだったんだ。

お約束の中でも特に印象的だったのは『身体に寄生してくる奴は危ない。そいつが喋るとなると尚更』って奴だったなあ。

そうだ。だから私はあの時、こいつの存在を拒絶しちゃったんだ。

こいつに騙されそうになつてゐるんだ、受け入れたら殺されるんだと勝手に思い込んで。

こいつの話をろくに聞こうともせずに……聞いた上で拒否るんならまだしも、聞かずに拒否るなんてな……バカじゃねえのか、私は。フタ開けて見りゃあ、こいつ中々良い奴じゃんよ……そうだよなあ）

―

考えを改める内に、リユーラの激痛はどんどん治まっていく。

そして痛みが完全に消えたとき、リユーラは怪物に言った。

「嫌ったりして悪かったな。お前、本当に私が好きだったんだろ？」

「おお！そうだよ！やっと判ってくれたか！俺あ嬉しいぜ！」

「こつちこそ、許してくれとは言わねえからさ……やり直そうぜ？」

「許さねえ訳ねーだろ！そもそも許すもクソもありやしねえよ！」

お前と分かり合えた！それが一番価値のある事なんだ！」

「そうか…嬉しい事言ってくれやがる。」

そついやそうだがお前、名前は？」

「俺か？俺アバシロってんだ」

「バシロ……『王』って意味だな。堂々としたお前にピッタリだな」

「ハハハ、止せよ。俺ア王なんて器じゃねえ。良くて足軽だ。」

ま、お前が女王だってんなら考えねえでもねえがな」

「いやいや、それこそ柄じゃねえさ。」

こうして話してもわかるんだ。お前と私は案外似てるってな」

「そうかよ！こいつあ一本取られたね！だが似たもの同士ってのは中々嬉しい事だぜ！」

和解後、暫く談笑し合っていた二人だったが、リユーラはふと繁を見て言った。

「なあ、ツジハラ」

「何でしょう？」

「お前さっき、秋本をブチのめす為に暗躍しようとしてる組織があるって言ってたよな？」

その組織の奴に会わせてくれねえか？母校を独裁支配なんてしゃがるクソ野郎は、許しておけねえんだ」

「俺も同感だぜ。リユーラは俺に生きる意味をくれた。」

だから俺には、リユーラが守りたいモンと一緒に守る義務がある！

頼むぜ兄ちゃん、組織のヤツと話をつけてくれ！」

頼み込む二人に、繁は笑みを交えて言った。

「ああ、その件なら大丈夫ですよ。

お二人は組織の代表者に気に入られ、恐らく組織にも受け入れられるでしょう」

「マジか!？」

「そいつあ淒え!だが何故だ!？」

「何故つて、貴方達は既に出会っているんですよ。組織の重鎮に」

「何!？何だと!？」

「何時だ!？俺達は何時、そんなスゲー組織の重鎮なんてヤツに出会えてんだ!？」

「何時?おかしな事を聞くんですね」

目を輝かせる二人に、繁はマスクを取りつつ言った。

「組織の重鎮とは私ですよ。私、辻原繁と申します。

またの名を『ツジラ・バグテイル』」

「ツジラ……ツジラだと!？まさか、お前があの!？」

「何だバシロ、知ってるのか!？」

「ああ、お前は毎日俺を押さえつけるのに必死だったから聞きそびれててたんだろ?が、チロつと話を聞いたことがあるんだよ。

ついこの間、カタル・ティゾルで突如放送が始まった謎のラジオ番組があるってな。

『ツジラジ』つつーんだが、メールや投書で寄せられた企画にパーソナリティ共が身体を張って生中継で挑んでいくつつー何とも面白い番組だそうだよ…噂に寄ればジユルノブル城の奴らを血祭りに上げ、列甲大関連の高校で暴れ回ってたクブスの生き残りを皆殺しにしたんだそうだ!

で、その番組の司会つてのが『ツジラ・バグテイル』……つまり今俺達の目の前にいるこの兄ちゃんて訳だ！」

「な、何だつてエ！つまりアイトラスのクス共に、クブスの変態野郎共の生き残りまで始末したつてのか！？」

おま、バカ！そんな英雄同然の御方にタメ口なんて聞いてんじゃねえ！」

「うへあつ、そうだった！す、すみませんツジラ様！」

俺つて奴あ不器用バカなもんでつい貴方様に無礼な口を！」

「ああいえいえ、気にしないで下さい。それに英雄だなんて烏滸がましい、ただの自己満足ですよ！」

「何を仰有いますか！私あガキの頃からアイトラスやクブスにや腹が立ってたんです！」

それを根絶やしにしてくれた貴方様を、英雄と呼ばずして何と呼びましょう！」

「ああもう、解りました。解りましたから何でも良いですから敬語をやめて下さい。」

年下相手に畏まってちゃ貴方らしくないですよ」

「いえ！そいつぁ譲れません！」

「そうでさあ！俺達ア腐つてもイスキュロン民です！とどのつまりは愛と義と哲学が俺達の信条！」

ましてや敬意を忘れてちゃあ、この大陸の基盤をお作りになられた黎明六英傑が一人、ミガサ・コルトの神託騎士たるユウゲン様の名が泣くつてもんです！」

「どうしてもと仰有るのでしたらツジラ様、貴方様と対等という事にさせて下さい！それでなら納得致します！」

二人の気迫に気圧された繁は、渋々二人の申し出を受け入れることにした。

「……解った。じゃあ俺とお前らはこれから対等だ。これで文句な

いか？」

「「勿論！」」

「それは良かった。……で、問題はお前らをどうやってここから連れ出すかだが……まあ良い、俺に任せておけ」

「有り難うよ！」

「恩に切るぜ、繁！」

かくして繁は一度病院を去り、リユーラを合法的に病院から連れ出す作戦を考え始めた。

第四十九話　これは軍人ですか？　5　ああ、奴らは実に面白い（後書き）

繁の考え出した作戦とは？

次回、リ्यूラがとんでも無いことに！

第五十話 これは軍人ですか？ 6 はい、どちらも瀕死です（前書き）

繁は一度宿に戻り、ひとまず報告

第五十話 これは軍人ですか？ 6 はい、どちらも瀕死です

―前回より―

「さて」

その日の夜、宿（と、言っても値段の割に所々中途半端に設備や待遇の良いビジネスホテル）の一室に集った我等がツジラジのメンバー達。

「今日は一部で『生存している』という噂の流れているリユーラ・フォスコドル元陸軍少佐に実際に会ってみたわけだが、凄かったな」「うん、凄かった。まさかあんなオチになるとは……」

「あの手の怪物は普通狡猾で打算的な性格で、寄生対象を操って暴れ回ったりするのがスタンダードなもんだけど」

「もしくはあのまま取り憑いて殺害・捕食なんてパターンもありますよね」

「しかしフタ開けてみれば何て事はない、恋するピュアな熱血少年っぽい奴だったと」

『いやあ、ヒトは見掛けに寄らないなんてのはしつこく言われますが、まさか謎の怪物相手にもそれが通用したとは……』

「んで、まあなんつうかアレだ。」

昼間も言ってたが、あいつ等出すぞ」

「『『』は？』『』『』」

「いやだから、出すんだよあいつ等を」

「出すって、何処から？」

「何だ香織？女の癖に鈍いな。」

出すつつつたら病棟から決まってるんだろ」

「ああ、成る程」

「そっちでしたか」

「いやいきなり出すなんて言うから何かと思って」

『成る程確かに、あの二人をメンバーに誘い入れることが出来れば戦力になるだけでなく、普通のラジオらしい企画もしやすくなりますね』

「だろ？何時も血生臭い企画ばかりつてのもアレだしよ、予め録音しといたのを電波ジャックで流しや良いんだから自宅で煉●武通信しつつ反省会出来るし、編集出来るしな」

「デュエルは？」

「遊●王なら可だな。向こうにデッキ置き忘れたからこっちで組み直さねえと…あ、制限ルールも向こうと違ってたらヤベエな…キーカードが揃うかどうか……」

等と雑談に花を咲かせつつ、五人の会議は進んでいく。

—翌日の隔離病棟—

繁は再びリユーラの部屋へと面会に訪れていた。

適当にツジラジについて説明した後、リユーラをあくまで合法的に病棟外部へ連れ出す作戦を説明した。

奇妙な事に詳細な説明がなされたのはバシロのみであり、何故かリユーラには簡単な指示と気構えについての説明があっただけだった。

そしてその日の夜。リユーラは作戦を実行に移す。

「（確か、まずコップに水道水を半分より少ないぐらいまで注ぐ…
つと）」

リユーラは細心の注意を払って作戦を実行する。

「（それをこぼれないように回して……机の上に置き40数える…）」

四十秒後。

「（あとはそれを飲んで二十秒以上したら、非常用呼出しブザーを押して…）」

等と考えながら待っていると、リユーラの体を突然凄まじい発熱・動機・息苦しさが襲う。

「（つぐおああっ…なん、だ、この…発熱と、息苦しさはっ…）」

苦しみ転げ回るリユーラは、ふと繁の言葉を思い出す。

―『何があっても状況を疑うな。恐れず段取り通りにやれ』―

「（そうだ…段取り通りに…仮に奴が私を殺すつもりだったにせよ、ここで助けを呼ばなきゃ死んじまう！）」

リユーラは必死の思いで這って動き、乱暴に非常用呼出しブザーを叩く。

暫くブザー音が鳴り響き、スタッフからの応答が返ってきた。

『どうしました？』

「苦しい…助け…助けてくれ！息苦しい…熱い…今…にも、今にも、死にそうだ！」

『畏まりました。直ぐに救護班を其方に呼び寄せます』

「あ…ああ…なるべく、早く頼む…」。

（クソ…何だこりゃあ…マジで死ぬんじゃないか私…つか、バシロの野郎…何処行っただ…？）

原因不明の発熱・動悸・息切れに苦しめられたリユーラの意識は、時間が経つにつれて加速度的に薄れていく。

そしてリユーラの病室に救護班が到着したとき、倒れ伏した彼女の身体からは既に体温が消え、脈拍も途絶えてしまっていた。

この事はすぐさま軍上層部に連絡され、会議の結果死因調査の為司法解剖が決定。

急遽ラビーレマより専門家のチームが召集される事となった。

第五十話 これは軍人ですか？ 6 はい、どちらも瀕死です（後書き）

リユーラ・フォスコドル、まさかの死亡！？
次回、リユーラ&バシロの運命や如何に！？

第五十一話 これは軍人ですか？ 7 はい、従姉妹の名言です（前書き）

リユーラとバシロの運命や如何に！？

第五十一話 これは軍人ですか？ 7 はい、従姉妹の名言です

―前回より―

―ラ―

(……)

―ユーラ―

「(……ん、何だここは……私は確か、死んだ筈……)」

―リユーラ、聞こえるかー？―

「(この声……―繁かッ!?)」

ガバァ

深い眠りから目覚めたリユーラは、ベッドの上に寝かされていた。周囲には誰も見当たらない。この部屋が何処かは解らないが、少なくとも死後の世界でない事は確かなようだ。

しかし彼女は全裸な上に、右半身の拘束具は外され、変異した体組織が脈打っていた。自覚はないがかなり魔されていたのであろう、シーツが汗で湿っていた。

「これは……一体……私は死んだ……そうだ、死んだ筈だぞ……？」
一人考え込んでいると、部屋の戸をノックする音が聞こえてきた。

「……入ってくれ」

ドアが静かに開いたかと思うと、エプロン姿で皿か何かを乗せたプレートを持った女が入ってきた。

女の背はリユーラよりも低く、見とれるような深紅のロングヘアを棚引かせている。

「漸く目が覚めたみたいね……良かった。さっき繁が起こしに行ったときは相方さん共々ピクリともしなかったって言うから」

女はプレートをベッドの側にあつたテーブルに置いた。
中を見てみると、どうやら揚げ麵を茹で戻したものらしい。橙褐色のスープからは、香ばしい香りが漂ってくる。

「……そうか…それは悪かったな……」

「良いのよ別に。それに謝るのは寧ろ繁の方でしょ。何もあんな事しなくたって、貴方を連れ出す方法くらいいくらでもあつたでしよ
うに」

「……ああ、いや、良いんだ別に。」

それより、幾つか聞いて良いか？」

「答えられることなら」

「まず第一に、あんた一体誰だ？」

「私？　そういえば自己紹介がまだだっけ。」

初めまして、私は清水香織。繁の従姉妹で、ツジラジでは司会と連絡係をやつてるの」

「そうか……じゃあ次に、倒れてから記憶が無いんだが……私は一体何をされたんだ？」

死んだと思つていたはずなのに、何でこんなところに居るんだ？あ

と、何で服が無い？」

「OK、一度には無理だから順番に答えていこうか。貴方が熱出して倒れたのは薬のせい。息苦しいのも心拍数があがったのも、全部。」

この辺りに棲息してるモリジガバチっていう蜂の幼虫は、頭と身体の側面に円錐形をした毒腺毛があつて、そのせいで『ハリムシ』って呼ばれるんだけど、その虫が持つてる毒から作った薬。

その薬を服用したあなたは一時的に発作を起こして仮死状態になったの。

で、軍上層部の脳に私の魔術で介入してあなたを司法解剖にかけるよう仕向け、死体運送業者のふりしてあなたを運び出したってわけ」

「そうだったのか……」

「服がないのは、仲間の元開業医がそうするように言ったから。鎧みたいなのも解熱の邪魔だったから外させて貰ったわ」

「そう、か。苦労かけたな……」

「謝らなくなつて良いのよ。あなたも相当苦労してきたんでしょ？」

「いや、そんな事あ無えさ……私は甘つたれだ。好き勝手生きてきた癖に、天才だ優秀だと周囲からチャホヤされて育ってきただけの甘つたれだ。」

褒められるような事なんて一つも――

――「果たしてそれはどうか」――

――「な？」――

「だつてそうじゃない。貴方の過去を繁から聞いて、気になったから調べてみたんだよ。」

あなたは自分のことを『周囲の七光りで出世した自分勝手な甘つたれ』なんて思つてるかもしれない。

でも、周りのみんなはそんな事思つてないんだよ。

インターネットで貴方の名前を検索にかけただけで、ファンサイトが幾つも出てきたよ。

有名人には大体毒づくのがセオリーな掲示板サイトでも、逆に貴方を否定する奴が叩かれる始末だったし」

「だから……何だってんだ？他人の評価なんてアテになんのか？」

「なるね。寧ろ他人の評価だからこそアテになるんだよ。」

『自分自身のことは自分が一番よく理解出来ている』っていうのは間違ってる。

でも、自分を客観的に見るっていう事は誰にでも簡単に出来る事じゃないし、他人じゃなきゃ気付けないような事だってある。

物事を計る計りは一つじゃいけない。色々な計りを幾つも使って、ようやく真実に近付ける。

自分の考えも他人の考えも取捨選択して、ようやく本当の自分が見えてくる。

それが世の中つてもんなんだよ、きつと」

「他人の評価も強ちバカに出来ねえってか。」

有り難うよ、香織。お陰でなんか元気が出たぜ」

「そう、それは良かった。あと、良かったらスープ食べてね」

「おう、貰っとく」

「それじゃ、何かあったら呼んでね」

そう言って、香織は部屋を後にした。

「……繁の従姉妹か……なあバシロ、お前はと思う？」

その言葉に応じるように、露出したリ्यूラの右肩からバシロが顔を出した。

「どうって言われてもなあ……見た目以外で解ることと言やあ、かなり良い女だって事と魔術師だつてことぐれえだぜ」

「それは私でも解ってたんだよ。」

繁にせよあの香織って女にせよ、どっちも私にとって最高なのは違い無えんだ」

「……どういう意味だ？」

バシロは嫌な予感がした。

「どういう意味って、決まってるだろ？」

容姿^{ツラ}、性格^{キャラ}、体形^{スタイル}の全部がだよ！」

「……はあ？」

バシロはリユーラが何を言いたいのか今一判らなかった。

「いやだからさ……はつきり言うとかいつ等、マジけしからん！もといエロ過ぎるっ！」

「つまり、平たく言うത്？」

「やりてえ！」

予感が的中した。

「……そついやお前フタナリだったな」

「厳密には先天性生殖機能併合症つつう奇形の一つらしいけどな。

奇形と言ったって障害が出るわけでもねえ。ただ孕むも孕ますも自由ってだけでよ。孕ます率が極端に低かったり、孕む機能が無かったりするフタナリとは別物だ。

調べてみたら男ベースもあってよ、フタナリは乳が張り出してんだが先天性生殖機能併合症はそれがなく、ツラも身体も生涯女みたいなんだと」

「ああ。そこまで頭の回る作者が怖えよ」

「ま、私みたいな身体の奴が皆バイなわけじゃねえ。

私の場合、男と女の気質がゴタ混ぜんなったような精神状態でよ。バイはそれの弊害だ」

「そつなのか」

「まあ、やるのも大事ではあるが、だ」

「どうした？」

「今の目標はひとまず、秋元の野郎を叩き潰す事だ」

「確かに、何をするにもそれが最優先だな」

こうして、新たな決意を胸に二人は再び眠りにつく。

第五十一話 これは軍人ですか？ 7 はい、従姉妹の名言です（後書き）

次回、遂に士官学校の実態が明らかに！

第五十二話　これは軍人ですか？ 8　はい。殆ど台詞で御免なさい（前書き）

ある公務員の51日間。

第五十二話　これは軍人ですか？ 8　はい。殆ど台詞で御免なさい

―デザルテリア国立士官学校数学教師高志・カーマインの部屋に遺されていたレコーダーより―

カチャリ

―ズツ――ザザア――チツ、チチツ――

《一日目。

黒板用コンパスを新調した。やはりこの手の金属製品は岸本工業に限る。

数日前から話題になっていた新任教頭の件だが、今日になって漸くその顔を拝むことが出来た。

確か秋本とかいう名前で、ヤムタの大学を出た鼠鯨系鰈鱗種だというが、どこか胡散臭かった。

ディロフ教頭の優秀さに慣れていた所為だろうか？それにしてもおかしい》

《五日目。

―昨日から引き続いて胃が痛い。

医者曰く胃潰瘍になる恐れがあり、入院の可能性も捨てきれないという。

これもあいつの…ヴァロータ・パルス・カラリエーヴァ・イスカとかいう無駄に名前の長い女子生徒の所為だ。

理事長の孫娘であるのを良いことに、言いたい放題散々言うだけ言うしか脳のない奴だ。

体育担当の日向先生曰く、姉のリエズヴィエも相当な問題児だったが理事長の手前注意も出来なかったという。

全く、どうすればいいのだろうか……」

《九日目》

昼下がり、暇だったので久々にハコガメの飼育小屋に行くと秋本教頭が居た。

教頭は何処か虚ろというか悲しげな表情で、どうにも話し掛けるのが躊躇われた。

するとそこへ、高等部の女子生徒が現れた。

衛生科の二年生で有角種、名前は確かりノ・ピプシル。私が教えている生徒の一人である。

近頃の富裕層としては珍しい人格者で、クラスメイトからも慕われていた。

様子を見るに、ハコガメの餌を持ってきたのだろう。ふと用事を思い出したので、その場を後にした。

しかし今になって思えば、彼女のスカートは少々丈が短すぎるのではないだろうか」

《十三日目》

近頃は特筆すべき問題も無く、胃の調子も良い。

作家志望だった友人が新人賞を受賞、デビューが決まったという。今度、他の友人達と共に祝賀パーティを開催しよう」

《十七日目》

祝賀パーティ当日。彼は涙を流して喜んでくれた。大成功だ」

《二十日目》

作家志望だった友人のデビュー作が出版された。ヤムタが舞台の推理小説で、高校時代書き連ねていた作品のリメイクだと言うが、とても面白い」

《二十二日目》。

秋本教頭に召集され、緊急の職員会議が開かれた。何でも、近頃生徒達の校則違反が酷いので取り締まりを強化するか。その場に居た殆どは賛成の姿勢を見せたものの、私は教頭の言葉に疑問を抱かざるを得なかった。

手始めに翌朝の持ち物検査から始めるらしい。教頭曰く『違反状態の解消が見られない限り校内に入れるな』との事。

しかも運の悪いことに、私も教頭から名指しでリーダーに指名されてしまった。

曰く『朝早くから学校に来て校内の掃除や必要な配布物の準備などを済ませてくれるカーマイン先生の生の勤勉さを見込んで』との事らしい。

実際はそんな作業など直ぐに済ませて職員室の隅で一人ゲームしてただけなのだが。

そもそも持ち物検査にリーダーも何も無いだろうに《

《二十三日目》。

どういう事だ！？おかしい！おかしい！何が起こっている！？

今日は珍しく授業が無く、仕事と言えば日課と登校時の持ち物検査だけだったのに！

あんな持ち物検査が果たして有り得て良いのか！？女子生徒に抱きついたり、男子生徒を木刀で殴り倒したり！

馬鹿げている！有り得て良いはずがない！

挙げ句の果てには歩兵科の教師が女子生徒の改造制服を無理矢理引きはがし、狙撃科の教師は指輪・付け爪等というアクセサリー類の装着を理由に拳銃で男子生徒の手を吹き飛ばした！

止めようかとも思ったが、生来の臆病が災いしてはつきりと意見を申し立てることも出来ない。

最初は気の狂った教員達が勝手な考えで暴挙に出たのだと思ったの

ではあるが、教頭が女子生徒のミニスカートを無理矢理下ろした辺りでそれが間違いだつたと気付く。

耐えきれなくなった私は腹痛を理由にどうにか自宅へと逃げ帰りこゝうして日記を更新しているわけであるが、今も恐怖と不安と息切れが止まらない！

……… 思い出しただけでも気分が悪い、今日は一日休むことにしよう》

《二十四日目。

持ち物検査は続行されていたが、昨日のような事にはなっていないかった。

それと校門をくぐる瞬間、白黒のツートンカラーに赤いランプというスタイリッシュな乗用車を見掛けたが、きつと趣味の良い来客のものだろう。

途中、警察官らしき人物ともすれ違ったが、恐らく近頃多発している質の悪い家焼きへの注意を促しに来たと行つた所だと推測する。

というか、そうだ。そうであるに違いない。既に死人も出ている事件なのだ。公的機関に注意を促すのは警察機関として当然の行いだ。家主の居ない時間を狙う空き巣と違い、家焼きは家主の有無を問わず動向に躊躇いが無い。私も気を付けなければ》

《二十七日目。

特筆すべき問題点はない。

そういえば士官学校の女子の体操着は何時からブルマーになったんだろうか》

《二十九日目。

そういえば忘れていたが、秋本教頭は赴任当初から校則改定に余念がなかったように思う。

近頃悪化した胃潰瘍によって不本意ながら入院を強いられている身

の上なので詳しいことは知らなかったが、日向先生から情報を貰って驚愕した。

『クラス内のトラブルは担任教員またはクラス委員の判決に従う』？

『男子生徒は女子生徒の、女子生徒は教頭の指示に絶対服従しなければならぬ』？

『選考審査で代表に選ばれた女子生徒は、指示に従い奉仕活動に従事すべし』？

ふざけるな。これが学校の校則か？私は怒りがこみ上げてきた。

しかし入院中の身である私にはどうすることも出来ない。日向先生も、近頃は学校の雰囲気は何処か怪しいので色々と理由をつけて仕事を休むようにしているらしい』

《三十二日目》

日向先生から連絡があった。どうにも学校が怪しいので勤め先を変えるのだそうだ。

賢明な判断だ。進行方向も解らないまま正体不明の敵に向かって行けば、待ち受けるのは十中八九敗北と死だ。

彼は逃げざるを得なかった。いや、逃げるべきだったのだ。こう言うのも何だが、彼はあくまで職員でしかなかった。

だが私は違う。私、高志・カーマインはデザルテリア国立士官学校高等部・軍用理学コースの卒業生だ。

卒業生である分、士官学校への愛は人並みにある。学校の為に己の身を擲^{なげ}つ覚悟も、あるにはある。

ならばどうしてやらずに居られようか。

そうだ。そうと決まれば、まずは胃潰瘍を治そう。話はそれからだ』

《三十四日目》

胃潰瘍が驚くほど早く治り、退院に漕ぎ着けた。あの軟体種の医者 gave くれた薬の効き目は素晴らしい』

《四十日目。

調査の結果、一部教員・生徒が秋本教頭と裏で繋がっている事が判明した。

全員で何人かまでは不明瞭だったが、自身以外の男性を扱き下ろすであろう秋本教頭の事だ。

全員が女性である事は予想が付く》

《四十一日目。

教え子の一人、中等部の女生徒で菌類種の三沢紀美歌が職員室にやって来た。

何でも、現行中の単元で解らない部分があるので教えて貰いたいそうだ。

思い付く限りの攻略法を伝授すると、元気な声で礼を言い去っていった。彼女は良い子だ》

《四十六日目。

身体に言い様のない違和感を感じるようになってもう三日になる。

医者に見せてもすこぶる健康だと言われたし、特に異常も見られないそうだが何かおかしい》

《四十七日目。

遂に決定的な情報を捕らえた。繋がっている女性達は彼の愛人だったのだ。

あとは該当者のリストと、教頭の悪行を実証するものがあれば私の勝ちだ！

しかし身体の違和感が酷い。精神科に通うべきか？》

《四十八日目。

特筆すべき事は何もない。身体の違和感が唐突に消え失せたが、やはり気のせいだったという事だろう》

《四十九日目。

頭が痛い。今日は一日寝ていよう》

《五十日目。

何だこれは……一体これは何だ！？私は一体どうなっている！？私に何が起った！？

私は一体誰に何をされたんだ！？

私は一何処に向かおうとしている（……………）！？
私は何になつてしまふのだ！？

これはそもそも何だ！？

……落ち着こう、そうだ。今日はもう今日は休もう。

私は間違っていたのだろうか。あの時転職していれば、こんな事には……》

397

《五十一日目。

こッ、こッれ、れはッ……一体ナんなンだ！？

私nO、

カRaDa牙ッッッ、

ドロ……けt a l e……n あんえッ……

あ……えあう……g……》

——ズッ——

— ザザア —

— チッ、チチッ —

— ブッッ —

第五十二話　これは軍人ですか？ 8　はい。殆ど台詞で御免なさい（後書き）

次回、遂に本格的作戦始動！

第五十三話　これは軍人ですか？　9　そう、学生生活は優雅に（前書き）

奴らが遂に動き出す！

第五十三話 これは軍人ですか？ 9・そう、学生生活は優雅に

―リユーラ加入より二日後の朝・デザルテリア国立士官学校高等部
軍用魔術コース3年A組―

「今日は皆さんに転入生を紹介しなければなりません」

クラスを受け持つ蔓植物系葉脈種の女性教師がそんな事を言つと、
途端に教室内がどよめき立った。

「はい、静かに。逸る気持ちも判らなくありませんが、先ずは何時
も通りの我々らしく出迎えてあげましょう。
では、どうぞ」

教師に促されるまま、転入生―背丈はそこそこ、体格は平均より若
干起伏があるといった感じの、大人びた霊長種女学生―が教室に入
ってきた。

整ったヤムタ系の顔立ちと、背を被うように腰まで伸びた深紅の長
髪が織りなす美しさに、男子ばかりか女子までも思わず見とれてし
まう。

転入生は殆ど無駄の見られない動作でタッチパネルに触れ、液晶式
黒板に名前を打ち込んでいく。

「今井椿姫^{ツバキ}です。」

色々にご迷惑をおかけするかもしれませんが、皆さんどうぞ宜しく
お願いします」

「今井さんはノモシアのガルダスタフ国立魔術学校に通っていたそ
うですが、皆さんもご存じの通り先日の内乱で校舎が丸ごと無くな

ってしまつた為転入を余儀なくされてしまつたそうです。

皆さん、気質や考えの違いはありましようが、差別や迫害の無いよう、イスキュロン民として最大限の敬意を以て接していきましよう。

それでは今井さん、席はノゼツさんの隣が良いでしょう。

ノゼツさん、良いですか？」

「はい。喜んで」

「宜しく願ひします、ノゼツさん」

「いえいえ此方こそ」

かくして椿姫と猫系禽獣種ロイマ・ノゼツは親交を深め、お互いに『攻撃系魔術が扱えない体質』と、『攻撃系は天才だがそれ以外は馴染まない家系』であつた為、実習等を通してすぐさま意気投合した。

—翌日—

朝間の寮から高等部謀報科校舎へ向かう通学路を、一人の女生徒が走っていた。

女生徒はスカイブルーの羽毛を持った四足型羽毛種であり、口には朝食のトーストなど銜えている。

というのもこの女生徒、今現在まさに遅刻するか否かの瀬戸際なのである。

「んもう、こんな朝に限って遅刻なんてッ！」

無理をしなければいいのに、女生徒は焦りから疾走しつつトーストを喰らう。

そして彼女が最後の曲がり角に差し掛かったとき、事件は起こつた。

ドン

「きゃっ！」

「ぬおっ！」

女生徒は曲がり角から現れた何者かに激突、大きく尻餅などついてしまう。

「痛たたたた……」

どうにか立ち上がった女生徒は辺りを見渡すが、ぶつかった相手らしき人影は見当たらない。

そして再び走り出そうとした所で、とんでもないものを見掛けてしまう。

それは自分と同じ学科と思しき男であった。詳しい識別は出来ないが、種族は恐らく外殻種であろう。

この種族は家族間でも個体差が激しく、専門の知識が無ければ別種に見えてしまう事も多々あるのだ。

それはまだ良い。しかし問題は、男の状態にある。

男はどういう訳か地面に仰向けになって倒れ伏しており、しかも頭から緑と黄色が入り交じった、汚染された淡水のような色の体液を流している。

「だ、大丈夫！？」

女生徒は思わず駆け寄った。先程ぶつかったのはこの男であり、恐らく見た目に反して軽量であるためぶつかっただけでこんなに遠くへ飛ばされてしまったのだらう。

だとすれば遅刻をしようが助けるのは自分の義務であるし、仮にそうでなくとも眼前に横たわる瀕死の外殻種を見捨てて走り去るなど、彼女の哲学が許さなかった。

駆け寄ってみると、どうにも息をしているようには見えない。
途端、不安になった女学生が男を揺り起こそうとした、その時。

「ご心配なさらず」

男は言葉を発すると共に勢い良く起き上がり、どさくさに紛れて女学生額のキチン質の右肩をぶち当てた。

恐らく故意ではあるまい。偶発的な事故なのだ。そう、事故でしかない。

「ツツツツツツツツツ」

頭を抑え転げ回る女学生に、男は言う。

「おっと、大丈夫ですか？状況からして事故とは考えられませんね……一体何処の誰にやられました？」

いけしゃあしゃあと、謝るでも詫びるでもなくそんな事を言う。

そもそも声色や見下ろすような態度からして、女学生の身を案じているとは考えがたい。

「ツツ……あん、あんた……」

「はあ、私ですか？」

「そう、あんたにやられけふえっ！」

女生徒の腹部に走る衝撃。見れば外殻種らしきの男が女生徒の腹を踏み付けている。

「その調子なら大丈夫そうですね。安心しました」

「んがっ！ぎえびっ！ばべっ！」

あっさりとそんな風に吐き捨てた男は、故意に女生徒を踏み付けるようにしてその場からそそくさと立ち去っていった。

結果女生徒は見事に遅刻。職員室で科長にどやされながら入室許可証を受け取り、腹をさすりながら教室に入ってしまった。

―教室（高等部課報科3・F）内―

「ホームルームの途中だから言うが、今日は何か転入生が来てんだよな」

内部が水のような液体で満たされたパワードスーツ状の機械の内部で蜷局を巻いた脚無井守系半水種の担任教師が、ふとそんな事を言い出した。

「何か前にラビレマやノモシアの諸学校で起こった乱戦とかの影響で校舎が使えなくなっただんで、授業数を補う為に他校へ一時的に生徒を転校させるって話があったろ？
あれの一人らしいわ」

担任教師の言葉を聞いて、教室内がどよめいた。

「アイ、静かにイ。そんなに騒いじゃ転校生気圧されて教室入って来れねえだろ？」

担任の男は騒ぐ生徒達を静まらせ、教室内に生徒を招き入れる。
朝方外殻種の男に踏み付けられた女学生も、果たして転入生がどんな人物なのかと気が気でない。

そして彼女は、教室内に足を踏み入れた瞬間驚愕する。

「（あいつは！）」

教室に招かれた転入生というのは他でもない、朝方彼女とぶつかった挙げ句腹を踏み付けて立ち去っていった外殻種の男だったのである。

更に女学生には、おかしい事がもう一つあった。

「（何…何なのよッ！？朝は死ぬほど憎たらしいって思ってた筈なのに、何で今はあいつの姿を見るだけでこんなに胸の鼓動が止まらないの！？

まさか私……あいつに……）」

年頃に達した人並みの女であるが故に、女学生は不本意ながらも覺っていた。

この胸の高鳴りはもしま、恋の兆しなのではないかと。

認めたくはない。しかし、本能には逆らえない。

元来属する種の九割が一夫一妻を貫き、死が分かつまで添い遂げるとされる鳥類の形質つ羽毛種は、恋愛や性愛については敏感であり独自の哲学を持つ者が極めて多いとされる。

風俗店勤務者やアダルトビデオ俳優も全種族中極めて少ないという統計も出ており、羽毛種は性を神聖視している傾向があるとも言われる。

かくして、羽毛種である女学生の葛藤に満ち溢れた学園生活が始まるうとしていた。

第五十三話　これは軍人ですか？　9・そう、学生生活は優雅に（後書き）

これは一体どういう事なのか！？まさか蠱毒が真面目にラブコメデ
イを！？

第五十四話　これは軍人ですか？　10　いえ、恋するバカです（前書き）

抱腹絶倒？ 諜報科女生徒・財田の不毛なる日々の始まり。

第五十四話　これは軍人ですか？　10　いえ、恋するバカです

―前回より・高等部諜報科3-F教室―

外殻種風の転入生は、液晶式黒板に名前を打ち込んでいく。

「中村輝実です。ラビーレマの東ゾイロス高等学校から来ました」

「この種族欄にある『ツバキを刺すゾウ』って何て読むの？」

「ああ、それはサシガメです」

「サシガメか……確か近頃ラジオをやってる有資格者のヴァーミンもサシガメだったな」

「ええ。私も彼のように堂々と生きていたら、と思っっています」

「そうか。じゃあ席は、そうだな……財田の隣で良いか」

財田というのは、朝方輝実に腹を踏み付けられた件の女学生である。
「（！？）」

いきなりの出来事に財田は動揺したが、気取られてはまずいと平静を装って事を受け入れた。

―授業時間―

一限目の諜報基礎概論、二限目の数学に続く三・四限目はD組との合同による白兵戦実習であった。

白兵戦実習とはいえ無論実銃や本物の刃物を用いるわけではなく、特殊な訓練服と訓練用の各種武器類を用いて行うものであり、コンピュータによる判定で勝敗が決まるというものだった。

しかも制限時間や体力ゲージめいたもの（無論、技の判定に用いるだけである）まで設けられ、見ている方も楽しめるため中々に人気の高い授業となっている。

等と訳の判らない事を宣いながら、輝美は制服の上着を振り回して応戦する。

そんな小学生の遊び程度の抵抗が何になるかと思うだろうが、ポケットに入れていた諸々の私物が働きかけて中々馬鹿に出来ない鈍器になっていた。

しかしそれでも尚着替えそっちのけで突撃する女生徒達を相手に、輝美はあくまで着替えつつ様々な武器や動作で対抗する。

そしてあらかたの女生徒達が動けなくなった辺りで輝美は戦いを取りやめ、無言のまま実習室へ向かって行った。

結果としてその場で着替えていたD組の女生徒達は揃って授業に遅刻。

担当教員から怒鳴られ同級生からも白眼視され、事情を説明しても現実味の無さから取り合って貰えなかった。

若い女が力を持ちつつあるこの平成ライトノベル界限にあって、輝美はその中で最も恐ろしい一つとされる『群れた女の怒り』を打ち破る可能性を見出だしたのである。

――授業開始――

「それでは予告通り、本日は両クラス代表による対抗試合を執り行う。

外野はそれぞれの試合の内一つに関するレポートを提出すること」

それを聞いた輝美は、他の生徒に混じって観覧席に向かおうとする。しかし程なくして、担当に呼び止められた。

「中村君」

「何でしょう？」

「すまないが君、試合に出てくれないか？」

とんでもない一言だった。

「……何故です？」

「いや、実は今日財田君と一緒に試合へ出る予定だった男子が急に
痛風で倒れたのだ」

「では別の生徒様に頼んでは？」

「そうしたいのは山々なのだが、D組の代表はどちらも還暦を過ぎ
た退役軍人の孫でな。」

おかげでうちの代表二人以外はD組の代表に妙な恐怖心を抱いてお
つて、試合へ出たがらんのだよ」

「御言葉ですが……それはイスキュロン民としてどうなんです？」

「確かにそう言われればそうなのだが、致し方のない事なのだ。」

昔に比べれば遙かに脳筋思考の和らいだ現イスキュロンだが、その
分家系や資産が力を持つことも珍しくはない。

故に、そういった権威主義に対し耐性のある君に——「ちよつと待
つて下さい寺杣先生！」——ん？どうした財田君？」

「中村は転入したばかりで、士官学校の基礎を知らなさすぎると思
います！」

「いや、案外そうでもない。中村君は転入前から我が校についてよ
く調べてきてくれている」

「——ッ、そうだとしても中村はラビールレマ民！」

身体能力はうちのクラスで最下位のイゼルにも及ばない筈です！ク
ラスの威信を賭けた試合に、そんな奴は——

——「その件についても心配しなくていい。中村君の身体能力は転入
前のスポーツテストで実証済みだ。」

そうでなければ諜報部になど、百億詰まれても入れはしないさ」

「……………」

財田は心底不服だった。只でさえ緊張する対抗試合のパートナーがよりによってこんな男では、試合の勝敗にかかわらず緊張で精神が持たない。

しかしこれも現実だとやむなく受け入れることにした財田は、仕方なく輝実と言った。

「良い？今日の所は仕方なくアンタと組んであげるけど、絶対足手まといになんかならないですよ？」

「解ってますって」

「自分がヘマして自滅するんならまだしも、私まで巻き込んだりしたら承知しないからね！」

「そら、可能な限り善処していきたいと思いますがね」

「あ、あと……ケガ……そう、ケガなんてしたら許さないわよ！？解った！？」

言った側から財田は盛大に後悔した。自分は何を言っているのか。こんな虫螻如きに、何故こんなにも気を遣ってやらねばならないのかと。

「ご心配どうも。肝に銘じますわ」

そう言われて益々立場の無くなった財田は更に強がるとする。羽毛種故に、恋愛感情を安っぽい粗末なものにしたくないという建前の元に。

「か、勘違いしない事ね！別にアンタの事が心配だとか、ケガして欲しくないとか、そういう事は思っていないんだから！

ただ単に、初実習で転入生にケガされるとクラス代表としての私の立場が無い。そう、ただそれだけよ！」

「へえ、解りました」

輝実は心底どうでも良さそうに手持ち武器である槍を調整しながら答える。

その態度に腹を立てた財田は、思わず輝実に掴みかかるつもりが、

「あ、試合開始や」

肝心の相手を掴み底ね、見事に転んでしまつ。
それを見た輝実が悪びれる様子もなく、

「財田さん、何してんです？」

まあ良いや。私先行つてますんで遅れないように来て下さいね」

等と実に軽薄な態度で立ち去っていった。

「（中村の奴、私がどれだけ心配してあげてるかも知らないで……。見てなさい……。乙女心を弄んだ罪、その身を以て償わせてあげるわ！）」

起き上がった財田は至極身勝手かつ稚拙な決意を胸に、アリーナへと向かった。

第五十四話 これは軍人ですか？ 10 いえ、恋するバカです（後書き）

次回、試合開始。

第五十五話

これは軍人ですか？ 1 1

おう、

やっぱ俺こつこついう柄じゃねーわ

遂に試合開始！

第五十五話　これは軍人ですか？ 11・おう、やっぱ俺こつこついうの柄じゃねーや

―前回より―

試合開始に伴いアリーナへ集った四人。

F組代表の財田と輝実に、D組代表の男女二人。

「御機嫌よう、財田さん。

それとそちらの方は……」

「転入生の、中村です。以後宜しく」

「初めまして。私はデザルテリア国立士官学校高等部諜報科のエリートこと、トルバ・リナラブ。」

伝説的狙撃手として名高きウイゼル・リナラブの孫娘ですわ」

金属光沢を放つ青い訓練服に身を包んだトルバの自己紹介には、根底から相手を見下すような傲慢さが見て取れた。

「初めまして、中村くん。僕はラモル・マカラ。」

祖母は軍事魔術の天才と名高きイルミネル・マカラ博士だ」

トルバとは対照的に深紅の訓練服に身を包んだラモルの目つきには、言い様のない怪しさが漂っている。

「それにしても、貴方が噂に聞いた転入生ですね。

ラビーレマの東ゾイロスから来たと聞いたのでどんな方かと思えば

……ッハ、外殻種だなんて！ てんでお笑いですわ！」

「おいおいトルバ、幾ら揺るぎようのない真実だからって相手へ直に言うのは失礼というものだよ。」

ラビーレマは只でさえ低俗な、無節操と卑怯者の多い汚らわしい学術者共の地。

統領キラマを始めとする忌まわしき悪魔ハタム一家の力を受け継ぐ情報弱者共だからと行って、露骨な中傷は可哀想というものだよ」

「そうですね。反面私たちの大陸イスキュロンは、誇り高きミガサ・コルト様の力を受け継ぐ絶対強者の地！」

そして私達は、そのイスキュロンの中でも特に選ばれた選民の血を引き継ぐエリートの中のエリート！」

風まみれの落ち零れ羽毛種や、地を這う事しか出来ない外殻種如き、私たちの敵ではありませんのよ！」

「その通りさトルバ！軍人の家系にある僕達は無敵だ！」

そうとも！僕等は——「凄いですねえッ！財田さんッ！」——は？」

二人の話を聞いていた輝実は、突如大声で財田に話を振った。

「な、何が？」

「何って、決まってるじゃありませんかッ！彼らですよッ！」

無節操で汚らわしく卑怯な情報弱者の虫虻である私には到底知り得ない世界の話ですがッ！」

彼らの祖父母は相当な力の持ち主だそうでッ！」

「ええ、そうらしいわね」

財田は覚った。おそらくこの男は、二人をおちよくる為にこんな事を言っているのだと。

「つまり彼らも相当な実力者という事ッ！」

しかも凄いのは彼らの祖父母の専門ッ！」

リナラブ様は狙撃手、マカラ様は魔術師だと言っじゃありませんかッ！」

「結構有名よ？あんたは転入生だから知らないのも無理はないけどね」

「そうでしょうそうでしょうッ！彼らはそれらの天才でしょうッ！しかしながらそれだというのに彼らの所属は諜報部ッ！」

祖父母の形質を濃く引き継ぐ選民のエリートであるならばッ！」

狙撃手の孫は狙撃科にッ！

魔術師の孫は軍用魔術コースに向かうのが普通と見えるッ！

しかし彼らは態々諜報部に入学したッ！

「そうよね！つまり彼らは、本来目立つべきであろう自らの運命を諦め、進んで―

―「お黙りなさいッ」

―「黙れエッ！」

「さつきから黙って聞いていれば何ですの！？」

「お前達、僕等をバカにしてるだろう！？」

怒り心頭で怒鳴り散らす二人に、輝実と言う。

「何です？もしや今さらお気づきになられたんです？

テメエ等のバカ丸出しの長ったらしい前口上は、バカにして下さいって言うてるようなもんだろうによオ。

ああ、悪い悪い。もうちょっと簡単に説明すべきだったか？悪いな、バカ相手にすんのも辛くッ―

―「黙れこの虫野郎がアアアアアアア！」

度重なる輝実による長髪で怒り狂ったラモルが、遂に彼目掛けて掴みかかってきた。

しかし輝実はその無駄に華麗な動作で回避。結果、壁にぶつかって仰向けに倒れてしまう。

ノびている彼の耳へ、輝実の更なる罵倒が飛び込んでくる。

「おいおいどうしたア！？エリートってなアそんなモンかア！？」

「だ、ま、れ、と、言ってるだろうがああああああ！」

更なる怒りを胸に、ラモルは再び突進を繰り返す。挑発の為に近付いた輝実も流石にこれを避けるには至らなかったが、この程度の相

手に掴まれるような彼でもない。

「んじゃ財田さん、あとは任せました」

「ひよ？」

財田が自分の立場に気付いた時にはもう遅かった。

近くに居たが為、輝実によってラモルの攻撃を防御する盾にされた彼女は、理性を失い暴走したラモルに掴まれ、そのまま怒濤の間接技連携『ヴァーサーカー・ソウル狂戦士の魂』を凄まじい勢いで喰らい続けた。

コキッ「ガッ！」

クキッ「イッ！」

ポキユ「エあッ！」

ペキヨ「ウおッ！」

ポキヤ「んッ！」

ゴギリ「げあエッッ！」

『ヴァーサーカー・ソウル狂戦士の魂』を受けた財田は試合開始五分もせずに敗北判定を受けた。

しかも受けたのが訓練用の武器攻撃ではなく本気の関節技攻撃だったので訓練服越しに凄まじいダメージを受けてしまっている。

そして敗北判定が下っても尚攻撃をやめないラモルは、既にガールフレンドであるトルバの言葉さえ耳に入っていないようだ。

そんな戸惑うトルバの隙を突き、輝実が槍で彼女の手元を殴り銃を叩き上げる。

「わ、私のライフルがつ！」

そして背に備わった翅で飛び上がると、宙を舞う銃を取り、未だ技をかけ続けるラモルの背目掛けて銃口が前を向くように投げつける。そしてそれを追うようにして天上を蹴り、飛び蹴りの姿勢を取った。

そして、僅か二秒後。

ヴゴギリリッ

輝実の飛び蹴りによって推進力が増し加わったライフルの銃口がラモルの背へと突き刺さり、その身体が逆方向へ角を成して折れ曲がった。

第五十五話　これは軍人ですか？ 11　おう、やっぱ俺こーいうの柄じゃねーや

このあと輝実は突如姿を消し、それと同時に彼は士官学校どころかこの世界にあえ「存在しないこと」になった。

また、輝実によって脊椎を直角にへし折られたラモルは病院へ搬送されるも死亡。

現場に居合わせたトルバはショックで精神に異常を来し、隔離病棟暮らしを余儀なくされる事となる。

試合に参加した中で唯一生存した財田は、全身に複雑骨折を負いながらも療養を続けているという。

第五十六話　これは軍人ですか？　12　いやあ、それがちょっと微妙な所で――

遅くなっただけと続きます。

第五十六話　これは軍人ですか？　12・いやあ、それがちょっと微妙な所で――

――前回より――

「と、言うことがあつてだな」

「あつてつていうか引き起こしたのアンタよね！？

ねえ、アンタなんでしょ！？」

「まあ、そう言われると認めざるを得ないな」

『認めざるを得ないって何ですか！？

潜入初日に騒動起こした挙げ句殺しまでする必要性が何処にありますかっ！？』

「ここにあつた気がする」

「何だその言い訳はア！？清水の姉ちゃんはっきりと情報掴んで来たつっのにオメエはよー！」

デザルテリアにあるホテルの一室に怒声が鳴り響く。

それらは現在の所、ただ一人の男に向けられていた。

その名は辻原繁。異世界カタル・ティゾルの破戒神を目指し奮闘するラジオDJである。

そして彼を怒鳴っているのは、不老不死の元開業医ニコラ・フォックス、生物と霊の中間的存在の小樽羽辰、謎の寄生生物バシロの三名。

怒りの理由については最早詳しく言及するまでもあるまいが、転入生を装い士官学校へ潜入した繁と香織の動向にあった。

というのも、あくまで転入生として過ごしながら教頭について調べ続けた香織に対して、繁の行動は前回あったように散々だったからである。

あのあとその場から逃げ出した繁は香織に転入生・中村輝美に関する全情報を消させ、以降適当に校内を徘徊した（本人談）。

これを聞いて怒らない者も多くはあるまい。

暫くして、怒鳴り散らす三人をどうにか残る三人が宥めるに至る。

そして場が落ち着いた辺りで休憩をはさみ、香織が報告する流れとなった。

「そりやみんなは、繁の事を許せないと思う。」

「ただそれは、単に繁の言い方に問題があっただけなんだよね」

「どういう事？」

「繁はさ、自覚は無いみたいなんだけど話し方に癖があってね」

『癖、ですか』

「そう、癖。自分のことについて話す時、無駄にマイナス方向へねじ曲げんの」

「マジ？」

「マジ。だから繁が自分のやった事について話してるのを聞くときは『口ではこう言ってるけど実際はそれほど悪くないんじゃないか？』って思いながら聞くと良いよ」

「成る程、覚えとくわ。で、つまりどういう事？」

「一緒に潜入してた私だから言うけども、私が情報収集出来たのは繁が騒ぎを引き起こしてくれたからっていうのもあるんだよね」

以降、香織が話したことを箇条書きにすると、

- ・転入生を装い士官学校に潜入するまではどうにかなった。偽造書類の内容は全て嘘八百だったが特に弾かれるでもなくすんなりと通った。

- ・クラスメイト達も怪しげな新参者をすっかり信頼しきっていた。隣人も人格者そうであり、潜入捜査は上手く行くものと思われた。
- ・しかし問題はすぐさま発生した。香織がいざ調査開始と思い諜報

用の魔術を起動すると、不可視のエネルギーが働いて魔術が打ち消されてしまったのである。

・調べてみた所、これは犯罪防止の為に校内へ設けられたセキュリティシステムであり、専門職員によって解除されない限り生徒は校内で魔術を扱う事が出来ないという。

・だが香織は魔術を用いない諜報活動については上手くやれる自信がなかった。聞き込みでは時間が足りないし、それ以外の方法ではすぐにボロが出そうではない。

・しかし三限目の序盤辺りで、彼女に転機が訪れる。諜報科の白兵戦実習で死人が出たというのである。

・しかも死んだのは退役軍人の孫で金持ちのエリート株だったようで、ともなれば授業どころではなくなる。

・結果的、魔術実習の授業はセキュリティシステムが解除されたまま放置される羽目に。混乱に乗じて自身と繁の学籍情報を抹消し、ついでに学校関係の情報もある程度搾り取って逃げ帰ってきた。

『成る程……つまり繁さんの大暴れも強ち叱れない、という事ですか』

「つていつか、寧ろ褒められるべき行為だったのね……」

「怒鳴ったりして悪かったな、ツジハラ……おめーすげえじゃん……」

……

―事態の收拾がついた数日後・士官学校教頭室へ向かう廊下―

「ちょっと、何なんですか一体！？僕が一体何をしたってんです！？」

「黙れ。我々が許可しない限りお前に発言権はない」

教頭室へ向かう廊下を歩く、二人の人影。

一人は長身に灰色のスーツという教師らしき出で立ちの食肉目らし

き禽獣種の女。

もう一人は、女に引きずられ無理矢理歩かされている、中等部指令科の制服を着た羽毛種の少年。

女は教頭室の前で立ち止まると、軽くノックをして反応を待つ。

「どなたです？」

「志摩です。違反者の男子生徒を連行しました」

教頭室内からの温厚そうな男の声に、志摩と呼ばれた禽獣種は答える。

「解りました。お入りなさい」

「はい。」

おい、さつさと来い！」

「わっ、とっ、うあっ」

羽毛種の少年は志摩によって投げ出され、広々とした大理石の床に倒れ込む。

暫くしていると少年の眼前に流線型の巨体が現れた。背は灰色で腹は白く、尖った鼻先と三角形の歯が生え揃った口。

何処か生気の失われたような虚ろで冷酷な目と、両の首筋には五つのヒダらしきもの。

デザルテリア国立士官学校現教頭（厳密には教頭代理）の鼠鯨系鰓種鱗種、秋本・九淫隷導・康志である。

「ほうほう、君ですか……」

「きよ、教頭先生！？これは一体どういう事なんです！？」

「何をした……ですか。おかしい事を聞きますねエ、校則違反を犯したからに決まっているじゃありませんか」

「……校則違反？そんな……一日に三回生徒必携を読む事が日課の僕

がそんなっ……………」

「生徒必携…ですか。考えが甘いですねえ君は。毎週の朝礼や配布プリントで事細かに、私の新設した校則について詳細に解説しているというのにそれに気付かないとは……………」

「……申し訳御座いません、教頭先生。しかし質問をしても宜しいでしょうか？」

「何です？」

「僕は……僕は一体どんな校則違反を犯したんです？どんな罰則でも受けますが、それだけは教えて頂かないと納得できません！」

「ほう、流石は優等生揃いの指令科ですねエ。歩兵科や狙撃科のバカ共とは頭の出来が違い、かと言って諜報科や軍用理学コースのクズどものような屁理屈での言い逃れもしようとしない……。」

まことにまことに素晴らしい。君のような生徒はまさしく我が士官学校の鏡です。

では、お教えしましょうかね。君の違反事項を」

羽毛種の少年は不安で不安で仕方なかった。

そして告げられたのは、衝撃的な内容であった。

「君の違反事項……それは、同時に複数の女子生徒から明確な恋愛感情を抱かれ、好意を寄せられたことです」

少年は落胆し、絶望した。そんな事が校則違反になるのか？

他人からの感情なんて気付きようがないではないか。

ましてやそれがどんな感情かなど、此方にとって知ったことでもない。

「そ、そんなッ！そんな事ですかッ！？自分に対する他人の思いな

んで、気取りようが無いじゃありませんか！」

「黙りなさい。兎も角、校則違反である事に変わりはありません。生意気なのですよ……酒も飲めない青二才の分際で、複数の女性から好かれようなんてね。」

さて、誓い通り君には罰を受けて貰いましょうか……」

「そんな、あんまりです！」

「だから黙れと言ってるでしょうが、取るに足らない鶏ガラ如きが生意気なんですよ。」

私が教頭である以上、私が士官学校に於ける絶対的な校則であり、倫理なのです」

そう言つて秋本は少年の腹を蹴り上げ黙らせると、周囲に控えていた女達に合図を出す。

合図を受けた女の一人が秋本教頭から何かの鍵を受け取り、奥にある金属製の扉の鍵を解除する。

扉には『要注意開閉 必要時を除き周囲3m以内に近寄るべからず』との張り紙がある。

更に女二人が少年を持ち上げ、扉の前まで運んでいく。

鍵を解除した女が扉を開けると、途端に内部からおぞましいうめき声や金切り声のようなものが響き渡る。

「ウエエエエエエええええエエアああアああア！」

ツァ、アヴォオロろろロロゴゴッ、ゴゴああエイッッ！ツええエうああおうッ！」

その余りにもおぞましい声に目覚めた少年は、恐怖の余り訳も判らず泣き叫ぶ。

「良いでしょう。投げなさい」

秋本教頭の指示と共に、二人の女は羽毛種の少年を扉の中目掛けて投げ込んだ。

すると次の瞬間、扉の中から砂鉄入りスライムを思わせる流体や触手、節足などが伸ばされ、少年の身体を絡め取る。

泣き叫びながら必死で壁の縁にしがみつく少年。

しかし、現実とは実に非情であつた。

「さつさと行けこの劣等生が！」

先程の教員らしき禽獣種の女・志摩が少年の両手を全力で蹴り付ける。当然少年は痛みから手を離さざるを得ず、扉の向こうへと飲み込まれてしまった。

すかさず扉を開けた女がそれを閉め手早く施錠。かくして扉の向こうに住まう謎の存在は、再び暗闇の中へと封印された。

「ざまあみろ、生意気な態度を自覚せず改めないからそうなるんだ。精々その中で泣いて齒軋りするが良い。その身を貪られ、命が尽き果てるまでなあ……」

少年の最後を見届けた秋本教頭は、嘲笑うように呟いた。

第五十六話　これは軍人ですか？　12・いやあ、それがちょっと微妙な所で――

遂に明らかになった秋本教頭の凶悪な実態！

この嘗て無いほど強大な敵に対し、繁達はどう立ち向かうのか！？
そして金属製の扉の向こうへ封印された黒い何かの正体とは！？

次回、物語はきつと急展開を見せるに違いない（多分予定上は）！

第五十七話　これは軍人ですか？　13　はい。学者と巨人です。（前書き）

一方その頃、ラビレマでは……

第五十七話　これは軍人ですか？　13　はい。学者と巨人です。

―前回より・ラビーレマは列甲大学工学部研究室―

「――お掛けになったお電話番号は、現在使われておりません―」

「クソッ！やっぱ駄目かつ！」

小柄な猫系禽獣種の女が、苛立ちの余り携帯電話を床に投げつける。
「どうした九条？」

「退屈で仕方がないから電話でカーマインの奴でもいじろうかと思
ったんだが、奴の携帯に繋がらんのだ！」

身体の各部位が機械的なパーツで被われた角竜系地竜種の大男の問
いに、禽獣種の女・九条は答えた。

「何だそれは……大体お前、退屈とはどの口が言うか」

「この口だが？仕方ないだろ、やる事が無くて暇でならんのだから
な」

「暇？暇だと？お前、今月中に目を通しておかなければならない書
類がどれだけ残っているか、解っているのか？」

「勿論だ。私を見くびってくれるなよ、ティタヌス」

「じゃあ幾つだ？」

「218だ。内112は他大陸からで、更にその内40はイスキュ
ロン軍からのもので間違いない」

「そこまでの確に覚えていられるなら何故全く手を付けない？」

ティタヌスの問いに、九条は心底呆れたような表情で言った。

「……？おいティタヌス、お前大丈夫か？まさかエラーでも引き起こ
したんじゃないだろうな？」

こんなに良い天気だというのに、崇高な学術の叡智をただ金儲けの
為に活用したがる連中の寄越した書類に目を通すなんて真似をして
良いと思ってるのか？」

「少なくとも仕事をさぼってまで暇を持て余していると主張し、相手の迷惑も顧みず嘗ての後輩に嫌がらせの電話をしようとするよりはずっと推奨されるべき行為だと思っがな」

「固いなティタヌス」

「お前がそうしたからな」

「装甲や筋繊維のみならず思考まで固くなりよつてが」

「思考の固さは元々だ」

「柔軟な思考の欠如は思わぬ所で仇になるぞ」

「柔軟と怠惰はヤムタ神話の姉妹神程にも異なるだろうが」

「ヤムタ神話の姉妹神……確か、姉の方がこの世に厄災をもたらした邪神で、妹は六栄神の一柱で武神と対を成す太陽神だったか？」

「そうだ。名前は忘れたが、同じ六栄神の中に夫が居るらしい。

確か冥界を支配する女神の弟で天空神だったか？」

まあいい。とにかくだな九条、早くこの仕事を片付けたらどうだ？」

「いずれやるさ。覚えてないのか？ 私はその都度やる気の有無が変動するんだ。だから今やったとしてもろくな結果は得られまい」

「子供でも言わないような屁理屈を大の大人が真顔で言っな」

「気にする事はない。どうせスタイルはガキのままだ」

「体形が何だ」「それに女というのは心の何処かでいつまでも若くありたいと願っているものだ。不本意ながらな」

「普段からろくに化粧もしないお前が言っても説得力がないな」

「真の理系女は原則化粧などせんのだ」

そう言つて九条は愛用のコンピュータを立ち上げる。

「だからお前――」

――「勘違いするな。純粹に後輩の事が心配になつただけだ」

「……携帯電話が繋がらない程度でか？」

「程度とは何だ？」

かなり深刻な問題だぞ？

奴は電話に出なかった事こそあるが、繋がらなかった事は一度たりともない」

「機種変更をしたまま報告をし忘れたという可能性は無いのか？」

「無いな。奴が他に類を見なくそ真面目な奴だという事はお前もよく知っているだろう？」

仮に奴が携帯電話の機種変更をするとすれば、『機種変更しました』という連絡は来ない。

来るのは『機種変更します』という連絡だ」

「つまり、事前に連絡が来ると」

「そうだ。しかし今回、奴からは何の連絡もない。

となると考えられるのは、携帯電話が破損したか、私に無断で解約したかだ。

我ながら言うのもアレだが、私は奴から徹底的に恐れられているようだ。

私の目が届きそうにないような所でも、不用意な行動は控えているらしいしな」

「……調べたのか？」

「私を誰だと思っている？」

大学園都市最強の工学部生たる称号『スターダスト』を得た最初の女学生、九条チエ様だぞ？」

舎弟の見張りも満足に出来ないでどうする」

「舎弟だったのか……」

「ああ、奴——高志・カーマインは私の舎弟第一号だ。

だからこそ私は——な、何だこれはっ!？」

「どうした、九条？」

「おいティタヌス、これを見ろ！」

ティタヌスは九条の指し示した記事に目を見やる。

「カーマインが行方不明……だと?しかも彼の自宅周辺には特殊な

セキュリティシステムが展開されており搜索の目処も立たず、か。とんでもない事になってしまったな……」

「ああ。奴の家に罠を張ったのは勿論私だが、まさかこんな事になるうとはな」

「お前だったのか!？」

「ああ、私だ。こんな事もあるうかと罠を展開しておいた甲斐があったというものだ」

「お前は一体何を言っている!？自分が何をしたか解っているのかっ!？」

「解っているとも。警察の捜査を妨害してやった」

九条は笑い混じりに軽々しく答えた。

「笑い事ではないだろう!？」

「いいや、笑い事だ。高志の家には、この一件に関わる重要な証拠が眠っている。

そしてその証拠、使いようによっては事件解決に向けての強力な手掛かりとなる!」

「…… だったら尚更警察を初めとする公的機関に譲り渡した方が良かったのではないか？」

「おいおいティタヌス、お前の部下兼最高傑作か？」

重要かつ強力な証拠だからこそ、尚更警察には手渡せんだろうが。

奴らは公務員だ。本来の力こそ強力だろうが、それを発揮する機会が極めて少ない。

それ即ちパワーバランスという奴でな、公務員の間管理職というのは上司の命に背いてまで己の意志を貫き通すなんて真似はそう出来んのだ」

「ではどうする？まさか我々だけで事件を解決するつもりか？」

不安げに問うティタヌスに、九条は言う。

「馬鹿を言え、誰がそんなエネルギーの浪費などするものか。

証拠は我々の手中へ確保し、警察より確実にこの一件を解決出来るであろう組織に明け渡すさ。

如何なる法にも縛られず、ただ己の意志を貫き通し常に十割の力を出し切ることの出来る存在にな」

「そんな都合の良い組織があるのか？まさかギャングや新興カルト教団の類じゃないだろうな？」

弱音を吐くようで悪いが、私はあの手の連中に関わるのはご免だぞ」
「アホか。私だってその程度の奴らにこんなに凄い玩具を暮れてやるつもりなど無いわ。」

例えば奴らに数兆積まれて懇願されようが願い下げだ。ギャングも新興カルトもクソ喰らえ！」

「ほう、よくぞ言ったな九条。改めて思う、お前の部下で居て良かったと」

「ッフ、そうだろうそうだろう？何せ私は女性初代の『スターダスト』だからなア！」

「それで、お前が頼み込むという組織とは何だ？」

臣下ティタヌスの問いかけに九条は、自信満々の笑みで答える。

「ああ、それか。何、お前も知っている筈だ」

「ほう」

「つい最近どこからとも無く沸いて出た、不定期放送のラジオ番組だ」

それを聞いたティタヌスは、深々と頷いた。

「そうと決まればティタヌス、長旅の準備だ。昼食後14：23発のフェリーでイスキュロンへ向かい、そのまま砂上船でデザルテリアまで向かう」

「随分と急ぐんだな」

「当たり前だ。そうこうしている間に舎弟が殺されてしまいうやもしれん。そうなつては私の『スターダスト』の名に傷が付く」

「成る程な」

「デザルテリアへ到着次第高志の家で証拠となるものを粗方回収し、ツジラー味を探り当てて用件を話しブツを突き出す」

「その後は？」

「無論、奴らに同行し士官学校を探る他あるまい。ツジラー・バグテイルはヴァーミンの有資格者であり、その相方の青色薬剤師は古式特級魔術の使い手だ。」

それに奴らの組織にはあのニコラ・フォックスも居る！つまり知識人としてこれに接触しない手はない！」

「確かに、お前ならそう言い出すだろうとは思っていた。だが仮に断られた場合はどうする？」

「その点は問題ない。組織のアテはもう二つある」

「流石だな、九条。それでこそ我が主だ」

第五十七話 これは軍人ですか？ 13 はい。学者と巨人です。（後書き）

次回、九条と繁、奇跡の出会い（予定）！？

第五十八話 闇のみぞ知る店内（前書き）

一方その頃、繁はというと

第五十八話 闇のみぞ知る店内

―前回より―

デザルテリア郊外の繁華街に備わったネットカフェでパソコンを操作するのは、白衣に蝗マスクの男―我等が主人公、ツジラ・バグテイルこと辻原繁。

生放送を二週間後に控えた彼は現在、頼り募集の為に設けたEメールアカウントを覗いていた。

「（やつぱり依頼ばかりか。遂行してる暇ア無えんだがな…… っと、質問や楽曲リクエストも結構来てるな。

法的に認可・保護された番組じゃない分大概の局は音源さえ手に入れば流せるし、質問も基本大概のことは答えられる。

油断しちやなんねえのは百も承知だが、非合法つてのも中々オツなもんだな）」

等と考えつつカーソルを動かしていた繁は、ふと件名の無いメールがあるのを見付ける。

今まで彼の所に届くメールは正式な応募から番組への意見、言われもない言い掛かりや誹謗中傷に至るまで全てに件名があった。

しかしこのメールにはそれが無い。差出人のアドレスもどういう訳が表示されて居らず、怪しさは益々高まった。

「怪しい…… が、思うほどでもねえ気がする」

という訳で、繁はそのメールを開いてみることにした。そもそもこのパソコンに設けられたセキュリティシステムなら、怪しげなURLが入っていればその時点で迷惑メールの欄に振り分けられ、ウィルスでも入っていようものなら到達前に削除されてしまう筈だ。

となればこのメールはさして問題があるとは考えられない。それが
繁の判断だった。

メールの内容はこうだった。

お初にお目に掛かる、ツジラ・バグテイル。

私は普段ラビーレマの大学で研究員をしている者だ。

『巨竜を駆る野良猫』私を呼ぶならそう呼べ。

今回こうしてメールを送らせてもらったのは他でもない。貴公らと
我々で解決したい事件が発生したからだ。

というのは、近頃イスキュロンの大国デザルテリアの国立士官学校
に勤務する私の舎弟が行方不明になっているらしいのだ。

その他諸々の点から見て、この事件には裏で暗躍する巨大な組織の
存在があるものだとは私は確信した。

無論、都合が悪いなら無理にとは言わん。協力者のアテはまだある
のでな。

追伸・本日19:00、デザルテリア国立大使館地下七階の料亭『
傘猫』で逢おう。

店に入る時、合い言葉を要求されるだろうが、お前なら解るはずだ。

「（『巨竜を駆る野良猫』……か。逢ってみる価値は大いにあるな）

かくして繁はその夜、メールの送り主と合流するため『傘猫』へ向かった。

―同日18:55・デザルテリア国立大使館地下七階『傘猫』―

青白い光を放つ蛍光灯が照らすコンクリートの通路を、繁は進んでいく。

―料亭『傘猫』―

国立大使館地下七階の狭い通路を進んだ先にあるこの店は、表向きこそ完全会員制にして貸し切り式の高級料亭という名目だが、そんなものは所詮隠れ蓑に過ぎない。

その本来の目的は政府関係の要人や裏社会で生活する人間など、曰く付き故に表舞台で堂々と生きられない人間達に、重要な交渉や約束事、話し合いなどの場を提供する事にある。

機密性を確保するため、客席は強固な防護壁で区切られ、八丈一間の『客間』と呼称される。

『客間』の出入り口には錠前が施され、専門スタッフのみが持つ専用の鍵によってしか解除出来ない仕組みになっていた。

政府の大臣によって管理されているこの場所の実態と真の目的を知る者は、イスキュロン広しと言えども数えるほどしか居ないという。

「（然し、『巨竜を駆る黒猫』とかいう奴は何故そんな店を待ち合わせ場所なんか指定したんだ？

確かに機密性は高いだろうが、一体……）」

等と考えている内に、繁は『傘猫』の扉の前へと辿り着く。

「（ここが『傘猫』か）」

通路の突き当たり左側に質素な鉄製の扉があり、上からは小さな猫型の茶色い電光看板が飛び出している。

扉には取っ手が見当たらず、『御用の方はここを押して下さい―店主』という張り紙とインターフォンがあるだけだった。

繁がインターフォンのボタンを押すと、低い男の声が受け答える。

『はい、こちら「傘猫」です。どういったご用件でしょうか？』

「突然すみません。実はある方と待ち合わせをしているのですが、待ち合わせ、ですか。相手様のお名前は？」

「それが、偽名しか知らんのですが……」

『構いません。当店をご利用なさるお客様の間では偽名を用いるのが暗黙のルールとなっておりますので』

「はい。では『巨竜を駆る野良猫』という方を、お願いします。

その方と今夜19：00にここでお会いする予定でして」

『「巨竜を駆る野良猫」様ですね。少々お待ち下さい』

暫くして、店主から返答が帰ってきた。

『お待たせ致しました。「巨竜を駆る野良猫」様はまだ来られていないようですので、ご予約のあった客間二十二番でお待ち下さい』

「有り難う御座います」

『それではごゆっくり』

店主の声が途切れると、金属の扉が横にスライドした。どうやら自動の引き戸だったらしい。

表向きには会員制の料亭とされるだけあつてか、『傘猫』の内部は際限無き高級感に満ち溢れていた。

涼しげな青白い光で照らされた店内は漆塗りの木材や大理石で彩られ、所々に飾られた絵画や竹細工の精巧さには思わず見とれてしま

う。

「（まさか俺の生涯でこんな所へ来ることになるうとはな……）」

等と思いながら、繁は受付で従業員に用件を伝え、店についての大まかな説明を聞いた。

今回は予約主である『巨竜を駆る野良猫』が代金の全額を受け持つ形式らしい事などを聞かされた繁は、早速客間二十二番と案内された。

客間の中は予想以上に広々としていて、利用者が居るであろう隣室からは話し声の一つも聞こえて来ない。

中央に設けられた漆塗りの机には四つ足に翼を持った龍―中国に於ける四霊の一・応龍が描かれており、机の両端と真ん中にメニユー表を立てる竹製の棚が据え付けてあった。

壁際には給水器・給湯器の他トイレまで備え付けてあり、客とそのプライバシーを外に出さない工夫が見て取れる。

「ご注文がお決まりになりましたらこちらの呼び出しボタンを押して下さい。

相手様が来られ次第、随時此方から連絡致します。

お手洗いとお水・お湯の機械はあちらに御座います。それでは、ごゆっくりどうぞ」

「はい、どうも有り難う御座います」

従業員の去った客間にて、繁は再び考えた。

『巨竜を駆る野良猫』とは一体何者なのか？

何故奴は自分が今デザルテリアに居ることを知っていたのか？

何故奴は待ち合わせの場所にこの店を選んだのか？

店と一体どんな関係があるのか？

考えれば考えるほどに深まる謎に繁が頭を抱えたその時、客間のスピーカーから従業員の声が鳴り響いた。

「お客様、相手が起こしになりました。そのまま客間二十二番でお待ち下さい」

第五十八話 闇のみぞ知る店内（後書き）

次回、『巨竜を駆る野良猫』と対面！

第五十九話 猫頭の工学者（前書き）

奇跡（悪夢？）の出会い！

第五十九話 猫頭の工学者

—前回より—

扉のロックが解除され、中に二人の人影が入ってきた。どちらもフールドのついたロープで姿を隠しており、それを見た繁は自分の愚かさを悔いた。

幾らマスクを被っているとはいえ、自身を相手に記号として認識させるような真似をしてしまつては機密性のきの字もありはしない。

二人組の体格差は凄まじく、高い確率で別種族である事は間違いない。

「それではごゆっくりどうぞ」

スタッフが立ち去るのを見守ってから、二人組は席に着く。

大柄な方は部屋の強度が大丈夫なのかと心配になったが、以前ビクともしていない辺りは流石はカタル・ティゾルと言ったところだろう。

「あ、初めまして。私の名はツジラ・バグテイル。お二人もご存じだろうが、ラジオ番組をやつてる」

繁がそう言つと、小柄な方が答えた。

「此方こそ初めまして。お目に掛かれて光栄だ、ツジラ。

私は『巨竜を駆る野良猫』」

小柄な方はフードを脱ぎながら名乗り上げた。

「本名を『九条チエ』。ラビーレマは列甲大学で研究者をやつていゝる。専門は機械工学だ。

種族は見ての通り猫系禽獣種さ。そしてこつちが——」

「角竜系地竜種のティタヌスだ。わけあって九条の部下をやっている」

大柄な方―もとい、九条の部下ティタヌスは淡々と名乗った。

そして三名は、お互いの用件を話し合った。

「すると何か？お前達も国立士官学校を標的にしていたと？」

「そうなるな。番組にそんな感じの投書が届いたんで、じゃあ向かうかと」

「九条、嬉しい誤算だったな。これでお前が守り通してきた件の証拠が役立つというものだぞ」

「ああ、全くだ！喜ベティタヌス、ヴァーミンの有資格者二人に古式特級魔術の使い手一人と結託出来た我々は、今や百人力と言っても過言ではない！

そう言うわけで辻原、お前にこれを託そう。今日我々が確保に成功した、秋本の悪行に関する決定的な証拠だ」

そう言って九条は小型のレコーダーを取り出した。

「士官学校に勤めている舎弟の部屋から回収したものだ。奴はある時を境に、こうして音声で日記をつける趣味があつてな」

―音声再生中（内容については五十二話を参照）―

「これは……恐ろしいな。校則の内容も仲間が確保した断片的な情報と合致する」

「そうだろう？私もこれを聞いたときは背筋が凍る勢いだった」

「そうだな。ところで、九条」

「何だ？」

「お前の言ってた合言葉っての、あれ言われなかったぞ？」

そう、成り行きでどうにか入店出来たものの、繁が地味に気になっていたのはそこだった

「ああ、あれか。すまん、メール送った直後に思い出したんだが、この形式だとお前は確率で合い言葉を要求されない場合があるんだよ」

「確率……？」

「そうだ。インターホンで受け答えをしてきた低い声の男が居たろう？」

「ああ、居たな」

「あれは実を言うと私の父上で、この店の経営者でもある。」

父上は肉声を聞くだけで相手の腹の内を大雑把に読む事が出来てな」

「それで俺は安全棒だと判断されたってか？」

「そうなるな。父上のヒトやモノを見る目は確かだ。娘の私が言うんだから間違いない。」

さて、それで作戦の件だが……」

「此方としては二週間後を想定してるが」

「そうか。では我々はこれでお暇するでしょう。」

ティタヌス、やれ」

「了解した」

指示を受けたティタヌスはぬつと席を立ち、大理石の外壁を両手でゆっくりと押した。

すると壁の一部が陥没し、3 m × 2 . 2 m程の縦長のスペースが出現した。

「な、なんだこの仕掛けは！？」

「『何だ？』とは愚問だな。出店用エレベーターに決まっているだ

ろっ」

「出店用エレベーター!？」

「そうだ。各客間の壁へ一定の力を加えるところで開くようになっていてな。」

このまま一気に大使館から各大陸の辺境にある『傘猫』の支店まで行き来が出来るのだ。

周囲から怪しまれるリスクを回避しつつ店から出られる上に、そこで勘定を済ませたり食事なども出来るので中々に便利だぞ」

「お帰りは各国家市町村中枢部行きの常設型転移魔術でひとつ飛び、というわけだ」

「成る程…曰く付きの連中が集う店だけにかなり高性能な仕様って訳だ。」

こいつあ凄え、俺も次から使ってみるかねえ」

「ああ、使ってみると良い。内緒話にはもってこいの場所だからない」

「ただ注意すべきは、他の客とのトラブルを起こしても公的機関を頼れない事だな」

「そこに関しちやもう覚悟は出来てるさ。こんな事やってる身の上だと、何時命狙われても可笑しくねえからな。」

前まではとんだ平和ボケだったのが、もう癖みてえに知恵が回るようになってしまった」

かくして三人は出店用エレベーターでデザルテリア辺境地にある『傘猫』の支店へ向かい、それぞれの更にそこから常設型転移魔術でそれぞれの拠点へと戻っていった。

― 19:13・九条とティタヌスの拠点―

「そついえば九条よ」

「何だ？」

「我々が確保した士官学校についての情報の内、辻原に提供していないものが僅かに見受けられたのだが、気のせいか？」

「気のせいではない。幾つかの情報は、辻原の役には立つまいと思つて報告しなかった」

「そうか……ではあの事も、奴の役に立つような重要情報ではないと？」

「何のことだ？」

「決まっているだろう？」

カーマインの顛末についてにの事だ」

「を、その事か」

「奴がどうなつたのかを話さなかつたのは、故意によるものか？」

「ああ」

「何故そんな事を？」

その問いに、九条は悪ふざけめいたギャグを思い浮かべる同人作家のような笑みを浮かべて答える。

「何故かだと？ 愚問だな」

「と、言つと？」

「そんな事理由は大概一つと決まっている。

面白そうだからだ」

それを聞いたティタヌスもまた、口元に幽かな浮かべながら言った。

「九条……やはり流石だな、お前という奴は。」

それでこそ、我が主だ」

第五十九話 猫頭の工学者（後書き）

次回、遂に士官学校へ突入か！？

第六十話 ラジオにDJが増えすぎた（前書き）

事件は教頭室で起きていた。

第六十話 ラジオにDJが増えすぎた

――二週間後・午前十時頃・士官学校教頭室――

「素晴らしい……実に素晴らしい……これぞまさしく絶景と言った所か……」

恍惚の表情で壁に並べられたモニタを眺めるのは、士官学校教頭・秋本。

この無数のモニタが映し出すのは彼が設けた校則により犯罪・不正行為・いじめ・校則違反を防ぐため全校内に設置された監視カメラの映像であるが、映し出されていたのは最悪の光景だった。

それ即ち、女生徒や女性職員達の私生活や着替え等の様子。

秋本が監視カメラを設置した目的の全てはほぼこれであつたと言つて良い。

当然こんなものが仕掛けられている事を、職員や政府機関関係者は知らないし、知ることも出来はしない。

そもそも誰が何をしようとも、自らの築き上げた帝国は崩れることなどありはしないと、そう言い切れるだけの自信が秋本にはあつた。

「何処からでも掛かつてくるが良い、私欲の為正義を騙る政府機関の眷属共よ。

あの厄介な校長と理事長を傀儡とした今、誰にも私の完璧な策を破ることなど出来はしない。

もし仮に暴こうものならば、私の愛しき恋人達が黙っていないだろう。

生徒・職員の中に紛れ込んだ彼女ら48人は、いずれも各分野に特

化したエキスパート揃いの最強先頭集団でもある。

それを相手に戦うなど、出来るはずも無い……。

そつだ。私は今やこの士官学校を――『せエーのッ、ツジラジッ！』
――！？！？』

秋本の思考を遮るようにして、校内中のスピーカーから数名による
タイトルコールが響き渡る。

突然の出来事に秋本が怯んでいる隙を突くようにして、続いて音楽
が流れ出した。

――萌え豚諸君御用達イのオ！

――ハーレムもののオ、養豚要員ッ！

――養豚養豚花。養豚ッ！

――養豚養豚フレンチ養豚ッ！

――養豚養豚金髪養豚ッ！

――養豚養豚巨乳で養豚ッ！

――養豚養豚甘えて養豚ッ！

――養豚養豚無差別養豚ッ！

――養豚養豚女も養豚ッ！？

――キリがねえぜ、豚共がアッ！

――屠殺屠殺赤目で屠殺ッ！

――屠ッ屠ッ屠殺だ萌え豚共ッ！

――屠殺屠殺俺の手で屠殺ッ！

――屠ッ屠ッ屠殺だお前等なんざア！

――てめえらそこそこ鬱陶しいぜエ！

――事ある毎にブヒブヒブー！

――屠殺屠殺界限のためにも、屠殺しようぜエ！

『お送りしているのは、インターネットの動画サイトで投稿から半
年足らずで再生数10万回を突破した大人気フリーシンガー・TA

KENOKO氏の「悪ふざけ」シリーズ第八弾として公開された「養養養屠豚豚豚」。

今日は。何時も不敵に貴方の街へ這い寄るDJツジラ・バグテイルです」

「ブクマ件数60件超えてるのに何でレビュー無し感想2件なのかが解りません、DJ青色薬剤師です」

「竜の風。2熱が再燃、一ヶ月もせずもう終盤な雰囲気作者が居ますけど私は専ら元気だったりします。

ニコラ・フォックスです」

「はい、そして今回から新しいパーソナリティが四人も増えてくれました」

「やったねツジさん、仲間が増えるよ！」

「それ死亡フラグだろ！」

「んじゃお前ら、リスナーの皆さんに早速挨拶だ」

「ツジラジをお聞きの皆様、初めまして。

新参パーソナリティのイモウトキシンと申します」

「その兄ことアニジキニンです。宜しく願います」

「どうも！新人の嶋野二十五番です。以後宜しく！」

「嶋野二十五番の旦那やってます、黒物体Vです！嫁共々頑張つていきますんで、どうぞ宜しくウ！」

「はい、みんな有り難う。それでは今回のお便り紹介行ってみたいと思います」

「……ツジラジ……そういえば忘れていた……謎解きラジオを騙る例のテロリスト集団……」。

だがその程度がどうした？あいつらはあいつらだ。バカ騒ぎでもテロでも何でも、勝手にやらせておけばいい……」。

そうだ、どのみち私が奴らに襲われる危険性は——「『そういう訳で今回はこちら、デザルテリア国立士官学校にて地球に優しくない校則で生徒や職員を苦しめる黒幕をぶつちめて殺ろうって発想な訳

です！』——な、何だとツ！？」

秋本の希望は一瞬にして瓦解した。

「そ、そんな馬鹿な！？何故だ！？

大東の扱う古式特級魔術『ジュルネ・ヴァッサーゴ』の隠蔽戦略は絶対——はっ！古式特級魔術ツ！

そう言えばあの一味には古式特級魔術の使い手が居たんだっ！何と言っことだ、私としたことがそんな初歩的な見落としをするなんてツ！」

自らのミスに頭を抱える秋本の元へ、一本の電話が掛かってくる。それは愛人達に持たせている『自分と連絡を取る為だけの携帯電話』からのものであった。

発信者の欄には先程名前の拳がった愛人の名前がある。

「もしもし、大東か！？」

『教頭、ご無事ですか？』

「ああ、何とかな！そちらはどうだ！？何か異変はあるか！？」

『無いと言えればこれほど幸いな事ありませんが……緊急事態です、教頭。』

校内に存在する生徒・職員・来賓等の学校関係者が……』

「どうしたというのだ？」

『我々四十九人を除き、一瞬にして消失しました』

秋本は絶句しそうになりつつも言葉を紡ぐ。

「どういう事だ！？何が起こっている！？」

『恐らく、敵の魔術攻撃と考えるべきでしょう。』

恐らく古式特級魔術の使い手である青色薬剤師が「ソワール・マル

「ファス」で、我々以外を外部に退避させたものと」

「テロリストにしては随分と妙な奴らだな。無関係の一般人を巻き込まない体勢を見せて民衆からの信頼を得ることで自らの行為を正当化し悦に浸ろうとでも言うのか？」

「いえ、それも目的には含まれているでしょうが、敵の目的はあくまで我々の抹殺でしょう」

「何？ではお前の考える『本格的な理由』とは何だ？」

「はい、教頭。」

この推察は、まことに申し上げがたい事なのですが……」

大東は呼吸を整え、言った。

「恐らく、恐らくですが、ツジラ一味が無関係の人間を荷が逃がした理由とは、もし仮に自分達が敗北寸前にまで追い込まれ逆転の見込みがなかった場合、強力な魔術やBC兵器、爆薬度を用い……」

「用い、何だ？」

「士官学校の校舎諸共我々を一人残らず抹殺すると、そういった事を我々に知らしめる為なのかも知れません」

「そんな……馬鹿な……」

「恐らくは故意に我々以外を逃す事で人数を減らし行動しやすくすると共に、「自分達は自爆テロさえも辞さない覚悟である」という意思表示でもあるのではないかと」

「そう……か」

「教頭、如何致しましょうか？」

「何をするかなど……決まっているだろう？愛人各位に連絡を取り、戦闘配備に付くよう指令を出してくれ。」

あちらがその気ならば、こちらも本気で挑まねばならないだろうか
らなあ……」

「畏まりました」

秋本は大東との通話を終えた秋本は、一人窓ガラスの向こうに広がる都市の風景を見ながら呟く。

「ツジラ・バグテイル……精々掛かってくるが良い。
私が嘗て倒してきた多くの愚者共の様に、お前も隅々まで喰らい尽くしてくれる……」

秋本の笑みによりうつすらと空いた鮫の大口から、一瞬茶色い棒のような何かが飛び出した。

第六十話 ラジオにDJが増えすぎた（後書き）

次回、ツジラジVS秋本軍団の壮絶な戦いがスタート！

第六十一話 メオトでかますぜリユーラちゃん！（前書き）

外野「来た！リユーラさんとバシロさんの合体コンボだ！」

第六十一話　メオトでかますぜリユーラちゃん！

―前回より―

香織の魔術により校内へ散り散りに突入した繁一行は、秋本の作戦により校舎内へまばらに配置されていた愛人達との交戦を始めた。

―歩兵科戦闘実習用アリーナ―

「行くぞバシロ！」

「合点承知の助ア！」

実習用アリーナに解き放たれた数奇なコンビ―リユーラとバシロは、待ち構えていた女生徒―何れも小学生かと見まごうほどに小柄で童顔な三名を相手に構えを取る。

「あんたたちね！最近ちまたを騒がせてるテロリストってのは！」

女生徒の一人、小さな弓を構えた尖耳系霊長種が言う。

「テロリストお？そいつぁ心外だなあ。私達は只の個性的なラジオDJだぜ？」

「うそおつしゃい！どこの世の中に、肩からおばけが生えたラジオでいーじえいがいるのよっ！？」

「おい、俺はこいつの宿六だぜ？お化けなんてふざけた呼び方は止してくんな」

「全くだ。体型のみならずボキャブラリーまで貧困とあっちゃあ、国立士官学校の名が泣くつてもんだ」

心底嘲るようなリユーラの言いぐさに、女生徒達は腹を立てた。

「なんですってえ！？かおの右はんぶんがくさってるどぶすのあん

たにいわれたくないわ!」

「もういちど言ってみなさいよこのおばさん!」

「そうよそうよ!おっぱいなんてしょせんしぼーじゃない!」

ここまで罵られれば普通は誰しも苛立つくらいはしそうなものである。

しかし流石は一介の中学生から国立士官学校特待生を経て陸軍少佐にまで成り上がり国民から英雄視されるに至ったリユーラとでも言うべきであろう。

女生徒三人の言葉に反応さえ、殆どしていない。

「はあ、お前等なあ……私の顔半分が腐つてるとかはまだ良いとして、『乳も所詮は脂肪』とかもうギャグとしても古すぎてツツコミも出ねーぞ?」

「言えてんなア。近頃の貧乳は養豚アニメでももつとマシな事言ってるぜ」

「まあどうしても突っ込んで欲しいってんなら、お前等のアナルなリヴァギナなりに私のイチモツをぶち込んでやっても構わねえがな」

「おいおい、あんな肉のねえギツギツそうなの口で良いのかよ?」

「ぶつちやけやだな。冗談抜きで。やっぱアナルは辻原、ヴァギナは清水のが良いや」

「アレ、冗談じゃ無かったのかよ……」

「冗談でこんなネタなんぞ言えるわけねーだろ。」

私は腐つてもイスキュロン民だぜ?愛つて奴は、尊重しねえと——
なえいつ!」

その瞬間、リユーラの左耳を一本の矢が掠めた。

「てンめエよくも俺の嫁目掛けて矢なんぞ放ちやがって!

話し中には矢放っちゃいけねえって学校で習わなかったか!」?

「ふふん、寧ろそこを狙えと教わったわ!」

「マジで!?!そんなフリルまくりリボンまくりの服着てる癖にそこ

まで知恵回るとか異常じゃね!？」

「なによ! 服装はべつに關係無いじゃない!」

「そうよそうよ! わたしたちのお洋服や鎧は、リボンからパンツまでみんな教頭先生が選んでくれた最高級品なのよっ!？」

「えっ、なにそれきめえ! あの教頭、そんな変態めいた真似までしてんのツ!？」

「きもいとはなによ! あんたたちの方がよっぽどきもちわるいじゃない!」

「そうよそうよ! じゅようもないようなキャラクターのあんたたちにきもいなんていわれたく————」

防御力の全く無さそうな白いビキニアーマーを着込んでいた鬼頭種女生徒の顔面へと、蛍光灯三本が一斉に叩き込まれた。

蛍光灯は砕け散り、幾つもの巨大な破片が少女の顔面に徹底して——額や頬、更には眼球までも——突き刺さっていた。

「いやあああああああああああああああ!」

余りに衝撃的な有様に、へたり込んで泣き叫ぶ尖耳種の女生徒。

しかしその隣に居た揚羽蝶系外殻種の女生徒は、醜態を晒す同級生を尻目にピンク色をしたハート形の巨大な宝石（実際はガラスやアクリルの塊であろうが）の埋め込まれたステッキを掲げる。

ドレス風のなりもあって、どうやら魔術師——軍用魔術科の生徒であるようだった。

「よくもぶりていをつ! くらいなさいつ!」

少女がステッキをバトンのように振り回し、両手で振り下ろすと、その先端部からハート形のエネルギー体が発射され、リユーラとバシロに襲い掛かる。

キュボボボン！

甲高く無駄にポップな音を立てて無数のエネルギー体が爆発した。この魔術は女生徒オリジナルの攻撃系魔術であり、厄介な詠唱がなく発生も早い癖に絶大な破壊力を誇っていた（また、本当に蛇足であるが先程言及された「プリティ」というのは蛍光灯を投げつけられて無惨な姿で絶命した鬼頭種の本名である）。

女生徒は勝利を確信した。四足竜種さえも仕留められる程の破壊力を誇る自身の必殺技を受けて尚立っていないなど、並大抵の生物には不可能だと信じて疑わなかったからである。

「さあ、いくわよふえありい。教頭先生にこのことをおはなしして、ごほうびをもらいにいきましょ」

揚羽蝶系外殻種の女生徒は、生き残った仲間の名を呼んだ。

しかし妙なことに、仲間からの返答がないばかりか声も聞こえないというか、気付けばその場には彼女一人以外に士官学校の女生徒の姿は無かった。

尖耳種の「フェアリー」どころか、「プリティ」の亡骸までもが、忽然と姿を消していたのである。

女生徒の脳裏を、最悪の事態が過ぎる。そして次の瞬間、彼女の眼前に湿って黒ずんだ塊が落ちてきた。

それを見て、女生徒は絶句し思わず尻餅をついてしまう。

「こんな……こんなこと……」

嘘だと思ったかった。しかし見まごう筈もない。

彼女の眼前に落ちてきたのは他でもない、嘗ての仲間「フェアリー」と「プリティ」の生首だったのである。

「え……うう……あ……」

恐怖の余り声も上げられない女生徒の眼前へ、更なる絶望が訪れる。

「「よう、大丈夫か？」」

そんな声を伴って現れた黒い何かによって目の前の生首二つが叩き潰され、血肉や骨の破片が飛び散る。

女生徒が恐る恐る顔を上げると、そこには自分の必殺技に敗れ去った筈のリユーラとバシロの姿があった。

女生徒が声も出せない程怯えているのを良いことに、二人は一方的に話を進めていく。

「まさかお前があんな技を持ってようとは、流石に驚かされたぜ」

「だがツメが甘かったなア、クソガキ。身体が羽化しようが、頭はまだまだ幼虫じゃねえか」

「うちの宿六は変幻自在でよ、ガキ二人程度引っかけて釣り上げるワイヤーぐれえ幾らでも繰り出せる」

「そいつで釣ってきたテメエの仲間二人を盾にすりゃあ、あんな攻撃系魔術如き幾らでも防げんだよ」

「まあ、あんな貧相なガキ程度最初はすぐぶっ壊れるかと思ってたんだが……」

「テメエ等のダッセエ服だの鎧だの、よく見りゃ一丁前に防魔仕様の合成繊維とか耐魔合金で作ってあるじゃねーの」

「しかもノモシア貴族・上級士官御用達の最高級ブランドの作った最新作とはよ。」

そりゃあお前、そんな装備がありゃあの程度の攻撃系魔術じゃそう簡単にゃ壊れねえわな」

「良い教頭を持ったな、テメエ等……いや、パトロンか？」

「ま、どっちでも良いけどよ。私等にも関係ねーし」

リユーラの左腕が、女生徒の襟首を掴む。

「『どのみちテメエを殺すつー予定は、今ここで片付けなきゃなんねーしなアっ！』」

二人の叫びと共に、女生徒の身体は中高く放り投げられる。

そして急降下を始めたその身体に、リユーラの右腕―バシロを受け入れ、彼と同化したが為に哺乳類とも爬虫類ともつかない異形のそれに変貌している―による回し蹴りが入らんとする。

それと同時にリユーラの長ズボンの裾から伸びてきた針金のようなバシロの触手が、太股から裾の辺りまで、右脚の脛すねを縦断するように真っ直ぐ伸びたファスナーを開く。

開かれたファスナーの中から現れたのは、バシロが変形した大振りな回転鋸の刃であつた。

内部機関が無いにもかかわらず、どういうわけかその黒い刃は高速で回転している。

「『夫婦奥義之ハッ！――』
めおとあつぎのはち 斬筋断骨脚』
ざんきんだんこつぎやく ウウウウツ！」

そんな二人の雄叫びと共に叩き込まれた臍の一撃は、女生徒の外骨格、脊椎、筋繊維、神経組織、主要臓器を綺麗に切断。

リユーラが一回転し脚を振り抜くと同時に刃は引込み、バシロの触手によってファスナーが閉じられる。

かくしてアリーナを舞台にした二対三の勝負は、かくも奇妙で何とも豪気な（自称）夫婦の圧勝に終わる。

中等部所属の愛人三名が死亡した秋本軍は、彼自身を含め残り46

名となつた。

第六十一話 メオトでかますぜリユーラちゃん！（後書き）

次回、戦いは更なる激化を見せる！

第六十二話 私の兄がこんなに空気なわけがない（前書き）

激闘は尚も続く！

第六十二話 私の兄がこんなに空気なわけがない

―前回より―

「すぐ離せ！今すぐ彼女をその手からッ！」

「ははははははっ！断ると、そう言ったのなら、どうします！？」

「貴様等をつ、貴様等をただ、殺すのみっ！」

五七五の川柳めいた会話を繰り返しているのは、破殻化した小樽桃李と、秋本の愛人であるウミウシ系軟体種の歩兵科教員。名をラズリ・スラッグと言う。

身体の殆どを筋肉で支える軟体種ならではの怪力を持って獣機関銃を軽々操る彼女と対峙する桃李は、この段階で既に秋本の愛人を四名殺害しており、次なる標的として狙撃科教員の羽毛種を殺そうとしていた所だとラズリと遭遇。

一心不乱に乱射された機関銃の弾丸を、待ってましたと言わんばかりに羽毛種女を盾にして防ぎ、そのまま挑発的あらゆる平面を重力無視のままに走り回っているのだった。

対するラズリは自身の恋人（教頭公認の仲）であつた羽毛種女を殺させられた事から怒り心頭。

機関銃で応戦するも、弾丸は全て愛人達の死体によって防がれてしまっていた。

「このゴキブリの出来損ないめが！卑怯な真似を！」

「卑怯で結構、元より毒沼育ちの腐れ外道ですからねえ私は。

まあ最も……」

桃李は死体を投げ捨て、言い放つ。

「職場を裏切り非道な独裁者の側に付いた貴方とでしたら、汚さはどっこいどっこいな来もしますがねえ！」

「貴様……秋本教頭を愚弄するかアアアア！」

ゾガガガガガガガガガガガ——

ラズリの重機関銃が火を噴き、大口径の弾丸が教室内の窓ガラスや備品を悉く破壊していく。

しかしゴキブリ故の機敏さと持久力を以て所狭しと駆け巡る桃李を相手に感情任せのガムシヤラな連射など無意味であり、意味のない連射は急激な弾切れを引き起こす。

案の定ラズリは直ぐさま弾丸を使い果たしてしまい、自棄を起こして機関銃を投げつける。

しかしそんな攻撃とも呼べないようなものが桃李に当たる筈も無い。

「おやおやどうしたんですう！？さっきのそれは攻撃ですかあ！？」

「黙れエエエエツ！」

そこに加わる桃李の嘲り。

この小樽桃李という女は衛生害虫の代名詞とされるゴキブリを象徴とするヴァーミンの有資格者であるが為か、それとも元々そうなのかは定かでないが、特定の他人を徹底して嘲る事に心血を注いでいた。

『特定の』とはつまり、嘲る必要性のある他人の内、『あらゆる可能性から考えて今後一切協力的・友好的な関わり関わりは持たない』という確定的な証拠が得られている』という事を大前提に、死者、瀕死者、その場に居合わせていない第三者、自ら殺害する事と確定しており尚かつ様々な方面から考慮してそれが如何なる場合も変更される事がないと確定できる相手等が含まれる（この辺りの定義は

大変曖昧かつ複雑なものであり、作者の文章で説明しているとこの話しが四千字を超えてしまい読み辛くなるためこの辺りで留めておく。

故に桃李は、秋本の愛人であるこの女を徹底して嘲ることが出来た。今頃は香織が外部へ逃がした生徒・職員達により秋本軍の真実も明るみに出ているはずであるし、そうとあれば秋本の手先であるこいつをここで嘲らないでおかない手はない。

ここで上手く話を進めておくことが出来れば、ツジラジはよりカタル・テイズルの民衆に愛される番組となり、政府関係者とも結託する事が出来るようになるかも知れないのだ。

桃李は可能な限り高速で思考を展開する。

「（幸いにも奴は元々水棲の傾向が強い軟体種……。それも体組織中の水分比が比較的高く防御用の殻も持たないウミウシ系、となれば私の温度操作で煮立たせるなり凍らせるなり出来ようもんですが……。相手がこの大きさ、かつ変温種族だとすると最低でも半径5m以内に近付かないとほぼ意味を成さないって所が問題なわけでした。」

直触りなんて論外で、もし仮にやろうとすれば軟体動物系軟体種特有の怪力にねじ伏せられて腕の一本でも持っていかれそうで怖いんですよね！。

破殻化したコックローチの外骨格なんて強度で言えばヴァーミン十種類中最下位レベルですし……ここは回避軸で接近戦に持ち込むしかないようですね……。」「

この間、僅か5秒しか経っていない。

桃李の頭の回転は幼少期よりほぼ常軌を逸したレベルに達しており、本気で思考を展開した彼女は実質的に時間の流れを遅くする能力を持つていると言って良かった（長時間続けていると激しい頭痛に悩まされるため滅多にせず、やるとしても最長一桁台に留めているが）。

「（ひとまずは奴へ安全に近寄らなければ……）」

桃李が平常時のペースでそう考えた瞬間、遠くにいたはずのラズリが突然目の前に現れた。

「——ッ!？」

「……驚いたろう？」

ラズリが言う。

「元来鈍足であるはずの貝類系何体種が何故ここまで俊足なのか、疑問ではないか？」

余りにも凶星な発言に、桃李はぐうの音も出なかった。

「凶星過ぎて言葉も出ないか……無理も無い」

壁際に追い詰められ身動きの取れなくなった桃李の首を、ラズリの扁平な右手が掴んで壁に押しつける。

「このまま貴様の首をへし折るなり締め付けるなり叩き付けるなりすれば一瞬で殺せるが……冥土の土産に聞かせてやろう。」

私が持つ桁外れの力について——つぐああああああああっ
「！」

その瞬間、ラズリの右手が炎に包まれた。

桃李が流し込み続けていたローチフィルムを加熱し、発火させたのである。

「すみませんねえ、ラズリ先生。」

貴方のお話を聞きたいのは山々なんですが、どうせラビーレマの学者が考案した特殊なトレーニング法の結果だとか、神経の放つ微弱な電気信号を餌にするミクロマシンを体内に仕込んでるとかそういうオチでしょう？」

「貴様あああああ！力の秘密がそれだと何故解ったあああああああ！？」

炎が全身に燃え広がって尚、ラズリは必死の形相で言葉を発する。

「そりゃあだって、私は生粋のラビーレマ民ですから。故郷の事情に詳しいのも当然ですよ」

「あああああああ！そんなばガボエイフェツ！」

只でさえ熱に弱い身体を悉く焼かれた上に熱気を吸い込んだ結果、更に熱に弱い喉が焼け焦げて貼り付いてしまったラズリ。

それでも無茶をして喋ろうとして喉を動かしてしまっただが為に、持ち前の怪力が災いして喉の柔らかい粘膜が張り裂け、口から大量の青い液体を吐き出してしまう。

これは彼女の体液であり、血中に含まれる呼吸色素ヘモシアニンが銅イオンと酸素の反応に由来する青色を示す事によるものだった（我々人類を含む脊椎動物は赤色素ヘムを持つヘモグロビンが血液の主成分である為血液は赤い）。

全身を焼かれ大量出血まで引き起こしたラズリに残された道は最早死の他になく、のたうち呻きながら苦悶し絶命しゆくその姿を嘲りながら、桃李は部屋を去って行く。

『（いやあ、流石は桃李です。』

この程度の相手、私が手助けをするまでもないようですねえ）』

かくして六名が死亡した秋本軍は、残すところ40名となった。

第六十二話 私の兄がこんなに空気なわけがない（後書き）

次回、ツジラジメンバーを待ち受ける更なる脅威とは！？

第六十三話　ねこメカ！（前書き）

秋本軍相手に優勢かと思われたツジラジメンバーにも、苦戦を強い
られている者が居り……

第六十三話　ねこメカ！

―前回より―

リユーラや桃李が秋本軍を圧倒する中で、珍しく苦戦を強いられている―というより、手も足も出せずに居る者が居た。

不死身で名高き元開業医・ニコラである。

理系魂をくすぐられ、軍用理学コースの理科実験室へと忍び込んだ彼女を待ち受けていたのは秋本の愛人が一人であるカマキリ系外殻種化学教師・真栄田（外観はラズリやニコラなどと同様極めて人間的である）。

事故により両足を失った彼女は普段から歩行補助用のパワードスーツを着用していたが、今回ニコラの眼前に現れたそれは完全に軍用の品だった。

「どうした！？随分と慌ててるみたいだな、嬢さんや！」

全高4mはあろうかという軍用パワードスーツの中央に乗り込んだ真栄田は、手早い操縦で拳を振り回し、逃げ惑うニコラ目掛けて机や実験器具を投げつける。

「そりゃあ慌てもしまさあねっ！あたしゃあんたに指一本触れられないんですからねえっ！」

対するニコラはそれらの猛攻を狐由来の身体の運動能力で素早く避け続けるが、いざセックモスの蛾型弾丸を放とうにも、狙いを定めたり発生源を設置するより前に鉄の拳や張り手で叩き飛ばされてしまったため攻撃のチャンスが一切無いに等しかった。

「（くっ、こいつはやばいね。私の不死性は『修復』の方は完璧なんだけど、痛覚や疲労は極めてストレートに来ちゃうのよねん。これじゃ狙いも乱射もあつたもんじゃないわ。ただ、あの猿女が乗ってるデカブツを止めることが出来たら……）」

桃李程ではないにせよ、霊長種から見れば機敏な動作でどうにか真栄田を翻弄しようとするニコラ。

しかし彼女の思惑に反するように、真栄田はパワードスーツによる打撃を的確に打ち込んでくる。

「（こいつ……多分昔はゲーマーだったんじゃないかしら？
それもアクションとかSTGとかFPSとか専門の、あの動作から見ると大方ゲーセン仕込みって所かしら）」

ニコラの読みは当たっていた。真栄田は学生時代、天賦の才を持つゲーマーとして地元のゲームセンターで有名になった事があるのだ。

「（はあ……『ゲームなんぞ出来て将来何になる』とかいうのは不寛容で頭の固い団塊世代のアホが言う世迷い言の代名詞だけど、まんまコントローラを移植したような操縦システムの機械が出来てからはその発言も益々アラだらけになってんのよねえ。

最初は雇用が増えるとか不況も吹っ飛ぶとか思ってたけど、まさかこんな形で苦しめられるとは……）」

そうこうしている内にニコラも疲労が限界に達し、足首をパワードスーツによって掴まれてしまう。

「（やば！）」
「うルア！」

ニコラがそう思ったとしても時既に遅い。真栄田はニコラを壁目掛

けて勢い良く投げつける。

ドゴア！バギゴッ！

鈍い音を伴ってコンクリートと骨が碎ける。

「スアラバツ！」

それでも飽き足りない真栄田は、近付いてニコラに追い打ちをかけ続ける。

ニコラの骨が砕け、筋が切れ、内蔵が破壊されていく。しかしそれでもノモシア王族に受け継がれる高純度の魔力からなる呪いは強力で、死なないばかりか徐々にではあるが再生を続けていた。

「さア！死ねエ！我らがツ！教頭のツ！栄光のツ！為にイイイイ！」

無抵抗のニコラを目一杯乱雑に殴り続ける真栄田。

その顔つきは教育者としてのモラルや倫理観、覚悟をもった化学教師たるものではなく、ゲームの中の最強である自分自身に酔いしれる稚拙なゲーマーのそれであつた。

「何故！？何故！？何故だあああああつ！何故死なない！？何故殺せない！？」

幾ら殴つても死なないニコラに苛立ちを感じながら、尚も殴ることを止めない真栄田の背後で、唐突に瓦礫が突破されるような音がした。

「さつさと死——どうおおおおお！？」

突然の出来事に取り乱した真栄田は振り向きざまに叫ぶ。

「なっとなななっとな何者だああ！？何も、なに、何者だあ！？」

何処からどう見ても慌てている真栄田の問いかけに答えるものは居らず、真栄田の脳内では焦りばかりが加速していく。

そんな中、散らかった理科実験室の床を堂々と歩いてくる二人の人影が彼女の目に入る。

体格が大きく異なる二人組は、どちらもクリーム色のローブで全身を覆い隠している。

「な、何者だ貴様等！？ここは部外者立ち入り禁止だぞ！？」

真栄田の叫びは高圧的でこそあったが、明確な焦りや怯えというものが如実に表れていた。

そんな彼女に対し、ローブの二人組の内小柄な方が言う。

「いやあ、これは失礼。正門も窓もロックされていたので屋根の上から突入する他ありませんでな。

お許し下され、悪気が会ったわけではないのです」

「御託は良いから名乗れッ！」

「失礼、私どもはしがない旅行者でして、とある筋より本日こちらでツジラジ公開録音の催し物があると聞いて馳せ参じた次第。

私も、私の臣下であるこの男もあの番組の大ファンでしてね。特に青色嬢の声が綺麗で可愛らしいとは、職場でも評判なのですよ」

「そんな事はどうでもいい！そのローブを脱ぎ捨てて名を名乗れッ

！」

「はあ、畏まりました。おい」

「ああ」

二人は一斉にローブを脱ぎ捨てつつ、淡々と名乗り挙げた。

「お初にお目に掛かります。ラビーレマは列甲大学にて機械工学を研究しております、研究員の九条チエと申します」

「同じく初めまして。私、九条の部下兼助手のティタヌスと申します」

そう。唐突に現れたローブの二人組とは、嘗て料亭「傘猫」で繁に

協力し秋本軍に挑む事となった二人組――桃色の毛を持った小柄な猫系禽獣種の女・九条チエと、大柄で身体の所々が機械的な角竜系地竜種・ティタヌスであつた。

「さて……そうだティタヌスよ、挨拶の印として此方のご婦人にアレをお送りしてはどうだ？」

「何？アレをか？いやあ、アレはやめておいた方が良いと思うぞ？」
九条の提案に、ティタヌスは笑い混じりに苦言を呈する。

「何を言っている。彼女を見る、両足を失いながらも尚こうして努力を惜しまずパワードスーツを乗り回して弱い者イジメに精を出されているじゃないか」

「弱い者イジメとは何事かつ！これは教員としての職務の一環であるぞ！」

九条の発言に戦うことも忘れて突っ込む真栄田だったが、党の相手方からは華麗に無視されてしまう。

「確かにそうだなあ。そう言われてみれば、確かに九条の言うとおりだ」

「何が言う通りかつ！助手ならば上司の間違い程度訂正せんかつ！」

「そういう訳で御座いますからして、名も知らぬ外殻種のご婦人殿。私どもよりの最大の敬意と挨拶の証で御座いますこれを、どうぞ受け取って下さいませ」

そう言つてティタヌスが右腕を真栄田に向けると、機械的な意匠が目立つ太い腕が瞬時に変形。

終いにはロケットブースター付き弾頭を使用した対戦車仕様の無反動砲を思わせる流線型の弾丸と射出部が露わになった。

「な、何だそれはっ！？」

「愚問ですなご婦人殿。何と言つたら決まっているじゃありません

か」

「我々から貴女様への、敬意と挨拶の証で御座いますよ」

「馬鹿め！そんな形で敬意と挨拶を表明する奴があるかつ！

ええい、貴様等など今にこの私が叩き潰して——ッ！？な、何故だ！？間接部が動かん！

くそ、こうなれば脱出を——何！？脱出用ハッチまでビクともしないだと！？」

気付けばパワードスーツの手足関節部と脱出用ハッチはいつの間にか謎の接着剤らしき物体で固められており、手足を動かすことも脱出することもままならない。

「動かない、という事は……この男の贈り物を正面から受け取って下さるのですね？」

「馬鹿！そんな訳があるかつ！良いから早くそれを下ろせつ！」

「まあまあ、そうご謙遜なさらず。口で何と言われようと、お体の方は正直ですぞ？」

「その風体でアダルト漫画のような言い回しを使うんじゃないこのシロサイの出来損ないが！」

「シロサイの出来損ないとは心外ですな、私はこれでもカスモサウルスですぞ？」

「お前の種族なんぞ聞いとらん！そもそも脊椎動物系種族なんてどれも同じようなものだろうが！

良いから早くそれを下ろせつ！私を敬っているのなら、早くそのでかぶつを——」

言い終わるより早くに、パワードスーツの操縦席が粉々に吹き飛んだ。

この間でかなりの再生と疲労回復に成功していたニコラはこれを見て見事な爆発だと感心した。

この後九条・ティタヌスと出会ったニコラはお互いの事を話し合い、お互いの事を知るや否や意気投合。

新たな秋本軍の手下を捜しに校内へと繰り出していく。

かくして40名だった秋本軍は一名減り、残すところ39名となった。

第六十三話　ねこメカ！（後書き）

次回、遂にあのコンビの活躍が！

第六十四話 しんうち！（前書き）

遂にあのコンビが姿を現した！

第六十四話 しんうち！

―前回より―

壮絶な戦いは尚も続いていた。

「えオリアアッ！」

繁の振るう槍の矛先が、中等部歩兵科女生徒の頸動脈を斬り付ける。続いてそこへ斬り掛かってきた兎系禽獣種の女も、香織の魔術によって操られた校舎の一部に叩き飛ばされてしまう。

ヴァーミンの有資格者・辻原繁と、古式特級魔術の使い手・清水香織。

元より姉弟兄妹同然の関係にあったこの二人の連携は秋本の愛人達を悉く圧倒しており、現時点で既に9人を殺害。

更に現在も、周囲を取り囲む愛人達を次々と始末していく。

その姿は最早人を逸した存在―言ってみれば獣、或いは悪霊か魔物を思わせるものであった。

別に繁が破殻化をしていたとか、香織が幻術で愛人を相手に自分達の姿をそう見せていたとかそういう事ではない。

淡々と、しかし猛烈に多くの相手を次々と手にかけていく二人の雰囲気周囲の目にそう映っていたのである。

そして二人が丁度20人を殺害した辺りで、敵兵がぱったりと出てこなくなった。

「……どういう事？」

「連中め、まさか俺らに怖じ気付いて逃げ出したなんて事ア無えだろっし……となると、アレか？」

「アレって？」

「ゲームとかだとよくあるだろ？長時間の雑魚戦が急に終わって、間を置いてからいきなりボスクラスのデカブツが出てきてガーって」

「あー、そのパターンは出来れば回避したいよね全力で」

「無論同感だ。が……」

繁は不安げに辺りを見回す。

「どうしたの？」

「なあ香織よ、改めて思うに……この部屋ア妙じゃねえか？」

「え？どこが？普通の綺麗なアリーナじゃん」

「そう、そこだ。お前、今の今までここいらの死体や血痕を掃除したか？」

「……ッ！……そういえば、そうだった……」

香織ははっとした。

彼女が習得している魔術の中には、例えば壁の血痕を綺麗に吸い取るものや、或いは地中・異空間等に死体を運び込むもの等が存在している。

しかし香織はツジラジの生放送について、これらを使用する事はなかった。

既に場所が割れているし、現場の状況を克明に流す事が目的である。即ち、隠す必要性が無いのである。

「……私達、ひたすら殺しまくってた筈なのに……何で……何で、何で死体が消えてるのっ！？」

香織は辺りを見回して驚愕した。

先程まで一心不乱に愛人達を殺していた筈なのに、死体が見当たらない。

血痕さえも、抜け毛の一本や薄皮の切れ端さえも、綺麗さっぱり消えているのである。

香織が呆気に取られていると、咄嗟に繁が叫ぶ。

「伏せろ、香織！」

その瞬間彼女の眼前に巨大な深紅の球体が飛んでくる。

必死に避けなければと思い立つ香織だが、突然の事態に驚いた身体は思うように動いてくれない。

「クソッ、怨むなよ！」

その言葉と共に、繁の飛び蹴りが香織を横方向へ大きく突き飛ばす。

——ズギョォイン！

球体は香織の背後にあった壁に当たると同時に、壁材の塗料とコンクリートを大きく削り取った。

「！？」

「（クソ……さっきから舌が塩辛い油モン食い過ぎた後みてえにヒリヒリすると思やあ……案の定紋章が出てんじゃねえか）」

未だヴァーミンの有資格者としては新参である繁は、紋章の発生する位置が一定でない。

道中拾った鏡で、現在紋章が自分の舌に現れていると知った繁は確信した。

——俺含め四人目か……悪くねえ！

「香織……」

「何？」

「この状況下で何だが、嬉しいお知らせだ」

「へえ、どんなの？」

楽しげに何かを覚ったような香織の問に、繁は同じく楽しげな調子で答える。

「……居るんだよ。さっきの奴かどうかは知らねえが……ヴァーミンの有資格者だ」

「やっぱり、さっきの奴？」

「どうだかな。もしかしたらさっきのをやった奴のサポートかも知れねえ」

「そう。……実を言うとな、私も感じてるんだよ……」

「ほう、何をだ？」

「何をつて、決まってるじゃん」

これまで以上に恐ろしい脅威たりえるかもしれない存在が眼前に潜んでいる事を覚りながら、香織は尚も楽しげな表情で言う。

「古式特級魔術の使い手だよ。」

それも前にラビーレマに居た、クエインっていうクブス残党の流体種とは真逆の——つまり私とも真逆の——純粋な攻撃系魔術以外はからっきしの奴がね」

「つまりアレか？お前が潜入中に意気投合したっていう、例のノゼツとかいう」

「いや、あの子じゃない。あの子はあくまで『攻撃系以外が馴染まない家系』の産まれただけであって、初歩的な奴なら攻撃系以外も扱えたし。」

私が言ってるのはそういうのじゃなくて、本当にただ攻撃系魔術だけに特化した完全火力型フルバーンの変わり種だよ」

「成る程、そいつは確かにお前とは真逆だな。」

まるでジョー。ターとブ。ンドーよろしく、根本から対を成す性質

って訳だ」

「ははっ、どっちがどっちよ？」

「そうだな……この流れから言っと、お前がブラ。ドーって所じゃねえか？戦術が変則的だしよ」

「そうかなあ？私は。ランドーっていうより、ア。ツシーとかメロ。ネとかミュー。ーとかのが似合うと思うんだけど」

「相変わらずモブ扱いのトリッキーな悪役好きだよなお前」

「そりゃ、ああいう奴らこそ輝くべきだと思ってるからね私は。特にミュ。ラーが好き。あとケ。ゾーとウ。ガロにはもうちょっと頑張っただけかなあ」

「へへっ、もうラノベのメインヒロインが言う台詞じゃねーって」

「良いじゃん別に。元々メインヒロインとしての自覚なんて在ってないようなもんだし。」

さて……それはそうと、こっちが隙だらけで待ち伏せしてるんだし、敵さん方もいい加減顔くらい見せたらどうよ？」

「そうだよなあ。こんな近くで明確に気配が察知できるんだ、隠れた所で無駄ってモンだろうによお」

二人の言葉に促されるようにして、アリーナの東端と西端からそれぞれ人影が姿を現した。

東端から現れたのは、生徒と思しき服装の小柄な少女であった。西端から現れたのは、保険医と思しき服装で長身の女であった。

「よもやここまで簡単に見抜かれるとは、些か予想外だったわ」
白衣を着た食肉目系禽獣種と思しき女が言った。

「あの程度であそこまで察知するなんて、お兄さん達流石だね」
小柄で人に近い妖精のような有角種の少女が言った。

「実にエロそうなケモ保険医に、妖精みたいなロリ学生つか……」
「学園もんのエロゲやエロ漫画じゃ定番の攻略対象じゃねえかア……」

かくして39名だった秋本軍は、20人が死亡し残すところ19人となった。

第六十四話 しんうち！（後書き）

次回、突如現れた二人組の実態とは！？
そして小柄な少女に隠された、衝撃の事実が明らかに！

第六十五話 やっぱり俺の仮説は間違ってたねえ！（前書き）

アリーナでの壮絶な戦い！

第六十五話 やっぱり俺の仮説は間違ってねえ！

— 前回より・教頭室 —

教頭室にて、秋本と愛人の一人が連絡を取り合っていた。

「首尾はどうです？」

「はっ。誠にお恥ずかしながら、劣勢としか言い様が御座いませんと、言つと？」

「はい。我々はどうもツジラ一味の実力を見くびっていたらしく……残存戦力は教頭ご自身を含め19人となっております」

「……そうですか」

「しかしご心配には及びません、教頭。諜報科の鳴頃野神子音とその姉にして保険医の比良子ひらこが現在、ツジラ・バグテイル及び青色薬剤師と思しき二人組と接触したとの報告がありました」

「ふむ……鳴頃野さん達ですか……彼女らは確かに我々の内でもかなりの実力者でしたねえ」

「ええ。しかし教頭、それだけではありませんよ。あの姉弟は元より連中に対抗しうるに相応しいのですよ」

「ほう？ どういう事です？」

「教頭の生まれ故郷であるヤムタの慣用句にあるでしょう？ 「蜂殺しには蜂を放て」という言葉が」

その慣用句を聞いた秋本は、納得したように深くうなずいた。

「成る程、そういう事でしたか。確かに、敵の元へと本質が似通う見方を送り込むというのは、古くからある作戦ですからねえ……」

— 同時刻 —

かくして『古式特級魔術を行使する魔術師』と『ヴァーミンの有資格者』という組み合わせによるミラーマッチは熾烈を極めていた。

保険医・鳴頃野比良子（ねぐら の ひらこ）が放つ攻撃魔術は何れも強力なものであり、しかも繁と香織を的確に狙い撃つてくる。

攻撃系魔術とはその名の通り対象物の攻撃・破壊に特化した魔術の総称であるが、その意味合いは『主に攻撃に用いられる魔術』であつて、『攻撃に用いることの出来る全ての魔術』ではない。

現に先天的素質から攻撃系魔術を全く扱えない香織も、『マルファス』や『デカラビア』系統の古式特級魔術で建物や岩石を操ったり、魔術によつて召喚した武器などを用いた戦闘は可能である。

では攻撃系魔術の特色とは何かと言えば、『攻撃・破壊の効力が魔力に起因する』という事に限られる。

否、それ以上に『他の魔術より攻撃に対し知恵や技術を要さない』という特徴もあるにはあるが、その点は現時点に於いて余り重要でないので言及を省く。

つまりどういう事かと言えば、例えば香織が行うような魔術攻撃はあくまで『建材や岩石で殴ったり、単なる武器での攻撃』として扱われるが、攻撃系魔術での攻撃は『純然たる魔術による攻撃』として扱われるのである。

多少解りやすく説明するならば、典型的なファンタジーもののRPGに於ける『物理』と『魔法』の差だと思えばいい。

カタル・ティゾルに於いてこの差が何を成すかと言えば、攻撃・破壊対象の性質に係してくる。

つまるところ攻撃対象の耐久力が高かったとしても、それに魔術対策が成されていなければ攻撃系魔術による攻撃が有効、と……すんません、やっぱり『物理防御』と『魔法防御』の話でした。

ともあれ、攻撃手段に於ける性質の違いを差し置いたとしても、魔術師としての比良子の実力は計り知れないものがあつた。

更に言えばもつと問題なのは、無差別にして強力無比な破壊力を誇る番号不明のヴァーミンを保有する有資格者・神子音であろう。

神子音の放つ深紅の球体は血液のように不透明な液体で構成されており、直系は5cmから1m程と多岐に渡る。

何らかの物体に接触した瞬間砲弾は液体としての性質の元に崩れるが、その際触れた物体は何もかもが煙も上げず削り取られたように消滅してしまう。

更に同じ液体でありながら、繁のアサシンバグと違って、発射されて以降何らかの物体に触れるまでの動きはそれこそ砲弾のようであつた。

「(クソっ！タセツクモスやコックローチと違って完全に直線的な飛び方しか出来ねえらしいが、それにしてもあの連射力は何なんだ！？まるで機関銃じゃねえか！

魔術だろうが学術だろうが―無論ヴァーミンだろうと、この世の中のモンには必ず『四則に基づく質量保存の法則』が当て嵌まる。

1・0+1・0は必ず2・0だし、3・0²は原則9・0でしかねえ。

不純物のない完全なゼロからは例え1/100000000さえも産まれはしねえ。

つまりところ何かをやるにはどっかからそれと同じだけのモンを取り入れなきゃなんねんだ……」

繁は多才な魔術によつて猛攻を凌ぐ香織の心配をしつつ、広大な室内を素早く飛び回りながら打開策を考えていた。

「(無論浮世は例外ありき。虚数は自乗して負の解を成すし、青薔

薇は人造で産み出される。

砂漠で育つカエルだって居るし、浮気しない・早死にする・ス。ンドは殴り特化の人型で派手に目立つっつー法則性が目を引く歴代ジヨ。ヨの中にあつて、90近くまで生きてスタ。ドも活躍基本地味だった紫のイバラ、おまけに浮気までしやがった二代目が居る！あとそんなジ。ジョの相方も、作中で死亡が描写・言及されんのがデフォなのに四代目だけはそれが無かつたしな！

だがそれは極めてイレギュラーな場合……そう、現実にそうそうお目に掛かれるような代物ではねえ！

つまり奴のヴァーミンもあれだけの連射力を演出してるって事ア何らかの仕掛けがあると考えた方が妥当なんだが……」

繁は思考を巡らせる。桃李程ではないが、幼い頃から長つたらしく小難しい（主に昆虫学関係の）の文章を読み慣れてきた繁は、その関係上一般人よりそれなりに頭の回転が速い。

「（待てよ……そういえば奴が現れる前に……いや待て、別の可能性も……何よりこの仮説が当たったとして攻略の足しになるのか……？）」

熟考の末に繁はある仮説に辿り着く。

「（だが実証しねえよりはマシだろうよ……厳密に断定できる『無駄知識』なんてもんはこの世に存在しねえ……なら、実証するしか無えっ！）」

決意を固めた繁は、懷からビニール袋を取り出す。

その中に入っていたのは、今朝方収録前に食べたフライドチキンの骨であった。

「（時間無くて軟骨食い損ねたのを残しといた甲斐があつたぜ。
トリの正しい食い方を教えてくれた親父には、その他諸々も含め感
謝してもしきれねえぜ）」

繁は軟骨の残つた骨を数本、名残惜しく思いながらも部屋の隅の方
へ放り投げる。

骨は放物線を描いて回転しながら落ちていく。

「（さあ……どうなる？ただ単に床へ転がったままか？それとも……）」

繁によつて投げられた骨は、床に落ちるや否や削られるように消滅した。
更にその数秒後、深紅の球体を発射し続ける神子音の喉元が幽かに脈打った。

それらの光景を見届けた繁は、確信する。

「（仮説的中！やっぱこいつは例外なんかじゃねえ！）」

第六十五話 やっぱり俺の仮説は間違ってたねえ！（後書き）

次回、神子音の持つヴァーミンの正体とは！？

第六十六話 オトコの娘は伊達じゃない（前書き）

遂に露わになる、鳴頃野神子音の本性！

第六十六話 オトコの娘は伊達じゃない

―前回より―

「（まあ……仮説が的中しようが最大の脅威は去ってない訳だが……）」

繁は尚も考察する。

死体消滅及び連射の謎について、大凡の仮説は成立した。

しかしだからと言って、こと攻撃力に関する面でこちら側が圧倒的に不利であるという事は変わりない事実でもある。

ともすれば、一体如何にしてあの二人に打ち勝つべきか？

「（あのチビは無理でも、あっちの保険医っぽい奴はどうにかしてえんだよね……さてどうするか……）」

只でさえ自衛で手一杯な香織の協力はアテにしねえが吉……と、するならば、だ）」

少しばかり考え込んだ繁は、すぐさま作戦を思い付く。

「（コレで行ってみるか……）」

壁に貼り付いた繁は、そのまま壁を蹴って比良子目掛けて突撃する。

「……？バカね、無駄な事を！」

早々に感付いた比良子は、嘲笑うかのように手元から大規模な電撃を放つ。

古式特級魔術でこそなかったが、その威力は並大抵の人間を消し炭にする程度の威力は持ち合わせている。

しかし繁はそれにさえ動じずに、空中で前転すると共に溶解液を纏い、そのまま両足で飛び蹴りを繰り出す姿勢となる。

「な、何ですってツ！？あんだ正気ツ！？

イスキュロン軍魔術部隊の古参精鋭さえも悩ませる最上級攻撃系魔術『C-インドラ-117』に真正面から突っ込むなんて――…

……！？」

その瞬間、比良子は目を疑った。

一般的な攻撃系魔術の中でも桁外れの威力を誇る筈の『C-インドラ-117』が、繁の身に纏った溶解液によって打ち消されているのである。

「ズエルアツ！」

繁の飛び蹴りが炸裂する直前、比良子は大きく飛び退いてそれを回避した。

着地点を中心に緑色の膜と飛沫が散り、床材を溶かす。

比良子が避けた事を見切った繁は、魔術で展開した盾で神子音からの攻撃を防ぐことに躍起になっている香織へ合図を送る。

防壁の隙間から辛うじて顔を出した香織はその合図を何とか理解したらしく、深紅の球体から必死で逃げ回りながらも何とか『了解』との返答をボディランゲージで返す。

そうこうしている内に繁目掛けて再び比良子の熾烈な攻撃系魔術――電撃の他、火炎や光線等多岐に渡るものが一斉に襲い掛かる。

しかし繁はそれら攻撃系魔術さえも、左手の一振りで撒いた溶解液によって掻き消してしまう。

「最初は物体だけかと思っていたが、成る程ここまで出来たのか。

この調子ならこれから先、まだまだ成長しそうな雰囲気だな……頼

むぜ刺椿象、俺のヴァーミンよ」

繁は両手から手甲鉤の刃を繰り出した。

「思えばコイツにも世話になりっぱなし……だ！」

手甲鉤の刃を構えた繁は、そのまま一直線に比良子目掛けて突進する。

対する比良子は何かを感じ取ったのか、咄嗟に波動を繰り出し繁を吹き飛ばす。

「ぐおお！」

そしてそのまま、微動だにせず球体で香織を狙い撃ち続ける神子音に言った。

「神子音ッ！あれっぽちじゃそろそろやばい筈よ！あんただけでも逃げなさい！」

そんな姉の忠告に対し、神子音は顔色一つ変えずに答える。

「大丈夫ですよ義姉さん。僕はこいつらを始末し、秋本教頭の栄光を守り続けます。」

義姉さんこそ、逃げた方がいいんじゃないですか？ツジラが義姉さんの魔術を無力化出来ると判明した今、最早義姉さんは彼に傷一つ付けることは出来ないでしょうから」

「何？あんたは私が役立たずだとも言いたいわけ！？」

「よくお判りじゃありませんか、義姉さん。」

僕が今相手にしている青色薬剤師は取るに足らない相手ですが、ツジラを前にした今の貴方はそれ以下です。

だから早く逃げ戻って、秋本教頭に例のアレを始動させるよう掛け合ってきて下さい」

「冗談じゃないわよ！妾の息子の分際で偉そうに！

今の今まで誰があんたみたいなのを育ててやったと思ってるのよ！？」

「誰ってそりゃあ、亡くなられた義父さんや義母さんに秋本教頭で

しょう。

あとは学校のクラスメイト達や先生方、それに侍従の皆さんですかねえ。

……まさか、そこで義姉さんだとも言えは良かったんですか？そう言ってくれるだろうという事に期待でもしていたんですか？そこまですて僕より優位に立とうと？」

「……ッッ！」

図星であつた為、比良子はただただ黙り込むしかない。

「義姉さん、貴方はバカですか？初めて出会った頃から救いようのないバカだとは思っていましたが、本当に何処までも救いようのないバカだったんですね？」

「何ですって——「だってそうでしょう？貴方如きちっぽけなクソ猫如きに恩義も愛情も何も在るわけがないじゃありませんか」

「この……義弟の分際で生意気を——ッグゴフッ！？」

比良子はその一瞬を以て、神子音の指先から伸びてきたホースのようなものに胸と眉間を貫かれ絶命した。

「僕という存在の目的はあの時……先天的なヴァーミンの有資格者として生を受けた時から既に決まっていたんですよ。」

『完全無欠の永久機関』……如何なる代償をも要さず活動する究極的生命体としての完成こそは、僕の存在意義なんです。

その為には……義姉さん、あなたみたいなバカなんて所詮は只の餌に過ぎなかったと言っことで——ッ！」

繁の槍が神子音の顔面スレスレを掠める。

「言いてえことはそれだけか？えエ、この女装野郎がよオ」

床に突き刺さった槍の頂上部に立った繁の挑発的な発言へ、神子音は冷ややかに言い返す。

「女装野郎……失礼な方ですね」

「そんなナリの野郎が言えた義理かよ」

「……よく僕が男だと気付きましたね」

「そりやな。さっきのバカが妾の息子とか言ってやがったし、何より臭いがしたからなあ……」

「臭い？」

「そうだ。どんだけ着飾って化粧しようが、先天的な雄臭さってのは抜けねえんだ……よッ！」

繁はポールダンスの要領で槍を軸に回転しながら手甲鉤で神子音に斬り掛かる。

「くうっ！」

すんでの所でそれを避けた神子音はそのまま飛び退くと、殺害した比良子を触手状の指から瞬時に吸収。

直後、球体を撃ち出す際出される円が空中に現れ比良子の衣類等を吐き出した。

「お前の能力については大体解ってきてんだ。

指定範囲内に落ちた動物の死骸を吸収し、そこから産み出したエネルギーを消費して深紅の球体を放つ……」。

球体の性質については言及するまでも無え、お前がバカス力撃ちまくったお陰でほぼ見切れてっからなあ」

「……流石ですね、僕の持つ『ヴァーミズ・ピャーチ リーチ』——つまりは蛭の象徴を持つ第五のヴァーミンについて、この限られた時間内でそこまで理解するとは。

流石は六大陸を騒がせるテロリストのリーダー、という事でしょうか」

「失礼な奴だな。俺はテロリストじゃ無え、ラジオDJだ。

しかもさっきお前に吸われたバカの言ったことが確かならお前……そろそろ弾切れが近いんじゃないか？

どうする？20人であの程度の量が限度なら、そんなバカ一人程度で撃てる分量なんぞ決まって来るんじゃないの？」

「ええ。間接吸収より直接吸収の方が効率的であるとはいえ僕の能力は未だ未発達ですから、上限など高が知れているでしょうね」
「だったら——」しかし、だからと言って僕があなた方二人を抹殺するという事実が変わりはありません——何？」

神子音は肩の力を抜きながら、繁と香織に向けて言い放つ。

「能力が使えまいと、僕にはまだ戦う術がありますから」

肌が小刻みに脈打つ神子音の姿を見て、繁は言った。

「成る程。お前も出来るのか……『破殻化』を」

「ええ……と言うことは貴方も？」

「まあな……」

「では、何処からでも掛かってきて下さい。何がどうなろうと、あなた方が僕に勝つ事など出来はしないのですから……ッ！」

神子音が目を見開いた瞬間、彼の皮下組織内部を無数のミミズかヒルのようなものが蠢き出す。

それに合わせて繁も破殻化の構えを取り、薄いガラス版の割れるような音と共に異形の姿へと変貌した。

かくして19名だった秋本軍は、1名が死亡し残すところ18名となった。

第六十六話 オトコの娘は伊達じゃない（後書き）

次回、蛭VS刺椿象&魔術師！！

第六十七話 ヒルがサシガメを追う理由（前書き）

尚も続く壮絶な戦い！

第六十七話 ヒルがサシガメを追う理由

―前回より―

「さて、どうしたもんか……」

魔術で異空間の中へ退避した香織は、窓の向こうにて繰り広げられる激戦を眺めつつ頭を抱えていた。

「外では二人が交戦中。しかも基軸になる能力はどっちも破壊力かとんでもないから、巻き添えを喰らうと明らかに死ぬんだよね。かと言って下手に動けば繁の邪魔になる上にそれこそ下手したら即死だし……ああもう、どうしたら良いかな……」

香織は考えた。最も楽な選択肢としては、このまま異空間に隠れ潜んだまま繁を見守るというものがある。

しかしながら、香織はその考えを思い立ち次第即刻却下した。それは余りにも手抜きが過ぎると思ったからだ。

かくして香織は尚も思考展開を続けるが、中々適切な策が思い浮かばず悩み続ける。

―同時刻・外部―

蛭のヴァーミンを持つ神子音の破殻化した姿は、それが元々少女と見まごう程に華憐で線の細い尖耳種の美少年である事を忘れさせるようなものであった。

それは差詰め色取り取りの蛭が群れを無し一つの生物であるかのように振る舞って生きるようであり、尖耳種としての意匠はおろか、

人型さえも保っていない。

日本の有名なアニメ映画に登場する、祟りによっておぞましい化け物に成り果てた巨獣のような姿のそれには、当然目や鼻といった顔のパーツは何も見受けられない。

しかしそれでも尚、神子音は何処から声を出しているのであろうか、明確にまともな言葉を喋ったりする。

しかも問題はその攻撃方法であつた。

破殻化前の神子音の攻撃と言えば、能力による球体の連射のみであつたが、ここにきてそのレパートリーが増えたのである。

というのは、身体を構成する蛭数匹が本体を離れ巨大化し床や壁を砕いて掘り進みながら突進を始めたのである。

しかもその動きは無差別なようで不規則ながら、本体である神子音を守りながら繁を狙うという芸当を的確にやってのけるので尚のこ
と厄介極まりない。

「（でエい、クソツ！しかもコイツ等、幾ら殺しても次の奴が来るんじゃあキリが無えツ！）」

繁は巨大蛭の猛攻を回避しながら打開策を練っていた。

「（だが打開策が無いとは限らねえ……そうだ！打開策は多分どこにある！そう信じよう！」

だが何だ？相手は繁殖力・再生力に優れた馬鹿でかいヒルの集まりだ。見る限りじゃパワーやスピードも連中の方が圧倒的に上回っていると見て間違いあるめえ。

問題は奴が如何にして俺を追ってきてるかだが……少なくともこれまでの事から考えて視覚は使えないと見て間違い無えだろう。

環形動物に目玉は無えからな……となりゃあとは聴覚・嗅覚か空気の振動、温度、二酸化炭素を基準にからこつちを探ってるかだが…

…）」

繁は巨大蛭の猛攻をかくぐって静かに着地すると、そのまま破殻化を解除し動きを止めた。

「（これで奴が聴覚に依存して俺の位置を探ってるならまだ打開策はありそうなものだろうが……さてどうだ……？）」

繁が暫く待っていると、巨大蛭達は途端に目標を見失って迷いだした。更に蛭の聴覚は曖昧なのか、呼吸音や足音などは聞き取れないらしい。

「（よし……これなら行ける……）」

繁は再び破殻化で姿を変え、動きを止める。

しかしそれを皮切りに、突如巨大蛭達が一斉に襲い掛かり始めた。

「（クソッ、どういう事だ！？破殻化の劣ってそんな大きくなかったよな！？）」

繁が混乱しながらも避け続けていると、蛭の塊である神子音が声を張り上げた。

「成る程、破殻化状態の僕が音で貴方を察知していると判断したわけですか。しかし考えが甘いですね。

元々耳に自身のない僕がまさか音で敵を探る訳がないでしょう？寧ろ耳は目玉共々破殻化と共に封印してしまいますからね、僕は音に頼らない」

「（そういう事か……だがだとすれば、何を手掛かりに俺を探って

るんだ？

まず嗅覚・二酸化炭素軸だとすると、止まってた俺を察知できなかった事と矛盾が発生する。

破殻化すると寧ろ体温下がるんだから熱軸も有り得ねえ。

となりや残るは振動軸だが……やってみる価値はあるか……）」

繁は携帯電話を取り出し、空を飛びつつ異空間の香織に連絡する。彼が持つ携帯電話は少々特殊で、相手の許可があれば如何なる隔たりをも超えて通信が可能という代物だった。

「香織、聞こえるか！？」

『し、繁！？聞こえてるけど、どうしたの？』

「奴はエネルギー消費を懸念してか、破殻化以降能力と視聴覚の使用を放棄したらしい。だが奴の妥協案つてのがまたかなり厄介でなかく乱の必要性がある。手伝ってくれ」

『そりゃ大歓迎だけど、どうやって手伝えばいいの？』

「簡単だ。『ビートエア・C3』をアリーナ中に放ってくれればいい！俺がやめると言うまでだ！」

『解った！』

通話が終わり次第、香織の放った魔術によってアリーナに充満した大気が振動した。

これで巨大蛭が空気振動や大気の流れを頼りに繁を察知しているのなら、混乱する筈である。

「良し、これでどうにか——！？」

しかし、現実とは違った。空気が振動し気流が大きく乱れる中であつて、巨大蛭は尚も凄まじい勢いで繁目掛けて向かってきたのである。

「ば、馬鹿な！？っがおあつ！」

繁は巨大蛭の噛み付き攻撃を何とか回避しようとするが、密集して

突進する太い柱となった巨体に叩き飛ばされ、意に反して破殻化が解除されてしまう。

人の姿で落ちていく繁を、巨大蛭は再び察知できなくなる。香織はその隙を突いて空間を歪め、異空間の私室に繁を退避させた。

―異空間―

「繁、大丈夫？」

「ああ。お前が山積みになった掛け布団で受け止めてくれたお陰で、人の身体である高さからアリーナの床に転落なんて事にはならずに済んだ。

有り難うよ、香織」

「良いって良いって。元より助け合っのが従兄弟じゃん」

「そうだったな……しかしありやあ何なんだ？聴覚でも嗅覚でも熱探知でもなく、ましてや空気振動や気流から探知してるわけでもねえとは……」

繁は頭を抱えた。仮に秋本と奴以外の愛人を皆殺しにしようとも、奴一人生き延びればそれだけでこれから先自分達の脅威になるであろう事は容易に予想が付く。

何より只でさえ強力なヴァーミンだが、それらは保有者に合わせて更なる成長を遂げる。

今でこそ死体を吸収しエネルギーを確保しなければ撃てないという弱点を抱えた神子音の球体も、何れその制約から解き放たれた真の姿へと成長を遂げないとも限らないのだ。

否、有資格者である神子音が生き続ける限り、リーチは何時か必ずその成長を完了させるであろう。

そしてヴァーミンの有資格者が背負う宿命に従い、今とは比べ物にならないほどの力を得た神子音は必ず繁達の前に立ちはだかるに違

いない。

「（となりやここで一度殺しておくのが吉……と、考えるのが手っ取り早い。あの性格と和解なんて出来るはずねえし、ましてや結託なんて夢のまた夢―それこそ例外中の例外の可能性だろう。

だがどうする？ 奴の攻撃をどうにか止めねえ限り、勝ち目はねえぞ……）」

繁は考えた。香織も考えた。お互い意見を出し合って話し合いもした。

そして様々な仮説を飛び交わす中、二人は遂にある結論を出すに至る。そして一介の仮説に過ぎないその結論が正しいという前提の元、二人は最適な作戦をも練り上げた。

「そうと決まりやあ……」

「早速、作戦開始だね」

繁は再び破殻化して外へと繰り出し、香織は安全確認も兼ねて離れ離れになっているニコラ、桃李、リユーラの携帯電話にもメールを送信する。

第六十七話 ヒルがサシガメを追う理由（後書き）

次回、ヒルVSサシガメの地味な吸血害虫対決遂に決着か！？

第六十八話 L e e c h ! オトコの娘確殺術（前書き）

V S 鳴頃野神子音戦、遂に決着！

第六十八話 L e e c H ! オトコの娘確殺術

―前回より―

香織の送ったメールは空間の壁を越えて四機の携帯電話へと届いていた。

一つは、実験室で座り込んで九条やティタヌスと談笑していたニコラの携帯電話。

二つは、獲物を探して廊下を彷徨う事に飽き広大な図書室で暇を潰していたリユーラの携帯電話。

三つと四つは、小樽姉弟が離れて連携を行う事を想定して共有している二台の携帯電話。

それらに届いたメールの内容から香織の作戦を知った七名は動き出す。

―実験室裏の準備室―

「ニコラ、こんなもので良いか？」

「うん、上出来だよティタヌスさん。これだけあれば大概の奴は溜まりも無いって」

「いや待てフォックス、いつそこの粉末試薬全てを持っていつてやるのはどうだ？」

「それは止めた方がいいと思うなあ。あ、でも臭素とかあるじゃん。これは使えるかも」

―食料庫―

「まさか学校に食料庫があるとはな」

「だろ？国立士官学校の名は伊達じゃねえのさ！」

「冗談抜きで凄過ぎんだろコレ……」

「んで確か……塩と酢と、あと何だ？」

「そんぐれえで良いだろ。他にもソースとか醤油とかもイケるらしいが運ぶの大変だしこんぐらいで良いだろ」

「そうだな」

――医務室――

『やはり軍人を育てる学校だけあって、消毒液や包帯のストックは計り知れませんか』

「ええ。これは最早本格的な大災害にも対応できるレベルですよ、兄さん」

『確かにそうですね。いや本当に、侮れませんよここは。』

医務室ですらこの勢いですから、恐らく建物全体を掌握することが出来れば強力無比な要塞としての活用も見込めますし』

「そう考えると何だか楽しくなってきましたねえ」

かくして香織に指示されたものを確保した七人は、彼女の開いた異空間への入り口を潜っていく。

――アリーナ――

繁は再び破殻化した状態で神子音の猛攻を避け続けていた。

「（さっきまでの不安が嘘みてえだな……やっぱ、苦境に対する打開策の有無は人の精神状態に大きく影響するらしい）」

繁には勝てる自信があった。度合いは確定の八割程度だが、繁にと

つてはその程度もあれば十分であった。

「さあ来い！」

着地した繁の挑発は意味を成さなかったが、それでも巨大蛭を引き寄せる事に支障はない。

案の定大口を開けて迫って来た蛭の頭部を、繁は溶解液で消し去る。すると傷口からは環形動物としての青い体液が吹き出す。

そして繁はその体液を意図的に浴びた。

「これでお前は俺を探れねえ……」

そう言うのと同時に、再び蛭達が混乱し始めた。神子音もまた、かなり取り乱しているらしい。

繁は言う。

「お前が索敵に使ってた感覚は、やっぱり嗅覚だったんだよ。だがその嗅覚から来る探知には、大きな欠点があった。

それは、破殻化したヴァーミンの有資格者の臭気にしか反応出来ないって事だ。

実際には強い力の持ち主に反応とかそんなだろうが、結果として俺をサーチ出来ないんじゃない意味はねえ。

まあ、今回はお前の体液で擬態させて貰ったが……どの道結果は同じだったらしいな」

繁は蛭が混乱している隙を見計らい、早急に香織へ連絡を入れる。

―異空間―

「じゃあ皆、準備は出来たね？」

香織の問い掛けに、七人は深く頷く。

「良し……それじゃ、これでも喰らいな！」

その言葉と共に、神子音の真上へ空間の歪みが生じ、異空間から大量の粉末や液体が降り注いだ。

「ッギアアアアアア！」

神子音は人のそれとは思えない悲鳴を上げて苦しみ悶える。

これは「破殻化したヴァーミン保有者の体組織は象徴たる生物に近くなる」という性質を利用した作戦であった。

というのも、環形動物である蛭は塩・酢酸・エチルアルコールに滅法弱く、肌へ食いついた蛭を撃退するにしてもこれらを用いるのが最も効率的で安全なのである。

更に質の悪さを發揮するのはニコラ達が持ってきた臭素であろう。臭素は地球上唯一とされる「常温・常圧で液体である非金属元素」であり、その名の通り刺激臭を持つ猛毒である。

ニコラが一時期その値段が金を上回ったともされる臭素に目を付けた理由は、皮膚に触れると腐食を起こすという性質故であった。

かくして塩・エチルアルコール・酢酸に加え、猛毒である臭素まで浴びせられた神子音は屠殺場の豚のような悲鳴を上げながら苦しみ悶えて暴れ回る。

それを養豚場の豚を見るような目で見下ろしていた繁は「これも絵になるかな」等と不謹慎極まりない事を考えていた。

しかしふとアリーナが汚れるのではと余計な良心を働かせた繁は、巨大蛭の死骸や体液諸共溶解液で神子音を消し去り、ひとまず休憩の為香織の設けた異空間の休憩所へ向かった。

― 同時刻・教頭室 ―

教頭室には残る愛人17名が召集されていた。

「さて……皆も知っているとおり、ツジラ一味は遂に鳴頃野姉弟の二人さえも倒してしまった。これは由々しき事態だ」

その言葉を聞いた愛人達の間にも、同様が広まった。

「落ち着け。おい、落ち着かないか。騒いでも何も始まらないぞ」
そう言って集団を宥めるのは、古式特級魔術の使い手である竜属種の教員・大東。

愛人達の間ではリーダー格でもある大東によって、集団は落ち着きを取り戻す。

「有り難う、大東。さて、そういう訳だから我々も遂に切り札を投入しなければならないと、私はそう思う」

「切り札、ですか」

「そうだ」

「しかし教頭、切り札とは一体何を？ ツジラは古式特級魔術さえも無力化してしまう強者ですよね？」

「確かにツジラ一味の力は強大だ。だが倒せない相手ではない」

「と、言いますと何を？」

「今に解る。三沢」

「はい」

秋本が呼び寄せたのは、菌糸種の中等部生・三沢紀美歌だった。教頭は三沢にただ「あれを」とだけ指示を出し、部屋を去る。

その指示を承諾した三沢は、懷から鍵を取り出して教頭室の奥へ向かう。

「ちよつと、三沢!？」

「何ですか？」

「あんた、まさか今その扉を開けるつもり!？」

「ええ」

「何でそんな事するのよ!？あれは校則違反者を取り締まる為のものでしょ!？」

「そうですよ。でも教頭先生の指示ですから、従うしかないじゃないですか」

「そうだとしてもだ三沢、あの扉の向こうに居る奴がどんなに危険かはお前も知っているだろう!？」

「知ってますよ。でもだからこそ、妥当ツジラ一味の切り札になるんじゃないですか」

そう言つて三沢は他の愛人達の制止を振り切り、鍵を開けてドアを解き放ち、鍵を中に投げ入れた。

直ぐさま扉の向こう側から、無数の黒い節足や触手が飛び出し、金切り声を上げながら這い出てくる。

「うえウエウオアアアああああアババアアガッががああがガギギアええガアアガッ!」

「三沢!アンタ自分が何したのか解つてるの!？あの鍵は奴をこの中に閉じこめておく最後の枷だったのよ!？」

「そうですね。そして高いエネルギーを持った鍵を喰らった彼は、我々による再拘束が不可能になり、ただひたすら本能の赴くままにあらゆる生命を喰らうでしょうね」

「良いのか三沢っ！？それでは我々共々、お前自身さえも喰われて死ぬぞ！？」

怒鳴る大東に、三沢は呆れ顔で言った。

「大東先生、何を言ってるんです？私がそんなヘマをやらかす筈ないじゃないですか。

私は施術者ですよ？彼をああしたのは他でもない私なわけですから、私に逆らう事は契約条件で不可能なんです」

「そんな、馬鹿な——」

言い終わるより早くに、伸びてきた触手が大東を丸飲みにした。

パニックを起こした愛人達は命惜しさから逃げ惑うが、用意周到な秋本は教頭室の戸や窓への施錠を忘れていなかった。

かくして愛人達は謎の黒い触手や節足を持つ巨大な何かによって食われ続け、遂に教頭室には三沢一人がぽつんと取り残される形となった。

「……」

暫くして、開け放たれた扉の向こうから黒い何かが現れた。

巨大なその姿を一言で形容するならば、蟹のような無数の節足で節足で歩き回る細長いイモムシといった所だろうか。

円筒形である胸部の前端には白い仮面にも似た円盤状の物体が埋まり、数学記号の”π”を90度回転させて少し太くしたような、まるで簡略化された目を思わせる二列の文様が見られる。

「さあ、お行きなさい。不埒なよそ者に天罰を下すのよ」

三沢がそう命じると、黒い巨大な「何か」はまるでアザラシかワニが水中へ入るが如くにして教室の床へと飛び込み、そのまま姿を消してしまった。

一方教頭室に取り残された三沢はそのまま微動だにしなかったが、暫くしてふと彼女の身体が揺らぎ出す。

「……………そろそろ、限界のようね……………」

胸を押さえて苦しみだした三沢は自らの運命に抗うでもなく、ただ一言を言い残して床に倒れ込む。

「……………九淫隸導様に、幸あれ……………」

その一言を言い残した彼女は、そのまま静かに息を引き取った。

かくして１８人だった秋本軍は、１７名が死亡し残すところ秋本ただ１人となった。

第六十八話 L e e c h ! オトコの娘確殺術（後書き）

次回、解き放たれた黒い怪物の正体とは！？

第六十九話 内壁から失礼致します（前書き）

繁達に迫る新たな脅威！

第六十九話 内壁から失礼致します

―前回より―

異空間より出た繁一行は、残る愛人共を駆逐せんとして校内を徘徊していた。

「しっかし居ないわね……どこ探しても見付かないわ……」

「まさか全員逃げ出したとかいうオチじゃないよね？」

「冗談じゃねえ、んな事あったたまるか。愛人共は兎も角、秋本って奴は確実に殺す」

「だな！流石繁だぜ！雑兵共は逃がしても、諸悪の根元は許さねえってのは私らも同意だ！なあ、バシロ？」

「おうよ！秋本ってのがどんな野郎かは知らねーが、きっといけ好かねえクズ野郎に違エ無え！となりや俺らでぶっ殺すのが筋ってモンだ！」

「何より、根源である奴を逃がせば他で悪さもしかねませんし」

『まさしく「蟻塚を潰すなら先ず女王を捜せ」と』

「それもある。が、本題は奴の隠し財産についてだ」

「隠し財産だと？それは初耳だな」

「ああ。調べてみたんだが、奴の正体は鰐鱗種なんかじゃなく、もっと別の何かかもしれないねえらしくてな。

その話によると奴はもんげえ長寿の絶倫野郎で、千年以上も前から無数のセフレにアホほど貢がせて遊び暮らしてたんだと。

んで、そいつの莫大な財産はカタル・ティゾルのどっかに隠してあるらしいんだとよ」

「そんな噂があつたのか……おい、ティタヌス」

「もう調べている。確かに該当の逸話はかなりの件数がヒットしたが……成る程、隠し財産の場所については諸説あるがどれも信憑性

は高くないな……」

「クソっ、となれば記憶吸収しかないな……辻原よ、仮にその噂が本当だとしてどうするつもりだ？」

意味もなく心配げな様子の九条に、繁は余裕綽々といった表情で答えた。

「心配無え、一応のアテはある」

「ぬ……そうか」

そしてそのまま校内を彷徨うこと十数分。そろそろ昼頃かと思ったその時に、ニコラが動きを止めた。

「おい、どうしたニコラ？」

「ニコラさん、何かあったの？」

「……聞こえんのよ」

立ち止まったニコラが暫し間を置いて言った。

「聞こえるって、何がです？」

「何かは分かんない。でも多分、ろくな音じゃないわ」

『ろくな音でない……悲鳴か何かですか？』

「もしくは、金切り声か絶叫かもね」

「ヒトのか？」

「どうなんだろ……その辺りが正直微妙なのよ」

「気配だけなら俺も感じるが……こりやまさか——」

バシロが言い終えるより早く、コンクリートの壁を突き破って巨大な黒い何かが現れた。

「何だこいつは……？」

それは大蛇のように太長い蟲のような生物——即ち、前回三沢によって解き放たれた謎の生物であった。

あんなクソ忌々しい自由工作の話は正直したくなかったんだが、何時かはお前にも話さなきゃなんねえだろうって事は解ってたんだ……」

「バシロ……お前……」

「だがよオ、話云々以前に今は兎に角逃げた方がいいと思うぜエ。つか、逃げるべきだ。」

さもねえと——「うおおああああああああつ!?!」「九条——ッ!——なっ、何だ!?!」

響き渡る九条の悲鳴とティタヌスの雄叫びに気付き振り返った一同が見たのは、衝撃的な光景だった。

謎の生物から伸びた触手に絡め取られ、引きずり込まれそうになっている九条と、それを助けようと躍起になるティタヌスの姿である。

「九条博士! ティタヌスさんッ!

よくも二人を……コンクリ喰ら——」「止せ、香織!」

繁の肩に掴まりながらも尚魔術で攻撃しようとする香織を、繁が制止する。

「繁? どうして?」

「今ここでそんなもん撃つな。掴まり立ちがやっとの奴には荷が重い」

「大丈夫だよ! 私ならやれるって!」

「やれるとしても今はやめろ。俺は男だがお前の事はそれなりに解る。」

お前、急性魔力障害で身体が思うように動かないんだろ?」

「バレてたか……」

魔力障害とは、体内に存在する魔力を司る血管に何らかの異常が生じて魔術発動に支障を来したり、魔術師等魔力依存度の高い生物に至っては体組織そのものを弱体化させてしまう病である。

先天的な発症の無いこの病は、大抵が特定の化学物質やアルコール等によって一時的に引き起こされることが殆どであり、恒久的に続く場合であってもほぼ十割方治療出来るようになっていく（魔術的・学術的手法により引き起こす方法もあるのだが、国営の専門的な研究機関等以外での使用や軍事利用は固く禁じられている）。

「そりゃバレルわ。どうも奴の奇声には急性の魔力障害を引き起こすような効果があるらしい」

「成る程ね……」

そうこうしている二人の向こう側から、桃李と羽辰が言う。

「辻原さん！清水さん！九条博士は無事です！早く逃げましょう！」

『バシロさん曰く、今の我々では奴を殺せないそうです！急いで下さい！』

「オウ、解った！」

「ごめん繁……幼い頃から苦労かけてばっかで……」

「心配すんな。苦労かけっぱなしなのはお互い様じゃねえか」

破殻化した繁は外骨格に被われた腕で香織を抱え上げると、仲間達に続くようにして一目散にその場から飛び去った。

対する謎の生物も折角の獲物を奪われたことがよほど悔しかったのか、酷く悔しそうな奇声を上げながら再び床へ潜っていった。

第六十九話 内壁から失礼致します（後書き）

次回、バシロの語る真実とは！？

第七十話 黒のヒミツ（前書き）

バシロの口から語られる衝撃の真相！

第七十話 黒のヒミツ

―前回より―

「バシロさん、これで良いですか？」

壁や床を冷やしたローチスリックで固めた桃李が、バシロに言う。

「オウ、大丈夫だ。奴は生物学的エネルギーの気配と記憶を頼りに獲物を探す。」

だがどうしてだかヴァーミン関連のブツは奴の探知を遮断する効果があつてよ、どんなにエネルギーシユな奴だろうと、ヴァーミンの有資格者だとか、ヴァーミンの関連物で覆われてるってだけで見向きもしねえのさ。

これで視覚がありや別だつただろうが、あの動きを見るにそれも無さそうだしな」

バシロのレクチャーに従い用務員の詰め所に隠れた一行は、そこでバシロからの説明を受けていた。

「何故そんな事が解る？まるでお前自身の事を語っているかのような口ぶりだな」

雰囲気こそ軽かったものの九条の一言は妙な重みを持っており、それに反応したリユーラが言い返す。

「おいおい学者先生、まさかうちの宿六がああバケモンと同じモンだつて言いてえのか？」

「そうは言つとらんさ。ただ、彼があれについて詳しいことが不思議でならんだだけだ。他意はない」

「そうか……突っ掛かったりして悪かったな」

「此方こそすまない。學術を扱う者は総じて疑り深くてね」

「いやいや、イスキュロン民はどうも単細胞になりがちだよ。」

……で、バシロ。あのイモムシの化け物は一体何者なんだ？」

「そういえば、奴の正体についてまだ話してなかったな」

バシロはリユーラの肩に空いたフアスナーの穴から西洋神話の怪物を思わせるデザインの上半身に似た姿を取って、腕組みをしながら語り出した。

「奴の正体について語るには、先ず予備知識ってモンが要るだろう。だから少しばかり昔の話をしようと思うぜ」

「ああ。異論はねえ」

「事の起こりはそこそこ昔、六大陸の片隅に居たある研究チームが『純然たる生命の人造』を思い立った所から始まった。」

チームの対応分野は、魔術と學術を併用した技術の雛形だったと思やあ良い。

チームの連中はその頃確立されていた魔術論や生命科学の粋を凝らし様々な理論を立てて必死で研究を続けたが、どうやっても思うような結果は得られなかった。

命を成すまでもなく死んじまったり、命を成したとしても何かの拍子で溶けて死んじまうんだ。

だがある日、大勢居た個体の中で一匹だけ生き残る奴が現れた。黒いスライムみたいなんだったが、歴とした生物だったのさ。

研究者達は歓喜し、その生命の秘密を探る事に昼夜も忘れて没頭した」

『それで、真相は一体何だったんです？』

「それがな、製造の途中で材料ん中にシヨウジヨウバエが巻き込ま

れてたらしいんだよ」

「シヨウジョウバエ？」

「そうだ。そこからヒントを得た研究者達は、完成した材料の中へ生きた鼠を入れて錬成する事を思い付いた。

結果、その生命はマトモに動き回る事が証明された。当初の予定とは違うが、研究次第じゃ幾らでも発展の可能性はあるだろうと研究者達は考えた。

更に研究が進み、黒い流体状の人造生命体は特定の生物に寄生しなきゃ直ぐに死んじまう事や、寄生する宿主にも相性ってモンがあるんだとか、色々な事が判明した。

魔術を使って材料を生物に馴染ませるなんて方法も考案されたな、そつえば。

そうやってそのまま研究が進みやあ良かったんだが、トラブルは唐突に起こった」

「トラブル…とは？」

「研究チームの一人が、焦って馬鹿げた事を抜かしやがったのさ。『材料としてヒトを使えば、知性や言語能力を獲得し擬似人造生命体が出来る筈だ』ってな。

勿論他の研究者共は猛反対したが、言い出しっぺは聞きやしねえ。

散々暴れた挙げ句、終いにやトチ狂って、チームリーダー一人を残して全員射殺しちまった」

「……何でそいつはリーダーを殺さなかったの？」

「『恩があつたから殺すのは惜しい』だとか抜かしやがって、確かにそいつはリーダーを殺しこしなかった。

だがだからってそいつがそれで反省したなんて事はねえ、リーダーを罠にハメて材料の溜まった容器の中へ突き落としてそのまま錬成、リーダーだった奴はそれで、黒いドロみてえな化け物に姿を変えちまった」

「そうだったのか……」

「それから暫くの間反逆者はいいい気になって取り繕うように生きてたんだが、素人の悪行だ。

バレねえ方が可笑しいってもんでよ。結果として政府機関に追い回される事になっちまった反逆者は、元々リーダーだった化け物を魔術で瓶詰めにし、大陸外へ亡命した。

手始めでノモシアで現地に居た不良魔術師共を實力でねじ伏せ子分にした反逆者は、何を思ったかそのままイスキュロンの片田舎へ渡り、そこで無意味に紛争なんぞ引き起こしやがった。

んで、そこへ駆けつけてきたイスキュロン軍と二十日間に渡り交戦した反逆者の一団は――

――「ちよつと待てバシロ！」

その話について心当たりの有りすぎるリユーラは、バシロを遮るように言った。

「どうした？」

「話を遮って悪いが、その話の続きはこうだろ？」

反逆者の一団は、首謀者を残し全員が死亡。残る反逆者自身もイスキュロン軍少佐から投降を言い渡されるがそれを良しとせず、研究成果の瓶を破壊し自殺した。

違うか？」

一同は驚愕した。まさかバシロの語る話がそんな結末に行き着こうなど、考えようもなかったからである。

「……流石だな、リユーラ……俺の目に狂いは無かったって事か。

そうだ。瓶から這い出た化け物ってのはつまり俺（●）――北エレモス理科大学大学院理学部生命科学科内部に在籍していた私立研究集団『ウボ・サトウラ』リーダーだった男……バシロ・ジゴール

だ」

「……まさかバシロがそんな奴だったとはな……」

「すまねえ、リユーラ。お前には何時か話そうとは思ってたんだ。だが俺ア、ただ自分の過去を語るって行為如きに意味もなく躊躇っちまっててよ……」

「いや、良いんだ。言い出しにくい事の一つや二つ、誰しも持つてるもんだろっからな」

「その通りだ。リユーラを純粹に愛し傷付けまいとしたお前にとつて、それは恥じることなんかじゃない。

……しかし、そうだとすればバシロよ」

「何だ？」

「お前と同じように変異した『奴』に知性が見受けられなかったのは何故だ？」

「解らねえ。だが恐らく、術者の施した術が未熟だったからかも知れねえ。あと水銀も精々怯ませる程度にしかなんねえ。

流石に素体になった奴が何処の誰かは解んねえが――

――その件ならば私が答えよう」

話を切り出したのはラビーレマの工学者・九条チエだった。

「先程我々を襲撃し、挙げ句私を喰らおうとしたかの怪物の正体だが……あれは大学時代私の後輩だった男だ」

その言葉を聞かされた一同に動揺が広まる。

「まあ落ち着け。慌てなくなる気持ちも解るが、ひとまず落ち着け。あれの正体――というか、あれが真っ当なヒトであった頃の名は高志・カーマインと言ってたな。

部屋に残されていたレコーダーの音声記録から、魔術が何かによってヒトならざる存在へと変異したことだけは解っていたのだ。

しかしそうか……あの計画によって産み出された術だったのか……」

「何だアンタ、詳しそうだな？」

「いやあ、別にお前さんよりお前さんや奴について詳しいと言うことはないさ。」

ただ、ここにいる他の誰よりも我々二人の方が確実に詳しいであろうモノは他にあるがね」

「……？」

「おいおいティタヌス、気付かないのか？我々二人がこの七人より詳しいと断言できるモノと言えばあれしか無いだろう？」

「ああ……あれか」

「そうだ……我々二人が君らより確実に詳しいもの……それは『奴』——高志・カーマインそのものだ」

そう言い放つ九条の浮かべる笑みは、根拠の解らない自信に満ち溢れていた。

第七十話 黒のヒミツ（後書き）

次回、一行は如何にしてカーマインと決着を付けるのか！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8961v/>

ヴァーミズ・クロニクル

2011年11月17日17時45分発行